
「アースルーリンドの騎士」番外編『ファントレイユとの出会い』

天野音色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「アースルーリンドの騎士」番外編『ファントレイユとの出会い』

【Nコード】

N2169D

【作者名】

天野音色

【あらすじ】

本編は、EZトップメニュー カテゴリで探す 電子書籍で、「アースルーリンドの騎士」で検索お願いします。本編はBL要素を含みますが、この番外編は、ファントレイユンが王子ソルジェニーの護衛に就任し、ギデオンが隊長から右將軍になる迄を書いたお話です。

護衛（前書き）

アースルーリンドの王子、ソルジェニーは、

国の古くからのしきたり、『光の王』の花嫁に選ばれた。

本来女性の役割なのに、この時女性の継承者が、居なかった為だ。

その特異な事例の為、身内を尽く早く亡くした幼い彼に、

城の者達は腫れ物のように扱い、彼はいつも孤独だった。

そんな時、彼は護衛の、ファントレイユに出会ったのである……。

＋：登場人物紹介：＋

ファントレイユ……19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー……アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし、

孤独な日々を送っている。

護衛

> i 7 8 0 0 — 3 0 0 <

ソルジェニーは本当に、気落ちしていた。

古くからの契約、アースルーリンドの王子の 軍事教練を受け持つ『風の民』との契約期間 が終わり、王子である彼は『風の民』の谷 から城に、戻されてしまったからだった。

彼は、家族のように扱ってくれる『風の民』 達と離れ、本来の居場所である城に、 戻る事がうんと寂しく、心細かった。

なぜなら彼の父であるアースルーリンドの 王は、彼が産まれた年にとつくに亡くなり、 彼の母親も直ぐに事故で他界。

その上父に代わって女王として君臨していた 祖母ですらも、彼が五歳の時にこの世を 去り、彼に愛情を注いでくれる肉親が 身近に一人も、居なかったからだ。

皆、慇懃無礼に礼を取って王子である彼に 頭を下げるけど、彼に親しく声をかける者 どころか、微笑みかける者すら稀で 城の中に彼の居場所は無いように 感じられて、とても孤独だった。

…『風の民』の荒れた地の 粗末な住まいと違い、ここには不自由なんて 全く無かった。 いつだって美味しい食事が用意され、布団はいつもふかふかだったし 衣服は毎朝召使いが、整えてくれた。 にも関わらずソルジェニーは、 親しみを感じない教育係と世話役に囲まれて 毎日、息が詰まりそうだった。

そんな時だった。 ファントレイユに、出会ったのは。

もう14にもなったのだから、 自由に城下を歩き回りたいと申し出たら、 大臣達が護衛役を付けてくれた。

近衛連隊の騎士の中でも、彼なら、宮廷でも 如才無く過ごせ、気

の利いた男で 腕も確かだと言われ、初めてファントレイクに会った。

その時ソルジェニーは戸口から、昼の陽光溢れる室内に彼が、金糸で飾られたクリームがかった 衣服を纏って姿を現し、自分の方へとゆっくり歩み寄って来たのを、不思議な気持ちで見つめていた。

溢れる光の中の彼は、光の加減でグレーに見える、たつぷりとした艶やかな栗毛を 首に巻き付けるように肩の上で ほんの少し揺らし、その際立つ美貌の細面の上に、微笑を浮かべていた。

あんまりその立ち居振る舞いが すらりと美しく、仕草も所作もが優雅で気品溢れ、一瞬見惚れてしまったように、思う。姿の綺麗なご婦人はこの宮廷で 幾人にもお目にかかったが、これ程優雅で隙無く美しい男性は、初めだった。

ファントレイクには 人を引きつける独特の雰囲気があつて、その透けるように明るく輝く ブルー・グレーの瞳の その美貌で微笑みかけられるとつい、彼に魅入られ、見惚れてしまい、それはうっとりとした気分させられる。

…宮廷作法の、教育係だと紹介されたりしていたらきつと、こんなに驚いたりはしなかったろう。けれど彼は近衛連隊に所属していて、護衛なのだった。

気づくと彼は、自分より背が低く 少女と見まごう顔立ちの、薄い金の長い髪を背に流す、青い瞳をしたソルジェニーに少し 屈んで伺うように見つめ、うっとりとする微笑を口元にたたえて告げた。

「近衛から派遣された貴方の護衛です。

ファントレイクと… そう呼んで頂ければ結構。それで…」

彼の声は、その容姿に似合わず びっくりする程通った声だった。

相手に自分の意思を、通すのに慣れた声色。

そう言えば『近衛連隊の隊長を務めている』と聞いていたのを、ソルジェニーは思い出した。

あんまり驚きを伴う表情で、自分を凝視する王子の様子に彼は気づくと、とうとう苦笑してささやいた。

「…期待外れでしたか？」

もつと屈強な男をお望みのようだ」

そう告げる彼の声は羽毛のように柔らかく、その癖隙が、無かった。

間近で良く見ると、確かに鍛え上げられた、武人のような、引き締まったしなやかな体付きだった。ソルジェニーは慌てて首を横に振ると、つぶやいた。

「…貴方のように綺麗な男性は、初めて見たので、驚いただけですが、だがファントレイユは朗らかに、笑った。

「…冗談でしょう？ 確か近衛一の使い手のギデオンは、貴方のいとこの筈だ。

貴方と親交も厚いと聞いています。

彼がどれ程近衛で目立つか、貴方はご存じ無い？

彼と比べて私の容姿なんて、どれ程のものです？

彼を見慣れている貴方が私に、そんな事を言うなんて！」

言われて、彼はいとこの、ギデオンを思い浮かべた。

そう言えば彼も、近衛だった。

確かに同じ血を引くギデオンは、自分に良く似た雰囲気、顔立ちで、金髪に青緑の瞳の、素晴らしく目立つ容貌の上、その顔立ちが女性のように綺麗だった。ソルジェニーは慌てて、付け足した。

「あの…つまり、身内以外で…という意味です」

ファントレイユはようやく、ああ。と、うつとりするような美貌の上に、微笑みを浮かべて、頷いた。

ソルジェニーは、慌ててつけ足した。

「それに貴方はギデオンとは、全然雰囲気が違うし」

フロントレイユは少しからかうように 覗き込むと

「…そりゃあ彼は本当に、あの容姿に似合わず戦うのが大好きで、剣を放さない猛者ですからね」

「…貴方は違うんですか？」

ソルジェニーが尋ねると、フロントレイユはまた、うつとりするくらいの微笑を たたえ微笑んで、告げた。

「…戦う以外に楽しい事は いっぱいあるでしょう？ 多分そこが、ギデオンとは 決定的に違うんでしょうね。

もつと腕の立ちそうな男をお望みなら、大臣にそうおっしゃって頂いて 結構ですよ？」

「…でも貴方もとても、腕のいい方だとお伺いしています。まさか剣の苦手なお方を大臣達も、私の護衛にしたりはしないんでしょう？」

フロントレイユは屈託無く笑った。

「…そりゃあ、近衛で隊長なんて していたら部下の手前、剣が使えなきゃ話になりませんが」

「…それに貴方をお断りなんてしたら、貴方の立場上でも、それはお困りになるんでしょう？」

このソルジェニーの言葉に、フロントレイユは社交用の仮面を外し、優しげで気遣う表情を甲斐間見せた。

「…噂通りの、お優しい方だ。でも私の心配より貴方のお気に召す 相手をお選びになる事です。ご一緒に過ごす時間が、結構ありますからね」

ソルジェニーはこれを聞いて、心が震えた。

彼のその言葉が、自分の立場より 本当にソルジェニーの気持ちを優先し、気遣ってくれると、感じたからだった。

儀礼的に、もしくは責務上彼を 気遣う者達は大勢いたけれど、心から気遣ってくれる相手が、今までこの城の中に居なかった事を ソルジェニーは、その時になって初めて、気づいた。

ああ…だから…。

唯一、一番身近ないとこのギデオンと 会った時、あれ程嬉しく、
彼が去った後とても寂しく感じたのは、 そのせいだったのかも
知れない。 ギデオンは身内だから特別なのだと、 思っていた。
けれどそうじゃなくて 彼を氣遣ってくれる相手がこの城で、 ギ
デオンただ一人だけだったと いう事だ…。 今までは。

それでソルジェニーはそのまま自分の心を、 彼に告げた。

「私は貴方が護衛で、 とても嬉しいです。」

貴方もそう思って頂けると 嬉しいんですけれど」

ファントレイユはとても優しい表情で 柔らかく微笑んで

「そりゃあ…。」

近衛と来たらそれは殺伐としていますから、 宮中でこんなに優
雅で楽しい職務を 努められるのが、 嬉しくない筈ありませんよ。
貴方のご性格は本当に、 申し分無くお優しい方ですし」

そう誉められてソルジェニーは思わず、 頬を染めて頷いた。

彼に氣に入られた事がこんなに 心が弾んで楽しい事だなんて 思
わなかったし、 誰かに氣に入られてこんなに嬉しい事は、 今ま
で無かったからだった。

護衛（後書き）

華やかですね。

出来ればこの場面だけで終わりたいかった……………。

作者がちよっと色気を出したのが、まずかったですね。

ファントレィユが護衛してるシーンが書きたい！

と……………で、つい城下の食事が続いてしまったんです……………。

本編は、E2トップメニュー カテゴリで探す 電子書籍で、

「アースルーリンドの騎士」で検索お願いします。

本編はBL要素あります。

好きな方、どうか本編も、よろしくねっ！

宮中（前書き）

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし、

孤独な日々を送っている。

宮中

ファントレイユと並んで外出すると、途端に人目が集まってくる。

やっぱり彼に見惚れるのは自分だけじゃないんだと、ソルジェニーはそつと横を歩く彼を、見上げた。

たつぷりのグレーがかった栗毛が、肩の上で波打つように揺れる。面長の、けれどもとても綺麗な形の頬と顎をしていて鼻筋が通っているし、何より顔立ちが綺麗だと言う他に彼にはどこか輝きを集めたような雰囲気があつて、どう考えても近衛よりこの宮中に居るのにふさわしい、文句無しの優雅な姿だった。

目の前の、豪華で壮麗な建物を抜けて広い中庭に、出る辺りでご婦人の一団に出くわす。

色とりどりの衣装を着こなし、身分ある方ばかりでそれは華やかだった。が、ファントレイユと並んで進むと彼女らの、呆けたように見惚れる視線が一斉に彼に、注がれた。

ソルジェニーはつい、彼女らの視線を追いかけて隣のファントレイユを見上げたが、彼は見つめられるのに慣れてる様子で、7人程居る女性達の視線を一身に浴びて、それは優雅に、にこやかに彼女達を見つめ返し、通り過ぎ様それはうつとりするような笑顔で微笑した。

彼女達の頬が染まりファントレイユのそのあまりの優雅な男らしい美貌に、通り過ぎたその後ろから一斉に感嘆のタメ息が、漏れる。ソルジェニーは初めての事でつい、再びファントレイユの様子を伺ったが、彼にとっては日常で、何でもない事で、当然で当たり前で、どうって事無いようだった…。

見つめ続けているとファントレイユの視線が前に、注がれる。黒髪の、それは美しいご婦人が彼を、見つめていた。

隣に居るのは大臣の一人で、どうやらその黒髪のご婦人は彼の妻だと紹介された事を、思い出した。随分お若い奥方をお迎えになったと、確か侍従達がそう、噂していた記憶があった。

大臣はソルジェニーを見つけると、少し頭を軽く下げて礼を取り、その後、その場を離れた。

…いつもの事だが彼らは大抵、ソルジェニーに捕まったり、長く話したり、質問をされる事を怖がっているようで、用が無ければ直ぐにその場を、立ち去るのが習慣だった。

仲違いしている訳でも無い相手にそんな態度を取られる事に、ソルジェニーはそれは気落ちしていたが、ファントレイユは大臣が場所を外した事は嬉しいようだった。

…ご婦人は夫に、ついて行かずその場に、残ったからだ。彼女はファントレイユに微笑みかけ、当然とばかりにその手を、差し出す。

途端ファントレイユはそれは優雅に微笑み返すと、その差し出された手をそっと取り、軽く膝を折ってその真っ白な手の甲に、軽く口づけた。

あんまり素晴らしい仕草で、ソルジェニーはご婦人にはこうやって礼を取るのか…。

と、まるでお手本を見ているように、ファントレイユの流れるような動作に見とれた。

「王子の、護衛のお方だと夫にお聞きしていますわ。」

…近衛連隊にいらつしやるとか…」

「…今日が初仕事ですが」

ファントレイユは神妙にそっと、俯く。

「…でも護衛をなさるならこれから度々、お目にかかれますわね？」

「…王子が私を召して下されば。いつでも」

ファントレイユが美貌のその面を上げて、婦人に微笑み返す。

だが彼女の夫の大臣は、女性なら大抵色めき立つその色男と話して

いる妻が気に入らないらしく、しきりに彼女に

『早くこちらに來い！』と、少し離れた場所から頭を振りまくって、合図を送っていた。

「…夫君が呼びのようだ」

ファントレイユがチラリとそちらに視線を向けてつぶやくと、

「…そのようね」

彼女も素っ気なく言い、ソルジェニーに振り向くと途端、にっこりと微笑んだ。

「…また、お会い出来ると良いのですけれど」

そして、そつ、と視線をファントレイユに残しながらもその場を、立ち去った。

ファントレイユがその視線を受け止め、身分の高いご婦人に礼を取るように軽く頭を、下げた。

その二人の様子を見れば、世事に疎いソルジェニーですら、その言葉は勿論自分に向けられたのでは無いと、解った。

彼女は、ファントレイユを護衛に連れた自分に、出会いたいのだとソルジェニーに告げたのだ。

あんな美人で豊満な、それは綺麗な胸をした女性にあんなに好かれて、ファントレイユがさぞ、心を動かされたのでは無いかと様子を伺ったが、彼は全然そんな素振りを見せず、自分を見つめているソルジェニーに、先に進むよう視線を送って促した。

ソルジェニーはファントレイユの横に並んで歩を進めたが、その素晴らしい美貌の護衛はその後毎度、ご婦人に出会う度にこんな光景を、繰り返し続けた。

城の中を歩いただけなのに、ソルジェニーは人の視線を浴び続けて随分と、疲労を感じた。

今まで一度も、無かった事だ。人々は大抵ソルジェニーを怖いもののように避け続け、出会うと殆どの者が礼を取るふりをして頭を下げ、王子に話しかけられまいと視線を下げたまま、逃げるようにそ

の場を立ち去って行ったからだった。

王子の疲れた様子にファントレイユは気づくと、

「そのベンチに、掛けましょうか？」

と屈んで彼の耳元にささやいた。ソルジェニーが頷く。

そしてベンチに掛けるとその側に、彼の視線を遮らないよう控え目に立つファントレイユを、見上げて不思議そうに聞いた。

「…どうして貴方は、掛けないんです？」

空いている隣の空間を目で差すと、ファントレイユは真顔でささやいた。

「…護衛は普通、ご一緒に掛けたりは致しません。

何かあった時に行動出来なければ、護衛の意味が無いでしょう？」

ソルジェニーはファントレイユがあんまり人々の注目を浴びるので、彼が護衛だと言う事をすっかり忘れている自分に気づいて、ああと頷いた。

「…でもここはまだ城の中ですから、出来れば隣に座って話し相手になって下されると、嬉しいんですが…」

ファントレイユは城の中だからこそ、職務を果たしている姿を人に見せたいようだったが、ソルジェニーの、とても話し相手の欲しい、物寂しそうな風情に目を止めてつぶやいた。

「ここからでもちゃんとお声は聞こえますし、話し相手は務められますよ？」

ソルジェニーが見上げるとその美貌の騎士は、それは優しげに微笑んでいて、ソルジェニーを有頂天にした。

「…あの…私は全然軍の仕組みが、解らないんですが、どうして貴方は宮仕えをなさらず近衛にいらっしゃるのです？」

聞かれてファントレイユは暫く黙った。が、ゆっくり口を開くとつぶやいた。

「…そうですね。宮仕えが出来る立場には居ましたが…」

そして、自分を伺うソルジェニーを見やると、微笑みを浮かべて言った。

「…そんなに不思議ですか？私が近衛に居る事が」

「だって、ここの誰よりも優雅でいらっしやるから…」

宮廷作法の教育係が、貴方と比べたりしたら不作法に、見えてしまう程です」

フロントレイユは苦笑して言った。

「それは…」

作法の教育係に、恨まれそうですね」

「…ギデオンのように、戦うのが好きだからですか？」

とてもそんな風には見えなかったが、取りあえずそう尋ねてみた。

「まさか…！」

そんな風に、見えますか？私は血を見るのも、殴り合いも大嫌いです」

やっぱり…。とソルジェニーは思った。

でもそれならますます、不思議だった。

「それでも、近衛が良かったのですか？」

フロントレイユは肩を、すくめた。

「…もし私が近衛で隊長をしていなかったら、多分もっとたくさんの男に、やさ男とめられて、決闘を、ふっかけられていたでしょうしね」

ソルジェニーは彼にそれは不似合いな、“決闘”という言葉について、驚いて訊ねた。

「…決闘を…なさるのですか？」

フロントレイユはいかにも、不本意のようにつぶやいた。

「勿論、好きでしている訳では、ありませんよ。」

大抵の男達は自分の惚れたご婦人が、私の気を引こうと色目を使うのが気に入らず、好んで私に突っかって来るんです」

ソルジェニーはこれまで城の中で彼に見惚れる女性の、その数の多さを考えてつぶやいた。

「…じゃあ、ひっきりなしに決闘していなくては成りませんか？」

「…近衛の隊長に、決闘を申し出る相手は限られます」

「…それで…あの…」

「やっぱりお怪我を、なさったりしますか？」

ソルジェニーが、それは心配そうな表情を見せたので、出会って間もない若い王子に心配された事が彼は、それは嬉しい様子で軽やかに微笑むと、返答した。

「近衛の隊長が色恋沙汰の決闘で怪我なんかしたら、首が飛びますよ！」

…幸い私は、今だに隊長で、いられます」

ソルジェニーは、少し呆れた。

彼はそれは遠回しに、“自分は決闘で、怪我なんかする程剣の腕は劣っていない”と、告げたのだ。

その言い回しもあんまり控えめで、ソルジェニーは彼がなぜ自分の護衛に選ばれたのか、理解出来たような気が、した。

彼は確かに人目を…特にご婦人の…引きまくったが、ソルジェニーに対するその態度も言葉遣いも、とても控え目で気遣いに溢れていたし、これ程浮ついた視線を送られ続けても職務をきちんと理解して遂行している所も…申し分無かったからだった。

宮中（後書き）

狙ってるんだか、狙われてるんだか……。

まあ、どちらも美味しいと思っていることでしょう……。

でもタヌキ……もとい、大臣は敵に回すなよ。

ギデオン（前書き）

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし、

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

ギデオ

数日、彼を続けて召して城内を歩いたが、この素晴らしい美貌の護衛は行く先々で女性の熱烈な歓迎を受け続け、ソルジェニーはすっかりその様子に慣れた。

ある時大公爵夫人が、滅多に顔を出さない城の大広間に、顔を出した。

その、煌びやかで豪華な衣装と、尊厳を示そうとする少しいかつい顔のご婦人はソルジェニーにとっても記憶のある姿だったが、以前会った時はそれは丁重に挨拶され、しかしソルジェニーが口を開こうとすると途端、きびすを返して彼の目前を、去った。

しかし、フアントレイユと一緒に、彼女の態度は違っていた。ソルジェニーに、やはり丁重にご機嫌伺いの言葉を述べ、しかし視線は後ろに控えるフアントレイユに、釘付けだったからだ。

「護衛の方も、大変な勤務ですわね。お相手が、王子ともなると。……ところで護衛の仕事の、空き時間は何をしていたらっしゃるの？」
フアントレイユはいかにも臣下と言う態度で、それは静かにソルジェニーの後ろで目を伏せていたが、婦人に話しかけられてその面を、上げた。

ソルジェニーもつい彼を見つめたが、彼が面を上げると聡明そうで隙の無い、文句のつけ所の無い美貌のそのブルー・グレーの瞳が、一瞬煌めくような輝きを放って見え、あんまり綺麗でソルジェニーですら呆けた程だったが、ご婦人にとっては尚更だった。

大公爵夫人の、タメ息が漏れた。が、フアントレイユは臆する事無く密やかだが力のある声でこう告げた。

「……これでも近衛で、隊長を努めておりますので、お召しが無い場合は部下の世話や軍務が、ございます」

婦人の頬が彼に見つめられて染まる様子に、ついソルジェニーは目

を、まん丸にした。それ程年輩では無いにしろ充分熟年で、身分を武器のように纏った威厳の塊のようなご婦人のそんな様子は、初めて見たからだった。彼女は少し、感動で震えるように掠れて狼狽えたような声音で、つぶやいた。

「…まあ…」

そんな危険なお仕事で無ければならないの？ご身分は？」

この明け透けな言葉にしかし、ファントレイユは眉をしかめる様子も無く、淡々と返した。

「…候爵でございます」

この時アースルーリンドの宮廷では、公爵以外の身分は皆下等で、虫けらのように思われていたから、ファントレイユはこの大公爵夫人の同情を、いたく買った。

「…ああ、それで…」

危険なお仕事に、付かなければならなかったのね？

でもご努力が報いられて、王子の護衛に付かれた事、本当によろこざいましたわ。

そうね。お望みなら、もっと危険も少なくてそれは貴方にふさわしい役職を、私ならご紹介出来るのだけれど…」

そして途端に、ファントレイユに色目を送る。

ソルジェニーはそのご婦人の様子に目を、ぱちくりさせたがファントレイユは慣れているのか、丁重に頭を下げ返答をしようと、口を開いた。

「…こんな男だが、近衛では大変役に立つのでね。

出来れば職を、変わって欲しくないのだが…」

横から口を挟んだその声の主に、皆が振り返った。

勇敢で、さわやかな意思の強い声色は、ソルジェニーは聞き覚えがあった。

そこに居たのは、やはりギデオンドった。

> i7808—300<

見慣れた彼だったが、その登場は、大公爵夫人を、たじろがせた。

ギデオンはいつも通り、それは人目を引く、見事な波打つ金髪を背迄たらし、色白の小造りの小顔の上の、その宝石のような青緑の瞳を煌めかせ、瞳の色と同じ青緑色のビロードに金の豪華な刺繍の入った上着をその身に付け、美女のような女性的な顔立ちとは裏腹の、尊厳溢れる堂とした態度で、そこに立っていた。

彼はソルジェニーのいとこで、彼の母親は以前、王位継承者だった。それに、彼の母親が継承権を放棄しなければ、ソルジェニーに代わって王子で次期国王たる地位の、それこそ大貴族ですらひれ伏す、それは身分の高い王族だ。

婦人は、『軍神』と呼ばれる代々右將軍を継いで来た家系の、その厳しい武人の前から慌てて罰が悪そうに色気を隠し、軽く礼を取ると、用があるので…と、そそくさとその場を、立ち去って行った。ソルジェニーは暫く呆けたように、その劇の一部のような展開に言葉無くして、ギデオンを見つめた。

ギデオンは困惑した表情を浮かべてその、小さいところをそつと見つめ、ファントレイユに告げた。

「…君といるとソルジェニーは、いつもこんな事に、巻き込まれてるのか？」

ギデオンが言うファントレイユは素っ気なく返答した。

「…巻き込んで、いないつもりだが」

ギデオンはその大広間の周囲を見回し、女性達が、群れては遠巻きにファントレイユに注ぐ熱い視線を、呆れるように見つめ、ため息をつかんばかりにファントレイユに向き直った。

「…君がここに顔を出すようになってから、随分浮ついたな」

ファントレイユはその美貌で、明るく微笑む。

「それは、光栄だ」

ギデオンの、眉が寄った。

「…誉めて、無い」

だがファントレイユは肩をすくめて言った。

「…それは、残念だ」

ギデオンに対して宮廷内では、大抵の者が大公爵夫人のような態度を取るのに、ファントレイユのその、全然彼に臆する様子の無い同等の口の利きように、ソルジェニーはなんだかとても、ほっとした。ギデオンは全然身分を気にしない男だったけど、周囲はそうでは無かった。

大抵、とても丁重に彼に、相対していた。ギデオンはそれに何も言わなかったけれど、もどかしく感じているのを、ソルジェニーは知っていた。

だから、対等の口を聞くこの護衛には、ギデオンも軽口を叩くみただった。

「…何しろ、君を推薦したのは、私だからな」

「…やっぱり？君のご指名だとは思ってはいたよ」

ファントレイユは、それは身分の高い大貴族にそう、告げた。が、ギデオンは身分等相変わらず構う様子無くつぶやいた。

「…君は女性には、それは念入りに親切だが、部下に対しても評判が良い…」。

態度が柔らかく気が利くで押したが、ここでそれは、君の本領が発揮され過ぎて、ソルジェニーに悪影響が無いが、心配だ」

ファントレイユはその彼の様子に、つい本音を覗かせて尋ねた。

「…ほう。どんな？」

「…君を一人占めしていると、ご婦人に恨まれないか？」

ギデオンの、その本心から心配げな声音に、ファントレイユはつくすくす笑った。

> i 7 8 1 0 — 3 0 0 <

「…冗談だろう？」

この職務じゃなきゃ、私はここには、顔は出せないと言えば皆、納得するさ」

ギデオンの、眉が途端にまた、寄った。

「…君はソルジェニーの後ろから巧妙にお気入りのご婦人の気を引いて、それ以外のご婦人の興味が自分に向いて都合が悪くなった

途端、職務だとか言ってソルジェニーの後ろに、隠れるつもりなんじゃ、あるまいか？」

ファントレイユはギデオンの疑問に、呆れながら言い返した。

「…それをするのは、当たり前じゃないか。

気の無いご婦人の、相手をする義理なんて私には無いし、第一その気も無いのに気を持たせるのは、相手に対して失礼だ」

ギデオンはファントレイユのこの隙の無い返答に、それは不満そうに腕を、組んだ。

だがファントレイユはふと、思い返してギデオンに微笑みかけると、口を開いた。

「…ああ。君に、礼がまだだったな。助かったよ。

…さすがの私も、彼女くらい大御所で身分の高い女性だと、あしらいかねる」

「…そうだろうな。どう見ても、君のタイプなんかじゃ、ないし。

…だが軍に関して私の言った事は、事実だ」

この言葉に、ファントレイユの瞳が急に、輝いた。

「へえ…！」

君に、そんなに買われる程、私は軍に必要とされているとは思って無かった」

ソルジェニーが見つめていると、ギデオンは少し、声を落としてさやいた。

「…現右將軍の、叔父達はそう思ってないだろうが、私は身分等気にしないからな…。」

腕が立ち、頭の回転の早いお前のような男は、戦場で必要だ」

だがこれを聞いてファントレイユは慎重に、言葉を選んだ。

まるでギデオンの誉め言葉を、鵜呑みにして有頂天に、成る気なんて、無いように。

「…そうだな。私の身分では、君の取り巻きはとうてい務まらない。最前線で、いつ命を落としても構わない、実戦型のような」

ソルジェニーは軍の中では身分の低い者達が、身分の高い者達に代

わって、捨て駒のように使われて命を落としている話を、聞いた事を、思い出した。

だがギデオンはそんな男なんかじゃない。

彼の知っているギデオンは、断じて自分の盾に、身分の低い者達の命を使うような卑劣な男なんかじゃ、ない筈だ。

ギデオンが、途端侮辱されたように鋭い声で、怒鳴るように唸った。

「…皮肉なんかじゃ、ないぞ！」

その真剣な言いように、ファントレイユは神妙な真顔になると、常に身分の低い者達の代わりに、危険な場所へと志願し続けるそれは身分の高いこの男に、心の中で謝罪した。

「…解った」

勿論、言葉にはしなかったものの、滅多に地顔を見せないファントレイユの、真剣な真顔にギデオンは、納得したようだった。

彼に軽く、了承したと頷く。

ソルジェニーは途端に、ほっとした。

軍の中ではギデオンは、自分の知らない男になってやしないかと、それは心配だったのだ。

だがギデオンはソルジェニーに振り返ると、厳しい態度を一変させ、それは優しい笑顔で、少し屈んでささやいた。

「やあ…」

挨拶すら、まだだったね」

ソルジェニーの表情が、ギデオンの声で途端に輝く。

「…会えて、嬉しいよギデオン！」

「…相変わらずかい？みんな、君には素っ気ないようだな。

…ファントレイユはどうだ？見た所、君の世話より、女性の相手で忙しいようだか」

「…凄く、刺激的で毎日が、楽しい！」

この彼の言葉に、ギデオンの目が丸くなり、ファントレイユは横を、向いた。

ギデオンはチラリとその美貌の色男を盗み見て、つぶやいた。

「…それは…良かった。」

じゃ、君は気に入ったんだな？」

「とても！…凄く！」

ギデオンの表情が、途端にほぐれる。

ファントレイユの視線が、今度はギデオンに、吸い付いた。

その派手で素晴らしく綺麗な外観とは違い、ギデオンは軍では、剣の腕が立つだけで無くそれは勇猛な猛者だったし、気に入らない相手はすぐ殴る乱暴者だ。

…その上身分迄、最高に高かったから、彼に逆らう相手は

『命知らず』

と、呼ばれる程だった。

…だが彼は不正は大嫌いで、身分の差別などしなかったから、身分が高いと言っただけで実力無く威張る貴族達を、それはとことんやり込めて、身分の低い者達にとって彼は、まるで英雄だった。

それに戦場で彼は誰よりもまっ先に敵陣に切り込み、その勇敢さで熱狂的な人気の持ち主でも、あった。

…その彼が、王子相手だと、見た事も無い程優しげな表情を、作るつい、ファントレイユが、喰い入るようにその、珍しい物を見つめている自分に、気付いた。

「…君は、王子相手だと随分優しそうなんだな」

ギデオンは顔を上げると、それは意外そうにそうつぶやくファントレイユの、美貌の面を見つめた。

「…そうか？」

ファントレイユは途端に苦笑した。

「自覚が、無いのか？」

ギデオンの、眉が寄った。

「…ソルジェニーを見ているというのに、どうやって自分の表情が見える。」

鏡を使ったって、無理だぞ」

ファントレイユは、それもそうだな。と肩をすくめた。

ギデオンは王子に向き直ると、言った。

「…気に入ったのなら良かったが、彼で困った事があればいつでも言いおいで」

ソルジェニーの、表情が途端に、曇った。

> i 7 8 1 1 — 3 0 0 <

ギデオンと良く似た面差し、少女のように可憐な出で立ちで、薄い金の髪を肩に垂らし、それは綺麗な青い瞳をした王子はいつもどこか心細げで、そんな彼の悲しげな表情に、ギデオンの胸がそれは痛む様子がファントレイユの瞳に映った。

「…でもギデオンはいつも、忙しいでしょう？」

だがギデオンは、それは優しくに微笑むと告げた。

「君が来ればいつでも時間を、作るさ」

そして、思い直したように、付け足した。

「まあ…そりゃ、十分な時間は、取れないかも知れないが」

だが、ソルジェニーはそれは嬉しそうにギデオンに微笑みかけ、ギデオンは満足げにその顔を、見守った。

だが彼はさて…！と腰を伸ばすと

「狸共と、ちよつとした会合が、あるんだ」

彼の言葉に、ソルジェニーの頭の中に疑問付が沸き上がったが、ファントレイユは頷くとつぶやいた。

「…大臣達か？それは大変だな」

「…奴ら、黒い腹を抱えて、本音を隠しやがるから話をするのに、気骨が折れる」

「…君のように、人の顔の裏を読むのが不得意な人間には、尚更だ。…大臣相手じゃさすがの君でも、殴れないんだろう？」

ファントレイユが、心から気遣う様子で尋ねるが、ギデオンは俯いてつぶやいた。

「…拳を震わせて威嚇する事はあるが…」

殴れないと、ストレスが溜まる…」

途端、ファントレイユが困惑したように告げる。

「頼むから軍で、発散しないでくれ」

ギデオンは、タメ息混じりにつぶやいた。

「極力、そうしているが、こう毎日が平和だとな」
ファントレイユはそつと、尋ねた。

「戦が起こって欲しいとか、思っていないよな？」

「それは勿論、望んでいないが、私に突っかかってくる奴がまるで居ない」

ギデオンが、がっかりしたように俯くので、ファントレイユは呆れて肩をすくめた。

「そりゃ、あれだけ殴れば、無理も無いだろう？」

ソルジェニーはその、とても綺麗な顔をしたギデオンの、軍での有様に、思わず口をあぐり開けた。

だがギデオンはいかにも不本意そうに腕組んで怒鳴った。

「そんなに殴った記憶は無いぞ！」

ファントレイユが、タメ息混じりに言い諭した。

「普通、数人腕自慢の男を殴り倒して顎の骨を折ったりしたら、たいして腕の無い男はみんな、君に対して用心するものだ」

ギデオンが、心底意外そうな顔を、ファントレイユに向けた。

「まさか君もそうなのか？」

ファントレイユは思い切り、肩をすくめた。

「好んで顎の骨を折られる、馬鹿に見えるか？」

ギデオンは首を横に、振った。そして、思い直したようにファントレイユの耳元に顔を寄せて、ささやいた。

「つまり私に突っかかる相手は、馬鹿なのか？」

ファントレイユは、今更何を言ってるんだ？という呆れ顔を、した。
「みんなそう思ってるぞ？」

「それで私の前だと、みんな大人しいんだな」

ギデオンの、その落胆仕切った様子に、ファントレイユが心から怯えて、そつとつぶやいた。

「つまらなそうだな」

「楽しい、訳が無い」

ソルジェニーが、二人の様子に、つい笑った。

「…二人共、とても仲が、良いんだね？」

ギデオンが眉をしかめた。

「…そうか？」

フロントレイユが、肩をすくめてつぶやいた。

「…そう見えるんなら、そうなんだろう？」

今度はギデオンが、肩をすくめる番だった。が、ソルジェニーに笑顔を向けると、また今度、と手を振り上げてその場を、立ち去った。

「ギデオンは、貴方の事をとても気にかけている様子だ」

その後ろ姿を見送った後、フロントレイユが王子に屈んでそう、優しく話かけると、ソルジェニーが微笑んだ。

「…いつも、とても気遣ってくれるから、お会い出来るのが楽しみなんです」

その笑顔が、まるで五歳の子供のように邪気無く、頼り無げで、フロントレイユはギデオンの気持ち、痛い程解って、頷いた。

王子が、皆から避けられているのは、訳が、あった。

アースルーリンドには『影の民』と呼ばれる人外の者達を封じている場所が多数あって、この封印が破られて彼らがこの地に、這い出たりしたら、人間はたちまちその魔物に命を取られて、滅びてしまう。

封印をし、『影の民』を追い払う事の出来る者はやはり人外の、『光の国』の王だが、彼は王家の者と婚姻を条件に、光臨を果たす。が、今世では直系に女性が生まれず、王子がその相手選ばれたものだから、皆は彼をどう扱っていいか解らず、ひたすら避け続けていたのだった。

また、迂闊に彼に色々聞かれたりして万が一王子が、『光の王』の花嫁なんて嫌だ、と家出なんてされたりしたら、国が滅びるのである…。

故に皆、王子と口をきく事をそれは恐がり、心を注ぎ、迂闊に物事

を教える輩はことごとく王子の側から離されたりしたから、彼がい
つも孤独でいるのは、仕方無かったかもしれない。だが、まだ幼い
王子の、身の置き場の無い、心細げな様子や不安そうな表情に、心
ある者ならば気にかけない者は、居ない。

ファントレイユはギデオンの事を影でこっそり、“猛獣”と呼ん
でいた。宮廷内では確かに、それは上品な大貴族に、見えるものの
その中味は間違いなく野獣だったし、今や軍の中では彼の外観に騙
される者は既に、皆無だった。が、王子にみせる気遣いに、ファン
トレイユは大いにギデオンを、見直した。

「まだ、出向きたい場所は、ありますか？」

ファントレイユは、そつとささやくように王子の意思を、促した。
王子は少し嬉しそうに微笑んで、ファントレイユにこう告げた。

「南の庭園を、歩きたいんです…。」

あの、もし、貴方が良ければ」

臣下の自分に、それは気を使う王子を、ファントレイユは心から不
憫に思った。

それに王子は、自分の言う一言で相手に嫌われないか、それは恐れ
ていたので、ファントレイユは何を言っても、嫌ったりはしないん
だと彼に教えようと、心を砕いた。

そして出来るだけ優しく、彼がどれだけ我が儘を言っても何でも無
いんだと、諭すようにささやいた。

「…勿論、お望みの場所に、いつでも一緒します」

王子がその美貌の騎士の、心からの申し出に、満面の笑みで応えた
のは、言う迄も、無かった…。

ギデオン（後書き）

べっぴんギデオンの登場です。

本人は、自分は凛々しく、それは堂々たる剣士だと、思っています。

母親そっくりの容姿で

母親ときたら王家の血を引く、もの凄いべっぴんですが

本人は母親よりうんと遅しく、長身だから、

自分は立派だと、思いこんでいます。

一般に、「近衛に入ってギデオンに一度も

見惚れない男はいない」

と言われるくらいのべっぴんですが、本人に勿論

全然自覚はありません。

城下の食事（前書き）

連載中の、進行状況、のっけています。

ブログです。

良ければやきに、付きあってやって下さい。

<http://easerrurind.seea.net/>

†：登場人物紹介：†

ファントレユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

て無くし

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、
抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからっきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を

度々救い、信望を得ている。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに

出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

スターグ・・・ファントレイユの後輩。マントレンの隊所属。

下級貴族で、腕が立つ遊び人。

ラウリッツ・・・スターグの友達。二人つるんでいつも

派手に遊んでいる。

城下の食事

その日、ソルジェニーはずっとファントレイユを待ったが、彼はなかなか姿を現さなかった。
軍務で、出頭が遅くなるとは聞いていたが。

午後の日が暮れ始めても彼の姿が無く、ソルジェニーはぼつんと室内で、時間を持て余した。

大抵午前中には、色々な行儀見習いだの歴史だのの講義は終わっていたし、昼食後は夕食まで、彼は放って置かれるのが常だった。
以前は一人が気にならなかったが、ファントレイユと出会って以来、あんまりたくさんの人との出会いで、一人で居る事がどれ程孤独な事が、彼は改めて思い知った。

召使いが夕食の支度をしていき、彼はいつも一人で食べるその食卓に、着く気すら無く、ぼつんと椅子にかけたままぼんやり戸口を眺めては、それが開く様子の無いのに、落胆した。

だが、並べられた夕食が冷め切った頃、その戸口はいきなり開いた。

「失礼。大変遅くなって…」

ファントレイユは息を切らし、自慢のたつぷりのグレーがかった栗毛を乱して、彼の前にその姿を突然、現した。

が、待ち侘びて顔を上げるソルジェニーのその顔と、食卓に並ぶ、手の付けられていない冷めた夕食を目にし、ファントレイユは一息整えて、いつもの軽やかで自信に満ちた声色で彼に、告げた。

「…お食事が、まだのようだ」

だがソルジェニーは静かに、俯いた。

「…食欲が、無くて」

ファントレイユは肩をすくめた。そしてつかつかと食卓の上の食事の、鳥肉を指で摘んで口に放り込むと、もぐもぐと口を動かして食べ、頷いてソルジェニーに微笑んだ。

「…とても、美味しいですよ?」

室内が一気に、明るくなるような彼の存在感に、あまりに寂しかったソルジェニーは涙が、零れそうだった。

ファントレイユにはその様子が、解ったようだったが彼は微笑みを崩さぬまま、もう一摘みして、口に放り込んだ。

「…お食べにならないんですか?」

「お腹がお空きなら、貴方が頂いて下さい」

ソルジェニーのか細い声にファントレイユは、チラと王子を見はしたが、さつさと椅子に掛けると、ナイフとフォークを使い始めた。

「では、遠慮無く頂きましょう。」

…何せ昼食も頂けなくて、腹ぺこですから」

そして、もりもり食べる彼の様子に、ソルジェニーは目を丸くした。

「…あの…」

お食事もされずにここに、駆けつけて下さったんですか?」

ソルジェニーの、その気遣わしげな様子にファントレイユは肩をすくめて、何でも無いように微笑を浮かべ、つぶやいた。

「…まだ、いい方ですよ。」

行軍になれば、ヘタをすれば夕食もお預けなんて、ザラですからね。それにここに顔を出したお陰で、こんなに豪華な食事に、ありつけた。

…まさか私が腹ぺこだと知って、わざと残して置いて頂いたんじゃないありませんよね?」

悪戯っぽくそう言って笑うファントレイユに、ソルジェニーの心はすっかりうきうきしてしまった。

「…違います」

微笑んでそう告げると、ファントレイユはやはりうつとりするような微笑を、その返事に返した。

が、フォークから肉を更に口に放り込むと、もぐもぐさせながら口を利いた。

「…では…貴方はまだですか」

「…あんまり、食欲が無いので…」

ファントレイユはグラスから飲み物を取ると、そう言って俯く王子を見つめた。

「…それは…いけませんね。育ち盛りなのに。」

お食事はお口に、合いませんか？」

言いながら、だが手は相変わらず、フォークで肉を押さえてナイフで切り分けている。そしてまた口に放り込む。

「…あの…」

こんな手の込んだ食事よりたまに、もっと…その…

素朴な物を食べたくなるんです…」

ファントレイユは、頷いた。

「なる程。確かに豪華な食材を使った、私じゃ滅多に食べられないご馳走ですが、貴方にとっては何を食べたいとか、我が儘は言えないようですね…」

ソルジェニーは力無く、頷いた。

「…あの…。お仕事が大変でしたら、来られないと断って頂いても構いません」

ソルジェニーがそう、落胆したようにつぶやくと、ファントレイユは一つ、タメ息を付いてフォークを、置いた。

「…今度からは遅くなる時は、使いを超越すとしましょう…」

まさかずっと、待っていていらした？」

ソルジェニーは、ファントレイユにとっても優しげにそうささやかれて慌てて首を、横に振った。

「…そんな筈ありません。」

それでも私だって、それなりに時間を過ごすやり方がありますから…」

だがそれを聞いたファントレイユは少し、怒ったように眉を寄せた。

「…王子。他人に気を使うのはもっと、大人に成ったら嫌でもしなけりやなりません。」

…少なくとも私に気遣いは無用です。

様子で、気づかない呆け者だと、私の事を思っていらっしゃる？」
氣を使つて怒られるなんて、ソルジェニーは想定外で、思わずびっ
くりして顔を上げて彼を、見た。

だがファントレイユは尚も、眉間を寄せたまま言った。

「子供は大人に気なんか、使うものじゃありません」

その、むくれたような言い用に、ソルジェニーはつい吹き出した。
だがファントレイユは尚も言った。

「ちゃんと自分の本心を、言えないようになってしましますよ？
素直に自分の、気持ちを言えがいいんです」

ソルジェニーはその言葉に後押しされて、つぶやいた。

「ずっと待つていて、とても寂しかった」

そう、口にした途端自分があんまり哀れで、ソルジェニーはつい目
頭が熱く成った。

ファントレイユは真顔でその様子を見て、ようやくほっとしたよう
に、口を開いた。

「これで私もちゃんと、謝罪が出来る。」

「お待たせして、本当に申し訳ありませんでした。」

次回からはちゃんと、貴方が待つてしていると覚えて置いて、氣を配り
ますから」

ファントレイユが真つ直ぐ王子を見つめて静かにそう告げると、そ
れが申し訳無いような表情をするソルジェニーの様子に目を止め、
言葉を続けた。

「それが大人の仕事です。子供は我が儘を言うのが仕事。」

忘れないようになさい」

そう、諭すように告げられ、ソルジェニーは潤んだ瞳で、頷いた。
ファントレイユはナプキンで唇を拭くと、急いでつぶやいた。

「しかし育ち盛りの子供が夕食を抜くのは、頂けませんね。」

城下の、私の知っている店がまだ、開いている。

あんまり上品な場所じゃ無いが、致し方無い。

食事は多分、貴方のお口に合う筈です。女将さんがそれは、料理上

手なので」

ソルジェニーの目が、まん丸に成った。

「…これから…お出かけして下さるんですか?!」

その様子が、あんまり嬉しそうだったのでファントレイユはつい、微笑んだ。

「お召し物を、もつと質素にして頂かないとね。

お城の中とは違いますから。

馬には、お乗りになれるんでしょう?」

「勿論です!」

ソルジェニーはそう叫ぶと飛び上がりそうな勢いで、椅子をがたがた言わせて、着替えの部屋へと駆け込んで行った。

ファントレイユはその様子について、微笑ましくって笑みを、こぼした。

ソルジェニーが、彼のそれは見事な、栗毛の馬に跨ってファントレイユの後を、付いて行く。

ファントレイユは目で王子の乗馬の様子を、気づかれない様にこっそり観察していたが、彼の乗馬の、それは自然で乗り慣れた様子に一つ、頷くと拍車を、掛けた。

ファントレイユの、その自分を置き去りにする早さに、ソルジェニーも思わず必死に彼の後を、追う。追いついて彼に並ぶと、ファントレイユはそれは優雅に馬を操りながらソルジェニーに振り向いて微笑みを送り、更に速度を、上げてみせた。

ソルジェニーが、それでも付いて来ると、誉めるように彼に微笑み返す。

ソルジェニーは彼の視線を受けると、途端に心が弾む自分に、気づいた。

ファントレイユに見つめられると、自分は何だか特別な、人間になったように凄く、胸が熱くなった。

間もなく、彼は並ぶ家々の軒先から粗末な門を見つけ、潜って中に馬を進め、居並ぶ馬の列に、自分の馬を、繋いだ。

ソルジェニーが彼に習って馬を降りて繋ぐ様子を見て、ファントレイユは笑った。

「…そんなに自分で何でも出来るんなら、城の中はさぞかし、もどかしいでしょう？」

「…皆、私に何も、させてはくれません」

ファントレイユはそのソルジェニーのぼやきに、心からの笑顔を、見せた。

あんまりその笑顔が屈託無く明るくて、ソルジェニーもつられて、笑顔になった。

ファントレイユの手が、彼の背に回され、押されて促される。

その手の温もりに、ソルジェニーはどきん…！と心が高鳴った。

そんな風に自分に触れてくれる相手が、城の中で誰も、居なかったからだだったが、それを別にしてもファントレイユの、その柔らかい癖にどこか強引な態度は、男らしい美貌も伴って相手を、どきまぎさせるんだと、ソルジェニーは思った。

彼の肩に自分の頭が触れる程で、振り返ったりすると彼の胸元が、それは近くって、彼にそんな風にエスコートされると何だかとても、どきどきしている自分に、ソルジェニーは戸惑った。

が、ファントレイユは何でも無い様に、灯りの漏れた賑やかな戸口から中へと、彼を促す。質素な、剥き出しの木が壁一面を覆い、カウンタも、幾つもあるテーブルや椅子も、全て木材なのが一目で解るその広い部屋は、酒の入った男達でそれは、賑わっていた。

ファントレイユが姿を現すと、奥のテーブルに掛けていた男が彼の姿を見つけて杯を上げ、合図を送る。

ファントレイユはその男に視線を送り、王子の肩を抱いて彼らのテーブルへと、酔っぱらい達を掻き分けて進んだ。

幾人の、カウンター前で立って飲んでいた男達が、ファントレイユの姿を見つけて声を掛ける。

「…隊長！どうしたんです？王子の護衛以来こんな店とは、無縁でしょう？」

「…身分の高い美人ばかり相手にして、ここはお見限りかと思いましたが、連れてくるソルジェニーに目を止め、その隊員らしい酔っぱらい達は二人を取り囲んで、目を丸くした。」

「…貴方にしては、随分………」

「…こんなに若い少女が好みだったとは…。」

「…そりゃ、美少女だとは思いますがね。」

護衛を始めて、趣味が変わったんですか？」

「……いつもは必ず、どこから見つけてくるのかと思うような、そりゃあ色気のある品良い美人を、とっ代えひつ替え連れ歩く癖に……！」

ファントレイユは五月蠅げに、その酔っぱらい達に眉を寄せると、ソルジェニーに手を伸ばそうとする男達を手で払い退けて言った。

「知り合いの親戚の子供だ！いいから、絡むんじゃない」

咄嗟に、ファントレイユの胸に抱き寄せられる格好になって、ソルジェニーの心臓が、跳ね上がった。

衣服をそれは、彼は優雅に付けていて解らなかったが、触れてみるとファントレイユは、それは引き締まった、しなやかで逞しい体付で、ソルジェニーは思わず心臓がどくん…！と鳴った。

『風の民』ではもつとたくさん、逞しい男達が居て、彼を抱き上げたり肩を抱いたりしたのに、こんなにどきどきした事何て、無かった。

ソルジェニーは、成熟した大人の男性は、こんな風なのかと改めて思っ、頬がつい、熱くなった。

ファントレイユは彼らから護るようにソルジェニーを胸に抱いたまま、ようやく、杯を上げた友の元へ王子を連れて行き、彼らの向かいに腰掛けさせて自分も隣に、座った。

杯を上げた男は明るい栗毛の癖っ毛を肩の上で揺らし、穏やかな茶

の瞳の、いかにも、平民のような田舎顔で、気さくで気のいい優しい表情を、浮かべて笑った。

「…今夜は随分、若い連れだな」

フロントレイユは途端に、気を悪くした。

「ヤンフェス。…君迄そんな事を言うのか？」

だが男は気にした様子無くソルジェニーに微笑みかけると

「食事かい？このじゃがいもは、美味しいぞ」

ソルジェニーは途端、彼の親しみ易い笑顔に釣られて笑った。

「それを食べてみたい」

ソルジェニーのその様子に、フロントレイユも思わず笑みを漏らし、注文伺いに来た男にそれを告げた。

彼の横には、金に近い真っ直ぐな栗毛を伸ばし、理知的な青い瞳で小顔の、少し青冷めた顔色をした、利発そうだが弱々しげな体格の小柄な男が、居た。

彼は理性的な言葉遣いで、ソルジェニーの考えを読んだように告げた。

「…フロントレイユは、特別だ。」

彼に扱われる大抵の相手は、どきどきするらしい」

フロントレイユは気づいたように隣のソルジェニーを振り向くと、尋ねた。

「どきどき？」

ソルジェニーは途端、気恥ずかしそうにフロントレイユから顔を背けて俯いた。

フロントレイユは言った男を見たが、彼はすまして杯を、口に運んだ。

フロントレイユの、眉が寄る。

が、ヤンフェスと呼ばれた気さくな男が、肩をすくめてみせた。

「…君くらい性的魅力に溢れた男は珍しいと、マントレンは言いたかったんだろう？」

第一私が君と同じ事をしてる彼女…それとも、彼か？」

フロントレイユに訊ねるが、彼は首を振っただけで、答えなかった。途端、男は何かを察したように、頷くと続けた。

「…ともかく私が君と同じ扱いをしても、きっと相手はときどきしたりは、しない」

フロントレイユが、どうかな、と首を傾ける。

マントレンが、畳みかけるように言う。

「…そりゃ、そうだろ？」

が、フロントレイユはソルジェニーに向き直ると、二人を紹介した。

「…こっちはヤンフェス。」

近衛一の、弓の達人だ」

人の良さそうな男は、笑顔で頷いた。

「…そして君にロクでも無い注釈をしたのは、マントレン。

参謀としては誰もが兜を脱ぐ、頭脳派だ」

「…ロクでも無い注釈をした割にはご大層な紹介をしてくれて、感謝すべきか？

…それで…彼…だろう？

何て呼べばいいんだ？」

二人はどうやら、彼の連れが王子だと、気づいている様子だったがそれを口にする事は、無かった。

「…どう呼ばりたい？」

フロントレイユのその美貌は、その粗末な酒場の中では更に輝きを増し、浮き立つように見えて、ソルジェニーは途端にどぎまぎしたが、そつと告げた。

「じゃあ…ソランと…」。

『風の民』には、そう呼ばれていたので…」

フロントレイユは頷いた。が、二人は王子のはにかむ様子に目を丸くして、お互い顔を、見交わした。

「…何か凄く、免疫が無さそうだが、大丈夫かい？」

ヤンフェスが、心配げな表情でささやくように言うと、マントレンも、唸った。

「君を押したのは、ギデオンだろう？」

そりゃ、適材とは言え、君相手じゃ、ソランは初過ぎる……」

ファントレイユの眉が、ますます寄った。

「…君達は何が言いたいんだ？」

ソルジェニーはそんな素の彼の様子が、すごく新鮮でつい、見入った。

ファントレイユは冷静な態度を崩さぬまま、彼らに言った。

「…別に見合いを、している訳じゃないし第一、マントレンが言っただよくに、“彼”だ」

二人は思い切り納得し兼ねたようだったが、友のその態度に同調するように、素知らぬ顔を作ると話題を切り替えた。

「…で、食事に来たのか？」

ヤンフェスの問いに、ファントレイユは優雅に笑う。

「遅くなったのでね」

ヤンフェスは頷くと、

「その、問題の主達は反省する気も無くここに顔を、出しているぞ」マントレンも続ける。

「君に、厄介事を押しつけて、いい気なものだ」

ファントレイユは途端、思い出したように二人の友の顔をじっと見つめた。そして言った。

「…押しつけたのは、君達もじゃないか…」。

騒ぎを聞いてそっと逃げたろう？」

ヤンフェスとマントレンは途端に肩を、すくめ合った。

「色事は君の、専門分野だ」

ヤンフェスが素っ気なく言うと、マントレンもくぐもるように告げる。

「正直…決闘騒ぎは、私じゃ手に負えない」

ファントレイユは友達甲斐のない二人に、呆れた。

「…女性の問題で、決闘騒ぎが、あったんですか？」

ソルジェニーがそっとそう問うと、彼はその美貌の面を向けてささ

やいた。

「…問題を起こしたのは、私じゃないがね…」

マントレンの隊の者で、女性を孕ませて捨てたとその女性の兄が、剣を抜いてまっ昼間、近衛の兵舎に怒鳴り込んで来たんだ」

ファントレイユはそのまま告げたがやっぱり、ソルジェニーは目を見開いて、ぱちくりさせた。

途端、ファントレイユが額に手を、当てた。

「…やっぱり、刺激が強いようだな…」

ファントレイユがそう、ぼそりとつぶやくので、ソルジェニーは慌てて訊ねた。

「…それで、どうやって収めたんです？」

「私が責任者だと名乗り出て…」

ご存じの通り、マントレンは逃げたのでね」

ファントレイユに流し目で睨まれて、マントレンは横を向いて、目を逸らした。

「…事情を聞くからと、ともかく剣を鞘に、納めさせた」

ヤンフェスが机の上で腕組んで、乗り出して聞く。

「…それから？」

ファントレイユは彼を見て、思い切り首を横に、振った。

「…それからが、長くなってねえ…」

剣を抜いて来るくらいだから、もっと直情的な男かと思ったら、愚痴り初めて…」

「だがどうせ君の事だ。さっさと話を、切り上げたんだろう？」

マントレンが、素早く口を挟むがファントレイユが、それは弱り切った表情を、見せた。

「…そうしようとする、泣き出す」

それを聞いて、二人が途端に、下を向く。マントレンが、タメ息混じりに言った。

「…それは…どうしようも無いな…」

ソルジェニーもそう思った。

ヤンフェスが、顔を上げると聞いた。

「…それで結局、どっちだったんだ？」

スターグか？それとも、ラウリッツか？」

ファントレイユが、頷いて返す。

「…やっと特徴を聞き出してスターグだと解ったので…。

慌てて彼を捕まえて事情を問い正した。

ところがあいつは、自分がそんなヘマをする訳が無いと言い張る。

…ソラン。じゃがいもが、冷める」

ファントレイユに目線で促されて、テーブルに乗る、注文した品が届いたのに気づき、ソルジェニーはスプーンを取った。

「…ああ。そのベーコンもとうもろこしも、絶品だ」

マントレンに言われて、口に運ぶが、皆それは素材を活かした素朴な味で、ソルジェニーは一気に空腹を思い出した。

その食べっぷりに、二人は思わず目を、見合わせた。

ヤンフェスが、呆れたようにつぶやいた。

「…とてもお腹が、空いていたようだ…」

ファントレイユが、くすくす笑った。

「育ち盛りなものな」

「…それで？」

マントレンが言うので、ファントレイユは続けた。

「…ともかく、スターグと話していると、熱血の兄貴は待たせた部屋からまた、剣を抜いて喚きながら俳諧するし…スターグは、絶対女性が嘘を付いていると言い張るし…」

「…言い張るんじゃない、嘘を付いてる。あっちが」

言葉を継いで、男がテーブルの横に、立つ。

確かに、見目の良く、肩幅もがっちりとした黒髪の伊達男だったけれど、尖ったナイフの様な印象の、少なくとも上級貴族なんかじゃなく、宮廷に縁無く品も無い、荒んだ感じのする若者に、見えた。

「…あんたに世話になって申し訳無いが、この後は俺が話を付ける」
ファントレイユが、そのブルー・グレーの瞳を真剣に輝かせてその

彼を見据える。

「…両親を亡くして兄一人しか身内の居ない女性だぞ…。
兄貴を斬り殺して天蓋孤独に、する気じゃないだろうな…！」

ファントレイユに低い声でそう怒鳴られて、スターグの顔が、歪んだ。

「…ともかく、女と話させてくれ…！
それ切り、あんたに世話はかけない」

ファントレイユはその言葉に、唸るようにつぶやいた。

「…兄貴が監禁しているんだ…！
第一貴様を見た途端、あの瞬間沸騰の兄貴は斬りかかって来るぞ…！
どうせお前は、かわしたりせずにはっさり殺る気だろう？」

「…じゃあ君が、女性と話すしか、無いだろう？」
マントレンがその緊迫感を収めるような、理性的な声で口を挟むと、
ヤンフェスも繋いだ。

「…君なら大抵の女性は、うっとり見とれて口を割る」
途端にファントレイユは、げんなりしてつぶやいた。

「…全然嬉しく無い評価だ」
「…そうだろうな。秘め事で無く、もめ事納めにその美貌を、使う
となれば」

ヤンフェスの、その素っ気ない言い様を、ファントレイユは軽く睨むが、それしか手が無いのか、次に大きなため息を、付いた。
そしてテーブルの横に立つスターグを見上げて言った。

「…本当に、覚えが無いんだな？」
ファントレイユがスターグに、聞くと彼は頷いた。
だがスターグは、美貌の色男に貸しを作るのは、凄く嫌なようだった。

彼の後ろから肩に腕を回して抱き、スターグの顔を覗き込む男が言った。

「スターグ…。俺が兄貴を抑えて置いてやるから、女と話を付けろ」
…もう一人の問題児、ラウリッツだ。

二人はファントレイユ達より幾らか年下で、近衛の中でも腕も立ち見目も良く、乱暴者でしかも遊び人で有名だった。

ラウリッツはやっぱり品の無い若者だったが、栗毛の巻き毛を長く伸ばし、はしばみ色の瞳をした、それはチャーミングな人好きのする美男だった。

だがこれにはマントレンが、猛烈に異を唱えた。

「…どう話を付ける！脅す気か？」

もし彼女が嘘を付いているんだとしても、脅されて女性が本音を言うか？

「…それですます頑なになったら、お前は彼女に乱暴しないと、誓えるのか?!」

スターグがこれには、目を剥いて反論しようとしたが、ヤンフェスがその前に、静かな声でつぶやいた。

「…勿論、穏やかに話せるんだろ？スターグ？」

途端、スターグは、自分の今の状態ではそれが、出来そうに無い事に思い当たって、うなだれる。

ヤンフェスはその様子に肩をすくめ、マントレンも、そら見ろ！と首を横に、振った。

ソルジェニーはまたまた、劇とかお話の一節のようなその場の展開に、スプーンを口に、運びながらもわくわくしていた。

ファントレイユは彼らのやり取りを見守っていたが、口を開く。

「…私に、借りを作るの嫌らしいが、仕方無いな？」

ファントレイユに念を押されて、スターグはうなだれた。

ラウリッツは、隊長達年長者の無言の迫力に、やれやれと肩をすくめると、友の肩を、ぽん！と叩いた。

スターグは立ち去ろうとして振り向くと、ぶっきら棒にファントレイユに、告げた。

「…この今夜の食事は、奢らせてくれ」

ファントレイユは彼の貸しを少しにしてやろうと、頷いた。

「…奢られてやる」

スターグは、頷いた。

背を向けてラウリッツと酔っぱらい達の間、その姿を消す。途端、ヤンフェスがソルジェニーに向き直った。

「…りんごのパイも、美味いぞ！」

マントレンも、畳みかけた。

「チーズのケーキも、凄くいける」

そして二人は、ソルジェニーの返事を待たずに注文を取る為、揃ってウェイターを、呼んだ。

ソルジェニーが、その二人に呆れてファントレイユの様子を伺うが、彼は事後処理を一気に任された事に、額に手を当てて俯き加減で首を横に振っていた。

が、店の者が注文を取りに来るとすかさず顔を上げて、言った。

「…葡萄酒だ。この店で一番上等のを、くれ」

ソルジェニーはそれを聞いて、思わず自分の言葉を、飲み込んだ。そして、俯きながらつぶやく。

「…生クリームたっぷりのケーキは、ありますか？」

ヤンフェスとマントレンはその言葉に思い切り頷くと、直ぐにそれを、注文した。

テーブルに運ばれた山盛りのデザートと、高級酒を、全員がそれは満足そうに、心ゆくまで正味したのは、言う迄も、無かった…。

城下の食事（後書き）

さて……。番外編「ファントレイユとの出会い」

の、チャプター1・2・3くらい迄終わりましたね……。

この後はまだ充分直しが終わってないので、作者が大変です……。
ここらでインタビューしてみましょう。

ギデオン、やっと登場ですが、ファントレイユ、ご意見をどうぞ。

ファントレイユ：この頃は、ギデオンはきっぱり猛獣だと、思っていました……。

ギデオン：それで私に対してあんなに遠巻きなのか……？

ファントレイユ：普通、相手が猛獣なら、対処方に神経を配るものだ……。

大けがをした後に後悔しても遅いだろう？だって……。

だが君の方も、よく考えたら私に一目、置いていてくれると言っか
言動に君にしては、気を使っているように思うが……。

ギデオン：君は弁が立つし、ともかく君との論争は避けたい所だ……。

アドルフエス：このチャプターだろう？ヤンフェスやマントレンが出て、あるう事が

スターグ迄もが、私より先に登場するのは・・・。

レンフィール：作者はシャッセルだけで無く、スターグもひいきしているように思うが・・・。

スターグ：冗談でしょう・・・。作者からは私は都合のいい狂言回し役としてしか

重宝されていない気がする・・・。

ファントレイユ：本編では、レイファスなんか宛われるしな・・・。

スターグ：・・・・・・・・・・・・。いくら乱暴で無法者だからって・・・・・・・・。

邪険にされ過ぎている気がする・・・・・・・・・・。

今回だってぬれぎぬなのに・・・・。しかもこの頃、目にする度にどハデなやさ男だと

思ってるファントレイユ殿に借りなんか作らされるし・・・・・・・・・・。

ファントレイユ：どハデなやさ男？

スターグ：だって・・・・。いつだっていい女連れ歩いて、嫌味ったらないじゃないですか・・・・・・・・。

ファントレイユ：・・・遊び人のお前に言われる筋合いは、無いと思うがな！

ヤンフェス：スターグ・・・そういう所が迂闊なんだ・・・。

あのアドルフエスですら、ファントレイユには言葉では絡まないぞ・・・。

勝てないと、知っているからな。

アドルフエス：・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
。

ギデオン：ファントレイユと言葉でケンカしてみる・・・。

二度とは消えぬ、心の傷を負うものなんだ・・・。

スターグ：どうしてあんなやさ男相手に凶体の立派な先輩達が言葉を控えるのかと思ってたが、・・・・・・・・そういう理由なのか・・・？

アドルフエス：懲りないのは、レンフィールくらいだ。

・・・それでも他の奴の1/10くらいしか、ファントレイユには言わないが・・・。

レンフィール：私だってファントレイユ相手に、滅多にやぶは突つかないぞ・・・！

それはぞつとする、蛇が出るからな……。

ファントレイユ：やめてくれないか？人でなしのように言うのは。

私はただ事実を端的に、言っているだけだ！

マントレン：事実だからこそ、余計心に、付き刺さるんだ……。

皆、俯いて頷く。

ギデオン：彼と話していると、自分では知らなかった自分が

はっきり浮かび上がるしな……。

しかもその自分は・・・・・・かなり、覚えのある自分だから、反論しにくいのが特徴だ・・・・。

「巧妙な攻め方だ……。」

相手の攻撃を塞ぎながらも攻め続ける……。

そんなやり方をされたら息絶えるのは、直だろう？

ファントレユ：……。私はそ
んなやり方をしているのか？

全員、頷く。

マントレン：君は普段、それは優雅に、ロマンチックに

見せてはいるが実はもの凄く現実的だろう？

言葉にしろ、剣にしろ、実戦重視で勝ち方を、研究しきっている・
。。ご婦人に対してもそうだ。

で、ひとつ疑問なんだが、いつも自分は勝つ事には興味ないような
顔をしているが実は君つてもしかしてもの凄く

・・・負けず嫌いなんじゃないのか？

思わず全員、乗り出す。

ファントレユ：それは無いだろう・・・。

勝つ気は無いが、負ける気も無い。

降りかかる火の粉を払っていたら、ただ単に、強くなっただけで・
。。

自分から争いを起こそうと言う気は無いし。

・・・だって、私の周囲には大抵の相手が私より短気だからな・
。。

ギデオン、アドルフエス、レンフィールが、気づいて顔を下げる。

ファントレユ：そういう連中と渡り合っていたりしたからこうな
っただけで・・・。

ギデオン：それは私のせいと聞こえるが・・・。

ファントレイユ：そう聞こえるのは明らかに君の耳がおかしい。

別に君がどうか、批判はしていないぞ。

レンフィール：だがお前が話すと、ひっかかりたく無くても、どっか引っかかって

勝手に心が傷つくんだが、どうしなんだ？

ファントレイユ：君の心が勝手にひがんでいるからだ。

全員、そうか？とファントレイユを見る。

マントレン：つまり・・・。大抵の相手は確かに君より短気だが、

大抵の相手は君より、繊細だと言う事だろうな。

ファントレイユ：：繊細・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・？

アドルフエス：外見で判断しているな？！

レンフィール：そうだ！いくらアドルフエスがごついからって、神経が

無いと思ったら大間違いだからな！

アドルフエス、レンフィールを睨む。

ギデオン……私も傷つかないと思ってないか？

ファントレイユ……つまり君達は、拳で殴られる方が

心突き刺されるよりマシだと考えているのか？

アドルフエス・当たり前だろう……。

ギデオン：心の傷には薬が、塗れないだろう？

スターグ ヤンフェスな顔を寄せて）：ファントレユ殿は、実はあんなに強かったのか？

マントレン：もっとと人生経験を積み・・・スターグ。左將軍なんて、運だけで回って

くるもんじゃない・・・。

ファントレィユがギデオンの左に並んだのは、偶然なんかじゃないぞ……。

スターグが、思わず、頷いた。

あああ、こんな書いてたら、今度はファントレィユが左将軍に選ばれた時

の事も書きたくなつて来たわ……。

それは、こたこたしただろうに……。

ファントレユ：面白がってるだけだろう？

……まあ、そうです……。

ギデオンの夕食 1（前書き）

＋：登場人物紹介：＋

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

ギデオンとの夕食 1

その翌々日の夕暮れ、護衛の職務に王子の部屋を訪れたファントレイユは、ソルジェニーの自室のソファに掛けるよう勧められ、腰を落ち着かせる間も無く王子の質問責めに、合った。

王子は向かいに掛け、手ずからお茶を入れて差し出したものの、ファントレイユに向けて一気に口を開く。

だが矢継ぎ早に尋ねる、頬を紅潮させて興奮の面持ちで自分に返答を催促する王子を尻目に、ファントレイユはソファの向こうにしまった、またそっくり手の付けて居ない冷め切った夕食の、まるっと残った食卓にその視線を落として、ぼそりとつぶやいた。

「王子。また食欲が、おありじゃないんですね……」

夜出かけた日の翌日、ファントレイユから軍務で護衛に付く事が出来ないと連絡が入り、その翌日：つまり今日は、夕食時にしか来られないとソルジェニーの元に使いの者が、訪れた。

じらされ切った王子は、その後どうなったか、知りたくてたまらなかったのだ。

ファントレイユは彼に、手短に話した。

確かに、昨日来られなかったのは、かの女性の家を訪問し、今ではすっかり見慣れた、妹を溺愛する兄の取り次ぎで、問題の女性に会ったと。だが彼女はガンとして、スターグの子供を身ごもっている、と、引かなかった。

そしてどうしても、彼と会いたいと言い出し、ファントレイユは兄を説得し、自分が立ち会い、席を立たないからと約束して妹を、連れ出した。

彼女が、スターグに惚れ込んでいるのは明らかで、スターグの冷たい態度にそれは、打ちひしがれていたと。

だがファントレイユは彼女に、脈の無い男を追いかけるのはうんと馬鹿げているし、スターグはとうてい、夫にも父親にも向かず、彼

が責任を取った所で決して幸せにはなれないと、言い続けた。
そんな風に、必死で説得する彼に、彼女は心惹かれたらしい。

ファントレイユの気が、自分にあると勘違いした彼女は、自宅へ送る途中とうとう、自分は身ごもってなんか居ないし、スターグの事は忘れるから、これからは自分の事だけ見て欲しいとファントレイユに告げて、彼をそれは、困らせたらしい。

「…それで、どうしたの？」

ソルジェニーが聞くと、ファントレイユは頭を、抱えた。

「どうもこうも、ありませんよ…」。

身ごもって無いと、証明出来るのかと聞いたら、出来ると言い出し、彼女に、兄の前でそれを言ってくれるよう、説得したのは良いんですが…。その後がね…」

「……後が？」

「彼女の兄が、妹の狂言だと解って胸を撫で下ろした所で、その妹は、自分はある男は忘れて、私と付き合うと言い出すものだから…」

「…それでファントレイユは、彼女と付き合う事に、成ったの？」

ファントレイユは優雅な面持ちを少し青冷めさせてつぶやいた。

「冗談でしょう？」

出来ない事を出来るだなんて、私は死んだって言いません。

勿論、きっぱりと言いましたよ。付き合えないと」

「…………でもその場でそんな事を言ったりしたら、凄く大変な事になるんじゃない？」

「…覚悟は決まっていたからね。

ともかく、私には思う相手がとつくの昔に居るし、彼女以外は考えられないから、どうしても付き合う事は出来ないと言うって、兄に、殴るなり蹴るなり、したいなら好きにしろと開き直ってやったんです」

「無事収まった？」

「私はどこか、痛めてますか？」

ファントレイユがようやく微笑むので、ソルジェニーも笑った。

「…ファントレイユの誠意が、お兄さんに通じたんだね？」

「泣き言に、付き合った甲斐が、あったというものです」

ファントレイユの、その珍しく疲れた様子に、ソルジェニーは心配げに、尋ねた。

「…大丈夫ですか…？」

ファントレイユはその王子の、何うような様子に途端に笑うと、

「スターグに思い切り、あんな安酒場の夕食なんかじゃ全然、割に合わないと思っちゃってやりましたからね」

ソルジェニーも釣られて、笑った。でもふと、思い返してささやく。

「…ファントレイユは、彼女じゃなきゃダメな程の、想い人が、居るの？」

ファントレイユはその美貌で軽やかに微笑むと、告げる。

「…ああ、それは勿論、嘘です」

ソルジェニーは途端に目を、ぱちくりさせた。

その王子の様子を目にし、ファントレイユは少し気まずい笑みを浮かべてつぶやいた。

「…それ位は言わないと、納得しないでしよう？だって」

「…だがそんな嘘はお前の評判を聞けば、すぐバレると、思うがな」
ふいに後ろからギデオンの声がして、二人して振り返った。

彼がそこに居るだけで、一気に場が華やぐ程の、鮮やかな波打つブロード。

そして一瞬、見入ってしまう、綺麗な小顔。だが堂とした態度は明らかに、武人のそれだった。

ソルジェニーは彼の登場に心が騒いだが、確かに、自分の護衛を務めている間、目立ちまくっているファントレイユを思い浮かべ、ギデオンの、言った通りかもしれないと、また心配げにファントレイユを覗き込んだ。

が、ファントレイユはギデオンのその姿に笑いかけた。

「…ご心配、ありがとう！だが彼女は暫くして自分に言い寄る男が

出てきたら、すぐに私の事なんか、忘れるさ！」

ギデオンは、だがじっとソファにかけてそう微笑みかけるファントレイユを見つめると、ぶっきら棒につぶやいた。

「君くらいの美貌の男が、女性に簡単に、忘れ去られるとは到底、思えないが」

ファントレイユがその言葉に、あんまりまじまじとギデオンの顔を見つめるので、ギデオンは途端に、罰が悪そうな顔をして問い直した。

「私はそんなに、間拔けた事を言っているのか？」

「いや……？君にそんな風に、思われてるなんて、知らなくて意外だった」

ファントレイユの返答に、ギデオンはほっとしたように肩を、すくめた。

「どうして私だと意外なんだ……！」

第一これは、ヤンフェスやマントレンの意見だぞ？

私も彼らに、同感だと思ったただけだ」

ヤンフェスとマントレンの名を聞いて途端、ファントレイユが気遣わしげにギデオンを、見つめ尋ねる。

「彼らと、話したのか？」

ギデオンは二人の斜め横のソファに腰掛けながら、ファントレイユの、自分の顔を伺う様子に気づいたが、とぼけた。

「随分な騒ぎだったからな……。いくら近衛の兵舎だって、抜刀したまま昼日中徘徊する奴は、珍しい」

腰を降ろし様、手を胸の、前で組む。

「……そうか………それでその………」

ファントレイユはギデオンがどこに話を持っていくのか、見当がついてそつと彼を伺い見る。ギデオンは意地悪く笑うと

「……君の、お手柄だ。」

さすがに日頃流血は嫌いだと言い張るだけあって、スターグの理不尽な斬り合いを押し止めた事は、誉めてやる」

ソルジェニーはギデオンの言葉を真に受けて、顔を輝かせてファントレイユを見たが、ファントレイユはギデオンの、滅多に口にしな
い『誉めてやる』という言葉に更に警戒を強め、彼が影で“猛獣”
と呼ぶその男の言わんとする事柄の落ち着き先を、慎重に見守った。
ソルジェニーがファントレイユの身構えた様子について、もう一度ギ
デオンの顔を、その理由を探るように振り返る。

ギデオンはファントレイユが、もう自分が何を言い出すのか、察し
がついていると踏んで、彼に向かって、笑った。

ソルジェニーが、見た事の無いギデオンの笑顔だったが、ファント
レイユは良く、知っているようだった。

背筋が、凍り付くような笑顔だ。

「…つまり…二人はしゃべったんだな？酒場にその……………」

ギデオンはファントレイユの言葉を、遮って言った。

「少女を伴って来たそうだな。」

知り合いの、親戚だそうだが、その知り合いとは私の事だろう？」

ファントレイユは、彼らがギデオンの猛獣振りを熟知していて、裏
切るとはどうしても思えなくて、もう一度聞き返した。

「…それも、マントレンとヤンフェスか？」

「いや？別口だ」

ファントレイユはやっぱり…とは思ったが、酒場で連れの少女を王
子だと気づかない間抜けが、迂闊にギデオンの前で口を、滑らせた
のだと解り、心の中で舌打った。

ソルジェニーも、彼を少女と間違えた、酔っぱらいの隊員を、思い
返していた。

そして安酒場に、よりによって嚴重警護が必要な、それは国にとつ
ての重要な身の上の王子を、お忍びで連れて行った事が彼にバレて
罰の悪そうなファントレイユの、下を向いて眉を寄せる様子を目に
し、ソルジェニーは慌てて彼を庇うように言った。

「ギデオン。私が頼んだ。ファントレイユに。」

もっと、素朴な物が食べたいって」

そう、可愛いソルジェニーに必死に言われ、ギデオンはふ、と冷め切った夕食の乗ったテーブルに、視線を向けた。

途端、ギデオンの顔が心配げに曇る。

「…食べて、無いのか？」

王子を見つめ、密やかな声音でそう言い、ファントレイユに視線を移す。

ファントレイユは彼の気遣わしげな碧緑の瞳に、そっと肩を、すくめて見せた。

ギデオンは途端ファントレイユに、神妙な表情を見せて静かに侘びた。

「…すまない。君はソルジェニーに、気を使っただんな？」

ファントレイユはその猛獣が、この小さないとこに弱い事を知ってはいたが、こうもあっさりと兜を脱ぐ様に、つい顔を、上げた。

その、彼の気遣いに素直に侘びる表情を向けた、自分の高い尊大な男のその愛情の深さを思えばかると、俯いてささやいた。

「…いや…」

私も彼の約束に、うんと遅れたので、償いがしたかっただけだ」

ギデオンはファントレイユが、彼を非難する事無く自分の非を理由に上げ、詫びを入れるその誇りを気遣う様子に少し、感謝するように頷くと、一つ、タメ息を付く。

「…それで今夜も、食欲が、無いのか？」

ソルジェニーは答えずに俯き、ファントレイユが代わりにつぶやいた。

「…その様だな……………」

ギデオンはまた一つ、ため息を付くと

「だが、安酒場は頂けない。

もう少し上品な酔っぱらいの居る店を、知っている。馬鹿高いが、

田舎料理も置いてある筈だ。

護衛の他に、私も同席すれば、文句も出まい」

ソルジェニーはそれを聞いて一気にはしゃいで顔を輝かせると、出

かける支度を、しに部屋を飛び出して行った。

ファントレイユが顔を上げ、ギデオンをまじまじと、見た。

「…君、本当に王子には、甘いんだな」

ギデオンはファントレイユに見つめられ、更にもう一つ、大きなため息を付いた。

「甘くも、なるさ……」。

君も様子を見ていたら、解るだろう？」

ファントレイユも思わず、頷いた。

ギデオンは、そんなファントレイユの、少し青冷めてやつれた、珍しくしおらしい姿を目にし、椅子から身を乗り出し、彼を伺うように見つめて訊ねる。

「それで？ 今日も別件でゴタついて、君は疲れていると言うのなら、私が引き受けるが」

が、ファントレイユは顔を上げて途端に明るく、笑った。

「…君の奢りで夕食にありつける、滅多に無い機会から私を、閉め出す気か？」

ギデオンがその笑顔に、釣られて笑った。

ギデオンはソルジェニーが一人で馬に乗る事を許さず、自分の馬の前に乗せてソルジェニーの後ろに跨った。

王子はそれは巧みに馬を操るのに…。

とファントレイユは馬上で手綱を取って二人の様子を眺め内心思ったが、王子はギデオンと同乗するのがそれは嬉しいようで、はしゃいだ様子で幾度もギデオンを振り返っては話かけ、ギデオンもそれは優しい表情を作り、彼の言葉にやっぱり、今まで一度だって聞いた事の無い、柔らかな声音で微笑みながら返答していた。

いと同志なだけあり面立ちの良く似た二人は、ギデオンの方が濃い黄金色の長い髪を肩に背に垂らし、ソルジェニーはそれよりは薄い金髪を背に流して、素直そうな青の瞳で、そのくつきりとした碧緑色のギデオンの瞳を、後ろに振り向いては見つめ返す。

…共に小顔で色白で、まるで少女のような王子と、近衛では半端無い睨みを効かすギデオンのそのとても優しげな表情に、普段からあまり男性に見えない美女顔も伴い際立って美しい、男装の姉妹のように目に、映る。

ファントレイユは何度も、自分の見ている光景が信じられなくて目を擦りたい衝動にかられたが、幾度目かでとうとう自分に言い聞かせた。

『そりゃあ、一度もお目にかかった事なんて無い猛獣のくつろいで愛情溢れる姿だが、いい加減見慣れる！』

それに彼があんな顔を見せるのは、王子に限定されているんだ。と、肝に命じて置くんぞ…！』と…。

だんだん建物の少ない外れにやって来て、ファントレイユも確かにこの辺りに上流の連中の使う、馬鹿高い店があった記憶が戻って来た。

が、二股の道の、右にギデオンが馬の首を向け進むのを見、

『あれ？こちらだっけ…』とぼんやりと、考えていた。

だが案の定暫く進むと、人っ子一人通らない道の両端を木々が被う、暗く人気の無い道に出た。が、その少し先の左へ細い枝道の伸びた分かれ際の木の枝に、看板がぶら下がっているのが月明かりで解る。

「…どうやら、ここを入るらしいな…」

ギデオンは言つて、馬をそちらに進めたが、ファントレイユは彼に問い正したかった。

本当に、こちらでいいのかを。

ひどい胸騒ぎがしたからだ。

確か……。自分の記憶が、確かなら……。

だが暗い木立を抜けて少し広い場所に出ると、屋敷が現れる。あまり立派で無い、どこか寂れた感じのする鉄飾りの門を潜るギデオンに声を掛けようとするが、彼はソルジェニーと楽しげに話し込

み、門を目にしたかどうか、疑わしい。

建物の前にある既に、客達の何頭もの馬が繋がれ、ギデオンはさつさとそこに馬を付けて降り、両手を広げてソルジェニーを受け止める。

ファントレイユは横に馬を入れると、彼に振り向きもしないギデオンを、今度は捕まえようと、手早く馬を繋いで後を、追う。

先を歩くギデオンはやはり、ソルジェニーとの話に夢中で、数段ある階段に足を乗せようとしていた。

ファントレイユは、店の入り口を見る。

確かに店のようではある。が、とうてい上流と言つにはあまりにも質素で、素っ気無い店構えだった。

「……ギデオン、あの……」

ファントレイユがとうとう声を掛けた時には、ギデオンはもう二、三段ある階段を上がりきり、王子の肩を抱いて店の戸を開け中へと消えて行った。

ファントレイユが一つ吐息を吐き、仕方無しに後に続いて店の戸を開ける。

……彼の予感的中した。

そこはどう見ても、悪党どもの巢窟のような柄の悪い酒場で、人相、目つきの悪い30人も居るかと思うごろつき共が、入ってきたいかにも品の良い三人を、一斉にじろりと見つめたからだだった。

ファントレイユがギデオンの肩を掴んで店を出ようと言い出す前に、戸口の横に居た男がファントレイユの後ろでボタンと音を立てて扉を閉め、振り向く彼のやさ男ぶりに、にやにや笑って

『文句があるのか』と太い腕つぶしを、めくって見せた。

そしてソルジェニーの肩を抱くギデオンとファントレイユの間に、別の男が割って入ると、ファントレイユに向き直り、睨め付けて言った。

「……二人も別嬪^{べっぴん}を連れてるなんて、さすがにお上品な色男は、違うな……！」

それを聞き、ファントレイユは心の中で『この男は終わった』と、思ったがその通りだった。

「……誰が、別嬪だ……！」

ギデオンがいきなり振り返ると、男の返答を待たず瞬間殴り倒すがっ……！どたん……！

床に埃の浮く倒れっぷりを、酒場の男達が黙して見守る。

皆の目が一斉に、殺気でぎらついた。

ギデオンはそれに気づき、咄嗟にファントレイユに視線を投げ、ファントレイユはそれを受け取ると急いで、ソルジェニーの細い肩を抱いて引き寄せる。

ソルジェニーは、ギデオンの時は全然何て事が無かったのに、いきなりファントレイユのその密やかで逞しい、引き締まった胸元に抱き寄せられた途端、こんな場合にも関わらずに心臓が高鳴り頬が熱くなつて、戸惑った。

ファントレイユはそのまま王子の肩を抱いて店を出ようと急ぐが、戸口に居た男は二人を出すまいと、彼らと戸の間にそのでかい図体で立ち塞がった。

ソルジェニーはファントレイユの、血を見るのも殴り合いも大嫌いと言う言葉を思い出し、ファントレイユよりもうんと逞しい、筋肉で出来たようなごつい面構えのでかい男を見てぞっ、と体が震え、腕に抱かれたファントレイユの面を、そっ。と、見上げる。

ファントレイユは、いつもの軽やかさは微塵も無いきつい透けるブルー・グレーの瞳で、相手を睨め付けていた。とん……。

とソルジェニーを軽く押して自分から離すと途端、飛んできた拳を軽やかにかわして男に、くるりと背を向けるなり、向かってくる男の脇腹に屈んで肘を真後ろに、思い切り突き入れた。

さっと身を翻し、腕を伸ばしてソルジェニーの肩を抱くなり、脇を押えて膝を折る大男の横を素早く通り過ぎ、扉を開け様駆け出す。戸を蹴立て、階段を飛ぶように二人一緒に駆け下りるが後ろからは、

ばたばたと後を追う男達の足音が聞こえ、ファントレイユはソルジェニーの肩を抱いたままゆっくり後ろに、振り向く。

追っ手は、三人居た。三人共がどう見ても盗賊のように薄汚い身なの、下品で卑しい顔をしていた。

一人の、腹のせり出した男が口に長い楊枝を銜えたまま唸った。

「色男さんよ。その子を置いて行きな……！」

そしたら、あんたは無事に、逃がしてやる……」

ソルジェニーはファントレイユを見たが、ファントレイユは聞く気が全然無いような、やはり真剣な表情で腰に帯刀した剣の柄に手を掛け、剣をすらりと抜き去った。

三人は彼の容貌と、自分達より華奢な体格ににやにや笑うと、無駄なあがきをするもんだと、同様に剣を、抜いて彼に見せた。

ファントレイユは腕に抱くソルジェニーをそつと、自分の背に回し入れながら、とささやいた。

「私の、背中から出ないようになさい。いいですね？」

ソルジェニーは頷いたが、ファントレイユの視線は直ぐに正面の三人の男に、注がれた。

男達はファントレイユが、かかってくるのを待っているようだったが、ファントレイユが動く気が無いのを知って、右の一人が先に彼に斬りかかった。

ソルジェニーはつい、目を固く閉じたが、ファントレイユの背中には動揺する気配が、無い。

ソルジェニーに左腕を回して後ろ抱きにし、彼事さつ、と飛んできた剣を首を傾けて避け様、体を屈めて空いた男の腹に、素早く剣を、突き入れた。

男があまりの早業に、痛みに呻いて体を折ると、ようやく残りの男達の、顔色が変わった。

「……野郎……！」

もう一人が斬りかかり、カン高い剣を交える音が、する。

ファントレイユがソルジェニーを後ろに抱いたまま、チラリと倒れ

た男がもう立ちあがる事の無いのを確認し、そしてもう一人、控えている男の様子を伺いながらも片手で相手の振ってくる剣を、少したどたどしく受け止める。

ソルジェニーは彼の背後からその様子を見守る。

が、ファントレイユは斬りかかる男の激しい勢いに圧され、防ぐのが精一杯。のようにぎこちなく、がつんがつん言わせる激しい剣をその、ごろつき共からしたら細く見える腕で必死の形相で防ぐ、ふりをしながら、ぎりぎりの所でしつかと受け止め、巧妙に相手の隙を伺っている様子が、解った。

右が、ガラ空きだ…！

ソルジェニーがそう思った瞬間、ファントレイユの剣が、右にさつと飛んだ。

「うがつ…！」

油断しきっていた男は咄嗟の剣の素早さに対応出来ずに斬り込まれた右胸を抑え、体を前に折って、崩れ落ちる。

最後の一人が

『こんな相手に何やってるんだ…！』

とぎり…！と歯噛みして、剣を振り上げ、間髪入れずに斬りかかって来る。

ファントレイユはだがその男が襲い来るととくに気づいていたように、さつとそちらに向き直るとさっきのたどたどしさを一気に取っ払い、目の醒めるような振りで降りかかる剣に自分の剣を交え、一瞬で相手の剣を絡めて、回し跳ね上げる。

男の剣が、ファントレイユの剣に弾かれて頭上高く、跳ね飛んだ。

月明かりに一瞬、飛んだ男の剣の刃が、キラリと銀に光る。

が、弾かれた剣が手から抜ける様に驚愕の表情を浮かべた男は次の瞬間、もう向かって来るファントレイユの剣に、胸を突かれうずくまった。

あんまり見事な奇襲でソルジェニーは見とれたが、ファントレイユは男が倒れるのも確認せず、ソルジェニーに振り向きその肩を抱き

厩へと、駆け出す。

ソルジェニーは一瞬、そのたつぷりのグレーがかった栗毛を揺らし、月明かりに頬を青白く浮かび上がらせるファントレイユの美貌の横顔を見上げ、彼に併せて走る速度を上げた。

厩に駆け込むなり、ファントレイユは手綱が繋がれている横棒に駆け寄り、手早く綱を解く。

ファントレイユのその素早い様子に、ソルジェニーは慌てて繋いであった馬に乗り込む。直ぐ後ろにファントレイユが飛び乗り様手綱を取って馬の首の向きを変え、ほぼ同時に拍車を入れて一気に、厩を飛び出した。

激しく駒音を蹴立て揺れる馬上で、ソルジェニーはチラリと後ろを振り返る。

ふわり……！と。

ファントレイユのグレーがかった栗毛が月明かりの中、艶を帯びて彼の肩の上で揺れ、ファントレイユがこんな時でもその優雅さが、決して失われないのを目にし、ソルジェニーは心から感嘆した。

その殴り倒した時から剣を交えている一連の動作中、彼はずっと流れるように優雅で俊敏だった。

……そしてようやく、ファントレイユは倒した男達がまだ向かって来るかどうかを、馬上でチラリと彼らが倒れている場所に視線を送って確かめ、その男達が今だ刺された場所を押さえてうずくまる事を確認すると、手綱を引いて馬の足を止め、速度を落として店の入り口に一瞥を、くれた。

……ギデオンは、まだ出て来ない。

が、店の入り口が騒がしくなり、ファントレイユは後を付けられてはと拍車を掛け、馬がいなき前足を跳ね上げ様その首を枝道の方に向けると、もう一度拍車を入れて一気に、そちらに走らせた。

ギデオンの、筋肉ではあるが、どこか柔らかな感触とは違い、フ

アントレイユの胸は密やかで熱く、どこにも余分に贅肉がついて無い様子で、それは引き締まっていて逞しい感じがし、ソルジェニーは背にそれを感じると途端に、どきまぎした。

彼の、胸も腕も、華やかな感じがするのにとても秘やかで独特の雰囲気があつて、抱かれたりするとやんわりと彼に絡め取られたような気分になつて、触れるその相手を、それは落ち着かなくさせる。

ソルジェニーは赤らむ顔を俯けて、彼に気づかれないように、した。そして彼が説得したというスターグに惚れている女性が、こんな風に、彼に後ろから抱かれて馬上で連れだつて乗っていたりしたら、つれないスターグなんかより彼の方に気が移つても、無理は無いんじゃないのかと、思った。

枝道を出て、看板のあつた本道迄出ると、ファントレイユはいなくなき馬を、静めながら向きを変え、道からやつて来る、人影をじつと見守る。

ファントレイユがあんまり真剣に、その方角を見つめるので、ソルジェニーもギデオンがとも心配になつて、そちらを一緒に見つめ、息を飲んで見守つた。

幾度か馬が進もうと歩を踏むのを、手綱を引いて静めながら、ファントレイユが来た道に戻ろうかとじりじりしている様子が解つて、ソルジェニーも、居ても立つてもいられなくなつた。

いつも大抵は一緒に居るソルジェニーに、必ず余裕を見せて微笑みかける彼だつたがその時は、その方角を見据えたまま、全く視線を外さない。

それからもう、暫くだった。

ギデオンの豪華な金髪が、馬の激しい駒音と共に月明かりの中、浮かび上がったのは。

二人は途端に安堵する。

ギデオンは突進する早さで駆けて来て、二人の姿を確認するなり叫んだ。

「…行くぞ！」

ファントレイユは馬に拍車を掛けると、疾風のように彼らの横を通り過ぎるギデオンの、後に続いた。

暫く、無言で併走したが、ごろつきが追いかけて来る様子が、無い。ギデオンはファントレイユに目で合図し、ファントレイユはちらりと視線を向けてそれを受け止め、手綱を引き、速度を落とした。

そして、彼らに振り向くギデオンのそれは快活な、いかにもさっぱりしたと言う全開の笑顔を見て、ファントレイユは途端に不安げに、そつ、と訊ねる。

「……まさか、わざと間違えて、無いよな？」

君の言った店はあの二股の、左側の道の先だろう…？」

その言葉に、ギデオンの眉が寄る。

「…知っていたんならその時なぜ、そう言わない？」

わざわざ私がソルジェニーを危険な目に、合わせる訳無いだろう…？」

「?!」

ファントレイユは肩を、すくめた。

「君を、信用したんだ」

ギデオンはその言い用に、きつちりむくれた。

「…私が信頼を、裏切ったと？」

ソルジェニーは見ると、ファントレイユは素知らぬ様子で、取り澄ました顔をした。

ギデオンはその男の様子に、仕方なしに続けた。

「…つまり私に、謝罪しろと言いたいんだな？」

ファントレイユは彼に向くと、急いで言葉を返した。

「そうは言っていない！」

…だが君は暫く殴る相手が居なくて、ストレスが溜まっていたようじゃないのか？」

ギデオンの眉が更に、寄った。

「…ストレス発散で私があのお店に、わざと足を向けたと、そう言いたいのか？」

ソルジェニーは思わず振り返り、ファントレイユの顔を、見上げた。彼は心底心配げに、そつと訊ねた。

「……違うのか……？」

ギデオンは即答した。

「勿論、違うに決まってる！」

きつぱり言い切るギデオンだったが、余程楽しかったのか、直ぐに思い返してつぶやいた。

「……だが、いい場所を見つけたのは確かだ。

今度からストレスが溜まったら、あそこに行けばいいから……！」あれだけの数のごろつき相手にたった一人だったにも関わらず、掠り傷すら負っていないギデオンの、その晴れやかな笑顔に、ファントレイユは一つ大きなため息を付いて、心の底からあのごろつき達に同情してささやいた。

「……君の訪問の、何度目かで全員、夜逃げしてるさ……」

それは小声だったが、ギデオンは振り向いた。

「何か、言ったか？」

ファントレイユは慌てて笑顔を作ってギデオンに向けた。

「いや……！君の為にもあの店が、潰れないといいなと、言っただけだ」

ソルジェニーが見守るファントレイユは少し青冷めて俯き加減だったが、ギデオンはその言葉を真に受け、意気揚々と笑った。

金のさざ波のような美しい髪は月明かりの中青味を帯びて輝いていたし、小顔の色白な顔立ちはそのくつきりとした碧緑の瞳と、華奢に見える細く形の良い鼻筋と、少し下唇が肉厚な小さく見る唇がたった今の戦闘で赤く染まり、美女顔が更に際立ち素晴らしく美しく見えた。

「そう、思うか？せいぜい祈ってくれ……！」

その、心底楽しそうなギデオンの様子に、ファントレイユはその容姿との凄まじいギャップに顔を思い切り下げると、内心、やっぱり

こいつは、猛獣だ。と心の中でつぶやいた。

その店は、ファントレイユの記憶通り左の道の、先に有った。

さっきの、うらぶれた玄関とは全く違い、庭にも噴水と彫刻が配されて美しく整えられ、厩には飾りの付いた屋根があり、店の門構えときたらそれは豪華な彫刻が施された、所々が金で出来た造りの大変豪華な玄関扉で、この店の玄関とあの酒場の玄関をどうやったら見間違える事が出来るのか、ファントレイユには謎だった。

…が、ギデオンの様子を目にした時、彼がソルジェニーに話しかけるのに夢中で、扉を開いてくれた侍従にすら気づかぬ様子に合点が行った。

彼は周囲なんて、全然見てはいないのだった。

三人はいかにも品の良い調度品に囲まれた、落ち着いた雰囲気、座り心地の良い椅子にくつろぐと、注文を取った。

「…それと…この店で一番高い食事と、一番高い酒を頼む」

ファントレイユの注文の仕方に、ギデオンがテーブルに付いた手の上に顎を寄せ、沈黙した。そして、口を開く。

「…私に、奢りたいのは解るが、どういう注文の仕方なんだ？」

ファントレイユはすました顔で口を開く。

「…滅多に来られない店なんだから、それくらいしたっていいだろう？」

ギデオンの、眉が密やかに寄った。

「…さっきの事を根に持って無いか？」

ファントレイユは直ぐ様、言い返す。

「持って無いと言えば、嘘になる」

ギデオンは、そうだろうよ。と俯くと、途端にソルジェニーが、くすくすと笑った。

ソルジェニーはファントレイユと並んで横に掛けたが、向かいに座るギデオンを、店のランプの灯りの中で見ても、その綺麗な顔に一つも傷を、作ってなんかいなくて、随分ほっとした。が、直ぐに隣

のファントレイユをチラリと見ると、彼の隙の無い、スマートで引き締まったしなやかな胸元や腕を思い出してつい、頬を赤らめる。ギデオンは珍しい物を見るようにそんなソルジェニーの様子を見つめたが、ファントレイユの方に、顔を思い切り傾けて告げた。

「ヤンフェスとマントレンが、言っていたが…」

ファントレイユは素で、尋ねた。

「何を…？」

「ソルジェニーに君は、刺激が強すぎると………」

「……………」

二人して思わず王子を見るが、さっきのどさくさでさんざん、ファントレイユと密着していたソルジェニーは、思いつ度、顔が赤らんだ。その王子の様に、ギデオンは短い吐息を吐く。

ファントレイユは表情を変えずその視線を、彼から顔を隠すように俯く王子に向けたまま、ぼそりとつぶやいた。

「…確かに、ヤンフェスは免疫が無いとは、言っていたな…」

それを聞いてギデオンが、思い切りばやいた。

「君の弊害は、女性だけじゃ、無いんだな」

今度はファントレイユの、眉が寄った。

「…そんな筈は無い…！王子。ギデオンの時だって、どきどきしませんか？」

ソルジェニーはファントレイユに覗き込まれてそう聞かれ、必死で思い出してはみたが、ギデオンの時には親しみと、安堵しか感じなかった。

ギデオンが彼の様子に途端に、笑った。

「返事が無くとも、明白だな」

ファントレイユはギデオンを睨むと、グラスの水を取る。

「…まあそりゃ、君と一緒にじゃ色事はさぞ、縁遠いだろうしな…！」

ギデオンは途端にむっとする。

「…それが悪いか…？」

私は君と違って、女性と遊ぶよりも殴り合いが、好きなだけだ…！

…ほらまただ…！

何人、女性の知り合いが居るんだ？」

横を通り過ぎるご婦人が、ギデオンにはほんの軽く頭を下げてただけなのに、フアントレイユにはそれは丁寧に、にこやかに会釈して行く。

フアントレイユもそれに気づくと、とても優雅に、微笑み返して頭を軽く下げる。

ギデオンが、周囲のテーブルに顔を振って視線を向け、フアントレイユの視線を促す。

「…みんな、君に来て欲しそうだ」

あちこちのテーブルのご婦人達が、自分の所へフアントレイユが、挨拶に出向いて来ないかと待ちわびて、そわそわと彼に、しきりに視線を送る様子が、ソルジェニーにも解ってつい、呆然と見渡した。20もある座席の、あちらからもこちらからも、一樣にご婦人の視線がフアントレイユに集まっている様は、なかなか壮観だった。フアントレイユはギデオンに振り向くと、笑った。

「君が盾代わりになって、どのご婦人もこのテーブルには来られないようだな…」

君の様な大物と一緒にじゃ、気軽に声は掛けて来られないだろうし。

…日頃色事を閉め出す君の堅物ぶりが、功を奏しているようだ」

フアントレイユの、その輝くような美貌の笑顔に、ギデオンの眉間が寄った。

不快そうに俯くと、ぼそりとささやく。

「…君にとってその大物の盾はさぞかし、邪魔なんだろうな」

ギデオンの皮肉に、フアントレイユはすました顔をして届いた料理を前に、ナイフとフォークを振り上げた。

切り分けた肉を口に運び様、口を開く。

「いや…？」

お付き合いしたいような女性が、今夜は来ていないから大変助かってる」

そして肉を、頬張った。

ギデオンは思い切り肩を、すくめた。

そして足を組むと尚も、周囲を見回す。

「…あっちの女性は結構、美人だぞ…？」

さつきから食事も取らずに君に視線が、釘付けだ」

濃い赤毛を結び上げた、口元にはくろのある美人が、しなを作って仕切りにファントレイユの関心を、引こうと努力する様に目を止めて尋ねる。

が、ファントレイユはチラリと相手に気づかれない様視線をくべて確認すると、素っ気なく言った。

「…残念だが私を寝取って、自分の株を上げたいだけだ。

連れ歩いて自慢の種に、したいんだろうな。

「…そういうのが、君のタイプなのか？」

ギデオンは途端に気を、悪くし、すまして食事するファントレイユの美貌を睨んだ。

だが、更に別のテーブルにその豪華な金髪を振り、綺麗な面を向けてつぶやく。

「…じゃあ、あっちはどうだ？」

それは豊満な、胸をしている。

色白で小柄で顔も、可愛い。

それはうつとりと、君を見つめている様子だが」

ファントレイユはチラリと見ると

「…駄目だ…。情が深すぎる。

彼女と付き合ったりしたらもう、他と付き合えない」

ギデオンは途端に、憤慨した。

「贅沢な奴だな…！」

ファントレイユは肩をすくめると、すました表情を向けてつぶやいた。

「君も、人の世話を焼いてないでとっとと食べたらどうだ？」

「…それとも誰か私に、紹介して欲しいご婦人が居るのか？」

ソルジェニーが途端に、くすくすくす笑った。

王子に笑われて、ギデオンは仕方無くナイフとフォークを手にとった。

「君にぞつこんの女性を、誰が紹介してくれだなんて頼むんだ！」彼は慣れた手つきで肉を切り分けると、フォークで刺してそれは優雅な仕草で、それを口へと運ぶ。

ファントレイユはその、とても育ち良さげな、それは品良く食事する綺麗な容姿のギデオンを見つめてつい、本音を覗かせつづやいた。「……………そうしていると、本当に、上品なものにな……………」

ギデオンは切った肉を口へと運び、眉根を寄せて睨みながらファントレイユに尋ねる。

「で、その後何て続くんのだ？」

ギデオンの疑問に、ファントレイユは慌てて本音を後ろに押しやると、言った。

「いや……………君位身分が最高に高くて、腕っぷしも申し分無く、容姿にも恵まれているというのに、どうして女性と遊ぶ気にならないのか、とても不思議だ……………」

「私は逆だ。

これだけ選びたい放題でどうして、全うに一人に絞れないのか解らない！」

ファントレイユは肩を、思い切りすくめた。

「どうして一人に絞れるのか、解らない」

それを聞いたギデオンはもう、この男とは話せないと言うように、軽くファントレイユを、睨んだ。

ソルジェニーがもうずっと二人の会話に、くすくすと笑い続けた。

が、ギデオンはムキになってソルジェニーに告げた。

「……………ソルジェニー。彼の事を随分気に入ってる様子だが、この趣味だけはマネしないようにしなさい……………」

どう考えても不道德だし、うんと評判を落とすから……………」

ソルジェニーはつい、聞いた。

「…軍の中でも、ファントレイユはそう、思われているの？」

ギデオンは肩を、すくめた。

「男ばかりだから…。羨ましがられてると思うが」

「…そう…なんだ」

「だが一般の場所では、彼はヘタをすれば、鼻摘み者だ」

ファントレイユはギデオンの言葉に、まるで同調するように頷くと、言った。

「そう…。大抵、自分を振り向かずに私に女性が振り向くと、他の男は嫉妬するものだ。」

「…その男の、身分が高ければ高い程」

ギデオンは、てっきりファントレイユが自分の事を指して皮肉っている思い込んで、目を剥いた。

「…私は別に、君に嫉妬していないぞ…！」

ファントレイユが首をすくめ、情けない表情を作りすかさずつぶやいく。

「君の事だなんて誰も、言っちゃしない…」。

大体、君は嫉妬される側だろう？」

この、自分の怒りを見事にかわす返答に、ギデオンは思わず素で問い返した。

「……………どうして？」

ファントレイユはギデオンこそ自分の言った事を、まるで心に留めていやしない様子にがっかりし、呻く。

「さっき、言ったじゃないか……」。

身分も容姿も何もかもが、恵まれてるって……」

ギデオンはそんなファントレイユの表情に『そうか』と軽く頷いた。が、ファントレイユは思い返しつぶやく。

「…ああ、だからこれ以上の嫉妬を買わない為に、わざと女性と遊ぶのを控えているのか？」

ファントレイユは、ほぼ本音で訊ねたが、ギデオンはその言い様に、

思わず怒鳴った。

「…そんな思惑は、無い…！」

「…そう言えば、君も君の取り巻き達も、どちらかと言えばあまり女性に対しての、武勇伝は聞かないな…」

ファントレイユの方は素朴な疑問を口にしたただだったが、口先で弄ぶかのようなファントレイユのその言動に、ギデオンは降参するように下を向いた。

「……ファントレイユ。頼むから自分を基準に、しないでくれ。

大抵の男は君程女性とは、遊ばないものだ」

ソルジェニーはまた、大いにくすくす笑った。

が、ソルジェニーは、いつものように余裕いっぱいではそれは優雅な隣のファントレイユを見た途端、ふ、と先程、ギデオンがあの酒場から無事出てくるかをそれは心配そうな、喰い入るような真剣な瞳で道を見つめていたのを思い出しギデオンに向かってそつとささやいた。

「…さつき……、待っている時間が長かった…」

「いつ…？」

ギデオンがフォークを止めると、尋ねる。

「…店から出た後…」

ギデオン、なかなか来なかったでしょう？」

ギデオンは途端に、すまなそうに表情になった。

ファントレイユの視線がまた、思わず見慣れぬギデオンのその気弱な表情に、釘付く。

ギデオンが声を落とし、ソルジェニーに労るようにささやく。

「心配かけて、悪かったな……」

素直に謝るギデオンのその様子に、ますますファントレイユはギデオンから目が離せなかったが、王子は首を横に、振った。

「でも、私よりファントレイユが…」

言って、ソルジェニーは彼を見るが、ファントレイユは途端に視線を、ギデオンを凝視していたのを気づかれない様そつと下に移し、

素知らぬ顔をした。

だがギデオンは王子を見つめたまま、つぶやく。

「…ファントレイユ？彼は心配したりは、しないさ。
私の事を良く、知っている。…そうだろう？」

ギデオンの視線がようやくファントレイユに、移る。

視線を感じたもののファントレイユは相変わらず素知らぬ表情を、
作り続けた。

ソルジェニーはファントレイユの横顔を伺ったが、ファントレイユ
はとりすました表情を崩さず、素っ気なくつぶやき返す。

「君の心配なんて無駄な事をして、何になる？」

ギデオンが、そうだろうと笑った。

が、ソルジェニーは、ファントレイユが真剣な表情であの道からい
つギデオンが姿を見せるかと、じりじり居てもたってもいられない
様子で伺うのを、思い返していた。

だって、でも、…それは、心配していた。

だが、ファントレイユが彼にそれを言わない理由も、なんとなく解
った。

…心配する必要が確かに、ギデオンには無かったからだ。

食事を終わると、ソルジェニーはいかにもくつろいだ様子を、見
せた。

ギデオンはそんな王子の様子に微笑むと、やはりとても優しい声色
で訊ねる。

「…怖く、無かったか？」

ソルジェニーは途端に弾けるように笑うと

「…だって、ギデオンとファントレイユと一緒になのに？」

こんな事を言うと、一生懸命護ってくれたファントレイユに怒られ
そうだけど…」

ソルジェニーがそつと彼を伺うので、ファントレイユは微笑んだ。

「…怒らないから、どうぞ言ってご覧なさい」

「本当は、もの凄くわくわくした…」

二人は途端に、ソルジェニーを凝視した。
が、ファントレイユが気を取り直してナプキンで口元を拭くと、つぶやいた。

「…血筋ですかね…。ギデオンもそれは、楽しそうだった」

ギデオンの、明らかに困惑した様子が伺えたが、彼はつぶやいた。

「まあ…。気晴らしには、成ったな。軍の部下は、やはり思い切り、殴れない…」

ファントレイユの目が、このセリフにいきなりまん丸に成り、ナプキンを扱う手が、止まった。

「…………あれで…………？」

じゃあさつきは一体、何人殴って来たんだ？」

ギデオンは不平を言うように唸る。

「…数なんて、数えてられるか…！」

次々に沸いて出て、それはわくわくしたが」

ソルジェニーが、やはり驚いた顔で、訊ねる。

「次々に出て来て、拳だけで戦ったの？」

「…最後は、剣を抜いて来たな…！」

でかい図体して、情けないったら…！」

あれだけの体格だ。

さぞ殴り甲斐があったのに剣を抜くなんて、卑劣だと思わないか？」

ギデオンの、その真剣に怒る見慣れた様子に、ファントレイユは一つ、頷くと、ギデオンの言いたい事を察して代弁した。

「…つまり、剣だとももの数秒で殺してしまえて、さぞかしつまらなかったんだろう…？」

ギデオンは、頷くと、落胆をその言葉に滲ませ、つぶやく。

「…そんなに、死にたかったのかな…」

ソルジェニーは目を、まん丸に、した。

彼はギデオンをそれは見慣れて意識していなかったけれど、これ程容姿に恵まれているファントレイユに

『彼に比べたら、私の容姿等どれ程のものです？』

と言わしめただけあって、正直ファントレイユに視線を送る、どの婦人方よりも、目立って綺麗だと思った。

金の髪に囲まれた色白の整った小顔に宝石のような碧緑の瞳が、誰よりも一際、人目を引く。

ファントレイユと居ると彼のそんな様子が時々、輝きを放って綺麗に見えたりするけれど、ギデオンが口を開く度彼がどれ程その容姿に反して、勇猛なのかも、伺えた。

ファントレイユは向かいに座るギデオンの方へ身を乗り出すと、言い諭した。

「君、ちゃんと警告したか？」

途端、ギデオンが眉を寄せて異論を唱えた。

「したさ……！私は卑怯者なんかじゃ、無い……！」

「でも、名乗らなかつたらう……？」

ファントレイユの、諭すような言葉に、ギデオンは大人しく俯いた。
「……まあ、確かに。」

お前はどうかんだ？剣を抜いたんだらう……？」

ファントレイユは肩を、すくめた。

「私はちゃんと、急所を外してやった」

ギデオンは、笑って言った。

「相手が解ってやってるのか？ありゃ、間違いなくお尋ね者共だ。

親切が仇にならなきゃ、いいがな……！」

だがファントレイユはギデオンに向き直ると、彼を見つめつぶやく。

「あれが、私にとっての警告だ……」

懲りずに今度又襲って来たら、ご希望道理今度はきっちりカタを付けるさ」

ファントレイユの、自分を見据えるブルー・グレーの瞳の輝きに、

ギデオンは思わず顔を、上げた。

ギデオンのその、真剣にファントレイユを見つめる様子について、ソルジェニーは小声で、そつと尋ねた。

「…ファントレイユは、本気じゃ無かったの…？」

ギデオンはその碧緑の瞳で、余裕を溢れさせたファントレイユのブルー・グレーの瞳を見据え、つぶやいた。

「全然、本気なんかじゃ無かったさ…」

ソルジェニーは尚も、ギデオンに尋ねた。

「…本気だと、どうなるの？」

ギデオンの声が、ファントレイユを見つめたまま低くなった。

「…そりゃ思い切り隙を見せて相手を誘って置いて、数秒で仕留める。」

私に言わせりゃ真剣にさせると、誰よりもよっぽど怖い男だ」

ソルジェニーが思わず、隣のファントレイユを見上げる。

が、ファントレイユの顔が途端、笑顔で輝く。

「…冗談だろう…？君に怖がられる程の、腕じゃ無い」

だがギデオンは、ファントレイユを見据えたまま低い声でつぶやいた。

「…ソルジェニー。この男の、こういう軽口は絶対信用するな！

こうやって相手を油断させて隙を作らせ、一旦攻撃に出れば一撃で相手の息の根を止める…！

こいつの、いかにも優雅なやさ男風の外観に騙されて、何人の男が歯噛みして口惜しがっていると思う…？」

ファントレイユはギデオンの、その真剣な表情を、見た。

そして、何を言ってるんだ？とばかりに肩をすくめると、つぶやいた。

「…殺るとなったら、ためらったりしたら相手が苦しむだけだろう…？」

急所を、思い切り突かれた方が相手にとっても親切と言うものだ。

それに…ご覧の通り、私はやさ男だし…。

色々な手を使って隙を狙うのは、私にとっては定石だ。

第一君相手に、剣を抜こうとは一瞬たりとも思わない」

ギデオンが途端に、笑った。

「命が、惜しいからか…？」

ファントレイユは顔色も変えずに言い放った。

「当たり前だ。」

私に言わせれば君に剣を向けるなんて、自殺願望としか思えないね。
…まあ、死にたくなったら君に、頼むとするか…。

何しろ君の切り口と言ったらそれは見事でためらい一つないから、それは安心して一瞬で天国に行ける事、請け合いだ」

ギデオンは、良く言うなとせせら笑った。

「…貴様も、そうだろう？」

だがソルジェニーが、そんな二人を見回し、朗らかに笑った。

「…じゃあ二人が一緒なら、もっと危険な場所に行っても、大丈夫なんだね？」

これには、さすがのギデオンも慌てた。

「ソルジェニー…冗談だろう…？」

君を危険な目に合わせたと狸共知られたら、奴らどれだけしくしくねちつくく、嫌味を言うてくるか解ったもんじゃない…！

こちらが殴れないのを承知で、いつまでもねちねちやられるんだぞ

…！

ファントレイユが、思い切り肩を、すくめた。

「…君、少しは言葉での応酬も、覚えた方がいい」

だがギデオンが、その綺麗な顔を歪めて直ぐに反論した。

「…あれは覚えたからって、出来る物じゃ、無い…！」

第一かつと成ったら、気づいたら殴ってるし…！」

ファントレイユが、俯いて青冷めた。

「…………やっぱり、そうだったのか…。」

君の沸点は結構低いから、ほんの少しからかうだけでも、かつと成って無いか？

結構バリエーションに飛んでいるから、君に対する禁止ワードを探るのは大変だ…」

その、思わず覗かせるファントレイユの本音に、ギデオンは笑うと

「…なる程…。一つを発見すると、みんなにこっそり回すんだろう…？」

ファントレイユは隙を作らず、にこやかに笑い返す。

「そりゃみんな、殴られまいとそれは必死だからな」

ギデオンはだが、それを聞いて思い切りタメ息を付くと

「…お陰で殴る機会が、減る一方だ………！」

と、思わず同情を集める程、肩を落として見せた。

店を出ると、ソルジェニーがそれは嬉しそうな微笑みを、ファントレイユに向けるのを目にし、ギデオンは王子につぶやく。

「…良く、眠れそうか？」

ソルジェニーは輝くような笑顔で、頷いた。

ギデオンはそんな彼の笑顔に、心から安堵して微笑みを返した。

王子を自室に送り扉を閉めると、ファントレイユがギデオンに振り向いてこっそり尋ねた。

「…安酒場の件、大臣達の耳に入りそうか？」

ギデオンは何う彼に目をやり

「…私の耳にも、入ったしな。」

だが君が伴って来たのは、少女だと言い張ってやる」

ファントレイユはそれを聞いて少し、俯くとささやいた。

「…今の内に王子の護衛を、シャッセル辺りに変更した方が良くはないか？」

彼なら公爵で大貴族だし、周囲の反発も少ない…。

たかが侯爵の私を押して、君だって随分、反発を受けているんじゃないのか？」

が、ギデオンはそうつぶやいて職を辞そうと考えるファントレイユの、その美貌の横顔を見つめた。

「…シャッセルにあんな風に、ソルジェニーの笑顔が引き出せるか？私の人選は間違っていないと、確信してる。」

そっちは心配するな。君にはこれからソルジェニーを頼みたい」
ファントレイユが、それは切なげな表情をするので、ギデオンは思い切り眉を、寄せた。

「…そんなに嫌か？この職務は」

ファントレイユは困った。そして、どう言えばいいのかと、言葉を探した。

が、ギデオンは笑った。

「…どう言いつくろったって、無駄だ…！」

宮廷中のご婦人の様子で、君がこの職務を心から楽しんでいるのはバレバレだ。

ソルジェニー迄あんなになついてるんだ…。

君に氣遣う気持ちが無けりや、あんなったりはしないだろう？

…さあ、どう私を言いくるめるつもりなのかを、聞こうか？」

部下の中でもその気になれば一番言の立つファントレイユの逃げ場を無くし、ギデオンは少し、嬉しそうだった。

だがファントレイユは真顔で言った。

「…私を推薦した君に世話をかけ、君に借りを作るのが嫌だと言えば、納得するか？」

が、ギデオンはますます楽しげに、笑った。

「借り…？！そんなものはソルジェニーの笑顔で、チャラだ！

あそこ迄楽しそうなあの子を見たのは、初めてだ！

杯があつたら君に上げて、乾杯したいくらいだ！」

ファントレイユはその快活な様子のギデオンに、一つため息を付いたが、ぼやいた。

「…弊害だとか、言っていた癖に…！」

ギデオンは肩をすくめて見せたが、それ以上は聞く気が無いように、さっさとその場を、後に、した。

ファントレイユは少しも動揺を見せない、堂としたその背を見送り、また一つ、ため息を付いた。

ギデオンとの夕食 1（後書き）

現在アースルーリンドは、まっとう路線ばりばりですが

本編はちゃんとBLしてます・・・。

作者の狙いとは全然、外れていきますが・・・。

ほんとうは、『光の王』の花嫁に選ばれちゃった

王子の話なんですネ・・・。

どんどんカップリングが増えてますが、

やっぱり登場人物が勝手に恋愛し

「こいつがいい！」

と夜這いかけたりしてもう、作者の手には、負えません・・・。

いい性格のキャラ、多すぎです・・・。

ギデオンは、責めたいんです・・・。

凄く、ろまんちっくに、弱い相手を、庇う騎士がしたい。

けど外見が美女顔だし、まず、乱暴過ぎて女性の

扱いが致命的に、ヘタ。

『夜付き人』と言う、まあ、行軍中の夜のお相手の

男性ですら、腕の骨を折った、と言う、最悪に……。

扱いが、ヘタ……。

この章でファントレイユにさんざん

「君なら身分も高く、顔も美男で腕も立つし、その気になれば
モテモテ」

と言われても、彼にはその後の

ハードルが、高すぎるんです……。

だから本人は女性とか、弱々しい相手が、大好きなのに……。

夜の生活が、病人生活に（骨折等で……。勿論、相手が）

なってしまう、不幸な男です……。

私も彼が、よもやファントレイユに、落ちるとは思わなかったけど

本人の嗜好とは違い、彼は実は、完全受け体質だったんですねー！。

さぞかし、ヤだったんでしょね……。

騎士、したいのにな。姫扱いされるの、ヤなんでしょうね。

実は凄く、ファントレイユが羨ましかったりして・・・。

また近い内に、聞いてみよ・・・。。。

と言う事で・・・いんたびゅー・・・かも？

あ・・・ふざけるなど、ギデオンに殴られそう・・・？

王子との会食（前書き）

＋：登場人物紹介：＋

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

王子との会食

翌日ファントレイユは、幼い少女のような儂げで可憐な姿をしたソルジェニーに、それは心配げな表情で迎えられて思わず、尋ねた。
「…どうなさったんです？」

ファントレイユに凝視するように見つめられ、ソルジェニーは彼に小声で問い返す。

「…ギデオンから何も聞いてない？」

大臣達に、知られたりはいしていないんでしょう？」

ファントレイユは途端思い当たって、笑った。

そして王子をソファに導くと座らせて、その横に座し彼をそっと、覗き込んで告げた。

「ギデオンの言った事を真に、受けていらしてるんですか？」

第一ああ見えても彼はちゃんと、対応しますよ…！」

ソルジェニーは一気に、安堵したように胸を撫で下ろした。

「…もう城下へ外出したらいけないなんて言われたら、どうしようかと思った…」

ファントレイユが笑顔になった。

「…とても、楽しかったようですしね…。」

ギデオンと一緒だと貴方はそれは、表情がほぐれるようだ」

「だっていつも、とても優しい…。」

でも軍の中であんな風に思われているだなんて、全然知りませんでした…。」

ファントレイユもつい俯くと、そっとつぶやいた。

「…貴方がご覧に成っている時とは、ほぼ別人ですからね……。」
ソルジェニーが素朴に訊ねた。

「…軍で彼は、あんなに優しくはないの？」

一瞬その『優しい』という言葉に、ファントレイユの表情が固まった。

「……………あんな穏やかで優しい彼は今迄一度も、見た事が有りません……………」

ファントレイユが俯いたまま、それは固い表情をしたので、ソルジエニーはそれ以上の言葉を控えて、話題を変えた。

「…ギデオンが強いのは知っていたけど、軍の中でもそんなに強いのか？」

ファントレイユは笑った。

彼がそんな風に笑うと、ブルー・グレーの透けた瞳がそれは綺麗で、ふんわりと肩から背迄伸びたたつぷりのグレーがかった明るい栗毛がとても優しい雰囲気を持っていて、その美貌が輝きを増して見える。

「気迫が、まず全然違います。

いくら剣の腕がたつても、戦いは氣力に左右されますからね…。

それに彼は……………」

「？」

そう顔を向ける王子のどこか儂げなあどけない面立ちはギデオンとそれは良く似てはいたものの、ギデオンの、氣の強く勇猛そのもので自信に満ちた様子と王子の心元無くいつも不安げな様子では、相手に与える印象がまるで違い、そんな王子に目を止めるとファントレイユは務めて優しく、顔を傾け告げた。

「ギデオンは体格的には素晴らしいとは、言い兼ねるでしょう？」

ソルジエニーはそうつぶやく、美貌の護衛を見上げた。

「…ファントレイユは自分の事やさ男だっけ言うけど、それならギデオンも同じくらいの身長だし大して変わらない体格でしょう？」

「…どうしてファントレイユが自分をそう言うのか、解らない…」
ファントレイユはその、ギデオンの言葉を全て鵜呑みにしている微笑ましい幼い王子につい、笑いかける。

「王子。私が一般的なんです。

貧弱とは言わないが、近衛の中ではそれ程立派な体格でも無い。けれどギデオンにとって、ハンデは無いも同然ですから…」

ソルジェニーは目を、見開いた。

「どうして？」

ファントレイユは少女のような容姿のソルジェニーにそう訊ねられ、彼に顔を残したまま少し、俯いた。

「…彼は多分、他の男達…勿論、私よりもうんと体が柔らかい…。相手を殴る際、拳だけで殴るのと腕を思い切り振り入れて殴るのでは、どっちがダメージが強いと思います？」

「…勿論、腕を振り入れた方でしょう？」

「…ギデオンは体全体を使う上に体重まで乗せる。

…そんな事はなかなか、普通の男には出来ない…。

だから立派な体格なんかじゃ無くっても、問題なんか無いも同然で、同じくらいの体格の私なんかよりうんと、強いんです。

その上彼は誰より予測が早い…。

相手がどこに打ってくるか…どう動くか、まるでとつくの昔に知っている。

だからいつも相手の裏をかける上に、一発の爆発力が凄いから、大抵一撃で相手に大きなダメージを与えられる。

…更にその上…。」

ソルジェニーがじつ、と自分を見ているのに気づきながらもファントレイユは言葉を続けた。

「…怖ろしく動作が早い…。

彼と、本気で追いかけっこなんかしてごらんなさい。

絶対に捕まえられやしない。

どこのどの筋肉も、それは信じられない位の早さで反応しますからね…。

…そして彼は剣を振るうのにそれは熱心で、毎日練習を、欠かさない…。

天賦の才能に加えてそれを磨く事にも余念が無ければ…軍で、無敵でも当たり前だとは思いませんか？」

そう、ファントレイユに優しく問われて、ソルジェニーは微笑んだ。

だがファントレイユは少しその美貌を曇らせてつぶやく。

「まあ、だけれどもそんな訳で……」

彼と殴り合う相手は彼の重い拳を何発も浴びたりしたら、大変、ひどい事になるでしょう？

大抵は一発でどこか骨折しているし……

それで、直ぐさま降参する。

けれどギデオンの方はそれでは……てんで、物足りない。

体力の塊みたいな男だし、彼が疲れ切った姿なんて余程の激戦でしか、見た事がありません。

……そんな訳で……ごたごたが無い時彼はそれは……体力を持て余しているんです。

大抵の男は私のように、暇な時は情事で体力を発散するものですが、彼はあれでとても育ちがいい上にとっても道德的だね……」

ソルジェニーはその、ファントレイユの独り言のようなぼやきについて、言葉を無くした。

「……そういうもののなの？」

ファントレイユは隣で彼の言葉を大人しく聞くソルジェニーを見つめ、続けた。

「彼は私の言う事を鵜呑みにするなと言いましたが、彼の方こそが一般的で無いんです。

貴方同様、とても特別な存在にもかかわらず……」

そしてファントレイユは深い、深いため息を付いた。

「彼は全然、その自覚が無い……」

ファントレイユの、いつも必ず余裕を残すその、全く素の本音について、ソルジェニーは同情して一緒にため息を、付きそうだった。

ファントレイユは続けた。

「……替えが利かない人間は、居るものなんです。

貴方に護衛が付くのも、貴方の代わりが居ないからでその立場はとても重要な物だ。

ギデオンだって、そうなんです。

…私と違つてね。

私の代わりは誰かが出来るが、ギデオンの代わりとなるとそうはいかない。

軍で、彼はそりやいつ誰を殴るか解らなくて確かに皆に恐れられてはいるけれど、でも誰よりも正義感が強くて、不正があるといつても猛烈に抗議する」

ソルジェニーの優しい青の、大きな瞳を見返し、ファントレイユは続けた。

「…私が抗議した所で誰も聞いたりはしないが、彼の抗議は彼が誰よりも身分が高いから、皆聞かざるを得ない…」

もし彼が居なかったら今の軍は…

不正が平気でまかり通つて、それは居辛い場所に成ってしまうんです……」

「……だからファントレイユは夕べあんなに、ギデオンの身を心配していたの？」

ファントレイユは一瞬、気づいたように首を傾けてソルジェニーを見つめ、だが少し怒った表情でむつり言った。

「…まるつきり、無駄な心配でしたかね…！」

「どうして、みんながギデオンを大切に思っていて心配してるって言わないの？」

ギデオンならきつと、聞いてくれるよ……」

ファントレイユは素直にそう訊ねる王子に、弱り切つてつぶやいた。

「……そりや、貴方相手には彼は信じられないくらいに素直ですがね……」

言つて聞く相手なら、もうとつくに言つてますよ！

第一貴方だつて、その御身がとても大事で、危ない事は一切してはならないと言われて、素直に聞きますか？

危険な事が起こると、それはわくわくされるんでしょう？」

ソルジェニーは思い返してつい、ギデオンの気持ちが解った。

ファントレイユはそれに気づき、ため息を一つ、付く。

「…そうでしょう？あなた方はやはり血縁者だけあって、良く似ていらつしやる。」

貴方も酒場で少女に間違われたが、ギデオンも……。入隊した当初は、それは素晴らしい美少女に間違われたものです…

…」

ファントレイユが、タメ息混じりに顎を手の上に乗せた。

「………女性が入隊したと、思われていたの？」

ソルジェニーがくすくす笑うが、ファントレイユはそれは優雅な微笑を返した。

「そうじゃ、ありません…」。

前右將軍の子息は、美少女のような容貌だと評判だったんで…。

ちゃんと、男性だと理解されはしていました。

…でもやっぱり男ばかりだったし…ほら。

ギデオンの容姿はそれは、目立つでしょう？

彼の金髪はそれはちよつと無い位の鮮やかで綺麗な色だし、人目を引かずにはいない。

それに小顔で色白で…美少女のような彼の容貌に、錯覚を起こして彼に惚れ込む者はそれはいっぱい居て………」

ソルジェニーは、やっぱり…。と、昨日の店の中でも群を抜いて綺麗だったギデオンの容姿を思い浮かべた。

がその後、ファントレイユはとても沈んだ暗い声でつぶやいた。

「…それでみんな随分ひどい目に、遭ったんです」

「…どんな？」

ソルジェニーが目を、丸くして聞くのでファントレイユは手を、振り上げて言った。

「…例えば彼を見て、素直に『綺麗だ』と言おうものなら間髪入れずに殴られますからね………」

ソルジェニーの目が更に、まん丸になった。

「…ああ………後、『可愛い』も駄目だったな…それから……。タベごろつきが言ったでしょう？」

『別嬪』だなんて女性を形容する言葉なんて、もつての他だ!」

「……それが、タベ言っていた禁止ワードですか?」

ファントレイユが顔を上げた。

「みんな、それは必死ですからね…。」

彼の前で口を滑らすまいと……」

「……色々、ご苦労がおりなんです…。」

ソルジェニーについてそう労られて、ファントレイユは困ったように笑った。

ファントレイユが王子にねぎらいを受け、今日は早く休んで下さい。と顔を出しただけで感謝を受け、早々に退出の許可を貰ったので近衛の舎に戻ると、その中庭でギデオンが彼を見つけて近寄って来た。

彼を取り巻いていた大貴族の、大柄なアドルフエスと狐のようにすまし返った銀髪のレンフィールがその場に取り残され、ギデオンが親しげに近寄るファントレイユの姿に思い切り、眉をひそめて見やる。王子の護衛なんて重要な役割を、ギデオンが彼のような下級貴族に配したのを、不満に思っているのは明白だった。

が、やっぱりギデオンは背を向けている取り巻きの意向なんかに、まるで気づく様子も無い。

取り巻きの大貴族だろうが、ギデオンは手加減する気は毛頭無いのを彼らも良く知っていて、ギデオンの前では極力それは大人しく、言葉を控えているようだったから。

ファントレイユは、その相変わらず中味を知らなければ素晴らしく綺麗な姿のギデオンに目を止め、心の中で一つ、タメ息を付いた。

…彼の前では大貴族だろうが下級貴族だろうが、等しく同じ気苦労をするものだ。

彼は身分等、全くお構いなしだったから。

「…今日は早いな」

ギデオンにそう言われ、ファントレイユは微笑んだ。

「疲れているだろうと、お休みを下さった」

ギデオンは一つ頷くと、笑った。

「私がわざと店を、間違えたしな」

ファントレイユは肩をすくめた。

「…疑っただけだ。根に持っているのか？」

「…私と一緒にだと随分疲労するんだろう？」

だが、君はか弱そうに見えてどんな時も取りすまして顔色も変えない、丈夫な男だと思ったがな…！」

ファントレイユは相変わらず、優雅に微笑むとつぶやいた。

「…か弱いからちゃんと体力配分を、考えているだけの事だ。

それより彼らを置き去りにして私と話していて、いいのか？」

ファントレイユがその場でこちらを伺い見ている、アドルフェスとレンフィールを目で、促したがギデオンは振り向くと、彼らがまだそこに居たのかという顔をした。

「用はもう済んだぞ？…それより君に聞きたいんだが…」

「ああ」

「ソルジェニーはいつもあんなに自室では、食欲が、無いのか？」

ファントレイユは一つ、ため息を付く。

「…そりゃあの年頃で部屋に閉じこめられ、同年代の話相手もいなければ、無理無いんじゃないか？」

ギデオンはファントレイユの顔を、それはじつ、と見たが

「…そうだな……………」。

君と居るとそれは刺激的で、楽しそうだ」

ファントレイユはギデオンの言葉に

『何を言ってるんだ？』と眉をひそめた。

「…君と居る時だろうか？」

それは嬉しそうだったぞ？」

ギデオンが、訊ね顔で聞く。

「……………いつ？」

「乗馬の時さ。君、前に王子を乗せていたろう？」

「…ああ」

ギデオンは思い出して頷いた。

そしてふ、と思い浮かべて言った。

「…お前と一緒に店で食事をしたのは初めてだが、あれではソルジエニーが刺激的で楽しいと言っても、無理は無いと思ったな」

ファントレイユはいかにも心外だという表情で、だが、そつと言った。

「……………刺激的な事をしたのは、どう見ても君の筈だ…」。

食事の前だが」

ギデオンがその言葉に思わず顔を上げて、正直な感想を述べた。

「……………忘れているのか？ご婦人の注目を集めまくってたろう？

君が浮き名を流しているとは聞いていたが、あれ程とは正直思わなかった……………」

ファントレイユは腕組んでため息を付くと、その素晴らしく綺麗な男を見つめた。

「…君がもう少しご婦人に柔らかな態度を取ってみろ…」。

彼女達の注目はたちまち君に集まると、保証出来る」

ギデオンの、眉が寄った。

「……………そういう問題じゃないと思うが？」

が、ファントレイユは肩をすくめた。

「君のような美男で身分の高い男に優しくされたら、彼女達は私に目もくれないさ……………」

ギデオンはそう言い切る、見つめられて微笑まれたりしたら大抵の相手が頬を染めてときまぎしてしまふ美貌の色男を、心の底からまじまじと、見つめて言った。

「…それは……………本気でそう、思っているのか？」

ファントレイユは少し、怒ったように眉を寄せた。

「当たり前だろう？」

ギデオンが、一つ吐息を付いた。

ファントレイユがつい、珍しいその彼の様子に喰い入るように見入

った。が、ギデオンが独り言のようにつぶやく。

「…それは、彼女達が気の毒と言うものだ……。」

君のような華やかで相手をどぎまぎさせるような雰囲気、騎士は、この近衛に山程男がいても、二人と居ないものなのにな……」

ファントレイユはそのギデオンの言葉に、驚愕に目を見開き、思わず声を、掠れさせて訊ねる。

「……………君の方こそ、本気でそう思ってるのか？」

ギデオンは顔を上げてむきになって言った。

「…身分を気にする相手なら致し方無いが、男としてどちらの腕に抱かれたいかと彼女達に、聞く迄も無く、君だろう？」

「……………」

ファントレイユがあんまり真顔でじっと、ギデオンを見つめてくるのでギデオンはつい続ける。

「君くらい近衛の似合わない男はいないと、宮廷で護衛の任に押したが、君に宮廷は似合い過ぎるようだな……。」

そこら中の知り合いに聞いて回ったが、どのご婦人ももうとくに君の名を知っていて、知らぬ者はいない程の有名人になっている」

ファントレイユは苦笑した。

「…それは……随分と宮廷の紳士達は、自分を磨く事をさぼっていらっしやるようだ……。」

まあ大抵は身分で釣れるから、努力なんか必要無いんだろうな」

「…なんだか耳が、痛いんだが」

ギデオンが俯いて言うと、ファントレイユは呆れ顔で言った。

「…だって君は少しも、ご婦人の気を引きたいとか注目されたいとか、思っただけなんだろう？」

「……………まあ、そうだな」

「じゃあそれは、当然の結果なんじゃないのか？」

ギデオンは顔を上げるとむきになって言った。

「…なら君はどうなんだ！注目を集めたいと、思っているようには見えないが」

ファントレイユは呆けたような顔をしたが、腕を組んで訊ねた。

「…そうか？ちゃんと女性と、遊びたいと思ってるぞ？」

ギデオンは困惑に眉を、寄せた。

「……遊びたいと思うと集まるものなのか？」

ファントレイユは頷きながら言った。

「君が、本心からそう思えばな。一度試してみるといい」

「……………」

言われてギデオンが、眉根を寄せて真剣な表情で考え込むように、沈黙した。

その間があまりに長かったので、ファントレイユはついギデオンの耳元に、そっと顔を寄せてささやいた。

「…無理ならお勧めしない」

ギデオンは途端、ほっとしたように顔を上げ

「どう考えても私には無理そうだ。そういう天分が、無い」

その笑顔が、ソルジェニーと同じで妙に可愛くて、ファントレイユは内心気を許しそうな自分を慌てて抑えた。

王子と違い、ギデオンは扱いを誤ると、殴られて顔の形が、変わってしまう…。

ギデオンは彼に『ゆっくり休め』と言って武人の彼に戻り、肩を揺らしてその場を去った。

その、彼の知っているいかにも猛獣のギデオンに、ファントレイユがどれ程安堵したか、彼は知らないだろう…。

「…ギデオン！」

ソルジェニーが、それはとても嬉しそうに彼を出迎えた。

ギデオンは運ばれて来る彼の夕食を見、召使いにもう一人分用意してくれと告げた。

途端、王子の顔が明るく輝く。

いつも一人でぽつんと食事を取っていたら、食欲が無くても無理は

ないのだろう。

用意されたテーブルに付くと、ソルジェニーもフォークを持ち上げた。その食欲ある様子に、ギデオンは心からほっと安堵した。

「ファントレイユを、早く帰したそうだな」

王子はつい、聞きたい事を次々に思い出し始めた。彼が質問をしても答えてくれる、唯一の相手だ。

勿論、ファントレイユが護衛に付く前迄の話だったが。

「ファントレイユはタベそれは見事な剣捌きだったし、ギデオンだって真剣にさせたら怖いって言っているのに、彼は全然そんな事は無いし、ギデオンはもう特別に自分なんかより強いって言うていたけど……」

ギデオンは少し、俯いた。

「……自分の能力も無いのに誇張して私に売り込む輩はたくさん居るが、あの男は何を考えているんだかいつも、自分の評価を下げて相手に伝える。」

「……いかにも自分はしゃばりじゃなく、控え目なんだというのを見せつける輩とも違って、ある意味本当に、自分は大した事が無いと思いつ込んでいる節もある」

ソルジェニーはついフォークを止めて、ギデオンを見つめた。

「……ギデオンが護衛に押すくらいだから、ちゃんと実があるんでしょう？」

「……そうだ。」

ああ見えて誰よりも頭の回転が早く、相手が何を思い欲しているのかを直ぐに、察知する。

剣の腕も同様だ。あんな外見で、ああ見えて誰よりも肝が座っている……。

口を開くと途端に、しんどい事も大変な事も……およそ優雅じゃ無い事は全部嫌いだ。みたいな情けない事を平気で口にする癖にな。だが、いざと言う時にはどれ程不利でも決して逃げないし、危険に飛び込む度胸もある」

そして宝石のような碧緑の瞳で、ソルジェニーを見つめた。

「…あの男の、護衛としての態度は私が保証する。信頼に足る、人物だ」

そしてソルジェニーが見つめているのを受け、少し俯いて、つぶやいた。

「……まあ、宮廷であいつの容姿はそりや浮ついて見えるし、周囲に騒ぎを撒き散らしてはいるがな。

当の本人はどこ吹く風で、始末に負えないが…！」

ソルジェニーはギデオンを、見つめた。

「…じゃあファントレイユは、ギデオンが全然自覚が無いって言うていたけど彼もそうなんだね？」

ギデオンは頷く。がふと、気に止めた。

「……私の自覚が無いって、そう言ったのか？あの男が？」

ギデオンの眉が寄ったが、ソルジェニーは素直に頷いた。

「……ギデオンは自分と違って、他に代えのきかない大事な人なのに、その自覚が全然無いって……」。

タベだって……。ファントレイユは実はもの凄く、ギデオンがちつとも来なくて心配していた……。

その後怒っていたけど」

ギデオンは笑って首を横に、振った。

「…心配は無駄だったと？」

ソルジェニーは、そう…！と笑い返す。

「…だがそれは間違ってるぞ、ソルジェニー。覚えて置きなさい。

替えのきく人間なんて誰一人、居やしない。

一人一人が誰かにとって、本当に一番大切な相手なんだ。

だから誰かは必要じゃないから命を落としたっていいなんて理屈は絶対に間違っている。

身分がどうか皆は騒ぐが、そういう事なんかじゃ絶対に、無い。身分等関係無く誰の命も等しく、大切なんだ」

ソルジェニーはそう言う、ギデオンを見つめ続けた。

だから……。だからファントレイユはギデオンを、とても大事だと言ったんだ。

他の大貴族達はみんな、自分の為に下級貴族が命を落とすのは当然だ。と、思っているから……。

ソルジェニーはつぶやいた。

「ファントレイユはこうも言っていた。

ギデオンは間違った事に猛烈に抗議するから、ギデオンがいなくなったりしたら軍で不正がまかり通って、それは居辛い場所に成るって……。」

ギデオンは大きなため息を、付いた。

「……そうか……。」

いつも軽口しか叩かない、あの男の本音はそれが……。

だからあの男の軽口を、真に受けてはいけないんだ。

あれでちゃんと物事の判断力もあるし、人間性も全うで潔い……。

だが解らないのは……。」

「のは……？」

「……どうしてあの男は、ちゃんとした人間だと他人に思われるのを、あんなに嫌がるのかだな。

マトモな口をきこうとしない。

ちやらちやらした色男だとか、やさ男だと相手に思われても全く平気な癖にな！」

ソルジェニーはそのギデオンの言い様に、思わずぽかんと口を開けた。

そして尋ねた。

「ギデオンは……そんな風に思われたら、やっぱり凄く嫌？」

ギデオンの眉が思い切り寄った。

「……当然だろう？」

男として立派だと、人に思われたいに決まっている！」

「……だから例えば『綺麗』とかって言われたりしたら、相手を殴るの？」

ギデオンは困惑をその表情に浮かべたが、言った。

「…だってソルジェニー。『綺麗』と言われて喜ぶ男がいるか？
そういう形容詞は一般的に女性に使うものだろう？」

ソルジェニーは、そうだねと、頷いた。

「…だろう？男相手にそんな事言われたりしたらどう頑張ったって
侮辱されたとしたか、思えない。」

侮辱されたら普通は腹を立てるものだ。

まともな神経があるんなら」

ソルジェニーは、なる程。と頷いた。そしてギデオンから見たら、
ファントレイユは、まともな神経の持ち主じゃない。と思っ
ているのも解った。

が、やっぱり美女のようなギデオンの容姿はそれはどうしたって
綺麗だったから、つい素直に『綺麗』だと感想を述べそうになっ
てもギデオンに侮辱を与えたと勘違いされたくなくて、それは必
死で言葉を控える部下達を、思った。

「…ギデオンは薔薇を綺麗だと思う？」

テーブルに活けられたピンクの薔薇に視線を落として、ソル
ジェニーが訊ねると、ギデオンは頷いた。

「…ああ。綺麗だな」

「…じゃあそんな風に、ギデオンの事を言ったりしたら侮辱に、
なる？」

ギデオンの眉が思い切り、寄った。

「…ソルジェニー。そういう問題じゃない。」

他人の瞳に私の容姿がどう映ろうと勝手だが、私は他人に『綺麗だ』
と言われるのは死んでも嫌なだけだ」

ソルジェニーは思い切り、食べた物を喉に詰まらせそうになっ
たが、頷いてみせた。

ギデオンも、ソルジェニーが頷くのを見て、納得したか。と了承の
頷きを返した。

その翌日、ソルジェニーは宮中をファントレイユと歩き、恒例の光景を眺めていた。

…つまり、ご婦人達が彼が通る度に自分の用も、話している相手もさて置いてはファントレイユを見ようと駆けつけて来て、彼の姿にうつとりと見惚れる、それは壮観な光景だ。

ファントレイユは相変わらず、それは優雅な様子で視線に対して微笑を、返していた。

自室に戻るとファントレイユにありがとう。と礼を言う王子に、ファントレイユは軽く頭を下げて下がるうとし、王子の少し俯き加減の視線に気づいた。そして王子が言い淀むような様子を見せたので、ファントレイユは直ぐに部屋を出ずに、彼の横で言葉を待った。

だが王子のそれを口に出来ない様子に彼はつい、少女のような姿の王子に優しく屈むと、告げた。

「…まだ私に、言いたい事がありなんでしょう？」

ソルジェニーは顔を上げるが、言った。

「…あの…鴨のパイ包みをとてもお好きだと、この間おっしゃっていらしたでしょう？」

今夜はそれなんです。

それでもし、ご用が無ければ……。

あの、もう一人分のご用意はすぐ出来ますから……。

でもあの、ご用があるんなら……。」

「ご一緒させて頂きます」

ファントレイユにそう言われ、王子の表情が、目に見える程輝いた。大人ですら、一人きりで食事を取らない為に誰か相手を探すものだから、こんな年若い少年なら尚更だ。

真っ白なテーブルクロスには金糸の刺繍が入り、ピンクの小花模様の華やかな飾りのついた白い皿には湯気の立つご馳走が並べられていた。

すっかり夕食の、用意が出来た所でギデオンの顔を出す。

彼の姿に王子の表情はそれは輝いたが、ギデオンはテーブルの前に座すファントレイユが、フォークを取り上げる様子を目に止め、つぶやいた。

「…今日は一人じゃないようだ。私は出直すでしょう」

瞬間、背を向けるギデオンに、王子が俯く。

ファントレイユは、王子のそれはがっかりした様子に目を止めると、ギデオンに聞こえるように言った。

「…王子は本当に、おいとこ殿のお姿が見えると嬉しそうなんですね…」

ギデオンが、ファントレイユの言葉に気づいて足を止めて振り向く。ファントレイユがソルジェニーの、俯きそれはがっかりした表情に視線をくべてギデオンに視線を送り、促した。

ギデオンは美貌のその男の、流し目のような合図に微かに頷き、途端に声を上げた。

「…ああ…忘れていた。」

今日は自室に食事の用意が、無いんだった…」

ファントレイユが俯くソルジェニーにそっと屈んで、頷く。

王子は直ぐに顔を上げて、言った。

「…ギデオン。直ぐに用意出来るけれど……」

ギデオンはにつこり笑うと、返答した。

「…なら、ここで頂こう」

王子の表情が、ぱっと明るく輝いた。

ギデオンはソルジェニーの横に掛けると、ファントレイユにチラリと素早く視線をくれて礼に代えた。

ファントレイユはギデオンの素早い一瞥を受け取ると、軽く頷きその礼を、受けた。

王子が、それははしゃいで食の進む様子に、ギデオンは幾度も微笑みを送る。

そうしていると、彼の元来の美しさが光り輝き、ファントレイユはもう少して軍での彼の、猛獣ぶりを忘れかけ、それは自重した。

「…言っていたでしょう？ギデオン。」

どうしてファントレイユは全うに評価されるのを嫌がるのかって…」
ファントレイユがソルジェニーのその言葉にふと、視線を上げてギデオンを見つめる。

「王子。全うな評価を嫌がる人間なんて、いやしませんよ」

ファントレイユが言うと、ギデオンが口を開いた。

「…私が、君は腕が立つと誉めても、君は受け容れないじゃないか」
ファントレイユは気づいて顔を上げる。

「…そりゃ、確かに君にそう言われるのは嬉しいが、君は群を抜いているだろう？だって」

ギデオンはその美貌の男に、素直に質問した。

「じゃあお前は自分は何番目位の位置に居ると思ってる？」

ファントレイユは途端に肩をすくめた。

「…そうだな、アドルフエスもレフィールも、シャッセルもそれは大した剣士だし…」

実際君のすぐ下なんかはいなくて、そのだいぶ下に、数人が五十歩百歩なんじゃ、ないのか？」

「…なる程。じゃ、その五十歩百歩の中に君は、いるんだな？」

ファントレイユはまた、肩をすくめた。

「…どうかな。君の取り巻き達は手を抜かないが、私は自分が頑張る必要の無い時には手抜きだからな…」

この“手抜き”という言葉に、ソルジェニーは思い切り、呆れた。

ギデオンは理解出来た。と、笑う。

「…つまり、自分の腕を周囲に見せつけたいレンフィールなどが頑張ると、彼と手柄を争う事無く君は引っ込んで彼に任せる訳だ」

ファントレイユはそれのどこが悪いのか、解らない。とすました顔を、した。

「…別に彼一人で用が足りるなら、それでいいだろう？」

私がでしゃばる必要も、無い。

彼は人前で自分の強さを見せつけるのが大好きなんだし、私は体力

を温存出来た分でご婦人と優雅に楽しめる。

お互いにとって、いい事だろう？」

それを聞いて、王子は『なる程』と納得したが、ギデオンは思い切り呆れた。

「君は手柄より、ご婦人との時間を選ぶのか？」

呆れられてファントレイユは、ギデオンを見つめると言い諭す様に告げる。

「ギデオン。人の価値観はそれぞれだ。

私は侮られて侮辱されない限り、ムキになって手柄を立てようとは思わない。

戦になればいつ命が無くなるか知れないから、その間自分の楽しみに時間を取るのは、当たり前だろう？」

「……………」

「君だって余暇は、自分の楽しみに使うんじゃないのか？」

それで、君には理解されないと思うが、君の思う楽しみと私のそれが違うだけで、余暇を楽しみに使うのは私も君と同じ事だ。

「ただ、まあ私の使い方は確かに普通の範囲よりちよつと超えてると思うが、しごく一般的な男の使い方だとは思っている。

「君よりは随分とね」

ギデオンは途端に、ため息を付いた。

「…お前も人の事が言えるか…！」

何が、ちよつとだ！

あれは全然ちよつとじゃないぞ！

あんなにご婦人の視線を自分に集めて置いてちよつとだなんて感覚は絶対に、おかしい！」

ギデオンのこの発言に、王子も同感だとファントレイユを見守ったが、ファントレイユは困惑したように首を、揺らした。

「…だって…………」

君の取り巻きもそれは大人しいから君は知らないだろうが、この前騒ぎを起こしたスターグだってそりゃ、遊んでいるぞ？

あの程度の見目の良さと近衛連隊の名で、あれだけ女性が釣れるんだから、隊長の私がもう少し多く釣れても、無理無いだろう？

君がその気になったりしたら、それこそもっと、釣れるんじゃないのか？」

ソルジェニーが思わずギデオンを見つめ、王子の視線を感じてギデオンは、解った。と頷いた。

「…もう、いい！」

ファントレイユが首を傾げて異論を唱える。

「いいのか？」

「…お前も、自覚が無いという事だ！あれ程ご婦人の視線と関心を集める男は、宮中で私は、初めて目にした」

ファントレイユはギデオンのその本音につい、肩をすくめる。

「…解った。それは、心に留め置くとしよう…」

ギデオンは顔を下げると、

「そうしてくれ…」

とつぶやき、スーパ皿に視線を戻したが、顔を上げた。

「…私も自覚が、無いようだな…」。

私が知らぬ場所で何やら君に、心配をかけている様子だが……」

ファントレイユはスプーンから口へスープを運びながら、その言葉と真っ直ぐ見つめて来るギデオンの碧緑の瞳を受けて手が、止まった。

「……………」。

そんな心配は、だが君はうつとおしいと、思ってやしないか？」

ファントレイユが、それは慎重にその言葉を口に、した。

ギデオンは途端に不満げに、眉を寄せる。

「……確かに、うつとおしいとは思っが…」

「…だろう？」

「…だが君が私を心配する理由も解る。

…つまり今の近衛には、問題があるという事だ。

父が死んで叔父が右將軍を、継いでから……………」

ファントレイユは顔を上げると、ギデオンを見る。

ギデオンはその視線に気づき、ファントレイユのブルー・グレーの瞳を真正面から受け止めた。

「君は知っているかどうかは解らないが、叔父が右將軍になる前は不正がまかり通ったりは、しなかった」

ファントレイユは視線を落とした。

「それは、聞いている」

「何とか出来るならしたいが…」

ファントレイユもつぶやいた。

「……そうだな……」

ソルジェニーは二人の様子に気遣わしげに、そつと口を挟む。

「何とか、出来そう…?」

幼い彼に心配げに見つめられ、ギデオンは笑った。

「きつと、何とかするさ!」

王子も笑い、だがファントレイユは俯いた。

「君は本当にそう思っているのか?」

言われて、ギデオンはソルジェニーの不安げな様子に視線を向け、ファントレイユをたしなめようとした。

が、ファントレイユは聞く気が無いようにむすつとした様子で、食事を口に運ぶ。

ソルジェニーはそんなファントレイユの様子に、不安げに問い正した。

「…望みが、無さそう……?」

ファントレイユは王子の言葉に気づくと顔を上げ、その美貌に微笑を浮かべ、ささやいた。

「…いいえ…」

貴方の護衛どころか隊長にすら成れない身分の私が、今こうしているんですからね…。

多分何とかなる日がきつと、来ますよ…!」

ギデオンが何か言いたげに俯いたが、唇を噛んだ。

が、思い直すように口を開く。

「…以前の近衛なら、当然の昇級だ。

君にはちゃんとその、実力がある」

だがファントレイユは顔を上げて軽やかにギデオンに、笑った。

「…でも今は以前とは違う。

いくら頑張った所で君が居なければ私は、一兵卒としていつ前線に送られるか解らない身の上だったからな…！」

ギデオンは不満げに唸った。

「…君には大貴族の後ろ盾がいるじゃないか…！」

ファントレイユが視線を落とした。

「…だが、友が身分が低いというだけで前線に送られるんなら自分一人だけ、後ろ盾があるからと安全地帯にいられないだろう…？前線で友と死を分かつ方が、余程心安らかだというものだ…！」

ギデオンが彼のその言葉に俯き、王子は逆にそう言う、血生臭い事なんかよりいかにも優雅な宮廷が似合い、命のやりとり等およそ不似合いなその人の覚悟を聞いて、切なげに眉を、寄せた。

が、ファントレイユは言葉が続ける。

「…大体それは君だって同様じゃないか。

君の身分ならいつも後ろでのほほんとしてられる筈なのに、好んで志願しては前線の危険地帯に真っ先に、体を張って出向く癖に…

……！」

この言葉にギデオンが顔を上げてファントレイユを見つめ、ソルジエーはギデオンを、驚きに目を見開き、見入る。

だがギデオンはファントレイユの言葉には答えずに訊ねた。

「…………私の事はさて置いて、君はそれが理由であそこ迄ご婦人に愛想を振る舞ってるんじゃない？思い残す事が無いように」
ファントレイユはその問いに途端に、肩をすくめる。

「…あれは条件反射だ。

軍でむさい男達に『お前、何様だ』と言わんばかりに突き飛ばされたり、いつ殴りかかれるか解らない緊迫した状況の中にいたりす

ると、あんなに華やかで煌びやかなご婦人達に微笑みかけられたりしたらつい、それは愛想が良くなっても仕方ないだろう……？」

ギデオンはこの返答に、スプーンを皿の底に当てて鳴らし、つぶやいた。

「……条件反射だったのか……」

フロントレイユはも呆けるギデオンをそつと伺い、尋ねる。

「……それが、知りたかったのか？」

ギデオンがぼそりとつぶやく。

「……まあな」

そして顔を揺らして口を開く。

「……お前ときたらやらせれば何でも見事にこなす癖に、軽口しか叩かない。

そつという男だと馬鹿にしようとするばちゃんと、心ある様子を見せる。

……もし、いつ死んでもいいようにご婦人の視線を集めているんなら、随分悲愴感があるものだが……そつでも無いようだし」

フロントレイユがこの言葉にとうとう目を剥いた。

ソルジェニーが目にした、ギデオンを心配していた時に見せた、それは真剣なブルー・グレーの眼差しだった。

「……悲愴感がある筈なのは、君の方だろう……？」

どれだけ誰も行きたがらない危険な場所へ、まるで自殺願望でもあるかのように志願し続けてたと思ってる……！

……私同様、君が居なければそれは悲惨な目に合う筈だった男達が山程いて、彼らは全部君の命を惜しんでいると言つのに、当の本人と来たら……！

君を心から慕ってる奴らが、君が志願し、危険に身を晒す度に泣きそつに表情を歪めても、気づきもしない！

あんな、ごつくてむさい男達がみんなだ！」

ギデオンはそれを聞いて、それは大人しく俯くとスプーンをゆっくり置き、タメ息を、付いた。

「…やっぱり、出来れば早急に何とかすべきかな…」

と、ファントレイユのその言葉に不安に震えるソルジェニーを、見やった。

ソルジェニーは少し震えながらもギデオンを労るように見上げると、告げた。

「…出来るんなら、そうした方がいい……！」

ギデオン。私も貴方がいなくなるのは、絶対に嫌だ……！」

可愛いソルジェニーに潤んだ青い瞳で見つめられ、ギデオンはもう一つ、それは深いため息を付いた。

がファントレイユの、それはすつきりとた顔をして食事を続ける様子を目にし、思わずつぶやく。

「……君は何だか晴れやかだな……」

ファントレイユはとびきり優雅な微笑をギデオンに送って言った。

「この先あんな、ごつくて少しも可愛げの無い男達の、泣きそうな悲しげな顔を目にしなくて済むかと思うと、思わず食も進むさ……！」
ギデオンはその言葉に思い切り肩を、すくめて見せた。

王子との会食（後書き）

いんたびゅー。

途中ですが、一言お願いします。

ファントレイユ：人の目に自分がどう映っているのか解って、それなりに新鮮だ。

ソルジェニー：思い出すと、とっても嬉しいです。

ファントレイユ：王子。貴方は人にあんまり免疫が無いから、

私の外見に、簡単に騙されるんでしょう？

ソルジェニー：でも、ファントレイユは私に、優しいじゃありませんか。

ファントレイユ：でも、ギデオンには負けますよ。

私の態度は単なる職務上のお愛想笑いと、

貴方があんまり素直で微笑ましいからつい、きつい態度が取れないのと、

貴方と一緒に宮中を徘徊すると、山のような質のいい美人と

出会えるから嬉しかったんです。

貴方は城の中で殆ど誰にも親切にされなかったから、

私程度でもそれは親切に、感じていらっしやるだけでしょう？

勘違いしては、いけません。

ソルジェニー：だって・・・。

やっぱりファントレイユは優しいし・・・。

それに一緒に居るといつも、ときどきしてしまう・・・。

ファントレイユ：それは、大問題です。

いいですか？

ギデオンに聞いてご覧なさい。

私のような男に惚れると泣きを見ると、きっとあの保護者のような男は、

言うに決まっています。

大体、彼だけじゃない。

私は経験上知っていますが、貴方のような純粹培養のようなタイプはそりゃあ、

周囲に大切にされていて、私に見惚れようものなら大抵周囲の保護

者達は、

私を彼女らから遠ざけるものですからね。

ソルジェニー：ファントレイユはいつも、そういう目に、あつて
るの？

ファントレイユ：無理もないかと、納得していますが。

一言が、随分長いですね……………。

ファントレイユにしゃべらせると、話がいつも、長くなるんですよ。

ファントレイユ：私のせいですか？

あの…………。ちょっと目が、怖いです……………。

一言コーナーですから…………。この辺で…………。

ファントレイユ：貴方に言いたいんですが、王子をさつさと『光の
王』と

くつつけちゃって下さいね。

私は人外のおんなに勝ち目の無い相手の恋敵を演じるのは絶対！

ごめんです。

……………解ってます……………。

怒らないでね。

あの性格が猛獣のギデオンですら、貴方を怒らせると地雷を踏んだ程の

緊迫感を感じているんですからね。・・・知らなかったでしょう？

フアントレイユ：地雷を踏む程なのか？

ギデオン：だってそうだろう？

私だったら殴って相手を黙らせるのに秒殺で済むが、

君ときたら、耳が痛くなつてその場に居るのが、

思わずいたたまれなくなる程の罵詈雑言を、

これでもか、これでもかと相手の息絶える迄浴びせるじゃ、ないか・
・・。

そりゃあ、非があるのは明らかに相手の方だと、解ってはいるが、

いつも、なぜか君が相手に浴びせる言葉を聞いていると、最後は相手に、

同情している・・・・・・。

そして、毎度思っんだ。

・・・君だけは、怒らせまいと・・・・・・・・・・。

ファントレイユ：ギデオン。戦場を全く怖がらないのに、私の叱咤は、怖いのか？

ギデオン：君くらい滑らかに舌の回らない者にとっては、

防御がまるで出来なくてただ、一方的に殴られ続けているようなものだ。

一発で沈める私は、それは親切な男だろう？

ファントレイユ：君の、いつ炸裂するか解らない一発が怖くてみんな、

君を遠巻きなのにか？

ギデオン：なら今度みんなに聞いてみよう。

どちらが親切か。

ファントレイユ：どう考えても、怖がられているのは、君の方だと思いが・・・。

私だって顔の形が変わるのが嫌で、君に殴られないよう、

君と相対する時には、それは気を配って細心の注意を払っている。

いつも皆君を、取り扱い注意のニトログリセリンのように

扱っているじゃないか……………。

さあ！もう今度こそ、その辺にしといて下さいね。

相変わらず、きりが無いんだから……。

あ、じゃあまた！

その内、コメントコーナー儲けた時に再戦して下さい。

ギデオン：……我々は、戦っていたのか……？

ファントレイユ：違うだろう？

ちよつと意見の交換を、していただけだ。

ギデオン：だよな。

ギデオン。ファントレイユが実際したいのは多分別の事らしいので、

会話はそれで切り上げた方が無難です……。

こんな公共の場で、ファントレイユがいつ本領を発揮し出すか、

私ははらはらしてるんですから……。

これで終わりと言う事で……。

ファントレイユ：私が、強姦魔のような言い草が、気に入らないんだが……。

ギデオン：心配無い。私にそんな事をしたら、切り殺してやる。

ファントレイユ：・・・つまり、優しく迫られたいんだな？

ギデオン：そんな事は言っていない！

はい！

これでこのコーナーは終了です！

今度こそ！

では、さようなら！

出陣（前書き）

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

出陣

だがその時は思ったより早くに、やって来た。

都の西に位置する、大貴族達の居城が立ち並ぶ丘陵地帯に大挙して『私欲の民』が現れ、次々に城を襲って金品を奪い、女子供迄も殺されたとの知らせが近衛に入った。

その盗賊の数は一軍に匹敵する程で、城の護衛だけでは手に負えないと、近衛連隊に討伐の指令が下ったからだった。

この討伐に、実質の指揮官はアデン准将が指名された。

准将は二人居て、そのもう一人がギデオンだった。

アデンはギデオンの叔父の右將軍、ドッセルスキの子飼いのような男で、ドッセルスキ同様ギデオンを良く思っていなかった。

左將軍とてドッセルスキの推挙を得たおよそ戦の出来ぬ能無し男で、相変わらず右將軍、左將軍とも自らの出る迄も無いと、戦場には出てこない腹のようだった。

また彼らに組みする隊長達も同様で、右、左將軍に習い出陣を見合わせた。

指揮者アデンだけがドッセルスキの息のかかった男ではあったものの、戦は事実上ギデオンに任されたも同然だった。

大貴族で成り立っている宮廷では、自分達の家族や財産に降り懸かる狼藉にそれは、浮き足立っていた。

いつもは地方の領民が襲われても、顔色すら変えずに他人事なのに、そう思いながら、ソルジェニーは大騒ぎする宮中でその知らせを聞いた。

もう14になるのだから、戦に顔を出す時期だ。と侍従に知らされ、王子は内心宮中を出られてわくわくしていたが、侍従がその様子を目に釘を差す。

「…貴方は大変大切な御身ですから、戦に行くと言っても当然、後方です。」

刀の触れ合う音等お聞かせしたりしたら、私を初め大臣達がそんな指令を出した男を、打ち首にしますからね…！」

ソルジェニーはそれを聞いて途端に、がっかりした。

彼を護衛の、ファントレイユが出迎えた。

ファントレイユは戦闘用と言うより普段通りの、光を弾くグレーの、金や銀の刺繍を縫い込んだ洒落た上着をそれは、素晴らしく優雅に着こなしていて、ソルジェニーは戦に行くと言っのにつきつきした気分を、止められなかった。

ファントレイユと一緒に近衛の兵舎に向かう途中城内を抜けていくと、広間を通り抜ける度次々とご婦人達が、

「これから戦場にお出かけになると聞きました」

とファントレイユに声かけ、その足を止める。

どさくさに紛れては彼の手を取り、

「どうか家族をお守り下さい…！」

と、王子の護衛の彼を、それは困惑させたものだが、女性心理とは恐ろしいもので、一人が手を取るともう一人は腕を絡め、更に大胆なご婦人は彼の胸に、飛び込んですがりつき、家族の無事を訴えた。そして別の広間にいたご婦人達はそれを目にすると次々と大挙して彼を、取り囲み始める。

…ソルジェニーは盗賊との戦いの前の、女の戦いにもみくちやにされそうな勢いのファントレイユを、呆然と見守っていた。

が、その人の輪の向こうから、声がする。

「…すまないが、彼の役目は王子の護衛だ。」

彼が王子と着かないと、連隊は出発出来ない。

貴方方のご家族をお助けする為には、まず、彼を放しては頂けまいか？」

その、低く響く透明で真っ直ぐな男らしい声の主に、一様にそこに居た全員が、振り返る。

ファントレイユよりも背が高く、それは立派な体格の姿の美しい白碧の騎士が、そこに立っていた。

ソルジェニーはあんまり素晴らしいその騎士の容貌に一瞬、見惚れた。白っぽい金髪を背迄無造作に伸ばし、端正で色白な肌に湖のような青い瞳が浮かび上がる。

その彫刻のように整った顔立ちの騎士は、静かな迫力のある武人に見えた。

立派なその体を、濃紺の、控えめだが素晴らしい刺繍を刺したそれは高価そうな上着で包み込み、静かで透明な存在感を醸し出していた。

…だが彼は大貴族でしかも、宮廷で、ギデオンの同様な女性相手にちゃらちゃらしたりはしない、堅物で有名な剣豪で知られた騎士だった。りしたから、ご婦人達は皆、態度を固くしてその武人の前に、しみついた手を離してファントレイユを、差し出した。

「……シャッセル。すまない……」。

ギデオンが君を、寄越したのか？」

並んで歩くとファントレイユは頭一つ程高いその白碧の騎士を見上げて、そつとささやいた。

だがシャッセルは、ぶっきら棒に告げただけだった。

「…急げ…！」

ソルジェニーはつい、ごつい男にいつも『何様だ』とどつかれていると言っていたファントレイユを思い出して、少しはらはらしたが、ファントレイユはそつとつぶやく。

「…私を迎えに来るなんて役割はさぞかし、大貴族の君には、不本意なんだろうな…」

だがシャッセルは、身分は関係無いような表情で彼を見つめ、それを打ち消した。

「…ギデオンの、命令だ」

フロントレイユは、心から忠義をギデオンに捧げるその騎士に、解った。と、頷いて見せた。

ソルジェニーにも解った。あまり表情の無い、シャツセルの真意を測る為にフロントレイユがわざとそう、カマをかけたのが。

二人が並ぶと、シャツセルはどこかそれは静かで、湖のような澄んで透明な雰囲気があつて、どう見ても騎士としてはシャツセルの方が素晴らしい容貌にも関わらず、フロントレイユは、それは優雅で輝きに満ち、やはり際だつて美しく見えた。

ソルジェニーは思わず心の中で、フロントレイユは多分、どこにいても人目を引かずにはいられない人なんだと、解つて感嘆した。

だが門を潜り、近衛の中庭に入ると、兵がばたばたと、出立の準備で走り回っている。

その向こうで数人の騎士と話をしているギデオンの姿が目映った。…相変わらず、その独特で艶のある豪奢な金髪は恐ろしく目立つ。またそれだけで無く、男ばかりの近衛で彼のその整った小顔の、色白で美女のような容姿に目が引きつけられずにはいられなかった。彼はいつものその瞳と同じ色の、緑がかつた青の控えめな刺繍を刺した、素晴らしく高価そうな上着をその身に付けて堂としていたりしたから、一目で彼が、それは身分の高い男だと周囲の者達にも解る程だった。

が、ギデオンは門から現れた三人を目にし、少女のように可憐ではあるが、明るい青の高価な上着を意に添わぬようにぎこちなく着こなし、付き添うフロントレイユに心元無げに視線を送る可愛いソルジェニーに、心からの笑顔を向けた。

ソルジェニーがそれに気づき、途端に満面の笑みを彼に返すと、ギデオンはそれは満足そうに使いに出たシャツセルに、ご苦労。と丁寧に頷いた。

ソルジェニーはギデオンのその様子で、彼がこの白碧の騎士を随分信頼していると、解った。

ファントレイユがギデオンを見ると、彼は笑う。

「…やっぱり、迎えが必要だったんだろう…？」

ファントレイユは珍しく返す言葉を探している様子で、ギデオンにはそれが解って告げた。

「…言い訳はいい…」。

それよりソルジェニーと馬車に乗ってくれ…！」

ギデオンが顔を向けるとそこには、既に用意されたそれは豪勢な飾りの付いた王室用馬車が、御者に制され待っていた。

「…君の馬は誰かに引かせるから。後からゆっくり来てくれて構わない。用意は全部出来ているから、もう乗り込んでくれ。」

形式上馬車が先頭で兵舎を出るが、その後直ぐに我々が追い抜く「ファントレイユが頷き、王子に視線をくべて馬車に向かうと、ギデオンは言った。

「…ああ…ファントレイユ」

彼は振り向く。

「…ソルジェニーを、頼む」

ファントレイユはそれは素晴らしく微笑んで、ギデオンに頷いた。ギデオンは王子に寄り添うファントレイユに心からの信頼を寄せている様子を見せ、彼の後ろに居た数人の取り巻きの立派な騎士達の、顔が一斉に歪んだ。

シャッセルですら、冴えない表情をして見せた。

馬車に乗り込むとそれはすぐに動き出し、ファントレイユは揺れる室内でソルジェニーに、顔を傾けてささやく。

「ね？ギデオンは背を向けて見えないが、私の方からは後ろの騎士達の表情がそれは良く、見える物でしょう？」

ソルジェニーはそんな彼の言葉に思わず、笑った。

馬車で着いた場所は城の中で、大貴族の一人が王子をそれは丁重に、もてなした。

豪華な室内に通され、くつろぐように告げられ、食事や飲み物が運

ばれて召使いが出て行くと、彼は放って置かれた。

その豪華で寂しい場所で、王子がそれはぼつんと、小さく見え、フアントレイユは彼を元氣付けようと彼に近寄り、ささやいた。

「……わくわくしなくて、退屈ですか？」

ソルジェニーは顔を上げて、落胆仕切った。

「……城の中とこれでは全然、変わらないんですもの……」

フアントレイユは思い切り、肩をすくめる。

「……でもこれは戦だし……。どさくさ紛れはきつとありますよ。

宮廷のあの、ご婦人達のようにね……」

そして彼は自分の軽口に笑う王子を見て微笑むと召使いを呼び、色々と訊ねた。

ソルジェニーはその様子をそつと、立ち聞きしていたが、どうやら状況を探る為に今夜はここに停泊するようで、近衛の全員がこの城に居るようだった。

「……隊長の、マントレンを彼の手が空いているようだったら呼び出してくれ……」

それと、ギデオンがもし忙しく無いなら、ここに顔を見せるようにと、伝えてもらえるか？」

フアントレイユの言葉にソルジェニーの、表情が輝いたのは、言う迄も無かった。

出陣（後書き）

さて……。番外編「ファントレイクとの出会い」

の、チャプター1・2・3くらい迄終わりましたね……。

この後はまだ充分直しが終わってないので、作者が大変です……。
ここらでインタビューしてみましょう。

ギデオン、やっと登場ですが、ファントレイク、ご意見をどうぞ。

ファントレイク：この頃は、ギデオンはきっぱり猛獣だと、思っていました……。

ギデオン：それで私に対してあんなに遠巻きなのか……？

ファントレイク：普通、相手が猛獣なら、対処方に神経を配るものだ……。

大けがをした後に後悔しても遅いだろう？だって……。

だが君の方も、よく考えたら私に一目、置いていてくれると言うか
言動に君にしては、気を使っているように思うが……。

ギデオン：君は弁が立つし、ともかく君との論争は避けたい所だ……。

アドルフエス：このチャプターだろう？ヤンフェスやマントレンが出て、あるう事が

スターグ迄もが、私より先に登場するのは・・・。

レンフィール：作者はシャッセルだけで無く、スターグもひいきしているように思うが・・・。

スターグ：冗談でしょう・・・。作者からは私は都合のいい狂言回し役としてしか

重宝されていない気がする・・・。

ファントレイユ：本編では、レイファスなんか宛われるしな・・・。

スターグ：・・・・・・・・・・・・。いくら乱暴で無法者だからって・・・・・・・・。

邪険にされ過ぎている気がする・・・・・・・・・・。

今回だってぬれぎぬなのに・・・・。しかもこの頃、目にする度にどハデなやさ男だと

思ってるファントレイユ殿に借りなんか作らされるし・・・・・・・・・・。
・・・。

ファントレイユ：どハデなやさ男？

スターグ：だって・・・・。いつだっていい女連れ歩いて、嫌味ったらないじゃないですか・・・・。

ファントレイユ：・・・遊び人のお前に言われる筋合いは、無いと思うがな！

ヤンフェス：スターグ・・・そういう所が迂闊なんだ・・・。

あのアドルフエスですら、ファントレイユには言葉では絡まないぞ・・・。

勝てないと、知っているからな。

アドルフエス：・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
。

ギデオン：ファントレイユと言葉でケンカしてみる・・・。

二度とは消えぬ、心の傷を負うものなんだ・・・。

スターグ：どうしてあんなやさ男相手に凶体の立派な先輩達が言葉を控えるのかと思ってたが、・・・・・・・・そういう理由なのか・・・？

アドルフエス：懲りないのは、レンフィールくらいだ。

・・・それでも他の奴の1/10くらいしか、ファントレイユには言わないが・・・。

レンフィール：私だってファントレイユ相手に、滅多にやぶは突つかないぞ・・・！

見せてはいるが実はもの凄く現実的だろう？

言葉にしろ、剣にしろ、実戦重視で勝ち方を、研究しきっている・
。。ご婦人に対してもそうだ。

で、ひとつ疑問なんだが、いつも自分は勝つ事には興味ないような
顔をしているが実は君つてもしかしてもの凄く

・・・負けず嫌いなんじゃないのか？

思わず全員、乗り出す。

ファントレユ：それは無いだろう・・・。

勝つ気は無いが、負ける気も無い。

降りかかる火の粉を払っていたら、ただ単に、強くなっただけで・
。。

自分から争いを起こそうと言う気は無いし。

・・・だって、私の周囲には大抵の相手が私より短気だからな・
。。

ギデオン、アドルフエス、レンフィールが、気づいて顔を下げる。

ファントレユ：そういう連中と渡り合っていたりしたからこうな
っただけで・・・。

ギデオン：それは私のせいと聞こえるが・・・。

ファントレイユ：そう聞こえるのは明らかに君の耳がおかしい。

別に君がどうか、批判はしていないぞ。

レンフィール：だがお前が話すと、ひっかかりたく無くても、どっか引っかかって

勝手に心が傷つくんだが、どうしなんだ？

ファントレイユ：君の心が勝手にひがんでいるからだ。

全員、そうか？とファントレイユを見る。

マントレン：つまり・・・。大抵の相手は確かに君より短気だが、

大抵の相手は君より、繊細だと言う事だろうな。

ファントレイユ：・・・繊細・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・？

アドルフエス：外見で判断しているな？！

レンフィール：そうだ！いくらアドルフエスがごついからって、神経が

無いと思ったら大間違いだからな！

アドルフエス、レンフィールを睨む。

ギデオン……私も傷つかないと思ってないか？

ファントレィユ……つまり君達は、拳で殴られる方が

心突き刺されるよりマシだと思っているのか？

アドルフエス：当たり前だろう……。

ギデオン：心の傷には薬が、塗れないだろう？

スターグ ヤンフェスな顔を寄せて）：ファントレユ殿は、実はあんなに強かったのか？

マントレン：もっと人生経験を積み・・・スターグ。左將軍なんて、運だけで回って

くるもんじゃない・・・。

ファントレィユがギデオンの左に並んだのは、偶然なんかじゃないぞ……。

スターグが、思わず、頷いた。

あああ、こんなん書いてたら、今度はファントレィユが左将軍に選ばれた時

の事も書きたくなつて来たわ……。

それは、こたこたしただろうに……。

ファントレユ：面白がってるだけだろう？

……まあ、そうです……。

ギデオンの暗殺計画（前書き）

やっと……………。

シャッセルの登場です……………。

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ……………19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー……………アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン……………19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拜者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

ギデオンの暗殺計画

暫くして扉が開いたが、訪れたのはマントレンだった。

彼は地味な紺の上着を付けていたが、その色が更に彼の顔色を、青冷めて見せていた。

が、ファントレイユが一目彼を見て、素早く尋ねる。

「…どうした？」

「…ギデオンが睨まれる…！」

そう告げて、顔を歪ませる王子に気づき、視線を落として言葉を控えようとした。

が、ソルジェニーは慌てて言った。

「…ギデオンを、助けてくれるんでしょう？ 貴方は…！」

マントレンは黙って、頷いた。

「…なら続けて下さい…！ 私に構わずに…！」

ファントレイユが、王子を見た。

「では、約束して下さい。我々が必ず何とかするから貴方は絶対、大人しくしていると…！」

「…しますから……！」

ファントレイユはソルジェニーを見つめたが、ソルジェニーの必死の表情に、その視線をマントレンに移すと、頷いた。

マントレンは口を開く。

「アデンの配下の二隊に、ローゼとその部下達がいる……！」

君も知っているだろう…？ 人切りローゼの噂を…」

ファントレイユは急いでつぶやいた。

「…ドッセルスキの刺客を請け負っているという、例の噂か？」

マントレンは頷いた。

「今まで近衛内で、公然とドッセルスキ右將軍に楯突く男達が次々に殺られているが、あれは全てローゼの仕業だ。」

私は全て裏を取ったが、噂なんかじゃ無く真実だった。

親ギデオン派の隊長らが全て、君の叔父のアイリスを頼って近衛を抜け出したのも、暗殺を防ぐ為だ」

ファントレリュが俯いて唇を、噛みしめた。

が、マントレンは続ける。

「…気配を消すのが得意のヤンフェスに彼らの話を盗み聞いて貰ったが、どうやらギデオンの下にローゼを付け、我々と隔離して……」
ファントレリュの顔が一瞬、揺れた。

それは低い、聞いた事も無い程鋭い声で聞き返す。

「…まさかどさくさ紛れに、暗殺する気が……?!」

仮にもドッセルスキにとって、甥だろう?ギデオンは!」

ソルジェニーはその“暗殺”という言葉に、一瞬冷気に晒されたように、身が凍った。

ファントレリュはきつい瞳をし、青冷めて見えはしたが、とても静かだった。

マントレンは動揺を隠せない王子の様子に、一瞬視線を向けたが、言葉を続ける。

「…身分の低い君や私を隊長にし、更に王子の護衛に君を付けた……身分重視の奴らは、限界のようだ……!」

これ以上、身分の低い者を重要な役職に就けるのを、防ぐにはそれを言い出す彼を……」

マントレンがその後の言葉を、飲み込んだ。

ファントレリュが声を落とし、つぶやく。

「……方法は、解っているのか?」

マントレンは俯き親指を噛むが、ささやくように告げた。

「……良くは……」。

今ギデオン達は配下の隊長達を連れて、西の城を襲った盗賊を討ちに、行ってる。

…多分ギデオンの事だから討ち取って帰ってくる。
だが敵の数を考えると一掃出来るとは、思えない……。

アデンがギデオンから彼の部下を取り上げ、ローゼ達をその配下に指名し、ギデオンに出動命令が出たりしたら……その時は、危ない」

ファントレイユは静かに、頷いた。
マントレンは顔を上げた。

「……ともかくアデンがそれを言い出すタイミングが解らないが、ギデオンにさんざん盗賊を討たせ、奴らに止めを刺せる時迄利用する腹だと思っ……」

「……ギデオンを殺して手柄は自分が独り占めか……。
相変わらず、悪党だな……！」

ファントレイユの、吐き捨てるような声の、優雅さの微塵も無い態度に、彼がどれだけその事に腹を立て真剣なのかソルジェニーには解って青冷めた。

マントレンが顔を上げる。

「……君の叔父アイリスは、大貴族で軍での実力者だ。

彼に使いを送って、アデンがこの暗殺計画の口を割るような手を打つよう、要請してもらえないだろうか？」

ファントレイユは即答した。

「直ぐに使者を送る」

マントレンが顔を下げた。

「ダサンテに、ここに忍んで来るよう伝える」

「頼む」

「……後はローゼを捕らえる方法だが、尻尾を出してくれない限り、押さえられない……」。

まだ暫く時間がある筈だから、こっちで何とか考える」

マントレンはそれだけ言うと、王子にそっ、と視線を投げた。

今の会話の内容の衝撃に、幼い王子の心の動揺を見取ったが、直ぐにファントレイユに視線を移す。

ファントレイユがマントレンの視線を静かに受け止め頷き、マントレンは後は任せると頷き返した後、王子に軽く、頭を下げて戸口に歩いた。

が、ファントレイユが行こうとする彼を、呼び止める。

「…マントレン」

彼は振り返った。

ソルジェニーが見つめていると、呼び止めたその美貌の騎士は端正な面持ちを崩す事無く、底に決意を秘めながらも、ささやくように告げる。

「フェリシテを、貸してくれ」

「彼を、どう使う？」

「………戦の間の王子の警護には、打ってつけだろう？」

マントレンの、顔が瞬間、歪んだ。

そして素晴らしい美貌の、優雅さの少しも損なわれないファントレイユの微笑を浮かべた顔を、たぷり見つめた。

そして小声で告げる。

「………宮廷で、身分の高い美人ともう、遊べなくなるぞ？」

ファントレイユは少し微笑んで肩を、すくめた。

「…まあそりゃあ、惜しいが、近衛の美人の方が付き合いは長いかな」

マントレンは顔が青いまま、笑った。

「…君にあんなにつれない美人なのにな」

「私にだけじゃ無い。

振られた男は数知れず、自分が美人だという自覚すら、無い」

ファントレイユがとぼけたように言い、マントレンはその軽口に少し笑うと、頷いて彼に背を向けた。

そしてもう一度、ファントレイユに振り返る。

その青白い顔の青い瞳が、真剣に彼に注がれるのを、ソルジェニーは引きつけられるように見つめた。

「…本気なんだな？」

ファントレイユが微笑のまま頷くと、マントレンも頷きながら、言った。

「…なら私の方にも覚悟がある。近衛の美人は………」

腹を決めたような低い声で告げ、マントレンはその青い、青い瞳でファントレイユを、見つめた。

ソルジェニーはファントレイユを真摯に見つめるマントレンの瞳があんまり印象的で、一生忘れられない色かも知れないと思った。

「君に任せる」

ファントレイユはご婦人に見せるような、それはうつとりするような微笑で、彼に、頷いて見せた。

マントレンは少し、ためらったがそれでも歩を踏み出すと戸を閉め、その場を去った。

彼の姿が消えると、ファントレイユの、覚悟を決めたようなブルー・グレーの瞳に、ソルジェニーは胸騒ぎを覚え、途端不安になった。

そして口を、開いた。

「近衛の美人って、ギデオンの事だよね？」

ファントレイユは顔を上げたが、微笑んだけだった。

「戦の合間の警護って…。だって護衛は貴方でしょう…？」

言って、そして、ソルジェニーははっとした。

「宮廷の美人と、遊べなくなるって！でもファントレイユ！

幾ら僕にだって解る…！こんな時に護衛の仕事を放り出したりしたら……！

ヘタをすれば近衛にだって、居られなくなるくらいの責任を……

！」

だがソルジェニーにはもうそれ以上は言えなかった。

ファントレイユにはとくに全て解っていて、覚悟を決めてしまっている。

だって何を言っただって、微笑むだけだもの………！

ダサンテが、そつと窓を叩く。真っ直ぐの栗毛を肩に流し、静かな茶の瞳をした誠実そうなその男は、無言のまま、開けられた窓から入り、耳を寄せてファントレイユの言葉を聞き取り、彼に頷くと直ぐに、来た道をそつと、出て行った。

窓を閉めるファントレイユが、ゆっくり、見つめているソルジェニ
ーに振り返る。

ブルー・グレーの瞳が優しく輝く。

「…お食事を頂きましょうか…」

もうとつくに、昼を過ぎてる」

ソルジェニ―は何も、言えなかった。

宮廷で、彼はあれ程光輝いていた。

それはきつと…誰に聞いても、答えは同じだろう…」。

近衛の美人…ギデオンの為なら…そんな優雅で夢のような楽しみす
ら、捨て去る覚悟だなんて……。

ソルジェニ―はその静かで時折食器にフォークが当たる音しかしな
い食事中、幾度も顔を上げて向かいに座り食事を取るその美貌の騎
士を見つめそして……。

口を、開きかけた。だがその都度、ファントレイユはとても柔らか
な微笑みを浮かべ、彼を見つめる。首を傾げそして……。

問われた言葉に誠実な返答を返す準備があると、その微笑で、告げ
る。

だが彼を見つめる度ソルジェニ―は言葉が…心から、消え去って行
くのを感じた。

食器は、青の小花模様が、散りばめられていた。

フォークは銀で、素晴らしい飾りが彫られていた。

ナプキンには優しい黄色の花と蔦が、絡んでいた。

誰が、刺した刺繍だろう？専門の、職人だろうか……。

ソファの色は、光沢あるピンクだった。

その周囲の木枠は白木。部屋の枠も白木で…。

壁は白にやはり、ピンクの小花模様がそこいら中に、散りばめられ
て……。でもカーテンは、不似合いな重々しく暗い赤だ……。

もう、止めようと思いつながらソルジェニ―は部屋の、今まで気にも
止めなかった調度の品を視線で、追った。

扉は重々しい茶色の、樫だろう…。柱に壁に、窓枠に…随所に、金

の飾りが、部屋を更に豪華にしようと飾り付けられてる。金の輪で囲まれ、素晴らしいカットのガラス飾りの幾つも吊された、シャンデリア……。そう……。そうそして…………。

「…私の元を離れて、ギデオンの所へ、行くの？」

視線を、食事を終えたファントレイユがナプキンで口元を拭う姿に、戻した時だった。

やっと、それを口に、出来たのは。

ファントレイユがそう問う王子を見つめる。

そのブルー・グレーの瞳はいつも通り、生気に満ち、輝いていた。淡いグレーに近い栗毛とブルー・グレーの瞳のその隙無く整いきつた美しい顔立ちは、昼の陽光を浴びて、白く輪郭をぼかし、神秘的でとても優しく見える。

彼は誰をも魅了する微笑みを浮かべ、首をほんの少し傾げささやいた。^{かし}

「…必ず、ギデオンを守ると貴方に、お約束しますから」

まるで、悪戯っ子のように、微笑んで付け足す。

「貴方のお側を少し、離れる事を、許して下さいますね？」

ソルジェニーは彼を、見た。喉が、詰まった。勿論彼に、可能な限り側から、離れて欲しくなんか無い。

でもその彼より、もっと危険なのは…………。

ギデオンの事を思い浮かべた途端、喉がひりつく。

命を…狙われてるだなんて…！

たった一人微笑みかけてくれるギデオン迄逝ってしまったら…………！それを、考える事すら、ソルジェニーは怖かった。のに…………。

その時、ふんわりと柔らかい空気が、彼を包んだ。ソルジェニーは気づいて顔を、上げた。ファントレイユはいつもと変わらぬ微笑を浮かべ、自分を包むように暖かく、見守っていた。

ソルジェニーはようやく、言葉が喉から滑り出た。

「…約束して下さい。貴方も…ギデオンも無事でこの遠征を、終えろと」

ソルジェニーの声は、しつかりしようとし…しかし最後は震えていた。

ファントレイユは全開で微笑んだ。

「勿論、お約束します。だから…」

ファントレイユの言葉を遮り、王子は急いで告げた。

「許します。そして一切、他言もしません！」

ファントレイユはだが、その件についてくたじけなくは約束出来ないかもしれない。自分は責任を取らされて免職になるかも。と、その首を少し傾げ僅かに眉を寄せ、微笑で語った。

ギデオンの命が救われる代わりに、護衛の彼を失うかもしれない危惧に、ソルジェニーはやっぱり涙が、零れそうになった。

唇が、震えたがソルジェニーはつぶやいた。

「…どんな事に対しても私は貴方を、庇います…！勿論、若輩の私は王子とは名ばかりで、何のお力に成れないかもしれない…！

けれど…私の出来うる限りどんな事に対しても…貴方のお力に成りますから…！」

王子が唇を噛みしめ、少女のような可愛らしい顔で、今にも泣き出しそうなを必死でこらえる様子を、ファントレイユは微笑んで見つめた。

本当に、優しい微笑みで、ソルジェニーは瞳が潤んで霞むのを、呪った。

この美しい人の素晴らしい微笑みを瞳に、焼き付けておきたいのに…！

涙が、滴りそうでとうとう、ソルジェニーは顔を、下げた。

ファントレイユは労るようにその幼い王子が、国一番の身分でありながらどれだけ…気にかけて気遣ってくれる相手が少ないかを思えばかって、ささやく。

「…貴方にそれ程迄に気にかけて頂くなんて、一生涯で忘れられない感激です…！」

貴方のお心に、私は最善の努力で応えさせて頂きますから。

きつと。必ず…！」

その声は静かで、とても愛情溢れて暖かく、例え護衛を辞しても、側に居られなくても、彼はきつと自分を心に止めて置いてくれると知り、ソルジェニーは顔を上げた。

が、やっぱりその美貌の、騎士の表情は潤んだ瞳にぼやけて映った。ソルジェニーは唇の震えを鎮め、そして静かに、頷いた。

ファントレイユは時々、召使いに戦況を訊ねる。

召使いは彼の疑問を聞きに、近衛の兵の集う場所へと出向き、帰って来てはファントレイユにそれを告げた。

ソルジェニーはいかに自分が、隔離された場所に居るのが解って、じりじりした。

ファントレイユが召使いと話す度に、聞き耳を立てるが、どうやらギデオンが自分の隊長らを引き連れ、今や軍のように終結した盗賊達と戦っている様子だった。

だが、直ぐだった。移動の知らせが入ったのは。

伝令に直ぐ行くとファントレイユは告げ…王子に振り向く。

ソルジェニーは静かに彼に頷き、上着を羽織った。

…ともかくこの隔離されたような、豪華な牢獄のような場所から出られ、ソルジェニーは安堵した。

ファントレイユと並んで白く幅広な大理石の階段を降り、手入れの行き届いた広々とした庭園に出ると、殆どの兵はそこには居ず、40名程の騎士達が、王家の豪華な馬車の周囲に整列していた。指揮官が、二人。

どうやら二隊のみが、王子の馬車を護る為にそこに、残っていたようだったがそれは…アデン准将と、ローゼの隊だった。

彼らは馬車に乗り込む王子にうやうやしく頭を下げ、名乗った。

「…アデン准将。この戦の、指揮を務めます」

「配下で隊長の、ローゼと申します。」

「御身と馬車の、警護を務めます」

ソルジェニーは思わずその、二人を見た。

アデンは黒髪の、いかにもごつい男で髭を生やし、殆ど黒に近い目が、ぞっとするような輝きを持っていた。

ソルジェニーはその男の企みについ、言葉を投げ付けそうになったけど、ファントレイユがそつ。と王子の腕を触って、たしなめた。

そしてローゼの方は真っ直ぐな薄い金色の髪のすらりと背の高い美丈夫で、だがその色味の無いグレーの瞳は冷たく油断無く、整ったその顔には、あまり表情も無かった。

ソルジェニーは震える心を隠し、軽く彼らに頷いて見せた。

だが言葉は出て、来なかった。

ソルジェニーが屈んで馬車に乗ろうとする時、馬車の扉を手で抑え隣に立つローゼが、後ろに続くファントレイユに、ぞっとするような冷たい流し目をくれニヤリと笑う顔が、瞬間目の端にチラリと、映る。

ソルジェニーは内の座席に座るなり慌ててファントレイユを、振り返る。

彼が乗り込もうと身を屈めながらローゼのその笑みを受け、一瞬動揺を隠すように顔を揺らし、そしてゆっくり、屈めた顔を少し上げ、見上げるように真横に立つ長身で金髪の、嗤う、隊長と言う名の衣に刺客の顔を隠し持った男の顔を、見つめた。

…射るような、瞳だった。

そのブルー・グレーは、いつもの軽やかで優雅な輝きを底に押しやり、きつい光を放ってその男を見据える。

これが本当の、武人のファントレイユなんだと、ソルジェニーは身が震った。

馬車が、動き出す。

ソルジェニーは隣に座るファントレイユを見たが、彼はもういつものように、王子に優雅な微笑を送った。

その瞳が、心配無い。と告げているようで、ソルジェニーの心がど

くん……！と震えた。

敵に対してはあんな瞳をして見せるのに、この、ギデオンが『信頼に足る人物だ』とそう告げた美貌の騎士は、護るべき相手にはこんなに優雅で優しい瞳を向ける。

ソルジェニーは俯いた。そして、その騎士の肩にそつ、親しみと労りを込めて、頭を預けた。

……そんな風に人にするのは、『風の民』を除けば、初めての事だった。

ファントレイユはそんなソルジェニーの様子に、気づいた様に見つめ、肩に置かれた彼の頭に、その顔をほんの少し、寄せた。

頭上にファントレイユの、唇と顎の気配を感じ、再び瞳が、潤んだ。……その騎士は、底に隠した緊迫感と強い意志を、それを表に出す時迄は心の隅に押しやって、今は彼に対する優しい気遣いだけをその全身から、香りのように醸し出していたから。

……だからソルジェニーも、その人に泣いてすがりつきたいような感情を押し殺し、ただその人のとても優しい気遣いに、心の中でそつと、溢れるような感謝を告げた。

ギデオンの暗殺計画（後書き）

アドルフエス：．．．なんか、長くなっていると聞いたが．．．。

レンフィール：このインタビューで我々が出刃ったら、出番を作ってくれたようだな。

アドルフエス：．．．．．．．．．．．．．．．。

ファントレイユ：不満のようだな。

アドルフエス：我々はこのでアピールしているというのに、

シャッセルの登場にはどうしてあんなに文字をつぎ込むんだ？！

ギデオン：お前達と違って、裏表が無くて信頼出来る男だからだろう？

ファントレイユ：いい男だから、作者のお気に入りなんじゃないのか．．．？

レンフィール：．．．それじゃ、私がいい男じゃ、ないみたいじゃないか！

アドルフエス：そうだ！だいたいシャッセルは、ファントレイユの次に腹の立つ男だ！

話題に成っていますが、シャッセルさん。一言どうぞ。

シャッセル：武人は、言葉よりも剣と態度でアピールするものだと思うっていたが……。

ギデオン：ほら見る！こういう男だから誰よりも信頼出来るんだ！

シャッセル：……まあ、作者にひいきされているという気は、している……。

アドルフエス：そうだろう？！

シャッセル：アドルフエス。前から聞きたかったが、やはり私にやたら突っかかってきて

ライバル意識を燃やしているようなのは、ギデオン殿の事についてか？

それとも武人の腕でか？

レンフィール：ギデオンの事に、決まってるだろう？

お前には一番態度が柔らかいからな。……あのギデオンが。

アドルフエス：レンフィール！本人で無くなんでお前が答えるんだ？

大体、お前が天才剣士で大貴族で見目がそこそ良いのにギデオンのウケが

今一なのはしゃばりだからだ！

レンフィール：俺と五十歩百歩のお前に、そう言われてもな……。

あの……。他にも、ヤンフェスとマントレンにも話をして貰いたいんですけど……。

レンフィール、アドルフエス共に、睨む。

ヤンフェス：……。アドルフエスの気持ちはそれなりに解る……。

あれだけギデオンに媚びているのに、当の本人は身分の低い我々と親しく話すもんな。

ギデオン：ヤンフェス。お前は気のいい男だから嫌う奴は居ないだろう？

ヤンフェス：冗談だろう？私は貴族どころか平民だから、身分を気にする奴ら

からは鼻つまみ者だぞ？

アドルフエス、レンフィール、知らん顔をして顔を背ける。

ファントレイユ：おまけにギデオンの、ウケがいいから、嫉妬の対照になってるしな。

ヤンフェス（頷きながら）：……。ギデオンと話した後は、一番幼稚なやり方では、足を

引っかけられたしな……………。

ギデオン：そんなどうしようも無い事をする奴が、居るのか？

作者：アドルフエスが、顔を背けて、頭を掻いていますね……。

身に覚えがあるようです……。

ファントレイユ：君の取り巻きはそれは強力だから、君の前ではいい子に

していて、君にそれはにこやかに話しかけられた奴に、

影で色々意地悪をして追い払っているんだぞ。

ギデオン：……嘘だろう……？子供でもないぞ。そんな馬鹿なマネ……。

マントレン：本当だ。君自身と話すのも、君に殴られないよう禁止ワードに触ずに

話さなくちゃならなくてやたら気を使うが、話したら話したでその後、

君の取り巻き達のいやがらせの洗礼を浴びるという

二段構えになっている。

ギデオン：……。……。……。……。……。凄く、

大変そうに聞こえる。話をするだけの事だろう？

マントレン：シャッセル相手にはさすがに連中は、幼稚なやり方は

控えるようだ。・・・そういういやがらせを気にも止めずに、

見事にかわしたり、口で思い切り皮肉って攻撃したり

裏をかくのがファントレイユだ。

ギデオン（思わず、頷く）：ファントレイユは頭が良い上に、余分な労力は使わないと

常に手を打つし・・・その上怒らせると、私でも怖いからな・・・。

ファントレイユ：・・・君が怖がるなんて、絶対嘘だ。

ギデオン：自覚が、無いのか？普段それはソフトな態度なのに、

怒ると問答無用で、相手への配慮は一切無しで、思い切りばっさり

殺る癖に・・・。。ここに居る誰よりも思い切りが、いいぞ？

アドルフエス、レンフィール、シャッセルが大きく頷く。

ファントレイユ：・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・君達、思いの外度胸が、無いな。

アドルフエス：自分を基準に考えるな！

レンフィール：それで普段口にする言葉は、武人としてはおよそ情けない事

ばかり並べ立てる・・・。

お前の言葉を鵜呑みにして、気の弱いやさ男だと思いこんだ奴程、不幸だ・・・・・・・・・・。

シャッセル：それに関しては私も全く、同意見だ。

ファントレイユ：だって、気はそれ程弱くないかもしれないが、体力自慢のアドルフェスやシャッセルと比べると明らかに、やさ男だろう？

作者：・・・でもみんな、貴方が怒ると怖いという事実を、知って、身に染みているようなんで・・・。全然為にならない本人申告はこの辺で・・・。

ファントレイユ、明らかに不満そう。

ギデオン：マントレン。君も苦労したのか？

マントレン：私は頭脳しか取り柄のない、うらなりだと思われて嫉妬の対照から外れて、助かっている。

ギデオン：そういうものなのか・・・・・・・・・・？

知らぬはギデオンだけのような、周知の事実の、ようですね・・・。

男の嫉妬ほど、怖いものは、無い……。

カディツ公居城での、戦闘（前書き）

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからつきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を

度々救い、信望を得ている。

ダサンテ・・・スターグらと同級の、ファントレイユの部下。

真面目で無駄口を叩かず、勇敢なので

先輩達からとても信頼されている。

アデン・・・ギデオンのうんと年上だが、同じ近衛准将。

ギデオンの叔父で、現右将軍、ドッセルスキに指令を

受けて、ギデオンの暗殺を企む。

ローゼ・・・近衛連隊、隊長の一人。アデンに指令を受け

ギデオンの直接手を下す機会を狙う、暗殺者。

ギデオンのより、年上の熟練の、刺客。

カディツ公居城での、戦闘

ギデオンはその城の中で剣を振るっていた。

野営の城に到着後間もなく、すぐ隣領地のカディツ公の居城より救援要請があり、直ちに連隊を率いて馬で駆けつけ、城の中で圧倒的少数で敵に立ち向かう、城のお抱え騎士達の加勢に飛び込んで彼らを安堵させた。

平常の戦とは違い、彼ら連隊が押し寄せると、幾つもある豪華な部屋部屋に敵は散り、騎士達は皆、城内の敵を追って散開した。

真つ先に、部屋に駆け込むギデオンが急襲する敵に剣を振り、一撃の元に斬り倒すのを目にした賊達は、彼がやって来ると蜘蛛の子を散らすように、逃げ出す。

ギデオンは、背を向けて逃げる敵に思い切り腹を立て、室内を歩き回ってその姿を探すが、戸の影から、箆筥、彫像の後ろから敵は急襲して来てその度、彼は剣を振った。

見回してももう動く気配無く、ギデオンは二階に続く広大な踊り場にしまえられた、幅広で豪華な飾り彫刻をふんだんに施した立派な階段を駆け上る。

城内をそんな風に敵の姿を求めて彷徨^{うろた}っているのは自分だけで無く、途中手摺りを掴み階段を見下ろすと、階段下ではシャッセルが、戦っている風も無くやはり自分同様、襲い来る敵を探し身構えていた。

ギデオンが豪華な階段を登り切ったその先の、素晴らしい金の額縁に飾られた絵画の並ぶ、ぴかぴかに磨き上げられた大理石の床の広い踊り場に、立つ。

その正面の部屋を探そうと進む彼の背に、突然絵の横の、開け放たれた飾り戸の影から敵が、急襲して来た。

シャッセルが、ギデオンの姿を追って階段を登りかけたが途中その狼藉者を目にし、慌ててギデオンの背を護ろうと、一気に階段を駆け上る。

そのシャッセルの急ぐ姿にギデオンは気づき、背に一瞬刃の振り下ろされる気配にだがギデオンは敵を見る事無くその向けられた殺気に対し、軽く体を振って襲い来る剣をかわし様振り向き、瞬時に剣を振り下げた。

相手はその一撃で床に、倒れ伏す。

駆けつけたシャッセルが、僅かに息を切らして床に転がる、敵を見る。顔を上げ、ギデオンを真正面から声無く見つめる。

金の、鮮やかで豪華な髪は僅かに乱れて波打ち、その髪に囲まれた色白な小顔の、小さな唇は赤く、その碧緑のくつきりと美しい瞳が自分を、見つめていた。シャッセルはその美女も叶わぬ類い希な美しいその姿と、相手をも見ず一撃で敵を斬り殺す、その見事な剣捌きとのギャップに、暫く、呆然とした。

が、瞬間ギデオンはシャッセルに、きつく強い視線を向ける。シャッセルは瞬間はつと気づく。

今度は自分の背後から、いきなり敵の剣が襲いかかって来た。背を絶ち斬ろうとするその剣に、シャッセルは振り向き様剣を当て止め、交えた剣を力を込めて押し合いながら、思う。

…これが普通だ……。

背後から襲いかかる剣を一瞬でかわし、敵も見ずに剣を振り入れ…
…そして一撃で殺す事等、ギデオンの他に一体誰が、出来る？

シャッセルはその剣を力尽くで跳ね上げ、自らの剣を素早く構えると、思い切りその男の開いた横腹に突き入れた。男は呻くと、傷を抑えて倒れ込む。シャッセルが一息付いて顔を上げる。

ギデオンはこの戦場で浮き立つ素晴らしく綺麗なその姿で、だが尊大に顎を上げ、息一つ乱さず彼にこう告げた。

「…私の心配は無用だ。自分の心配を、しろ」

見下す風で無く、その声に気遣いが潜み、シャッセルは心の中で彼

に感謝の、一礼を、した。

その先の長い廊下に進むと、降りかかるように次々に敵が襲ってきて、シャッセルはギデオンの斜め後ろに付けながらもギデオンと共に、五人程の向かい来る敵と、対した。

シャッセルは、自分に襲いかかる剣を受け止め、ついそれを、目にした。

豪奢な金の髪が瞬間鮮やかに、散る。

降ってくる剣を屈んでかわし、瞬時に相手の懐に飛び込んで剣を突き入れ、それを引くなり弧を描く間すら無く銀の残像を一瞬残す早さで、斜め前の男の腹を踏み込み様思い切り横に薙ぎ払い、両端に倒れ伏す男達の真ん中その向こうから、剣を振りかぶり向かい来る賊を、剣を振り上げては一步退き、相手が握りに力を込めて剣を振りかぶる、その瞬間さつと身を屈め、あつという間に間を詰めて一気にばつさりと肩口から、激しい一刀を振り入れる。

…あんまりその姿がしなやかで俊敏で、勇猛で美しく、シャッセルは一瞬、視線が彼に釘付けられ、見惚れる自分を制した。

自分も敵の剣を、受け止めて対しているというのに、ギデオンはその間に三人を斬り殺していた。

シャッセルが気合いを入れ直し、瞬間剣を外してその男の脇を早く鋭い一撃で突き倒す。

その横から隙を見て逃げ去ろうとした賊は、向かい来るシャッセルに慌てて剣を構えようとするが、シャッセルは上げた剣を力尽くで振り下ろし、敵を一刀の元切り捨てた。

見るとギデオンはもう先に、進んでいて、アドルフエスが自分の姿を見つけて後ろから近寄って来た。

黒髪で自分と同じくらいの身長、頑健な体付をしたその男前の騎士は、白っぽい金髪で碧眼のいかにも女性受けのいい、整った容姿のシャッセルのその姿に視線を投げ、厳つい表情をその勇ましい顔に一瞬浮かべ、彼と肩を並べてギデオンの背に、続く。

アドルフエスは、深い藍色の瞳をギデオンの背に向け、その背の後

るから荒れた室内を、見渡した。

宝物部屋なのか激しく物が散乱し、物色した後があり……その散らかった部屋の奥に一人、豪奢な金の刺繍の入った高価な青い上着を付けた青年が、今にも倒れそうになりながらも、剣を杖代わりにその身を支え、立って居た。

ギデオンが近寄ると、彼は脇を押さえ、そこから血が、吹き出しているようだった。

その他にも、肩や腕に数力所傷を作り、その高価な上着を自らの血で、汚していた。

それでも倒れ込まず、何とか崩れ落ちそうな体を必死に剣で支え、ギデオンを見つけると顔を上げ、苦しげな息を吐きながらもささやく。

「頼む……。弟を……連れて行かれた。

助けてやってくれ……！」

「カディツ公子息か？」

ギデオンが静かに問うと、青年は痛みに顔を歪ませながら、頷いた。

「ウィリッツだ……」

ギデオンが後ろを振り向き頷くと、シャッセルがその視線を受け、脇を開けるギデオンの目前を抜け、その若い青年に近寄って傷から手を離させ、腰のベルトの隙間から止血用の布を、二本の指先で抜き出しそつと、傷口に押し当てる。

ギデオンはそれを見守った後、くるりと背を向け足早に室内を出、アドルフエスは後に付き従った。

彼らは二階の手摺りから、盗賊の死体があちこちに転がるその広々とした豪華な階段下の広間に、がやがやと集い来る部下達を見つける。ギデオンが彼らに、鋭い声音で叫んだ。

「子息がさらわれた！何としても、探し出せ！」

全員が、上から降って来るギデオンの声に揃って顔を上げ、そして一斉に、城内外に散って行った。

盗賊の残党は広大なカデッツ公爵領地内にある、なだらかな丘陵地帯のその向こう。

小高い丘の上の、要塞のような別宅に立て籠もっているとの報告が入った。

狐のようにしなやかな細身の、銀に近い金髪をたなびかせたレンフイルが城の庭でその縛り上げた男からそれを聞き出すと、ギデオンがふいに後ろから姿を、見せる。

「…確かなのか？」

聞き慣れたギデオンの声に、レンフイルは振り返ると捕らえた盗賊の襟首を掴み、引き上げた。

「…確かだろうな?!」

男は若者だったが、いかにも盗人。といった、下品で薄汚れた顔をしていた。

襟首を掴むその男の、銀狐を思わせるしなやかな銀色の長髪。薄いグレーの瞳をした女顔で柳腰の風貌に視線を向けたもののその男が、剣を手にした時顔色も変えずに何人もの仲間をあっという間に斬り殺すぞつとした凄腕の使い手だと言う事も、十分目にしていた。

だがその男は後ろから現れた素晴らしく目立つ金髪の、女性と見まごうばかりの別嬪の、身分の高そうな男の姿に冷静さを失い、彼の顔色を伺う様子に、若く縄打たれた賊はひきつる喉をなだめながら、必死に叫んだ。

「………本当だ………！」

お頭他、その取り巻き連中が、緊急の時にはあそこに避難すると言ったからな………！

俺が付いて行こうとすると、俺の盗んだお宝を取り上げて、お前はここに残って戦えと………！見捨てやがった………！」

男がそれは悔しそうに顔を歪めてそう叫ぶと、レンフイルはその、綺麗な細面を少し歪ませて低く呻いた。

「…そういう事を聞いているんじゃない………！」

男は、レンフィールの後ろに黙して立つ派手な人目を引く豪華な金髪、見目こそそこの女よりも余程綺麗な容姿だが凄まじい気迫を滲ませる身分の高そうなその男と、自分の首を締めてる凄腕の剣士の歪んだ顔を見比べ、慌てて付け足す。

「…確かに…確かに、貴族の子供も一緒だ…！」

俺達が盗んだお宝と一緒に、お頭達があそこへ運んだ…！」

見目のいい男の子供はヘタな宝石なんかより、余程高く売れる…。」

お頭達が絶対殺す訳ねえし、放したりも、するもんか…！」

ギデオンはそれを聞き、笑った。

「…で、お前は剣を捨てて命乞いか？利口だな」

足元に転がる、飾りの無い粗末な剣を見てそうつぶやく。

レンフィールに締め上げられているその若い賊は、だが吐き捨てるように言った。

「…使い捨てにされて、たまるか……！」

男の悔しげなつぶやきに、ギデオンが途端真顔に成る。

「…使い捨てが嫌なのは、盗賊も騎士も同じだな」

ぼそりと告げる、凄まじい迫力の身分の高いその男の静かな独り言に、盗賊の視線が思わずギデオンの綺麗な横顔に、吸い付いた。

がギデオンはレンフィールに顔を向け、命令を出す。

「…捕らえた者は集めて連行しろ…！」

アデン准将と王子達がこちらに向かっている。

捕らえた者達を連れて彼らと合流してくれ。

私は一足先に、賊が立て籠もっているという別宅に飛ぶ」

レンフィールは、頷いた。

ギデオンは、後ろに並び立つシャッセルとアドルフエスを引き連れ、馬に跨った。

レンフィールはギデオンが、疾風のように馬を駆けさせ、アドルフエスとシャッセルが顔を歪めて必死で手綱を取り、ギデオンの背を追う様を見、肩をすくめて部下達に、引き上げの合図を、送った。

…やがて、馬車が止まった。

ファントレイユが窓から覗くと、馬に跨ったレンフィールの姿が見えた。

レンフィールはアデンの姿を見つけると、馬を寄せる。

アデンが馬に跨ったままのレンフィールから報告を受け、頷く。

「…この先の、丘陵地帯の別宅か…。いいだろう。

では我々も、もう少し進み、その近くで野営しよう…。

城内はひどい有様か？」

「…城付きの騎士が十数名残っていて、後片づけをしています」

「…ギデオン准将は別宅を、見に行っているのだな？踏み込む様子か？」

「…私もあの別宅は目にした事があるが、ぐるりと高い、石の堀に囲まれ、入り口は正面に一つしかない…。

いざと言う時の要塞として、建てられたと聞いている。

入り口をぴったりと閉じられては、ギデオンとて容易に侵入は出来ないと思う…。」

アデンがその言葉に頷く。

「…もう、日も暮れる…。

君はギデオン准将と合流し、様子が伺えたらこの野営地に戻るよう、告げてくれ…。」

レンフィールは一つ、頷くと手綱を取る。

ふわり。と、白っぽくくねる銀髪が見え、彼は相変わらず気配の無い狐のような様子でさっ、と馬を駆けさせてその場から遠去かって行った。

だが、王子の元には何の報告も無いまま、馬車は再び進み始めた。

カディツ公居城での、戦闘（後書き）

ギデオン暗殺計画」

まあ、計画だけです。

出てるのは、ファントレユ

ソルジェニー マントレン

そして、ダサンテ。

敵方のアデンと

ローゼも出ますね。

金髪の美丈夫。

でもアースルーリンドの

金髪はやっぱり

皆、野獣ですね・・・。

ギデオン。ローゼ。それに14話「アデンへの尋問」で

やっと登場のまだ出てないギユンター。

本編しか出てない、グエン＝ドルフも野獣……。

なぜなんだ……。

アイリスと大物達と、その後の野营地（前書き）

ギデオン本領発揮ですね〜〜！

やっと、シャッセル、レンフィール、アドルフエスが活躍？

しますね・・・。

レンフィールったら・・・。

ギデオンの下だとせつせと、働くのね・・・。

ギデオンの後ろに自動的に

シャッセルとアドルフエスが並び立つのも、相変わらず・・・。

しかし第三者が見たら、迫力だろうな・・・。

綺麗なギデオンの後ろに、でかい黒髪の精悍なマスクのアドルフエ
スと

静かで迫力の、端正なシャッセルがどどーん！

まあ、盗賊達はみんな、逃げるでしょう・・・。

彼らは手強い敵よりお宝好きだから・・・・・・・・・・。

十：登場人物紹介：十

ファントレリュ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフエス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

アデン・・・ギデオンよりうんと年上だが、同じ近衛准将。

ギデオンの叔父で、現右將軍、ドッセルスキに指令を

受けて、ギデオン暗殺を企む。

アイリスと大物達と、その後の野営地

ダサンテが、『神聖神殿隊』付き連隊官舎の中の連隊長司令室に辿り着いたのは、日の暮れる前だった。

彼は乱れた息を整えてアイリスへの面通しを願ったが、マントレンの名で、執務室の扉は簡単に開いた。

>i5666<ruby><rb>300<

敵</rb><rp>(</rp><rt>おごそ</rt><rp>)</rp></ruby>かな暗い色をした執務机を前に、

椅子に掛けた軍の大物と呼ばれるその人物は、幅広の肩に手入れの良く行き届いた艶やかな濃い栗色の巻き毛を垂らし、ファントレイユの叔父だと納得のいく、素晴らしく顔立ちの整った美男で、ゆったりとした優雅な姿をしたとても魅力的な人物だった。

その濃紺の瞳をダサンテに向けると、微笑みかける。

ダサンテは一つ、息を吐くと声を潜め、しかし通るはつきりとした声音でこう、告げる。

「指揮官アデン准将が、ギデオン准将の暗殺を企んでいます。

阻止はこちらでするので、捕らえたアデンの、口を割らせる方法をお願いしたいと」

アイリスは顔色も変えず、微かに頷いた。

「それで？どれくらいの猶予がありそうなんだい？」

その声は低く良く響く声で、だがとても優しくかったので、ダサンテは拍子抜けした。

「…現在ギデオン准将は、カデイツ公居城の盗賊討伐をしています。その数は劇的に減ると思いますが、それで賊らが完全に撤退するとは思えません。

マントレン殿はおそらく次の一戦で、アデンはギデオン殿の部下を

引かせ、自分の部下を代わりに付けるだろうと」

「…暗殺決行はその時か。」

それがいつになるかはまだ、解らないという訳だな？」

ダサンテは、静かに頷いた。

全く無駄無く、自分の仕事に誠実なその年若い使者に、アイリスはそれはにっこり微笑むとささやくように告げる。

「^{シュティツ}荒野亭”がああ近くにゐるのを、君は知っているか？」

ダサンテは面長の、端正な顔を上げた。

真っ直ぐの栗毛が、肩の上で揺れる。

「…ええ。上級貴族の集まる、サロンですね？」

「野营地からは、どのくらいかな？」

「…ほんの、小半時。…いえ、もつと早くに、着けます」

「ギデオン准将がアデンの部下と出かけたら、“^{シュティツ}荒野亭”のミリアスに連絡を入れてくれると有り難い。」

私の名を、使ってくれて結構だ」

ダサンテは、頷く。

そして言い難そうに、その美男の軍の大物を上目使いで見つめ、小声でそれを告げた。

「…マントレン殿はこの先、ドッセルスキ右將軍の企むギデオン准将暗殺計画に、付き合う気は無いと…。」

そう告げればお解りになるからとご命令頂きました」

アイリスがこの言葉を聞いて激しい衝撃を受けるか、もしくは激しい異論を怒鳴り付けるか…。

ともかく、優雅この上無い高官の取り乱す姿を、ダサンテは待ち構えた。

が、予想に反しアイリスは、それは素晴らしい微笑を浮かべただけだった。

「じゃあ、ギデオンの説得も彼が引き受けるんだな？」

始まった以上は必ず期待に添える成果を、上げる事を約束するとマントレンにそう、伝えてくれ」

ダサンテはまさか即答が返ってくるとは思わず、一瞬たじろぐ。
がその素晴らしい微笑を浮かべる、とても魅力的な美男に、深く一
礼した。

アイリスは立ち去ろうとする彼に告げる。

「こちらは何も心配はいらない。そう伝言してくれて、結構。

…それと、君の名前も聞いておこうか」

ダサンテは意味が解らなかったが、とりあえず自分の名を口にした。
「ダサンテ准子爵です」

その大物の大貴族は素晴らしい笑みを、湛えた。

「ではマントレンにもう一つ、伝言願えないか？

君の選んだ使者はとても君らしくて、素晴らしいと思う、と」

ダサンテは意味が解って少し、頬を染めた。

「ありがとうございます」

謙虚で素直な感謝の言葉に、アイリスはますますにつこり、微笑ん
だ。

が、ダサンテが出て行くと、彼はマントを羽織り直ぐにしん既に、向か
う。

優雅だが風の、ようだった。

中央護衛連隊本部官舎は、そう遠くの建物では無かった。

アイリスが姿を見せると、そこに居た銀髪美貌の都護衛連隊長、
取り次ぎ役のシェイルは直ぐ、奥の扉を開け、彼の上官である中央
護衛連隊長の名を呼んだ。

「ギウンター！アイリスだ」

> i 2 8 5 0 — 3 0 0 <

金髪で、紫色の瞳をした男らしい美貌のギウンターが、その長身の
隙の無いしなやかな動作で姿を見せると、アイリスは微笑んだ。
ギウンターが、自分と同じ位の背の、優雅この上無い大貴族の彼の
その、とても愉快そうな微笑みに一瞬身じろぎ、身構えると、そっ
と、ささやく。

「楽しそうだな」

「無論ね。」

どうやら討伐に出かけた近衛で、動き始めたようだ。

使者が来た。ギデオンも相手が凶行に出れば、腹を決める筈だ」

「凶行？…ドッセルスキが、まさか甥に刺客を差し向けたのか？」

それを尋ねたのは取り次ぎ役の、銀髪で際立つエメラルド色の瞳の、美貌の青年シェイルで、ギユンターの、表情を変えない驚愕の表情を通り超し、アイリスはシェイルに振り向く。

> i 2 4 1 1 — 3 0 0 <

「ローフィスとオーガスタスにも、伝えてくれないか？」

そして…出来れば元左將軍の、ディアヴォロスの方も借りたい。

退いたとは云え今だ、彼に尊敬と忠誠を向ける者は、数知れずだからな」

シェイルは一つ頷くと、ぶつきらぼうにつぶやく。

「ディンググレーも、来ると言うだろうな。」

宮中護衛連隊長なんて面倒な役職を押しつけられて、鬱憤が溜まりまくってる」

アイリスは笑い頷くと、シェイルは直ぐに部屋を出、名の上がった者達には使者を送り、自分は既に駆け込むと馬に跨り、ディアヴォロスの元へと真っ直ぐ駆けた。

アイリスは長身で金髪的美丈夫、ギユンターに視線を向ける。

「付き合ってくれ。ギユンター。君の顔が、要るんだ」

ギユンターは思い切り、肩を、すくめる。

室内からそつと、ローランデが姿を、現す。

> i 4 4 7 7 — 3 0 0 <

独特の、濃い栗毛と明るい栗毛の交互に混ざる髪を品良く背に垂らし、澄んだ青の瞳の高貴な剣豪の貴人は、アイリスよりも一級上で今は北領地「シェンダー・ラーデン」の大公だった。

そのローランデがギユンターの横にそつと付くと、とても素晴らし

い可憐なギウンターの恋人に見えて、アイリスは残念そうにギウンターに視線を、向ける。

「…邪魔したかい？」

ギウンターが口を開く前に、ローランデが言った。

「使者でなく君が直接出向いて来た以上、事は重大だと言う事だろう？」

ギウンターは直ぐに支度が、終わる」

ギウンターは、そう告げる隙の無い騎士に戻った恋人の、艶やかな髪や唇を惜しそうに見つめ、吐息を吐いた。

馬上から、アイリスはギウンターをチラリと見る。

アイリスの方に振り向きもしないで、ギウンターがぶっきら棒に告げた。

「…馬鹿だと、思ってるな？」

アイリスは、吐息を付く。

「…いや。教練時代からまだ続くんなんて、つくづく本物なんだなと感心していた所だ。

ローランデはとつくに結婚してるし、子供も二人、居るんだろう？」

ギウンターはアイリスを、真顔で見た。

この二級下だった、当時から人を喰ったような誰をも魅了する笑顔の、本音を“優雅さ”と“気品”で覆い隠し、滅多に見せた試しの無いアイリスが、『本音』でそう言うのを聞いた。

で、ついギウンターも、本音を吐く。

「…俺も続くと、思ってたかった」

「…君が諦めて？」

ギウンターが、思い切り肩をすくめる。

「いや？ローランデに惚れ込む女が出来てだ」

アイリスが、本心で頷いた。

「…見事な騎士だからな。

当時ですら大層遊び人だった君と付き合ってるだなんて、奇跡が起

こつたんだと思っていた。

…だが奇跡を君が、起こせる男だと解って納得した。
今度もそれを期待してる。

なにせ、今回はかなりの厄介事だからな」

ギュンターはローランドを使った世辞かと、いぶかってアイリスを見つめたが、アイリスはもう、前を向いていた。

ダーフス公の居城は、城から少し離れた領地内に、豪勢にそびえ立っていた。

アイリスは軽やかに正面で無く裏口に回り、その門番に訪問を、告げる。

彼と仲がいいようで、ギュンターはアイリスが、何度も彼を介してダーフス大公と、秘かに渡りを付けていると感じた。

ダーフスは近衛に口出す、大貴族の親玉だ。

勿論『神聖神殿隊』付き連隊長のアイリスが、直接関わり合う必要の無い相手だったが、中央護衛連隊長ギュンターは、別だった。

ダーフス達は近衛連隊に金も出し、口も出して来たが、そういった大貴族達は大抵盗賊被害を懸念する、それは豪華な金品や財産をあちこちの地にたくさん持っている金持ち達だった。

居城は城近くにあり、当然その地の治安管理にも口五月蠅く、その地の治安の要は…中央護衛連隊が、護っていた。

ギュンターはその経歴を認められ、ダーフスの強い推薦を受けて中央護衛連隊長の椅子に、座り続けていた男だった。

今回のように、大規模な盗賊集団は近衛連隊に任されたが、ダーフスは常日頃から近衛の戦闘能力に疑問を抱いていたし、彼は中央護衛連隊長、ギュンターにその信頼を置いていた。

ギュンターを伴った来訪故に、少し遅い時間だったが、中へと通される。

ダーフスは、王族の二大血統、“右”の金髪の家系、そして“左”

の黒髪の家系の、黒髪の家系の出だった。

甥で養子に、誉れ高い軍神と呼ばれた元左將軍ディアヴォロスを持ち、誇り高い、厳格な男だった。

養子ディアヴォロスはギデオンの父、アルフォロイスの時の左將軍だったが、アルフォロイスが命を落とした後、『戦が、つまらなくなった』と軍から一切手を引いた、伝説の使い手だった…。

だがそのカリスマのような影響力は依然として存在している。

ギウンターの部下、銀髪で美貌の青年シェイルが走ったのは、この人物の元だった。

ダーフスは二人が室内に入ると、部屋着姿だったが威厳を滲ませ、だが性急にギウンターに、問うた。

「…討伐隊の事か？が今度はあの“軍神”アルフォロイスの息子、ギデオンが同行している筈だ。

父親譲りの勇敢さと、人を率いるに長けた人物だと聞き及ぶ。

あの辺りの貴族達がこぞつて、一刻も早く賊を追い払う事を期待しているが、ドッセルスキは准将達に、任せているようだな？

…最も金と政治しか出来んあの男に戦は無理だろうし、出向かない方がむしろ現場の邪魔に成らずに済むが、事は重大だ。

ギウンター。君が、出動する状況に成りそうか？」

ギウンターは、他部署の相談を持ちかけられて困惑した。

元より近衛を差し置いて中央護衛連隊が出動なんてしたら、近衛の面目が潰れて連中がいい顔をしないのは、明白だった。

ギウンターの口は重そうだったが、その真っ直ぐの黒髪を背に流し、細面だが品格溢れて厳しい表情をしたダーフスは構わず続ける。

「本音を言えば、君に出動して欲しかった。

今の近衛は戦闘を悪戯に長引かせ、犠牲者ばかり量産してまるで、決着が付けられん！

今までは（地方だったから）容認出来たが、今度（大貴族の居城だらけの地なので）ばかりはそうは、いかん！」

ギウンターは自分可愛さに、ドッセルスキをのさばらせたダーフス

に、さらさら同情する気は無かったが、ギデオンの為に告げる。

「…右將軍直系子息の、ギデオンはそれは、優秀です」

ダーフスは不安が少し遠ざかって、ほっとギユンターを見つめた。その瞳には心からの信頼が、溢れていた。

「君の言う言葉なら確かだな。君は滅多に、誉めない」

ダーフスはギユンターが、およそ世渡りの為に、世辞もおべっかも使わない事に更なる信頼を寄せていた。

が、ギユンターは心の中で肩を、すくめる。

平和時なら彼にそれは取り入るドッセルスキと、微笑んで親しげに話す男だ。

余程、今回の盗賊襲撃が、こたえている様子だな。と、秘かに嗤^{わら}つた。

ギユンターはだがようやく、訪問の意図を告げる。

「貴方にお話があるのは、彼の方なのですが…」

アイリスはギユンターの後ろに控えていたが、すつ、とその姿を現す。

優雅、この上ない態度でダーフスですら一瞬、彼のその長身で魅力溢れる男らしさと、惹きつけられる存在感に魅入られる。

アイリスはだが、あくまでも丁寧に語り始めた。

「…実は、お願いがあつて来ました。

先日近衛を辞した男が大変な情報を握り、ドッセルスキ將軍怖さに私を頼つて来たのですが…」

ダーフスは、そんな場合では無い。と眉を顰めてアイリスを見つめた。

が、アイリスはその、濃紺の瞳をダーフスから外す事無く続ける。

「…彼は、ドッセルスキ右將軍が南領地ノンアクタルの領主に他の地には行わない定例報告訪問をし、どうやらその手みやげが、貴方が出資している近衛の金庫から出ている事を知りました……」

ダーフスの眉が、思い切り寄った。

「…つまり私の金を使って、南領地ノンアクタルに定期的に賄賂を、

送っている？」

ダーフスには思い当たる事が他にも、あるようだった。ドッセルスキは大貴族には子息やゆかりの者に役職を与え、優遇して懐柔し、それと引き替えに金を要求していた。

そしてその他の大物には、賄賂を。

…だがそれは、公然の事実の筈だ。

しかも、それを公で裁くとしても、賄賂相手が南領地ノンアクタルでは状況が悪すぎる。

アイリスがこの件を今、この事態に持ち出した事をダーフスは、深刻に考えた。

「…君の腹づもりは、もしかして……」

アイリスはにこやかに、笑った。

「…それは頼れる、直系子息ギデオンももう、19になります」

ダーフスは一瞬、顔を揺す。

アイリスは、尚も畳みかける。

「彼には多大な人望があり、彼の率いた近衛は彼の父の時同様、無敵となるでしょう」

ダーフスはだが、まだためらった。

「……だが南領地ノンアクタルを、言いくるめられるのか？」

かの者とのトラブルは避けるに限ると、頭の良い君なら解るだろう？」

だがアイリスは微笑んだまま、告げる。

「…それは私が、何とかしましょう」

「…いいだろう。」

それが君に出来るのなら、君の考えに私も異存は無い」

「では、南領地ノンアクタルを納得させた後、使者を貴方に送ります」

とても優雅に一礼し、彼は背を向け、ギウンターはそれに従った。

が、ダーフスはいかに去りゆくアイリスの背に、その言葉を投げか

けた。

「…その、罪状でドッセルスキを廃すのか？」

アイリスは振り向き様、微笑んだ。

だがその濃紺の瞳は一瞬煌めき、ダーフスはその鋭さに背筋が凍る。

「…別の罪状が上がり次第、ご報告いたします」

ダーフスは、唾を飲んで頷いた。

その、大貴族然とした優雅この上ない、気品溢れる男の底に潜む、容赦無い決断に怯えながら。

あの気迫は覚えがある。

どこの血を引いたのか、今は養子の甥、ディアヴォロスも持っていた。

弟の子だったが、彼の弟でさえあれ程の“気”は、持ち併せてなかなかかった。

いざとなれば一瞬の躊躇無く敵を切り裂く事の出来る男が見せる、無言の、迫力だった。

ダーフス邸を出た後、一気に中央護衛連隊本部迄駆けて戻ると、シェイルの使者に呼ばれて、オーガスタス、ローフィス、ディングレーが、集まっていた。

「…詳しい事情を、聞いてないよな？」

> i 4 4 7 6 — 3 0 0 <

その赤味がかった栗色の巻き毛をライオンのたてがみのようになびかせ、大柄なオーガスタスは相変わらず親しみやすい鳶色の瞳をアイリスに向け、ざつくばらんにそう告げる。

今や大貴族の上に実力者として名の轟くアイリスだったが、オーガスタスにとっては三級下の後輩に当たる。

アイリスはとくに教練校の終わった今もその態度を変えないオーガスタスを、咎める様子無く見つめて微笑むと、言った。

「ギデオンの暗殺をドッセルスキが企んでるので、近衛の参謀も私も、堪忍袋の緒が切れた所だ」

オーガスタスは大きな吐息を、吐いた。

「それは、とつくだろう？」

ではギデオンは腹を決めたのか？

奴がその気じゃなきゃ、我々がどう頑張ったって無理だぞ？」

言ったオーガスタスの横で、ギンターとは同級でディアヴォロスとは親戚の、「左の王家」の血を継ぐ黒髪の大貴族、ディングレーがつぶやく。

> i 4 4 7 8 — 3 0 0 <

「腹を決めざるを得ない状況に、追い込むんだろう？どうせ」

ディングレーの横に立つ、オーガスタスと同年のローフィスは、明るい栗毛と空色の瞳の美男で、相変わらず軽やかで爽やかな微笑を浮かべて後を、次ぐ。

> i 4 4 8 1 — 3 0 0 <

「それはあつちの参謀が上手くやるさ。

で？こつちは何をするんだ？」

言われた途端アイリスは、オーガスタスに顔を向けると優雅に微笑む。

オーガスタスはその微笑に心からぞつとして、親友ローフィスと一級下の悪友ギンターを、救いを求めるように交互に見た。

二人が二人共吐息混じりに俯いて、彼に心からの同情を寄せる。

「明日の地方護衛連隊会議で、ドッセルスキが南領地ノンアクタルに送っていた賄賂は不正で、これを正すと発表してくれ」

オーガスタスが途端、頭を、抱える。

感情を滅多に顔に出さないディングレーですら、呆然とつぶやく。

「爆薬投入だな」

オーガスタスはアイリスを見、怒鳴る。

「で？つまり俺にあの南の野獣を、言いくるめろと言う気か？！

賄賂を送っていたのはドッセルスキで、本来ドッセルスキが聞く苦情だぞ？！

それを俺に……よりによってあの、野獣だらけの会議で何とかしろ?!」

アイリスが、ディングレーを見た。

「西領地「シャノスゲイン」の護衛連隊長ウエラハスは王家の血繋がりで、君とは親交があるだろう?」

ディングレーは、頷いた。

「……まあな。さほど親しくは無いが」

「……だが君になら、会うだろう?」

彼に事情を、話して置いてくれ」

「オーガスタスに味方しろと頼むのか?」

「必要無い。近衛の野党討伐出動中ギデオンの命を狙う者が居るとして明日の会議の、内容を告げるだけで」

ギユンターが、唸るようにつぶやいた。

「どう出るかは、ウエラハスに決めさせるのか?」

アイリスは肩をすくめる。

「彼は、ギデオンの実力と人柄を買っている。

我々が何をする気か、読むだろう?」

ディングレーは腕組みしたまま、机にもたれていた腰を素っ気なく上げて返答も返さず帽子を被り、その部屋を後にした。

「で?我々は?」

ローフィスが尋ねる。

ディングレーと入れ替わるように、たった今戻ったローフィスの血の繋がらない弟シェイルは、兄と並んでアイリスを見つめる。

アイリスは二人を見つめ、ぼそりと漏らす。

「……アデンの、口を割らせる必要がある……」

ローフィスが言った。

「いいだろう。俺がサランティス公に話を付けよう。

かのじいさんは元から、アデンが自分の金を使い込んでないかと疑ってる。」

寄付金の受け取り窓口をいつも、あいつは進んでやってるからな。
証拠をでっち上げてやれば、喜んで裁け。と俺達に命ずるだろうよ
！」

シエイルがぼそりと、つぶやいた。

「……でっち上げなくても、間違いなくすねてるだろう？ アデンなら」

ローフィスがその言葉に肩をすくめ、金に近い栗毛を揺らし陽気な笑みを浮かべ、そう言う銀髪的美貌の弟の顔を見やる。

人付き合いのいいローフィスは抜け目無く腕も立ち、本来アイリスの椅子（『神聖神殿隊』付き連隊長）に座る程の器の男だったが、大貴族で無かった為その地位を、三つ年下のアイリスに譲った。が、別にアイリスを恨む様子を一度も見せた事が無い。

ローフィスは、シエイルを見つめ促す。

「彼は君が、お気に入りだ」

シエイルは肩をすくめると、マントを手にして義兄ローフィスを見る。

「……一人で行けないんなら、付いて来て下さいと俺に頼むべきだろう？」

シエイルの軽口にローフィスは笑い、彼の頭を軽く叩いて促した。

二人が出て行くと、アイリスはつぶやく。

「……要手が、欲しいな」
かなめ

ギュンターがアイリスの要請について一ツタメ息を付き、オーガスタスをすまなそうに見つめながら、言いにくそうに告げた。

「アデンなら俺はうんと恩を売ってあるんだが……」

オーガスタスが、ギュンターを睨んだ。

「……ギュンター。明日の護衛連隊会議に、出ないつもりじゃないだろうっな？」

お前は中央の、護衛連隊長なんだぞ！」

オーガスタスの、怒気含む言い回しに、ギウンターは気の毒げにそれでも救いを説く。

「重なるとは限らないだろう？アデンの口を割らせる時と、会議とアイリスも、頷く。

「で、どんな恩なんだ？」

「近衛にいて隊長だった時の部下だ。

ドッセルスキ同様からつきし意気地無しで、何度も敵に斬られかけたのを俺が保護した」

アイリスは呆れた。

「…つまり命の恩人か？それは助かる。

暗殺が動いたら、ぜひ私に同行してくれ」

ギウンターは尚もオーガスタスに気の毒そうな視線を送り、アイリスに告げる。

「…会議と重なって、俺迄いなくなればオーガスタスは、それは大変なんじゃないのか？」

大公の地位に座る前は北領地「シェンダー・ラーデン」の地方護衛連隊長だったローランデが、彼らから少し離れた場所から気づいたように、口を出す。

「…私は息子共々、明日の会議には顔を出すが…。

オーガスタスの補助は無理だろう」

だがアイリスは微笑んだ。

「君の息子のマリーエルは北領地「シェンダー・ラーデン」護衛連隊長の上、大層剛気だろう？

南領地ノンアクタルのアーシユラスに睨みが効く筈だ。

彼に頼んでくれ」

ローランデは頷く。

だがオーガスタスは荒れ狂う嵐の方がよっぽどマシだと言う程の、明日の護衛連隊会議を思っただけでつい、語気が荒くなった。

「西領地「シャノスゲイン」、北領地「シェンダー・ラーデン」の長が味方に付いてくれたとしても！

相手が誰だか解ってるのか？

サイアクの“俺様”の野獣なんだぞ！

死人が出なけりや、めっけものだ！」

アイリスは微笑みを崩さなかった。

「…そう。

この軍のみならず、大貴族達もこぞって口を揃え、君以外に地方護衛連隊会議長は務まらないと言い切り、他の適任者がここ10年も見つけれないのも、君が素晴らしい実力者だからだ」

「…それは誉め言葉に、聞こえない！

地獄に行け！よりひどい言葉だぞ」

ギュンターがぼそり。と口を挟んだ。

「…だがその通りだからな。事實は」

オーガスタスがその、金髪で美丈夫の長年の悪友をきつ！と睨み据える。

「俺なら何とか出来ると思ってやがるな！お前ら！」

アイリスとギュンターは顔を見交わしたが、揃って頷いた。

「…当然だろう？」

アイリスが言うところギュンターが更に後押しする。

「これを機会に、アイリスにうんと恩を売って置け」

オーガスタスが瞬間、怒鳴った。

「出来るか！これはアイリスの為なんかじゃない！

あのアルフォロイスの息子、ギデオンの右將軍就任の為なんだろう

?!」

ローランデが、それを聞いて静かに言った。

「…その為なら、やれるだろう？あんななら。

アルフォロイスが死んで以来、身分の低い近衛の騎士達がドッセルスキの命の元、捨て駒のように激戦に送られ、次々に命を落としていると聞いて胸を、傷めてた筈だ」

ローランデに率直に言われ、オーガスタスは憮然と彼を、見つめ返した。

そして下を向いて黙り込み、ぶつぶつ口を動かしながら自分にそれを言い聞かせ、無理矢理その使命を、自分に納得させる。

「俺が出来る限りは、やってやる！」

ギユンターはアイリスを見たが、アイリスはもう、もらった！と言う顔をした。

「ローランデはいつも真実しか言わない誠実な性格だから、私の言葉より余程説得力がある」

だがギユンターはそう言って笑うアイリスに、そつとささやいた。

「そう思うならお前はもう、口を開くな。」

オーガスタスの気が変わると困るだろう？」

アイリスは彼を見て頷いた。

「…ごもつとも」

アイリスが部屋の戸口に人影を、見つける。

彼は目ざとくそちらに行くと、戸影の人物はそのまま視線を送って、部屋の外へとアイリスを促す。

それは同じ神聖神殿隊付き連隊に所属している彼の、目を掛けている甥だった。

ファントレイユとそして、アイリスの息子テテウスと同年のいここに当たる。

小柄で、その面差しはファントレイユらしいとこ達に似てはいたが、鮮やかな栗色の肩迄ある巻き毛を華やかに揺らし、くっきりとした青紫色の瞳の、とても可憐な美青年だった。

遅い時間のアイリスの行動と大物達の召集に、何事かと姿を現し、事の内容を思いついて控えている様子で、長身の叔父アイリスが彼の前にそつと立つと、俯いて言葉を待つ。

「レイファス。私は多分間もなく、近衛の野営地に出向くだろう」

レイファスは顔を揺らす。

「ではその間はローフィス殿が指揮を？」

アイリスは、そうだと、優しい微笑を浮かべ、頷く。

レイファスが、言い淀むように告げた。

「テテユスも気に、してるが……」

息子、テテユスの名を出されて、アイリスは小柄な彼をそつと、伺う。

「解ってる。ファントレイユの事だろう？」

レイファスは顔を上げると、濃い栗色の長髪を胸に揺らしその男らしく優雅に整いきった叔父の顔を、見上げる。

鼻筋が素晴らしく美しい形で、気品が溢れ返っていた。

レイファスは少しうつとり彼を見つめたが、慌てて言葉を放つ。

「ファントレイユは今度は王子の護衛だから、無茶はしないでしょうね？」

アイリスは、配属が違って同年のいところを心配するレイファスとテテユスの気持ちを思い、ささやく。

「……保証は出来ないが。」

でもファントレイユはいつも今まで、乗り切って来たじゃないか？」

レイファスはだが、心配がそれで拭えた訳じゃない。と俯いた。

アイリスはそんな彼を見つめたものの、言葉を続ける。

「……確か君は近衛の隊長のローゼと、親交が無かったかい？」

極力、レイファスを気遣って言っただつもりだ。だがレイファスは一気に顔を、上げる。

気遣いは向けるものの、かつて恋人だったアイリスに全く妬く様子が見られなくて、がっかりしたように肩を落とし、少し拗ねたようにつぶやく。

「ええ、まあ」

「彼に何か、聞かなかったかい？」

レイファスの、眉間がきつく寄る。

「……じゃあそれは、冗談じゃ無かったですか？」

アイリスはため息を付く。

「…何か、言っていたようだな？」

「ギデオンを、殺れる程腕の立つ男は、自分だと…」

「この所近衛で、ギデオンと親交の厚い男が次々に暗殺されている」
レイファスはそう言うアイリスを、たっぷり見つめた。

「……つまりとうとう、連中はギデオンを……？」

アイリスは低い声で即答した。

「この期に、それを命じたドッセルスキを廃す。その企みの、真つ最中なんだ」

そう言つてアイリスは、耐えに堪え忍んで来たロクデナシの暴君を
廃せる喜びに、心から楽しそうな微笑を浮かべる。

レイファスはきつ！とアイリスを見つめると、一気に言葉を放った。
「ならファントレイユに伝えて下さい！」

ローゼに一泡、吹かせられるでしょうから！」

レイファスの語気が大層きつく、アイリスはそれは困つたようにつぶやく。

「…でもローゼは、君の恋人なんじゃないのか？」

レイファスは睨むようにその瞳に鋭さを滲ませ、アイリスにきつぱりと言った。

「貴方と比べる事が、貴方への失礼に当たるような相手です。

恋人なんてとんでも無い！」

アイリスは、やっぱり困つたように微笑む。

レイファスは尚も、それは苦々しい表情で言つた。

「ローゼの口ぶりだとファントレイユもあいつには、それはいい顔
をしていたようなんですがね！」

そしてレイファスがじつと自分を見上げているので、アイリスはその小柄で素晴らしく華やかで可憐なレイファスに屈んで耳を寄せ、
彼のひそひそ声を心に止めた。

日の殆ど落ちた夕暮れに、その要塞は丘の上に、黒々とそびえ立

って見えた。

その丘の麓で、テントが張られて行く。

兵達はごった返し、野営の準備に忙しく動き回る。

ファントレイユは王子と共に、テントが張られる迄馬車の中に放って置かれた。

その兵達の、取りあえずの戦闘を終え、まだ終結前の緊張感が、ソルジェニーも伝わる。

が、ファントレイユはギデオンの暗殺の不安を胸の内に隠し持つているにも関わらず、表情強ばる王子に戦や野営のテント張りの様子等を、相変わらずの優雅な表情で話して聞かせ、ソルジェニーの退屈と緊張をほぐそうと試みた。

王子は不安でたまらなくて、何度その美貌の騎士の胸にすがりつきたい衝動を抑えたか知れない…。

大好きな、ギデオン。

彼にとつて、たった一人の気に掛けてくれる大切な身内。

もし彼がこの世からいなくなったら…そう考えただけで喉が、ひりつく。

ようやく使者が王子のテントの支度が出来たと告げに来て、ファントレイユはソルジェニーを促し、馬車の中を出た。

もう殆ど暗くなり、あちこちに焚き火の篝火が灯り、並び立つテントの白幕をその炎で赤く揺らめかせる。

ファントレイユがその少女のような容貌の王子を伴って、並び立つテントの間を抜け、用意された金の刺繍入りの豪華なテントへと進み行く。

それを目にした者達の作業の手が一瞬止まり、並んで歩く二人のそれは品良い優雅な姿に見惚れる。

ファントレイユは振り向くと、アデン准将が王子に視線を送るのが見え、こちらに報告に来るのかと思ったが途端アデンはふいと背を

向ける。

案の定、アデンにとって王子はお荷物で、ともかく戦闘終了迄は何事からも遠ざけ、どこかに閉じこめて置きたいようだった。

王子に万が一の事でもあれば指揮官アデンの首が、確実に飛ぶからだ。

が、兵達がざわめき始める。

口々にその名が、昇った。

「…帰った…」

「ギデオンが…」

「…ギデオン！」

ソルジェニーはテントの入り口を潜ろうとし、その騒ぎを耳にして振り向く。

暮れゆく夕日の中、その篝火の焚かれた広い場所へと馬を進めて来る豪奢な金髪の乗り手の姿が視界に入り、ソルジェニーは思わず駆け出す。

いきなり、ファントレイユの腕が抱きしめるように小柄なその体を抱き止める。

そして耳元で、密やかにささやく。

「…ゆっくり進みましょう…」

そしてアデンの前で一言も、余分な事を漏らしたりしてはいけません…！」

ソルジェニーが見やると、ファントレイユのそのブルー・グレーの瞳はやっぱり優しくかったが、声は感情を殺したように低かった。

ソルジェニーはその美貌の面を見つめ、一つ頷く。

ファントレイユはそれを見、王子を抱く腕を解いた。

二人は馬から降りてアデンに報告するギデオンの方へと向き直り、ゆっくりと歩を進める。

並び立つテントの合間を、ファントレイユと一緒に抜けていく。

兵達が、今だ新たにテントを張り物を運ぶ作業の手を止めながら、皆篝火に浮かび上がる金の髪、素晴らしく綺麗で勇猛なギデオンの姿を安堵するように見つめていた。

ソルジェニーは不思議に、感じた。

その前迄はどこかにぴりぴりとした緊張感が確かにあったのに、ギデオンがその姿を見せた途端兵達からその緊張が消えていた。

皆、嬉しそうな表情で、ギデオンがアデンと話す姿を作業の合間に盗み見る。

「…ギデオンはみんなに、凄く好かれているの？」

王子の、見上げて問いかけて来るそのとても可憐な少女のような姿に、フロントレイユは優しく顔を傾け、ささやき返す。

「とても、『信頼』されています」

ソルジェニーはそう告げる、微笑を浮かべた美貌の騎士を見つめた。そして周囲の騎士達の、心から朗らかに作業をする様子を見回す。ギデオンの存在一つで皆の雰囲気が変わる程…彼は皆に、信頼されているのを肌で感じて。

テントの谷間を抜けその広場のような場所に出ると、アデンと話しているギデオンの顔が、ゆっくりとこちらに振り向く。

「…ギデオン！」

ソルジェニーはとうとう、我慢出来なくて駆け出した。

ギデオンはソルジェニーの様子に嬉しそうに両手を広げて迎えると、王子はその腕の中へと飛び込む。

ギデオンは彼を抱きしめ、微笑を浮かべ優しくささやく。

「…怖かったかい？」

ソルジェニーは彼の胸に顔を埋め首を横に、振る。

顔を上げてギデオンを見ると、いつものとても優しくな彼で、ソルジェニーは途端、涙が滲みそうだったが必死で抑えた。

「…ぜんぜん…！刀の触れ合う音も、聞いていない…！」

ギデオンは、笑った。

「ならとても、退屈なんだな？」

ソルジェニーは頷いたが、後ろからアデンがすかさずつぶやく。

「…今回の相手は盗賊で、正式な戦ではありません。」

軍の様子をご覧になるだけですからな…！

大してなさる事もありますまい。

テントでどうか、ごゆっくりくつろぎ下さい」

そして王子をこんな所へ連れ歩く護衛のファントレイユを、それは忌々しげに睨む。

ソルジェニーはそれに気づいた。

ギデオンが途端、冷静な表情でアデンに告げる。

「…野営地内を見回るのも、様子を見る事の内。」

…それも大切な王子の仕事でしょう？」

そう言い、ファントレイユを睨むアデンの視線を、きつい瞳で厳しく制した。

ソルジェニーはそんな風にアデンからファントレイユを庇うギデオンの態度を見て、心が熱くなった。

思わずファントレイユを見上げたが、彼がそれは切なげな瞳で、そんな風に現体制にたった一人で立ち向かうギデオンの恐れ of 微塵も無い強い態度と、その尊大な姿をじっと見つめていた。

金の髪が暮れかける夜風になびき、一歩も引く様子の無い、決然とした表情を浮かべる美しい宝玉のような碧い瞳の、彼の姿を。

ファントレイユのそのブルー・グレーの瞳は

『ギデオンはとても大切な人だ』

と物語り、彼の命を救う事は、自分の職務や今後の昇進よりも余程大事なんだと告げていて、ソルジェニーの胸を、きゅんと痛ませた。だがギデオンはソルジェニーに振り向くと、少し首を、小柄な彼に傾けささやく。

「…まだ終わってないから、する事があってゆっくり出来ない…。」

明日には戦いの土産話が、笑って出来るようになるといいが」

そう微笑むギデオンに、ソルジェニーが口を開きかけ、後ろのファントレイユの気配に慌てて口を噤む。

余計な事を言うな。とファントレイユに釘を刺された事を、思い出したのだ。

思わず振り返ると、アデンは一瞬背を向けるギデオンを忌々しげに睨み付け、王子の視線に気づき慌ててくるりと脊を向け、歩き去って行った。

ソルジェニーが、ギデオンとは反対側に立つファントレイユを見上げたが、彼は俯くとギデオンにそつと告げる。

「…アデンに勝手に、睨ませて置けばいい…」

ファントレイユの切なげな表情と、地に落とした視線。

その言葉にはギデオンを気遣う響きがあり、ギデオンは少し笑った。

「…ソルジェニーを、厄介者のように扱うから腹を立てたんだ。

別にお前を、庇ったりしてない」

ファントレイユは、目線を少し上げた。

ファントレイユのブルー・グレーの瞳は夕闇にきらきらと煌めいて、それがとても綺麗に、ソルジェニーの瞳に映り込む。

そしてその形の良い唇が動く。

「…それでもだ。別に睨んだってお前が容認している限りはどうとも、出来やしないんだ。

睨むくらいはさせて置けばいい」

秘やかな、ギデオンへの労りの言葉。

ギデオンの瞳が、ファントレイユの少し俯き加減の表情に、腑に落ちないように注がれた。

「…確かに、あいつに睨まれて縮こまるような神経の持ち主じゃないな。お前は」

ファントレイユはギデオンのその言葉にようやく目線を彼に向け、ギデオンの姿を見つめて嬉しそうに微笑んだ。

「…解ってるじゃないか…」

ソルジェニーの胸が、彼のその笑顔に微かに震えた。

フロントレイユは自分同様：もしかして自分以上に、ギデオンの事が好きなのかも知れない。と、思ったからだ。

ギデオンは無言で暫く、その美貌の笑顔を見つめたが、口を開く。

「……ともかく、用事を片づけて来る。

今夜は出勤出来るかどうかは解らないが、ソルジェニーより小さな子供が捕まっているから早い所あの忌々しい要塞に切り込んで、助け出したいんだ」

フロントレイユは、頷く。

ギデオンは、いつも地顔を軽やかで優雅な態度で隠し続けるその男が、素顔を晒し続けるいつもとは違う、その真摯な様子を伺い、言葉を紡ぐ。

「……お前の仕事はソルジェニーに、もりもり夕食を食わせる事だ」

フロントレイユは、伺うように見つめてくるギデオンの宝石のような碧緑の瞳に気づき、軽やかで優雅な態度を取り戻して笑う。

「……ああ。そんなのは訳無いさ。君の仕事と同様にね……！」

ギデオンは、その余裕に肩をすくめる。

「……まあ、そうだろうな。

だが首領が残ってる。

アースルーリンドに攻め込む『私欲の民』の首領は大抵、手応えがあると相場が決まっている」

フロントレイユも、肩をすくめた。

「……じゃあ君はさぞかしストレスが溜まっていたから、一気にここで発散出来るな」

そのフロントレイユの笑顔に、ギデオンがぼそりとつぶやく。

「……嬉しそうだな」

フロントレイユは尚も朗らかに微笑んだ。

「出来れば、部下を殴りたくなる分迄、この機会に全部発散しておいてくれ……！」

ギデオンはファントレイユのそのいつもの言い草に首をすくめ、
だ
が言った。

「…そうしよう」

アイリスと大物達と、その後の野营地（後書き）

宮廷用ファントレイユではなく、軍での

ファントレイユが出てきますね・・・。

ソルジェニーが微笑ましく、どぎまぎしていますね・・・。

武人の彼はかなり格好いいと思いますが

どうやら本人は、自分は大した事はないと、思っている節があります。

インタビュー して見ました。

ファントレイユ：武人の、私ですか・・・？

だって軍には、使える男が山ほど居るし・・・。

剣術馬鹿だけでも、そういう姿にばーっと

なるご婦人も、多いでしょう？

・・・貴方の基準は、そこですか？

ファントレイユ：猛々しい男が好きなご婦人には、私はアピール能力は

無いと思いますね・・・。

誰なら、猛々しいんです・・・？

ファントレイユ：まあそりゃあ・・・。

。 猛々しく男らしいと言えば、代表選手はアドルフエスでしょう・・・。

性格にかなり、問題はあるが・・・。

男前だし、がっちりしてるし、長身だし・・・。

スターグも、その部類でしょうね・・・。

シャッセルは男の私から見ても、騎士としては出来過ぎでしょう・・・。

あの容貌で、あの性格。

更に、期待通り腕が立つし・・・。

ご婦人方が彼にぼーっとなっても、納得が行く。

綺麗と言えば群を抜くのはやはりギデオンだが、

彼は容貌と反比例して性格に問題がありすぎるし、

ひたすら、摂生するストイック？？？なタイプだが

レンフィール の戦う姿は綺麗の部類でしょうね・・・。

普段口を開くと、我が儘でどうしようも無い男だが

剣の才能は天才肌で他の追随を許さない……。

お前は口を聞かず、剣だけ振るってると、

思った事は何度もあります……。

……そうですか……。

で、ご自身は……？

フアントレイユ：私はご覧の通り中背だ……。

ご婦人の扱いで言えば私だって、他の追随を許さぬ自信はあるが

剣士としてどうかと言えば……。

自分と周囲の者の命を護れるくらいには、使える筈だし

いざやバイ時でもまあ、腕の無さを気迫で補い

やり過ごす事くらいは出来ている。

まあ、実際、実戦に強いタイプだとは、思いますよ。

格好良いとは、思っていない？

フアントレイユ（笑って）：それなりに、いいんじゃないかとは

思いますが・・・。

大体、命が危ない時に、格好つけていられますか？

さすがの私もその時はそれなりに、必死ですからね・・・。

大体、戦場でいかにも『使えます！』

みたいにハデに剣を振るったりしたら、敵に好かれます。

私は好かれるのはご婦人だけで結構なので

なるべく、目立たないように気を使いますよ。

大体、私は顔がこんなでやさ男で

押し出しが無いんで、それで無くとも簡単に討ち取れると

思われて敵が寄って来やすいのに、自分で誘って

どうするんです・・・。そういう趣味は、私にはありません。

無駄な体力を使って、何が嬉しいのか解らないが

ギデオンやアドルフエス達は、体力温存してその後

のお楽しみの事なんか、考えて無いでしょうね、きつと。

・・・よく、解りました。

ありがとうございました。

アデンの命令（前書き）

書き足しました。

マントレンとファントレイユの使者ダサンテの、その後です。

アイリスがどうやって根回ししたか、省きましたが

つい書き足しました。

やっぱり要は、ギデオンの年齢と覚悟だったみたいですね。

彼が居なくちゃ、ドッセルスキは廃せないんですね。

本来一話分ありますが、

後をずーっと、話番号を繰り降ろしするのが大変で

ここに無理矢理、入れてしまいました。

気づいた方、よければもう一度

この話、読んで下さいませ……………。

十：登場人物紹介：十

アイリス・・・ファントレイユの叔父で、『神聖神殿隊』付き連隊の、長。

大貴族で、軍の実力者。反ドッセルスキ派の最右翼。

参謀、マントレンと、反ドッセルスキ同志で秘かに

交友があり、情報交換を、している。

ギウンター……中央護衛連隊の、長。都周辺の警護を一手に引き受け

その信望は厚い。

“どんな激戦でも部下を見捨てない男”として、周囲から

信頼を得ているが、とつても遊び人。

だが誰もが“見事な騎士”と認めるローランデに

ベタ惚れ。して以来、彼には頭が、上がらない。

ローランデ……アイリスより一級上の、北領地「シェンダー・ラーデン」大公。

地方大公は、剣の腕が抜きんでていないと務まらない。い。

とされているが、彼はその中でも、更に抜きんでて
いる。

誠実な人柄で、好感を持たれているが、

ギョンターに惚れられて人生が変わった人。

ある意味、かなり、不幸かも。

オーガスタス・・・アイリスより三つ先輩の、地方護衛連隊、会議長。

「死人が出ない地方護衛連隊会議」を仕切る

ただ一人の人間と、周囲の信望が厚い。

シェイル・・・ギョンターの、部下。都護衛連隊長。ローフィスの、義弟。

美貌でならした人で、外伝になるが、

軍神ディアヴォロスの恋人。

影の実力者ディアヴォロスを動かしたのも、この人。

（二人の会話シーンは省きました・・・・・・・・。書くべきか？）

ローフィス・・・アイリスの部下。『神聖神殿隊』付き連隊、顧問長。

シェイルの、義兄。オーガスタスの親友。

ディンググレー・・・大貴族で、王家の血を継いでいる。

腐った貴族が嫌いで、彼らとつるんでいる。

王家の血で顔がきくので、重宝されているが、
人は

面倒くさがり屋。一応、ギウンターの部下に当たる

宮中護衛連隊の、長。

レイファス・・・19歳。『神聖神殿隊』付き連隊所属。

ファントレイユのいとこ。ファントレイユ同様

小柄で目立つ美青年だが、性格はきつい。

理路整然と、口で相手を言い負かすのを得意とし

周囲からは“無敵”と思われる。

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

アデン・・・ギデオンよりうんと年上だが、同じ近衛准将。

ギデオンの叔父で、現右將軍、ドッセルスキに指令を

受けて、ギデオン暗殺を企む。

アデンの命令

テントに向かう途中に、ソルジェニーが何度も物言いたそうにフアントレイユを伺い見る。

もう、いいかと、人気の無い場所で周囲を見回して確認し、フアントレイユがとても優雅な微笑みを王子に向け、告げる。

「…どうしてギデオンに、暗殺の事を告げないか…ですか？」

ソルジェニーはじれたように彼の腕の袖口を掴んで言った。

「…だって…注意して置いた方がいいでしょう？」

それが当たり前だとソルジェニーは思ったが、フアントレイユの表情が、厳しく成った。

「…必要だと思えばマントレンがそうギデオンに告げる。

それに、ギデオンはああ見えて、アデンの部下に見張られていますからね…！」

迂闊に彼の周囲で耳打ちなんて、出来やしない」

「…でも暗殺は阻止できるんじゃないの？」

「…ここで逃れて、それで…？」

次が無いと、思いますか？

叩くなら、出来ればここで一気に敵を叩きたいから、マントレンはギデオンに告げない」

「……………じゃあ……………じゃあこの後は、どうするの？」

それは不安げな王子に、フアントレイユは軽やかに笑って見せた。

「奴らが尻尾を出してくれるのを待ち…後はマントレンに、任せればいいんです…」。

そして自分の果たしたい役割を、もう私は彼に告げてある。

私が動くべき時彼は私にそう、告げに来る。

その時、覚悟を決めて全力を尽くせばそれでいい…。

人にはそれぞれ、その人に出来る役割がありますからね！」

ソルジェニーはそう微笑む、ファントレイユのその美貌を見つめた。が、心細げにささやく。

「…貴方が命を落とすような事はありませんね？」

ファントレイユはそれは軽やかに微笑むとそれでも嬉しそうに、弾んだ声で言った。

「…会って間も無いのに私の心配をして下さるなんて、本当に光栄です！」

でもまあ、ギデオンが認めてくれたように私も剣は、そこそこ使えますからね…！」

ソルジェニーは、ギデオンがあれだけ真剣に認めているその剣士の『そこそこ』と言う言葉に呆れた。

そしてギデオンが『あの男は何を考えているのか、いつも自分の評価を下げて相手に伝える』と言った言葉を、思い返した。

「…あの…。ファントレイユ。」

本当に、自分はそこそこしか剣が使えないとか、思っているの？」

ファントレイユはその、真面目な疑問に思わず真剣な顔をして言葉を探した。

「…まあ…そりゃあ、近衛にいれば生き残る為には必要で、私なりには頑張っています、が、天賦の才にも体格にも、それ程恵まれてはいませんしね…。…マントレンは別にして。

彼は才能が全部頭脳に行ってしまったて、剣ときたら本当に、からっきし、どうしようも無い程使えませんから…」

ソルジェニーはマントレンの小柄でひ弱そうな姿を思い出すと、思わずファントレイユの言った事が理解出来て、心の底から頷いた。

「…あんな…！あんな、総大将だろう？」

あんただよ！金髪の、別嬪さん！」

捕虜達が縛られて、転がされている中をギデオンと隊長達が見回っ

ていたが、そう叫ぶ命知らずな男の言動に、その場の兵達全員が、思わず凍り付く。

が、ギデオンはその男の前で不遜に腕組むと

「私を別嬪べっぴんとのたまう以上は、大層な情報だろうな？お前が私に言いたいのは」

男はさつき、レンフィールに締め上げられていた若い盗賊だった。

「……あの皆に、入るんだろ？子供を助けに」

ギデオンは彼の前にその豪奢な金髪を揺らして、立つ。

「……そうだ」

「……一つだけ抜け道が、あるんだ」

ギデオンの後ろにいた、シャッセルもアドルフエスもレンフィールもが、身構えるようにその男を見つめた。

近くにいたヤンフェスも、そつと様子を伺う。ギデオンは、笑った。

「……まさかお前が、案内するとか、言うんじゃないよな？」

そう言つてその男に屈むと、男はムキに成った。

「……騙して逃げ出したい訳じゃない……！」

あんたがその場所が見当付けば、俺がわざわざ案内する迄も無い……！

俺はここに居てもいいんだし、第一………その方がいい」

ギデオンは頷いた。

「……命が、惜しいからか……」

折角命乞いして助かった命だものな。

で、その場所とは？」

アデンは、ギデオンの報告に、頷いた。

「……いいだろう……。夜襲を掛ける、許可を出す……しかし」

そう言つて、アデンは蛇のような瞳をいかつい顔の上に浮かべ、言つた。

「君の部下には引いて貰おう。ローゼ隊長とその配下で乗り込んでくれ。」

「……それが飲めないようなら、許可出来ない」

瞬間、後ろで控えていた黒髪のアドルフェスが、いかにも不満げにその立派な体格の肩を前に押し出し異論を唱えようとするのを、咄嗟にギデオンが手でその頑健な肩を押し止め、つぶやく。

「……いいだろう……。では許可を貰おうか……！」

アデンは自分を睨み付けるギデオンの部下、シャッセル、アドルフェス、レンフィールを、顔を揺らして見据える。

「……お前達。命令違反をしたら近衛を除隊だぞ……！」

いくら父親が、大貴族だろうがな……！」

アドルフェスがその男前の顔を歪め、凄まじい瞳で睨み付け、シャッセルは白に近い金の髪を肩で揺らし碧眼の視線を落として唇を噛み、レンフィールはその整った女顔の細面の上に、底冷えする微笑を浮かべた。

すっかり暮れた篝火の灯りの中、ローゼとその隊員達がこちらを伺い、寄って来るのを目にし、黒髪の精悍な面構えのアドルフェスが、その美しい金の髪を背に流したギデオンの肩口で、彼の耳元に吼えた。

「……本気ですか？」

ギデオンは答えず、繋いである馬の方へと歩み行く速度を緩めなかった。

銀髪のレンフィールはその髪を肩の上で揺らし、彼より少し背の低いギデオンを、気取って何うように見つめながら隣に並んで歩くと、すまし顔を造りアドルフェスに、振り向いて告げる。

「……命令違反が何だ？あいつはとにかく、宮廷に手柄を立てて見せたいだけだ。

子飼いのローゼに子息を救わせてな……！」

ギデオンが、そう誇らしげに横に並ぶレンフィールを見、思わず足を、止める。

「……レンフィール………」

レンフィールは後ろのアドルフエスに気を取られ、ギデオンを追いついたが振り向き、彼に言い放った。

「君に付いて行く。当然だろう？」

ギデオンは一つ、ため息を付くがレンフィールを真つ直ぐ見据える。「今後近衛に、お前が居ないと困る」

『殺し文句だ』アドルフエスもシャッセルもそう思ったが、その通りだった。

レンフィールは一瞬ギデオンの、自分を見つめる宝石のような碧緑の瞳に魅入られ、それでもまだ何か、言いたそうだったが、口を、閉じて俯いた。

ギデオンは取り巻き三人をその場に残し、代わりに取り囲む、薄い金髪の鞭のようにひよりと背の高い、しなやかで頑健な肩をした冷やかな氷のように色味の無いグレーの瞳のローゼとその配下に囲まれ、彼らに一つ、頷いて、合図を送った。

それを遠目で見ていたヤンフェスが、そつと側のフェリシテに何か告げ、女性のように綺麗で華奢なその男は、その場を後に、した。

テントの戸がさつと、開いた。

女性を思わせるその美しさに、ソルジェニーは一瞬入って来た青年に見惚れた。

けぶるようなプラチナに近い、綿飴のように緩やかにくねる髪で肩の上を覆い、美しい紫の瞳を、していた。

細い顎も頬も、それは綺麗な曲線で彼をそれは華奢に見せていたし、何より、軍所属とは思えない程体付が細っそりとしていた。

ソルジェニーより背は高かったが、ファントレイユと比べても頭一つ程低かった。

「…フェリシテ」

だがファントレイユは彼の名を呼ぶと、急いで駆け寄る。

「…ギデオンに、ローゼと出勤命令が下りました」

フェリシテは小声で急いでファントレイユにそう告げた。

場が場で無ければそれは綺麗な佳人にファントレイユが、告白を受けて居るような光景で、ソルジェニーは二人の美しさに一瞬呆けて見とれた。

が、ファントレイユが、フェリシテから告げられた言葉を耳に止め、途端に厳しく顔を引き締め、剣を掴むと脇に携え、足早に出口へ歩くのを見、王子は慌てて彼に駆け寄ってその腕を必死で掴んだ。ファントレイユの、その今では見慣れたいつまでも見ていたい美貌の顔が、それでも優しく見つめ返す。

「…ギデオンを……！」

ソルジェニーは喉が引きつったが、ファントレイユはゆっくりと頭を揺らし、微笑んで頷いた。

だがソルジェニーはとうとう我慢出来ずに涙を溢れさせて低く叫んだ。

「…貴方も……どうか、死なないで………！」

その、頼るべき相手のあまりにも少ない王子のその境遇を思い遣って、ファントレイユは静かに頷くと、顔を寄せてささやく。

「フェリシテが、代わりに貴方を護ります。

彼はああ見えて凄腕の短剣使いですから、それは安心ですよ。

それに……」

ソルジェニーが、その後の言葉を促すようにファントレイユを見つめ、彼は微笑んで頷いた。

「…貴方が夕食を残さず食べたなら、私はちゃんと戻って来ますから」それでも微塵も陰りを見せないファントレイユの微笑みに、ソルジェニーは涙で掠れた声でささやいた。

「必ず、全部残さず食べるとお約束します……！」

ファントレイユはその返答に、鮮やかに笑って見せると、後ろに控えるフェリシテに一つ頷き、さっとテントの入り口の、布を払って出て行った。

ソルジェニーが俯いて肩を震わせ、フェリシテが心からその不遇の

王子に同情を寄せて、その肩にそつと手を、乗せた。

とても優しい温もりで、ソルジェニーはその綺麗な男性を見上げた。紫の瞳は煌めくように輝いていて、ソルジェニーは思わず彼に尋ねる。

「彼とギデオンはいつでも必ず死地から、戻って来ます…」

ソルジェニーが、震える声で聞き返す。

「本当に……？」

フェリシテは、頷く。

「私はそれを幾度も目に、していますからね……！」

ソルジェニーはようやく濡れた青い瞳を、その凄腕の短剣使いに向けて微笑んだ。

ギデオンがローゼとその配下に、取り囲まれるように出立したその様子を見守り、暫くその場から、アドルフエスもシャッセルも、レンフィールすら足が動かず立ちすくんでいた。

が、その多数の馬が繋がれている場所に姿を現すフロントレイユを、レンフィールが目にした。

彼の、自分の馬の手綱を解き、さつと馬に跨って、見慣れたグレーがかつたたつぷりの栗毛を散らして駆け去る姿を目にし、レンフィールは手近にあった長身のシャッセルの腕を、思わず掴んだ。

「……どうした？」

シャッセルに、顔を下げ見つめられてそう言われ、レンフィールが馬が繋がれている場所を指差し、叫んだ。

「……フロントレイユだ……！確かに、あいつだった……！」

馬に跨って………！」

黒髪のアドルフェスの、顔が曇った。

「……あいつは王子の警護だ。抜け出す訳が、無いだろう？！」

レンフィールが幻覚でも見たと言いたげな、気の毒げな声音でそう言う。

だが、その後ヤンフェスとマントレンが、人目を忍んで王子のテン

トの方へとこつそり足を運ぶのを見て三人は、目を見交わしてその後を、付けた。

テントがまた開いた時、相変わらず親しげな微笑を浮かべたヤンフェスが顔を覗かせ、フアントレイユが『彼に任せて置け』と言った小柄なマントレンの青白い顔が、彼に頷いて、ソルジェニーがどれ程安堵したか知れない。

ヤンフェスとマントレンは王子に『心配無い』と告げるような顔をして見せた。マントレンはソルジェニーの隣迄来たが、ヤンフェスはフアントレイユが、もう発ったのを確認すると直ぐに入り口へと取って返し、乱入しようとするレンフィールと、鉢合わせた。

「…レンフィール」

マントレンが王子の隣でささやいたが、レンフィールは中にずけずけと入って見回し、フアントレイユの姿が無いのを確認する。

後ろから、アドルフエスとシャッセルの姿が見え、彼らもフアントレイユの姿がその場に無いのに、呆然とした。アドルフエスが、唸った。

「何を考えてるんだ！あの男は…！」

俺達ですら除隊なのに、王子の護衛なんて放り出したら、それこそ投獄だぞ！」

その不用意な言葉に顔を青冷めさせる王子を見つめ、マントレンは力無く肩をすくめて見せた。

ヤンフェスは彼らに構わず、こつそりとその場を抜けようとしたが、長身のシャッセルに立ち塞がれ、その淡い金髪を背に流す美しく整った容姿の、体格の立派な騎士にその腕を掴まれた。

「…フアントレイユの、加勢に行く気か？」

ヤンフェスは、静かにそうつぶやくシャッセルに軽く肩を、すくめて見せた。レンフィールとアドルフエスが、その言葉に思わず二人同時に、振り向く。シャッセルは、親しみを感じる茶髪と茶の瞳の、田舎臭い緑のベストを付けたヤンフェスを、見下ろしながら告げた。

「…お前は弓使いだから、フェリシテが同行しないと背後が危ない

だろう？」

ヤンフェスが、長身のその高貴な白碧の騎士を見上げ、告げた。

「…フェリシテの代わりに君が、王子の護衛に残ってくれたら、私だってフェリシテに同行して貰って背中を護られ、安心して弓が、使えるんだがな……」

シャッセルが、ぼやくヤンフェスの腕を放さぬまま素早くつぶやいた。

「君の背は、では私が護る」そう言い、二人は目を見交わすと、同時にテントを出て行くこうとしてアドルフエスに怒鳴られた。

「…どこへ行く！」

シャッセルが、振り向いて彼に叫んだ。

「…投獄覚悟の奴がとっくに出かけたと言っのに、たかだか除隊でここに、残れるか？」

シャッセルがさっさと背を向け、とっくに先に消えたヤンフェスに続くど、『それもそうだな』と、レンフィールがずっと彼らの後に、その身を進める。

アドルフエスが、消えた二人に何か言おうと口を開き、言うより動いた方が早いと気づき、一声唸って後を、追った。

「…抜け駆けするなよ……！」

残ったマントレンは、王子がその次々と訪れた来訪者のさっさと出ていく様子に、目を丸くしている姿を見、フェリシテに肩をすくめて見せた。

そしてぼやいた。

「…どいつもこいつも……」

最高位身分の王子に礼を取らない、礼儀知らずばかりだ……！
だがフェリシテは、王子に微笑んだ。

「…二人が無事に帰る確率が、ぐんと上がったようです」

フェリシテのその言葉に、ソルジェニーは思わずそれは嬉しそうな笑みを、その顔に浮かべた。

アイリスが室内に戻り、出かけた皆が帰って色好い報告をして間もなく、“荒野亭”からの使者が、ギデオンがアデンの部下の暗殺者達と盗賊の討伐に出かけた。との報告が入った。

オーガスタスは、ふて切っていた。

ギュンターはそれでも友に、すまなそうな様子で帽子を、被った。

その様子を目にし、ギュンターの部下、都護衛連隊の長である銀髪美貌のシェイルが、気の毒げにささやく。

「…私が、君の代理で会議に、出ようか？」

だが同じくギュンターの部下に当たる、宮中護衛連隊長、黒髪男前の大貴族ディンググレーは、即座に怒鳴った。

「俺が代理の方が、まだマシだ！」

君なんか出たら、あの男女お構いなしの地黒（南領地ノンアクタル）の好色野獣がヨダレ垂らすに、決まっている！」

これには皆が、同感だった。シェイルは時々、自分の容姿を綺麗さっぱり忘れているようで、義兄ローフィスに劣るように見つめられ、そうか。と下に視線を、落とした。

中央護衛連隊長、金髪のギュンターは、彼の部下に当たる二人の男の様子を見て、

「代理は、ディンググレーに頼む」と、告げた。

ディンググレーはその艶やかな黒い長髪を揺らし、男らしい顔をギュンターに向けて即座に、頷いた。

宮中の護衛連隊長の立場すら面倒臭がるディンググレーが、もつと面倒な地方護衛連隊会議に出るだなんて。とギュンターは内心笑った。

出かけるギュンターとアイリスを見送りながら、ローフィスがそれでも大柄な親友オーガスタスを、慰めるように告げた。

「あいつらは睡眠時間無しだが、俺達は少なくとも、会議迄は眠れるぞ」

オーガスタスは慰めにもならない思いやりに、その軽やかな伊達男

に見える金に近い栗毛の親友に、思い切り肩を、すくめて見せた。

要塞での攻防（前書き）

十：登場人物紹介：十

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからつきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を

度々救い、信望を得ている。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに

出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフエス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

アデン・・・ギデオンよりうんと年上だが、同じ近衛准将。

ギデオンの叔父で、現右將軍、ドッセルスキに指令を

受けて、ギデオン暗殺を企む。

要塞での攻防

ギデオンが、殆ど陽の落ちた暗い要塞の、高い石堀の亀裂の一つに、確かに茂みで偽装されてはいるものの、人が一人通れるくらいの穴を見つけた。茂みを手で払うと、素早く中に、侵入する。慌てて続くローゼに、振り返るとギデオンは低くつぶやいた。

「……人質はお前達が探せ。私は正面から斬り込む」

どうせ、その手柄が欲しいんだろう。と言うギデオンのその表情に、ローゼは頷いて見せはしたが、ギデオンが彼に背を向けるなり、人質探索を後ろの部下に「任せる」と頷き、そつと去りゆく背を、伺った。

ギデオンは全く見張りのいない中庭を抜けて屋敷の、正面に回る。

柱に括りつけられた松明の灯りに浮かび上がる石段の二段上に、幅広い焦げ茶色をしたオーク材の立派な玄関扉があり、その前にはさすがに見張りが一人、立っていた。

が、男はやる気の無いように扉にもたれかかり、瓶から酒を煽っている。

「……のどかだな」

ギデオンはしなやかに石段を駆け上がりそう、声を掛ける。

「……！てめえ……！！」

その見張りは驚きに目を見開いた。が、腑に落ちず、咄嗟に正面の大きな門を見たがやっぱ閉まっただけで、男はギデオンに向かって叫んだ。

「……どこから入って来やがったんだ！」

ギデオンは顔色も変えずその男に近寄り様剣を抜き、男が慌てて短剣を懐から差し出し、間近に迫るギデオンの顔めがけて斬りつけたが、ギデオンは首を傾けて避け、剣を振り上げ、一瞬でそれを振り下ろして一刀の元に切り捨てた。

「ぎゃっ！」

男は短く呻いてその場に崩れ落ちる。

ギデオンは不遜な態度で豪奢な金髪を散らし、血糊の付いた剣をさつと下に振って血糊を飛ばすと、握ったままきびすを返し扉を開けた。

…ローゼが駆けつけた時もう扉は開いていて、男が血を流して事切れているのを目にする。中に入るが、その広い玄関広間の床にまた、一人。

丸で死人の後を辿ると、ギデオンの姿が見つかるとても言うように、彼の進んだ先には死体が、転がっていた。

…疾風のように馬を走らせる

ファントレイユの、その脳裏にはギデオンの姿が、あった。

彼の事だ。

一切無駄は無いし、一端出動となるとローゼ達ですら置いて行きかねない早さで駆けて行くに違いない。

暫くして道を外れ、丘を一気に駆け上がる。

蛇行した道の遙か下、丘の裾野に、二頭の馬が駆ける豆粒のような姿が、月明かりの中に浮かんで見え、その二騎には見覚えがあった。ヤンフェスとシャッセル。

その後ろにまた一騎。レンフィールと、その後ろから少し遅れてアドルフエスの姿迄月明かりの煌々と照る、蛇行した丘を登る一本道に現れ、ファントレイユは坂の上から思わず手綱を引いて、馬の足を止めた。

「……解ってるのか！西の端だぞ！」

下から、ファントレイユの姿を見つけ、レンフィールが叫ぶ。

ファントレイユは軽く頷くが、急かすように馬の首をまた丘に向けると、蛇行する道を外れ、一直線になだらかな坂道を、駆け上がって行く。

「……………」

それを見たシャッセルが、慌てて馬の首を道から外すと、丘の上へと馬の首を向け、拍車を入れて駆け上がる。

ヤンフェスもほぼ同時に、シャッセルの、横に並んで駆け上がって行った。

レンフィールが、そしてアドルフエスもが気づき、慌てて馬の首を道から外し、丘を、一直線に駆け昇り始めた。

が、シャッセルがどれだけ馬を急かしても、幻のようにフアントレイユの背には追いつけない。

そのフアントレイユの早さに、シャッセルの胸が騒いだが、それはレンフィールもアドルフエスも同じだった。

彼らは幾度もギデオンの死を迎えるだろうという危機を目にして来たが、ギデオンのその、最も危険な時に、いつも決まって駆けつけるのはフアントレイユだったからだった。

フアントレイユはまるでギデオンの危機に、特別なカンでも、働くかのようなだった。

シャッセルが、更に馬の速度を上げようと拍車を掛けたがそれは、レンフィールもアドルフエスも、同様だった。

ローゼは必死で廷内を探した。

死体は転がっているものの、彼の探すその姿はどこにも見えない。

…だが、玄関広間に戻り、その二階に続く幅広の階段を上がった、その先だった。

開いたその扉の向こうに、多数の人のざわめく気配を感じた。

ローゼが、両開きに開いた戸口からそと中の広間を伺い見る。

その舞踏会が開ける程広い部屋の中には、警戒する手に刃物を持った大勢の盗賊達が敵を迎え、そのたった一人を取り囲み、慌ただしく周囲を動き回る姿が、見えた。

…盗賊達は、40人程、いた。そして男達が殺気立って取り囲むその輪の中に、彼の探す姿をやっと見つけた。

金の、どこにも無いような、鮮やかに小刻みに波打つ長髪。色白の

小顔に、宝石のような碧緑の瞳が煌めく。

その、むさい盗賊達の中で彼の姿は素晴らしく綺麗だったが、ローゼとてその容姿に騙される男なんかじゃなかった。

40人の盗賊に囲まれた彼の気迫は凄まじく、その瞳はざらりと光り、幾数本の刃を向けられても、冷や汗すらかく様子の無いばかりか、たった一人でありながら彼らを圧倒する程の威圧と恐怖を、敵に与えていた。

ローゼはその彼の、戦場での人を超えた気迫の漲る様子にぎり…！と唇を、噛んだ。

…彼の狙う男は、人にあらざる、金の猛獣。

恐れを微塵も見せず、勇猛にして果敢。

一瞬でも気を抜けばその牙にかかって、あっという間にあの世に送られる。

ギデオンは襲いかかる敵を、素晴らしくしなやかな動きで、斬り捨て、次にかかってくる敵をも、一刀の内瞬時に斬り捨てていた。

その、流麗な動作に少しの、戸惑いもためらいも無い。

ローゼの、眉が、寄る。

隙が、全く無い…。

息一つ乱さぬ、その豪華な金髪の男は、多数の敵に取り囲まれているにも関わらず顔色すらも、変えない…。

ファントレイユはどうしても、眉が寄るのを止められなかった。

決まって、ギデオンの危機を感じる時の、あの全身がぞつと冷たい、嫌な感覚だった。そして、幻が脳裏に浮かぶ。

それがまるで数分後に、実際起きるかのような、鮮明な。そしてそれは、いつもギデオンの死の、幻だった…。

幾度目だろう…？毎回、自分の身も忘れ、その幻に支配されるのは…。だが、それは事実だと、経験で解っていた。

自分が間に合わない限り、この幻は、確実に現実になる！

歯を、自然と喰い縛る。頼む…！

彼は馬に心から語りかけた。

どれだけでもその後休ませてやる…。

だが、頼む…！今だけは……………！

馬は狂ったように急がせる、その乗り手の意を汲み兼ねていた。

速度を上げるが、それよりも、もっと早く…！

…早る心が痛い程伝わったが、いくら必死で地を蹴っても、乗り手の望む早さには到底、到達出来ない気が、した。

地を蹴り続け、だが何度も急かす手綱を振り払うかのように首を、横に振る。

いつも優しい主人はだが決然と、手綱を繰って拍車をかけ、猛速を望むのだった。

ファントレイユの瞳にギデオンの、幻の姿が映り続ける。

幾度も幾度も、その背に刃の喰い込む映像が、悪夢のように、だぶり続け、ファントレイユはそれを振り払う迄諦める気は、無かった。

王子に、私が言ったのだ。

後は、覚悟を決めて出来る事をする迄だと…！

まだだ。頼む。もっと早く……………！

もっと、もっとだ…！

間に合う迄……………！

ファントレイユは背に深く傷を受けて血を吹き出す幻のギデオンを、抱き留める事をしなかった。

それは俺が、したい事なんかじゃない…！

その前だ…！その刃の、振り下ろされるその前に、ギデオンの背に、

飛び込み…そして……………！

必ず、止めてやる。何としても！

ファントレイユは、倒れるギデオンの幻を振り払い続け、そして幾度も、振り下ろされる前にその刃を、自分の剣で止める幻にすり替えた。

チラとでも、息絶える青冷めた彼の姿を思い浮かべたりしたら、その想像を超えた喪失感で、自らが獣になって慟哭してしまいそうで、

またぎり……！ときつく歯を喰い縛ると、その慟哭を心の、うんと、うんと奥底へと、押しやり続けた。

……そしてまた、一人……。

ギデオンがしなやかにその身を返し、野獣の、牙のごとくの剣を振る度に、男が短く呻いて床に倒れる。

正規の軍で無く、盗賊の集まりで皆が命を惜しみ、その獣の敵となるのを、ためらっていた。恐怖におののき、ついに我慢出来なくなった男がまた一人、狂ったように、剣を掲げて彼に、向かっていく。狂気の形相にも、彼は顔色も、変えない。ずばっ！剣を振る、その形も定かに見えない程早く、それは横に弧を描いて男は短く呻き、倒れた。

全員が、次の敵を待つ、たった一人のその男をぞつ、として見つめた。

命の惜しい男が、ギデオンを取り囲む輪からこっそり外れ、扉のこちらに逃げ出して来る。ローゼはそつと扉の影に隠れると、広間には見えないようにその男を後ろから捕まえ、口を塞ぎ、喉をさつ、と切って誰にも気づかれないよう殺した。

ローゼは尚も、広間を伺うが、誰も気づく様子は無い。

彼がその場を僅か外したその隙に、床に転がる死体が、また増えていた。

ローゼは喉を鳴らして、唾を飲み込んだ。

ギデオンの、金の髪が散り、彼がその体をしなやかに倒し、いともたやすく敵の剣を潜り抜け、そしてまた、一人……。

振りかぶり様、凄まじい気迫の元、やはり一刀の内に打ち倒して賊は床に、突っ伏した。

ローゼは焦る心を、止められなかった。

……これではギデオンの、疲労は望めず、隙すら見つからない……！じりじりと様子を伺うが、二人同時に斬り込んだにも関わらずほぼ同時に近い早さでギデオンは瞬時に二刀入れ、二人の男が床に伏す。

怯えきる、盗賊達を目にしてようやく、群の奥に居た首領が姿を、現した。

濃い栗毛を後ろで束ね、ごつい面構えの濃い藍の瞳をした、さすが頑強な、逞しい岩のような大男で、他の男達より全ての造りが二周り大きかった。

ギデオンが、笑った。

「…やつと私とやる気に、成ってくれたか？」

待ち望んだように低くつぶやくと、首領はその、ぞっとする幾人をも斬り殺してきた残忍な藍色の目を、ギデオンに向けた。

そして二人が相対し合うがさすがに首領だけあり、ギデオンの気迫籠もる一刀をその剣で、瞬時に防ぎ止めた。

「…やつと手応えが、あるな…！」

剣を交えたままギデオンが笑うと、首領も唸った。

「…降伏するなら今だぞ…！」

その綺麗な顔を切り刻むのは、惜しいからな…！」

「いらぬ世話だ…！」

同時に剣を離して引くが、引くなり構え、両者ほぼ同時に、真っ直ぐ互いに、襲いかかる。

再び激しい、剣のかち合う音がする。

だがギデオンの気迫は、剣がぶつかり合う度増すばかりで、首領は場数を踏んでいるだけありよく、ギデオンの鋭く早い剣を、全て受け止めてはいた。

だがどう見ても押しているのはギデオンで、その勢いは止まる様子が、無い…。

ギデオンの後ろから隙を付いて男が一人、振りかぶって斬りかかった。

が、ギデオンは鮮やかに剣を握り返し、正面に居る首領の動向を睨み据えたまま、後ろのその男の腹に真っ直ぐ剣を、突き入れた。

ざっ！剣を抜き様、隙有りと襲いかかる首領の剣を、瞬時に握りを返して受け止める。

がっ！重ねた剣を、放した後瞬時に襲いかかる首領の剣がざらりと銀の輝きを放って空を斬り、しなやかに身をかわしたギデオンも刃を返して振り入れるが、その鋭い剣は、首を振って避ける首領の顔近くを、ぎりぎりで掠めた。

殺気を帯びた銀の輝きを間近に目にし、首領はいかつい顔を歪め、思わず冷や汗をかく。

が、ギデオンのその背にまた、一人が斬りかかる。

だがギデオンはまるで知っているかのようにその男の突き出す剣を、僅かに横に一步体をずらし避け、右に突き出た男の腕を脇に挟み捕まえ、剣を一瞬で左手に持ち替え、鮮やかに回し刃を後ろに向け、突き刺す。

腹を刺されて呻く、男の腕を放し、右斜め後ろからかかって来る敵に、一瞬で剣を右手に持ち替え、振り向き様一刀を入れて斬り殺し直ぐ、襲いかかる首領の剣を、振り向き様受け止めた。

…ローゼはイライラしていた。

首領が討ち取られてもしたら、ギデオンの命を狙う隙が、全く無くなる。

心から敵の盗賊達に、ギデオンが疲れ切る迄持ってくれ…！と望みを掛けた。

フェリシテが、仕切りに王子の様子を、伺う。

が、マントレンは構わず言った。

「貴方の番だ。王子。」

それとも、ソランとお呼びした方が、いいですか？」

三人はテーブルに座り、カードを切っていた。

ソルジェニーはマントレンの言葉に顔を上げ、微かに微笑み、頷くが、気もそぞろな様子に、マントレンは真っ直ぐ斬り込んだ。

「…ギデオンの事が、心配ですか？」

顔を上げたソルジェニーの顔はランプの灯りの中、今にも泣き出し

そうだった。

フェリシテが、それは胸の痛む表情を見せ、心配げに王子の様子を伺った。

だがマントレンは、小柄ながら肝の座った様子を、見せた。

「…王子。私は、作戦を立てるだけだ。」

そして後はいつも、彼らの無事を祈る事しか出来ない」

ソルジェニーはそのひ弱に見える、理知的な参謀の顔を、見た。

確かに、少し青白い顔色で痩せていて、どう見ても軍隊に向いてい
るとは言えない彼だったが、こんな場面で静かな態度を崩さない、
その意志と覚悟は、ソルジェニーにもはつきりと伺えた。

マントレンは更に口を開き、静かに告げる。

「…信じて、待つ事しか、出来ません」

ソルジェニーはそのマントレンの、静かな微笑みに圧倒され、頷い
た。

そしてか細い声で、一緒に居てくれる彼に返答した。

「…私も、そうします…」

マントレンはようやく、笑ってカードを切った。

「王手…！また私の、一人勝ちのようですね？」

ソルジェニーはマントレンの切ったカードを見つめた。

フェリシテが、ついばやいた。

「…手加減、無しですか？」

「…したくても、君達は弱すぎる」

フェリシテが王子を見、ソルジェニーはフェリシテを見ると、二人
で肩をすくめた。

だが不思議な事にソルジェニーは少しずつ、カードに没頭していっ
た。

マントレンがそうする用し向けたせいもあったけど、マントレンに
はどこか、とても心が落ち着く風情があって、彼と居ると、なぜか
確信出来た。

ギデオンは無事、必ず返って来ると。

今度はそれが嬉しくて、ソルジェニーはまた涙が零れそうになった。が、笑い声を立てるフェリシテも、朗らかに笑うマントレンも、彼の嬉し涙を、咎める事はしなかったから、ソルジェニーは涙を、拭いながら笑った。

「…どうして勝てないんです？ 貴方は強すぎます…！」

マントレンに抗議するが、彼は笑い

「私のカードの切り方をもう少し見ている事です」

と言ったきりだったし、フェリシテもソルジェニー同様、文句を言った。

「…そこそこ解る私だって貴方が、毎度手を変えている事くらい、解りますよ…！」

そんなの、覚えられる訳が、無い…！」

「ならファントレイユが戻って来る迄、君達は私に負け続けるしか、手はないね…！」

フェリシテはムキになる目をし、ソルジェニーは、ファントレイユが帰って来る事を確信しているマントレンが嬉しくて、また涙をこぼして言った。

「…一度くらいは、勝ってみせますから…！」

マントレンは大きく頷くと、返した。

「…では、受けて立つと、致しましょう…！」

ファントレイユの顔が、一瞬輝いた。

見えた、亀裂だ…！」

石塀の西側の、掻き分けられた茂みの向こうの亀裂めがけて、突っ込む。

後は自分の足が、頼りだった。

まだ馬を降りる前から、駆け出す自分の姿を思っただけで、彼の体に力が、沸いて漲る。

岩塀の亀裂がぎりぎり、塀に衝突寸前迄馬を走らせた。

そして、馬から飛び降り様着地しそのまま、茂みを払いのけて裂け目に飛び込む。

素早く潜り抜け、足を全く止める事無く彼は全速で、中庭を走り抜けた。息が、止まってもいい……！

あの背に刃が振り下ろされる、その前に、飛び込めたなら……！

首領の、息が上がる。

糞……！

ローゼが心の中でだらしな盗賊の首領に悪態を付いた、その時だった。

彼の配下の部下達が、捕らわれた子息を救い出してローゼの元に駆けつけたのは。

ローゼは部下達に指令を下す。

30名程のローゼの部下達は大挙して広間に乱入すると、盗賊めがけて、なだれ込んだ。

広間に居た盗賊達は、入り口から斬り込む騎士の数の多さにおののき、顔を歪め、慌てて剣を構える。

ローゼは彼らに紛れ、こっそりギデオンの近づく。

ファントレイユは二段ある石段を一飛びで駆け上がった。

玄関扉を駆け抜け、一瞬廷内を伺う。

そして、二階の広間で剣を交える音と人が騒ぐ音を仰ぎ見、階段を猛速で、駆け上がって行った。

一瞬、その視界にギデオンの背に飛び込む自分の幻が、今度ははっきりと見えた。ファントレイユは更に、速度を上げた。

石塀の裂け目をくぐったものの、シャッセルはもうファントレイユの姿を見失った。

アドルフェスとレンフィールは息を切らし、ヤンフェスは軽やかに彼らを、追い抜いて行った。

「……敵は……！」
ヤンフェスの背に、レンフィールが言葉を投げかけたが、アドルフエスが『廷内だ……！』とその建物を目で示し、二人はヤンフェスの背を追った。

シャッセルが廷内を見回すと、ファントレイユのグレーがかつた栗毛が二階広間の開いた扉に消えて行く姿がチラリと見えた。彼は視線を階段に向けると、猛然と、駆け上がった行った。ヤンフェスが軽やかにその背に、続いた。

ギデオンは、隙を狙う首領の剣をその刃で止め、二人は剣を重ねたまま睨み合った。ギデオンのその背後は、がら空きだった。

ローゼが、紛れていた部下達の間から、さっと抜け出す。

ギデオンはさつきより気迫を、首領だけに向けている……！
多数の味方の援護で、彼の注意は目前の敵にのみ集中しているように、見えた。

ローゼはそっと、殺気を隠して彼に、近寄った。

ファントレイユが戸口から広間の中へ足を踏み入れると、ローゼの部下達と逃げ惑う盗賊の間を、ぶつかり来る背を避けながら縫い歩き、その姿を必死で探す。

やっと広間の奥にローゼを見つけ、その姿が、でかい首領と剣を交え力比べのように押し合うギデオンの背に、気配を消して忍び寄る姿を見つけ、ファントレイユの眉が一瞬きつく寄る。

ローゼを激しく睨み据えると、ギデオンの姿目がけて猛然と、ごつた返す争乱の広間を、駆け抜けて行つた。

ローゼが、隙を見せるギデオンの背に、剣を振りかぶり襲いかかった。

ギデオンが一瞬、ふいに現れた殺気を背後に感じ、ぞっとした。
近い……！が、首領は交えていた剣を、剣毎彼をまっ二つにする

氣迫を込め、力尽くで上から押さえ込む。

…今、この重い剣を例え跳ね除けたとしてもその途端、背後の剣が彼の逃げる隙など与えず瞬時に、その背に振り入れられるのはほぼ確実で、ギデオンは一瞬、覚悟を、決めた。

シャッセルもヤンフェスも、レンフィールもアドルフエスもが、広間に飛び込んだ瞬間、その光景を、見た。

ローゼの刃がギデオンの背めがけて振り下ろされたその時、ファントレイユはギデオンの背に飛び込み様、下げた剣の、握りを返してローゼの剣を、受け止めて見せた。

がっ…！ギデオンが、背後に人の気配を感じ、チラリと後ろに視線を投げ、直ぐにファントレイユの姿を確認し、その刃を交えていた首領の剣を、力を込めて思い切り上へと、跳ね上げた。

そのまま剣を振り上げ、握りに力を込め、稲妻が駆けるより早く首領の肩へと、振り下ろす。

首領は肩口から胸にかけてはっさりと傷を作り、血を滴らせてギデオンを、凄まじい藍色の瞳で睨み据えた。

ローゼは止められた剣を引くと乱打するように、降って沸いたようなその邪魔者めがけて次々剣を、繰り出し続けた。

ファントレイユは雨のように息付く間も無く振り降って来るローゼの剣を、全て受け止めて見せた。

ローゼの視線に一瞬、傷を受けた首領の姿が映り、その顔が焦りに歪む。

何としてもこの男をさっさと始末しなければ、職務の遂行は望めない…。

だがこの男はファントレイユ。そこそこ使える程度の、やさ男だ…！彼は更に握る剣に、力を込めた。

だがファントレイユはそのブルー・グレーの瞳でローゼを睨みさえ、一息も漏らさず降ってくる剣をことごとく受け止め、彼を討ち取ってギデオンを狙おうとする刃を、全て阻む。

瞬間、ヤンフェスの放った矢がこつた返す人の頭上を抜けて飛び、ローゼに代わってギデオンの背に襲いかかる、部下の一人の、背を貫いた。

盗賊達は敵が、味方を狙う様に混乱を起こした。

が、ローゼの部下が、打ち合っていた盗賊を放り、ギデオンを取り囲み始めるのを目に、シャッセルが室内に飛び込むと、レンフィーとアドルフエスも、慌てて後に続く。

ヤンフェスは自分の背後を護ると言ったシャッセルが、さつさと持ち場を離れるのに思い切り肩をすくめたが、一つため息を付くと室内の壁に背を合わせ、近距離用の、弓を構えた。ローゼの部下達は入り口からなだれ込む剣士達の前に次々と倒され、その様子を盗賊達は浮き足立ち、室内から、今が好機とばかりに逃げ出し始めた。

首領が逃げ出す彼らに、怒鳴りつけようと目で追う隙にギデオンが更に激しい一刀を振り入れ、首領は肩から血を滴らせながらも何とかそれを、避けた。

が、次に首領が、これが終いだとばかり、ギデオンを討ち取るつもりで剣を、凄まじい気迫で思い切り振り被った時、それを察したギデオンは一瞬剣を後ろに引き、首領が剣を、振り下ろすよりも先に懷に飛び込み、その身事剣を腹へと突き入れ、深々と腹を刺し貫いてはさつとその身を、剣ごと引き抜いた。

首領は首を垂れ、剣を落として脇を抑え、そしてそのまま、床に崩れ落ちる。

息を切らしてギデオンは振り返るが、ローゼがまだ、ファントレイユ相手に眉間を寄せていた。

ローゼは、そこをどけ…！

と言わんばかりに凄まじい瞳でファントレイユを睨め付け斬り殺そうとするが、ファントレイユは一步もその場を、引かず対等に渡り合う。

ギデオンの眉が、その光景を目にし、切なげに、寄った。

…普段優雅なその男は、見た事の無い程の気迫を漲らせ、ローゼが

振り入れる素早い剣を、尽くはじき飛ばして見せた。

静かな気迫を威圧にすら変え、一步も退く気の無い厳しい表情でローゼを睨み据える事を、止めようとしなない。

ローゼの、相手にすらならないと思っていたその敵の手強さに、その顔を歪め焦る様子が、手に取るように伺える。

ずばっ！

…だがついにローゼの早い剣が、ファントレイユの肩を掠る。

ファントレイユのブルー・グレーの瞳が、一瞬駆け抜けた肩口の熱さに瞬く。

ローゼは笑った。

が、ファントレイユは痛みに呻くどころかその瞳を少しも泳がす事無くローゼを見据えたまま、静かに剣を、握り直す。

見ると右肩口から血が、滴り始めている。

ギデオンの口を開こうとしたその時、ファントレイユの剣が隙を付いて返礼のようにローゼの脇を、目に止まらぬ早さで掠めた。

一瞬、焼けるような痛みが腹に走ったのか、ローゼは体を揺らし、その顔が、驚きに歪む。

見えなかったんだ…。ギデオンは思った。

こんな早業を、彼は一度だって人前で披露した事が無い。

だが明らかに、ファントレイユの礼の方が上手だった。

…その滴る血は、ローゼの方が、多かった。今や誰の目にも使い手として人を殺す腕では隊一の、『人切りローゼ』と異名を取るその男なんかより明らかに、ファントレイユの剣戯が上廻って見えた。だが…。

ギデオンは知っていた。

上を行ったのは剣の腕で無く、その凄まじい、気迫だと……………。

ギデオンはファントレイユに、『もういい』と声を掛けようとし、彼のあまりの気迫に言葉が、出なかった。

ローゼの瞳に、ファントレイユの背後、ギデオンの様子を伺う姿がチラと映る。そして…レンフィール、シャッセルが、荒い息を吐き

ながらも自分の背に、剣を向ける気配に、気づく。

アドルフエスが少し遅れて、やはりその背に、剣を構えた。

正面のファントレイユの他、背後を三方から彼らに狙われ、ローゼはとうとう視線を、正面で今だ殺気を解こうとせず睨み据えるファントレイユからそつと外し、背後からぎらつく殺気を滲ませて剣を向ける三人の剣豪達に、それぞれ送った。

右斜め後ろのシャッセルも、中央後ろのレンフィールも左斜め後ろのアドルフエスも、ローゼがそれより一步でも動けば斬り殺す腹で、動くのを、剣を握りしめてじりじり、待っている様子だった。長身の、端正な面持ちの白碧の騎士シャッセルは殺気を纏いながらも、ぞつとする程、静かに。“銀弧”と異名を取る華やかな容貌のレンフィールは笑みすら浮かべ、剣を下げて殆ど遊んでいる程軽く握り、だが敵が動けば直ちにそれを、一気に振る様子で。

そして、長身で頑健な肩幅の黒髪男前のアドルフエスは、ギデオンを殺そうとした男を、生かしておく気は全く無いように高く剣を構え、凄まじい藍色の瞳で急所を、狙いすましていた。
が、ギデオンが叫んだ。

「……………殺すな！」

その声で、ファントレイユはようやく気迫を解いて、剣をゆつくりと、降ろした。

ローゼはまるで誘うような、直前迄戦っていたその敵の隙に、思わず釣られて剣を、振り入れようと反射的に一步、進もうとし、直ぐに動きを止めた。

背後の三つの剣が、瞬間殺気を帯びてぎらついたからだだった。

アドルフエスが、低い、どすの聞いた声でつぶやいた。

「……いいぜ……！とつと動いて、ファントレイユを斬り殺せ……！」
アドルフエスの脅しに、ファントレイユは静かな様子で息を切らしていたが一瞬、目をしばたいて見せた。

だが、ローゼは構えを解き、腕をだらりと剣每下げ、ギデオンの、生きて傷一つ無い姿を一瞬視界ではつきり捕らえ、目を細め顔を歪

めて、一息大きく、吐き出した。

シャッセルが視線を送るが、レンフィールもアドルフエスも構えを解かなかった。

どうやら命令違反をしたいようで、ローゼが悪あがきをしてくれる事を、心から望んでいるようだった。

レンフィールの構えは両手を下げ、遊ばせていて、およそどう見ても、構えているようには見えなかったが。

が、ローゼが、シャッセルが近寄っても大人しく、シャッセルはその両手首を後ろから取り、重ねて縄で縛り始めてようやく、レンフィールは舌打ちして忌々しげに剣を、一気に鞘に納め、アドルフエスはその剣を振り損なって唸りながら怒り、空を切る激しい勢いで振り降ろして、鞘に収めた。

ギデオンが、ファントレイユの横でそつと様子を伺うが、ファントレイユは俯き、目を閉じ、肩を小刻みに上下させ、息を整えている様子だった。

ギデオンはとても声の掛けられない彼を、気遣うように見守ったが、ローゼを振り返るとつぶやいた。

「…… たったの一人、生き残ったな……」

ローゼはその言葉に後ろを振り返ると、30数名は居た彼の部下達は三人の剣士と、広間後ろに陣取ったヤンフェスの手で全て息を止められ皆、床に転がっていた。

ローゼは唇を噛んだが、シャッセルに肩を乱暴に押され、歩き出した。

ギデオンは俯くファントレイユの横顔に視線を戻すと、じっと彼を見つめた。

……あの瞬間、彼は覚悟した。

だがまたしても、ファントレイユがそれを止めた。

……幾度目になるだろう？

間違いないそれが自分に届き、息の根を止めるだろう刃が、まるで魔法のように消えて無くなるのを感じるのは。

間違いなく鋭く重い、それは命を奪う程の殺気だったのに。

一瞬で、背が軽くなる。そしてそこには、温かな体温を感じた。断固としてそれを阻む意思を持った……人の体温だった。

時々、ギデオンは彼に訊ねたい時があった。

……お前はもしかして、私の守護天使なのかと。

幾度も目を堅く閉じて待った。

それが振り下ろされる瞬間を。

本当に、いつだってほんの僅かな隙だった。彼自身ですら防ぎきれない。

いつだって戦闘の、まったく中で、皆が自分の事で、手一杯の、ごった返す中に……。

なのにどうして……。

それが解って、飛び込んで来られるのか。

どうしたって人の仕業に、思えなかった。

だが、ファントレリュがようやくその美貌の面を、横に立つギデオンの、向ける。その、ブルー・グレーの瞳は、今だ殺気が消えていなかったが、目の前の、生きてどこも傷の無いギデオンの無事な姿を、その瞳に映した瞬間、泣き出しそうな安堵の色を浮かび上がらせ、ギデオンは彼の想いを感じて、瞳が、熱くなった。

ほっとしたようにいきなり気が、抜けたのか、ファントレリュのその足がふらついて、ギデオンは思わずその左肩を手で支えた。

その温かさが、ギデオンに教えた。

彼は守護天使なんかでなく、生身の人間なのだ。

そして視線が、彼が受けた傷に自然と吸い付く。

「……ファントレリュ……」。

右肩に怪我を、している……」

ギデオンが、彼に心配の漂うか細い声でそう、告げる。

ファントレリュは疑問を一瞬その表情に浮かべ、ギデオンの顔を見つめ返した。

そして、少し心の平静を欠いたように眉を寄せ、慌ててギデオンの

姿を、見回す。

ギデオンの瞳が、彼のその様子に、更に切なげに瞬いた。自分の負った傷も忘れて彼の心配をするファントレイユに、胸を殴られたようなショックを、受けたからだ。

そこ迄……。滅多に、感情を、現さない癖に……。

どうしてそこ迄人の事で、狼狽えてみせるんだ？

「……私じゃ、無い……。君だ……。」

右肩を、掠ったろう……？」

声が、掠れた。

だがファントレイユは、ギデオンの宝石のような碧緑の瞳が、自分を真っ直ぐ見つめて輝くのを、それは安堵した表情で嬉しそうに見つめる。

ギデオンが、その彼の様子に、泣き出しそうになる感情を必死にこらえて聞く。

「……………痛く……………無いのか……？」

ギデオンのその、気遣いに満ちた震う声によやく、彼の言っている事が、解ったようで、一瞬自分の右肩をチラリと見た。そして、大きく吐息を吐き出して、つぶやいた。

「……掠っただけだ」

そう、端正な顔で俯く彼は、教練時代に見慣れた、何の感情も現さないそれは綺麗な人形のような顔で、ギデオンは思わず眉を寄せた。どうして……。彼はこうなんだろう？

私の事ではあれ程動揺してみせる癖に、自分の事になると、痛みすら、現そうとしない……。

ギデオンはその彼の様子に感極まっていたが、ファントレイユが感情を抑えているのが解っていたから、俯いて髪で顔を隠すとファントレイユの左肩を支えたまま、弓を背に担いで近寄ってくるヤンフェスに、声を掛けた。

「……傷薬は、持っているか？」

ヤンフェスは一つ、頷くと、腰に下げた革袋を開けた。

ギデオンは、ファントレイユの正面に回ると、彼の上着の、ボタンを外す。ファントレイユは不思議そうに自分の首の前で動く、そのギデオンの、白い指を、見ていた。

上着の前を開け、それを彼の、左肩からそつと滑らせる。

そして、その下の真つ白なシャツが、破れて血で滲むのを見ると、一瞬、ギデオンの眉が寄った。

…そんな程度の傷は見慣れている筈だったが、指先が震え出しそうだった。

だが、努めて平静を取り戻してシャツの、ボタンを解く。

左肩から、そつと傷に触れないよう、滑らせた。

彼の、色白の、しなやかな筋肉の肩が現れ、その傷が見えた。

掠ったとはいえ、5センチ程だったが、中央が少し深く切れていて、血が滴っていた。ギデオンはその傷に、ヤンフェスが差し出した軟膏を指で掬って、なるべくそつと、塗った。

その時ようやく、軟膏が滲みるのか、ファントレイユの眉がくっ…

！と寄り、その表情を一瞬、ギデオンから背けて隠した。

ふわりと、彼のたつぷりなグレーがかった栗色の髪が揺れてギデオンの、頬に触れた。

ギデオンは、自分のせいで傷を負った、その負担を彼に感じさせまいと、大した事は無いと演技続けるファントレイユに、気づいていた。

…いつも、そうだった。

一生かけても返せないような借りを作っていると言うのに、ファントレイユは毎度、そんな事は何でも無い振りを、する。

自分の無事な姿を見た時あれ程、安堵してみせたと言うのに、恩に着せようとした事が一度だって……無かった。

「……………」

努めてそつとそれを塗り、そしてまた、指が震え出さないよう注意して、彼のシャツと上着を、静かに戻した。

「…痛むか…？すまない。気を付けた、つもりだったが」

ギデオンの、掠れて弱々しい声に、ファントレイユは振り返り、切なげに眉を寄せるギデオンのとても綺麗な心配げな顔を見て、困惑仕切った表情を一瞬浮かべたが、直ぐに普段通りの優雅な微笑を取り戻すと、ギデオンを見つめて答えた。

「…少し、滲みるだけだ。君にしては素晴らしく優しい」

その言葉と、普段通りのファントレイユの微笑みに、ギデオンの眉が思わず寄る。

「……私にしては……？」

ファントレイユは途端、いつものような少し戸惑う表情を浮かべ、一つ、ため息を付くとそっと、ささやくようにギデオンに、顔を寄せてつぶやいた。

「…だって君、およそ繊細な事は、苦手だろう…？」

ギデオンは、感激が思い切り薄れるいつも通りのファントレイユの受け答えに、また思い切り眉を寄せ、今度は低い声で、ささやき返した。

「………傷の、痛みくらい解るぞ？」

だがファントレイユは、本当に？という顔をして、見せた。

「だって…ジャンジャンが傷を負って喚いた時、君が薬を塗っていたが、あれは確か……拷問に近かった……」

途端、レンフィールとヤンフェスは、知っているのか思い出して二人同時にぷつ、と吹き出した。

アドルフエスが、呆れて彼らを、見る。

ファントレイユは、思い切り眉を寄せているギデオンに、問いかけるようにそっと、首を傾けてささやく。

「…君に薬を塗られてもっと、喚いただろう？」

君は、喚くのを止めようとしたらしかったのに。

君に薬をその……。

あんまり優しく無く塗られて、もっと五月蠅くなったのを、覚えていないのか？」

瞬間ギデオンは、自分のヘマで大怪我を負った間抜けなジャンジャ

ンの場合と、彼の場合との違いを全く無視するファントレイユに怒りが沸き上がったが、ぐっところえた。

その瞳が、真っ直ぐファントレイユを見据えて問う。

「……君の傷に塗った時も、拷問だったのか？」

ファントレイユは一瞬たじろぐ様子を見せたものの、返答した。

「……いや？とても優しくったからもの凄く………意外だった」

「……………」

ギデオンが、言葉を失い眉間に皺を寄せたまま、ファントレイユをじっと、見つめ続けた。

レンフィールは笑いが止まらず、アドルフスはギデオンが手ずから傷の手当てをした事に、不満そうに眉を寄せていた。

ヤンフェスがギデオンの様子を見、そしてファントレイユに向かって、しょうも無いなど、口出した。

「……ファントレイユ。君に礼が、言いたいんだギデオンは。

それとも、彼に言わせたくないのか？」

ギデオンが、ヤンフェスの助け船に途端、ほっとした。

が、ファントレイユは困惑した表情を、浮かべただけだった。

「……………礼？」

ファントレイユが、そっと聞く。

ギデオンはその綺麗な顔をすっ、と真剣な表情に変えると、つぶやいた。

「……命を救ってくれたろう……………」

ギデオンの、声が掠れていて、その宝石のように綺麗だと影で評されている碧緑の瞳があんまり真っ直ぐ、自分に向けられて、ファントレイユは困ったように顔を下げてその表情を、隠した。

暫く言葉を探す様子だったが、顔を下げたままつぶやいた。

「……私は君の、部下だから、当然の役割だと思うが……」

ファントレイユがそう、言い訳のようにつぶやくと、ギデオンは俯く彼の表情を伺うように、顔を少し下げてささやいた。

「……………君の仕事は、ソルジェニーの護衛の筈だ……」

そう言えるのは、ここに居るヤンフェスや、シャッセル、レンフィールや……アドルフエスから聞くなら、当然だとは思うが」

だがファントレイユは俯いたままで、ギデオンがその次に言い出そうとする言葉を、受け取る様子を見せない。

ヤンフェスがため息混じりにつぶやいた。

「……君は彼の礼を、受け取りたくないのか……？」

幾らギデオンだって、感謝したい時はあるんじゃないのか？

命を助けられる事なんてそうそう、ある事じゃないんだから……！」
ギデオンがその言葉に次いで、感謝を口に、しようとしたその時だった。

ファントレイユがいきなり顔を上げると、一気に言い放った。

「そうそう？ギデオンに関しては、まだこれから先幾らでもありそうなんだぞ？」

礼を言っただけを大切にしてくれるんなら私だって報われるが、どうせ君は、生き方を変える気なんか、無いんだろう……？！」

そう捲し立て、真剣なブルー・グレーの瞳で真っ直ぐギデオンを見つめ返す。突然の彼のその剣幕について、ギデオンが口を閉じ目を見開いて彼を、見つめた。レンフィールもアドルフエスもが、ぎよつとしたが、ファントレイユはギデオンの返答を待たなかった。

「もう二度と、君の命の心配をしなくていいと言っなら、礼は喜んで受け取るさ……！！」

だが、そうならない事も私は知っているからな！」

ファントレイユが、吐き捨てるようにギデオンにそう告げると、ぶんぶん怒って彼に背を向け、歩き出す。

ギデオンはその彼の反応に、思い切り呆けた。

暫く呆けたままだったが、隣のヤンフェスに、困ったように眉を寄せて訊ねた。

「……………何で、彼は怒ってる？」

だがヤンフェスもその予想のつかない反応に、覚えがないと言っ様子で困惑し切ったギデオンを見つめ、肩を、すくめて見せた。

シャッセルが、ローゼに子息の居所を吐かせ、ローゼを拉致したまま広間に取って戻ろうとした時、眉間を寄せて怒っている風のファントレイユが、広間を出て来るのを目にした。

「皆はまだ中か？」

声を掛けたがファントレイユは答えず、通り過ぎて行く。

シャッセルはつい、その反応が理解出来なくて思い切り肩を、すくめた。中を覗くと、レンフィールと目が合い彼を、呼ぶ。

レンフィールがそちらに向かう。ギデオンは、ヤンフェスに振り向いて問うた。

「事前に、知っていたのか？マントレンの差し金か？」

ヤンフェスは頷く。

「彼からの伝言だ。」

ローゼに何としても口を割らせろと。

首謀者はアデンだ。だがここからが肝心だ。

「真の首謀者は勿論、君の叔父だ」

ギデオンは、口は閉じていたが、目を見開いた。

だが、事の次第をギデオンに飲み込ませた上で、ヤンフェスは続けた。

「テテュスを、覚えているか？」

教練時代一緒だったそうだが、その後近衛で無く、『光の塔』付き警護隊に移った、ファントレイユのいとこだと聞いた」

「ああ。良く覚えている。」

ゆったりと大らかで、それは腕の立つ剣士だ」

「彼の父親アイリスは軍での実力者だそうだが、彼に使者を送って、アデンを揺さぶる方法を探って貰っている。」

「アイリスの指示が出る迄は、アデンに姿を消して貰っては、困るそうだ」

アドルフエスが、ヤンフェスの言葉に目を見開いた。

ヤンフェスはだが更に、続けた。

「ここらで君に、腹を括ってもらいたい。」

マントレンとアイリスは、君の叔父の、失脚を企んでいる」

その言葉に、ギデオンが一瞬目を閉じた。

そして開いたが、その少し潤んだ碧緑の瞳があんまり綺麗で、ヤンフェスですら一瞬見惚れた。

が、必死に踏み止まって、言葉を続ける。

「…君の、同意が欲しいそうだ。」

勿論、右將軍の後釜には、君に付いてもらいたい」

ギデオンはその宝石のような碧緑の瞳をヤンフェスに向けたまま、つぶやいた。

「…マントレンが私に、腹を括れと、そう言ったのか？」

「………そうだ。奴らはとうとう、君の暗殺を目論見始めた。」

君の叔父は身分の低い者を役職から一掃しようと企んでいるにも関わらず、君は王子の警護に、ファントレイユを押したりする」

その言葉を聞き、ギデオンはため息が出そうになったが、そつと訊ねた。

「……だからファントレイユは責任を感じているのか？私に………」

だが、ヤンフェスは肩をすくめた。

「…さあね。ともかく、あっちの言い分は、これ以上君のやり方を、貫いて貰っては困ると言う事だ。」

…だが我々の方も………」

ヤンフェスの言葉にギデオンが、問い返した。

「我々の方……？」

「…これから連中が企む君の暗殺計画に、いちいち付き合って行く気は全く無い……」

これを機に、一気に決着をつけときたいそうだ。

我々は何としても、君を失うつもりは、断じて、無い」

ヤンフェスの言葉に、アドルフフェスは軽く顔を下げ、レンフィールもシャッセルも、戸口から振り向いた。そしてヤンフェスは最後の言葉を繋いだ。

「…この事を肝に、命じて貰えるか…？」

ギデオンは一瞬、泣きそうに眉を寄せ、そう告げるヤンフェスを見つめた。

だが、冷静な声でこう返した。

「…解った」そして続けた。

「……………それが君達の望みなら、勿論同意する。

ファントレイユにもそう伝えてくれ」

が、ヤンフェスはまた肩をすくめた。ギデオンの顔を伺うように、そつとつぶやく。

「…生き方は変えられないが、とりあえず命を大切に選ぶ道を選んだと、君から彼に、言っちゃったらどうだ？」

ギデオンは少し俯くが、顔を揺らしてヤンフェスを見つめた。

「…そう言って、怒りを解くかな…？」

怖いもの無しのギデオンが、ファントレイユの怒りに少し怯えている風なので、ヤンフェスは思わず目を見開いて取り乱しそうになったが努めて冷静さを装い、つぶやいた。

「……………怒りの解ける保証は無いが、機嫌は直るんじゃないのか？」

ギデオンは一つ、頷いた。

「…そうだな。

で？これからどうすればいい？」

「…アイリスからの返事の使者が来る迄ここに、身を隠して居て欲しいと…」。

遅くとも、陽が中天に、昇るくらい迄は。

その間にローゼの口を割らせて置けと言う事だ」

ギデオンは周囲を、見回した。

「……………死体だらけだが、五月蠅くは無さそうだ」

「…そう長い事じゃない。だがファントレイユは帰さない」と

ギデオンは頷くと、

「……………護衛だからな……………」。

では彼に、同意したと、マントレンに伝言してくれるように頼めば

いいのか？」

ヤンフェスは頷く。

「…後、これを持たせてやってくれ…！」

生クリームは持ち運びに最悪だから、りんごのパイだが…」

ギデオンはその包みを受け取ると、暫く、手に持ったまま無言でそれを、見つめていた。ギデオンの様子に、ヤンフェスは言葉を足した。

「…王子の、好物なんだが、りんごのパイも好きそうだった」

ギデオンが、ようやく事の次第が解って、頷いた。

ギデオンが、部屋を出て行く。

レンフィールは、シャッセルが吐かせたカデッツ公子息の居所だと言つた広間の箆笥に手を掛けたまま、暫く彼らの話を聞いていた。が、アドルフエスが彼の横に来て、耳元でぼそりと

「…大体、ファントレイユなんぞを王子の護衛になんかするからこんな事態になる…！」

とぼやいたが、レンフィールに

「…なら、ドッセルスキに、ギデオンらが反逆を企んでいると注進に行くか？」

と笑って言われ、彼を思い切り睨んだ。

レンフィールが何げに扉を開けると、6才くらいの、身なりのいい子供がいきなりレンフィールの腰に抱きつき、わんわん声を上げて泣き始めた。

「……………鼻水を、付けるんじゃない！」

気取ったレンフィールが厳しく言ったが、子供は聞く様子無く、彼の腰にしがみついて顔をこすりつける。

レンフィールは救いを求めるようにアドルフエスを見たが、彼は素知らぬ顔をして顔を背け、その場をそつと離れてレンフィールを見捨てた。

レンフィールは仕方無しに声を、上げた。

「ヤンフェス！君に、うって付けの、仕事があるんだが……………」

ギデオンの岩の裂け目の向こうでようやく、煌々と照る月の光の中にファントレイユの姿を、見つけた。彼は、馬の首を労るように抱き、なでていた。

そして、馬に語る目を向け、ブルー・グレーの瞳を輝かせてその美貌の、うつとりするような微笑を見せていた。

「……馬まで籠絡しそうだな……」

ファントレイユが、その声の主に振り返る。

そして岩壩を潜るギデオンの、豪奢で明るい金髪に目を止め、そつとつぶやく。

「………馬を口説いてるつもりは、無い……」

ギデオンはすかさず言った。

「……そんな事は解ってる。」

いつもの君のようではっとしている所だが、私の姿を見たらまた、怒るか？」

素晴らしく人目を引く豪奢な金髪と月の明かりに浮かぶように煌めく碧緑の瞳の、ギデオンのその素晴らしく存在感ある姿を見つめて、ファントレイユは独り言のようにつぶやいた。

「………怒った所で、嵐は止まないのと同じだ……諦めている」

ギデオンの、眉が悲しげに寄った。

「………感謝も、聞く気は無いのか……？」

少し、声を落として訊ねるが、ファントレイユは肩をすくめただけだった。

「……用が、あるんだろう？」

ギデオンの、手に持った包みを目にし、そう告げる。

ギデオンは気づいて彼に言った。

「……ソルジェニーの、好物だそうだ」

ファントレイユの、眉が思い切り寄った。

「まさか、生クリームじゃ、無いよな？」

「りんごのパイだそうだ」

ファントレイユは頷いた。包みを手渡すが、その理由を、言う迄も無い様子だった。

ファントレイユはその包みを鞍の横の革袋に、しまい入れてさつさと馬に、跨ったからだ。

ギデオンが、馬上の彼を見上げて告げる。

「……マントレンに伝えてくれ。了承した……と」

その時ようやく、ファントレイユは鮮やかに笑った。

「……确实だ！直君の、虎の紋章入り金の肩当て姿が、見られるな！」

虎の肩当て……ギデオンはそれが右將軍の印だと、思い返した。そしてふ、と顔を上げる。

「……君はそんな事を考えて、駆けつけて来てくれたのか？」

ファントレイユは馬上で、それは心外そうに眉を寄せた。

「……駆けつけている間にそんな余裕が、ある訳無いだろう……」

事が終わった今だから、笑って想像出来る」

ギデオンは一つ、頷いた。

ファントレイユがもう、馬の首を来た道へと向けるので、その背に言葉を投げた。

「……ソルジェニーに、よろしく伝えてくれ……！」

ファントレイユはその、グレーの輝きを持つ淡い栗色のたつぷりの髪を肩の上で揺らして振り返ると、それは素晴らしい笑みを、ギデオンに向けた。

「……それが最高の楽しみだ！」

それを聞いて、ギデオンは心の中で彼に兜を脱いだ。

彼は護衛として、ソルジェニーの心配を打ち砕いて彼の心まで、護つてみせたのだ。

「……ならソルジェニーに言ってやれ。」

君の護衛は最高の男だと！」

ファントレイユは馬を進めかけ、慌ててそのギデオンの言葉に、手

綱を引く。

馬は進みかけ、いきなり制され、戸惑ってその首を振り、悪戯に歩を踏んだ。

ファントレイユが、その最上の誉め言葉を聞き、ギデオンを驚きの混じった表情で、揺れる馬上から喰い入るように見つめた。

ギデオンはファントレイユに直も、言った。

「…正確に、彼に伝えてくれ」

その顔は、感謝を受けない代わりに誉れを受けてくれと言わんばかりで、ファントレイユは一瞬それは怯むような表情を見せたが、自分を見つめ続けるギデオンに軽く、了承したと、頷いた。

その時ようやくギデオンの、真剣な表情が崩れて素晴らしい微笑へと、変わった。

ファントレイユは心の中で“猛獣”と呼んでいた彼の、極上の微笑みに一瞬見とれたが、直ぐに手綱を取って、駆け出した。

ギデオンが屋敷に戻ると、ヤンフェスがそれは上手に、子供の機嫌を取って笑顔に変えていた。

側に縛られたローゼが転がり、死体はどこかに、片づけられていた。ヤンフェスと子供の周りに、取り囲んで様子を伺い見るアドルフエスとレンフィール、そしてシャッセルが、居た。

「…上手いもんだな」

レンフィールがつぶやくと、ヤンフェスが顔を上げて呆れて言った。

「…子供をあやした事すら無いのか？」

レンフィールの眉が寄る。

「…私は、一人っ子だ！」

アドルフエスが言った。

「…兄は、居る」

シャッセルもつぶやいた。

「…私も一人っ子だな…」

ヤンフェスが、ギデオンが戻るのを目にし、尋ねた。

「…機嫌が直ったようだったか？」

ギデオンが笑顔で肩を、すくめた。

「…そう…思うが…」

アドルフエスが猛然と異を唱えた。

「…あんな奴の機嫌を取る必要が、あるんですか?! 貴方が…?」
が、シャッセルがつぶやいた。

「…あんな奴かもしれないが、もし居なかったら我々はギデオンと
こうして話を、していなかった」

レンフィールが俯き、アドルフエスは悔しそうに、それを言ったシ
ヤッセルを、睨んだ。

ギデオンは一瞬、素直にファントレイユを認めるシャッセルを静か
に、見つめた。

彼自身も、シャッセルの言う通りだと、熟知していたからだ。

ヤンフェスは、さて…!と腰を上げた。

「ここに居る筈の無い人間には戻って貰わないと…」。

だがここも人手が要るだろうし、目立たない奴に残って欲しいんだ
が…」

と三人を、見た。

アドルフエスは長身と頑強な体格と、その傲慢な態度で目立ってい
たし、シャッセルは無口だがその素晴らしい容貌で人目を引いた。

レンフィールは女性を思わせる綺麗な容姿と、その威張った我が儘
な態度と、横柄な口の利きようで。

目立たない男は誰一人居なくて、ついヤンフェスは俯いた。

だが、レンフィールがつぶやいた。

「ローゼは私が受け持つ」。

目立たないお前は帰らなくていいんだろう? ヤンフェス。

子供は当然、お前の担当だ。

アドルフエス、シャッセル」

二人が、呼ばれて彼らより小柄なレンフィールを、見る。

「…アデンから目を離すな…！」

奴を雲隠れ出来ないよう、見張ってくれ」

シャッセルは頷いたが、アドルフエスはぶつぶう言った。

「…何でお前が俺に、命令を出すんだ…！」

と。それを聞いてレンフィールが言った。

「『お願いだ…！』と、つけ足せば気がすむのか？」

「…冗談だろう？そんな気色の悪い事が聞けるか！」

アドルフエスの怒鳴り声にレンフィールは肩をすくめると、

「どっちみち、怒るんじゃないか…！」

とぶうたれて皆の失笑を、買った。

ファントレイユが馬を繋いでいると、暗がりの中人の気配がして、振り向いた。…アデンだった。

「……そこで、何をしている？」

ファントレイユは、聞きたいのはこっちの方だ。と思ったが、直ぐにアデンが事の成果を知りたくて、影で隠れている配下の者達に任せず自ら、そこでローゼを待っていたのだと思い当たって、とぼけた。

「…何……って、お使いですよ」

「…とぼけるな！お前は王子の護衛の筈だろう…！」

「…だから。王子のお使いです…。」

どうしても甘い物が、食べたいとおっしゃられて…」

「…夜中だぞ…！」

「ですから…甘い物が食べられないと、お眠りになれないそうで…。
急な出立でしたからね。

用意が出来ていなかったようなんです。

私も困りましたが、ようやく調達出来て、こうしてお届けしようと

…」

アデンは、その人を喰ったような美貌の騎士の、手に持つ包みを見とぼけた言い分を聞いたが、伺うように暗がりでその顔を、見つめ

続けた。

だがファントレイユはしゃあしゃあと続けた。

「……王子のテントは隊の別の腕の立つ者に、見張らせていますし……」

「……なぜその男が、調達に行かない……！」

その時、アドルフエスとシャッセルが、満月の月明かりを背に馬を走らせて来、遠目で言葉を交わす二人の姿を、篝火の薄暗い光の中、見つけた。シャッセルが馬を止めてアドルフエスに合図すると、アドルフエスも頷いて馬を、止めた。

「……この辺りに繋いで置こう。駒音でアデンに気づかれる」

シャッセルが馬を降りる。

アドルフエスは、少し野営場所迄距離があるのに視線をくべると、一つ、ため息を付いたが静かに馬を、降りた。

「……無論、彼より私の方が地理に詳しく、調達場所を、知っているからですよ。」

お早く届けしないと、王子の眠るお時間が、無くなる」

ファントレイユはアデンを、責めるように見つめる。

アデンは頷くと言った。

「……早く、お届けしてお眠り頂け！」

ファントレイユは肩をすくめたかったが、殊勝に一礼して、その場を去った。

「（……アデンの方はローゼ達に戻る現場を見咎められなくて、さっさと私を追い払いたいようだな）」

ファントレイユは心の中でつぶやくが、そのまま足早に、王子のテントに戻った。戸口の布をさっと払うと、ソルジェニーの見慣れた大きな青い瞳が、安堵した輝きと共に彼に、向けられた。

胸に、飛び込んで来るかと思ったが、彼は感極まり、震えながらそっ、と一歩、踏み出した。

後ろに、フェリシテとマントレンがテーブルに付き、カードのゲームに付き合っていた様子で、二人して、カードを手にしたまま彼を見つめていた。

「…どこも…お怪我はありませんか？」

王子に震える声でそう尋ねられ、ファントレイユは小柄な彼に少し屈んで、笑顔を作った。途端、ソルジェニーの青い瞳が、濡れて輝く。

「…ギデオンは、無事ですな？！」

あんまり大きな王子の声に、ほぼ三人同時に人差し指を口に当てて、しっ！とつぶやいた。

王子が思わず口に手を、当てるがファントレイユを、見つめた。

ファントレイユは輝くような微笑を称えてソルジェニーを見つめ返し、そして言った。

「…ぴんぴんしていますよ…」

ソルジェニーの晴れやかで安堵に包まれた顔を、ファントレイユはそれは満足そうに、微笑んで見守った。

王子はフェリシテとマントレンにそつと振り向くと、心から嬉しそうに顔を輝かせ、大きく、頷く。

二人は、それに応えるように、満面の笑みを返す。

ファントレイユはその様子に肩をすくめると、王子に屈んだ。

「すっかり仲良く、なったようですね？」

ソルジェニーは彼に嬉しそうに、頷いて見せた。マントレンが、ファントレイユに声をかけた。

「…おみやげを、頂こうか…」

夜中に起きていると、お腹が空くから…！」

マントレンの言葉にファントレイユは包みを、上げた。

「…君の読み通り、アデンは見張っていたよ」

マントレンは満足げに、頷いた。

「君の身の潔白を証明した後、我々の胃袋も満足させてくれる。なかなか役に立つ、パイだ」

一同はその言葉に、心からの同調を寄せて、にっこりと微笑んだ。

「……………」
転がされていたローゼが椅子に座らされ、レンフィールに睨まれるが、ローゼはレンフィールを恐れる様子は微塵も見せなかった。だてに異名を、取る男じゃない。肝は、座りきっているようだ。レンフィールは自分より年上で経験豊富なローゼの、隙を伺うが、結局口でどんな脅しを言おうが堪えないのが解って、剣を抜いてみた。

だがローゼは直ぐに言った。

「…殺すんなら、殺せ…」

切り刻むんなら、好きにしろ。

失血死も、悪くない」

レンフィールは結局、一言も発せぬまま、肝の座りまくった男の前に、降参した。

考えてみればギデオンの命を狙う男だ。

並の神経の持ち主じゃない。

レンフィールは一つ、ため息を付くが、剣を一刺ししようかどうかためらい、結局その場を、後に、した。ギデオンが姿を現し、その後ろに、付き従うレンフィールの姿が見えた。

ローゼは彼の金の長い髪に囲まれた、素晴らしく綺麗な容姿に目を向けて言った。

「…その綺麗な顔を死に神に引き渡せなくて、残念だ」

瞬間、ギデオンが拳を、握り込んだ。

が、ローゼはギデオンの反応を知り、更に続ける。

「…全く、いつ見ても綺麗な男だ。

君にもう少し隙があったら、縛り上げて犯してやりたいくらいだ。その顔が、男に可愛がられて喘ぐ様が見られないのは本当に、残念だな…！」

レンフィールはその挑発に思い切り眉を寄せ、そつと、ギデオンを伺い見た。

顔にはそれ程出ていないが、握った拳が表に現せない怒りで、それ

は激しく震っていた。

レンファイルにも、解っていた。

ローゼが、ギデオンを怒らせて自分を殴り殺してみると、誘っているのが。

今、自分の口を割らせる為に、殺せないこちらの弱味を、存分に突くやり方だった。

「…顎を割るかあばらを折るのが君のやり方だろう…？」

ああ、そうだったな！

顎なんか割られたら、それこそしゃべれなくなる…！

それで、我慢してくれているのか？

君は『綺麗だ』と言われるのが大嫌いだと、確か隊長就任の時、誰かが親切に教えてくれたよ。

君の前では決して言うな、顎かあばらを折られるぞと。

それで？折角こらえてくれていているんだ。

私にしゃべらせたいんだろう？」

ローゼが、その整った顔立ちのそれは根性の悪そうな表情で、ギデオンを見つめた。

二十歳をとづくに超えた彼にとっては、十代の小僧なんてどれ程の相手だと言う、侮りが見て取れた。

ギデオンはさすがに顔には、出さなかったが、拳は握り込まれたままだった。

ローゼはその様子をたっぷり見ると、続けた。

「どうした？何が聞きたい？」

まさか君の部下が禁を破って駆けつけて来るとは思わなかったが、君の背に、それは動けなくなる位の重傷を負わせた後で、君の血が流れ出して君が死ぬ迄、部下達と共に君を犯してやろうと目論んでいた事が…？」

ギデオンが、その豪華な金の髪を散らして叫んだ。

「…夢の中で楽しんでろ！現実が、解っているのか？」

お前は私の背にすら、届かなかったらう？」

だがローゼは、笑った。

「…ギデオン。君の唇は感情が高ぶると赤くなるんだな。熟れた果実のように美味しそうだ」

ギデオンがとうとう、拳を振った。

縛られているローゼの腹に思い切り入れ、その瞬間ローゼは短く呻いて、気絶した。

レンフィールが、困ったようにギデオンを見、その男の垂れた頭を、髪を掴んで上げ、気を失っているのを確認してギデオンを、見た。

「…意識が無くては、口は割らせられない…」

心底弱ったレンフィールの声に、ギデオンが怒鳴った。

「…そんな事は私だって、知っている！！！」

だが顎は割ってないし、移動出来るように、ちゃんとあばらも外した！

これ以上、どう手加減出来るか教えてくれ！！！」

レンフィールは、俯いたが、つぶやいた。

「…よくやった……………」。

君に、しては」

ギデオンがようやく、そうだろう。と思い切り、頷いた。

アデンへの尋問（前書き）

＋：登場人物紹介：＋

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからつきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を
度々救い、信望を得ている。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに

出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

フェリシテ・・・ヤンフェスらの後輩。短剣の名手でヤンフェス同様
とても重宝されている。

主に、戦場ではヤンフェスと行動する事が多い。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフエス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

ローゼ・・・近衛連隊、隊長の一人。アデンに指令を受け

ギデオンに直接手を下す機会を狙う、暗殺者。

ギデオンより、年上の熟練の、刺客。

アデンへの尋問

シャッセルとアドルフエスは、アデンの動向を見守っていた。

が、明け方近くにととうと、その寒さに震えてアデンは自分のテントに戻り、彼らは無言のまま、テント近くに居を移して、その場を見張り続けた。

陽は直に、昇った。

明け方の朝焼けを背に、その一行が野营地を訪れた時、アデンが兵のざわめきを耳にし、慌ててテントからその姿を、現した。

着替えもせずに仮眠を取っていたようで、彼は櫛の通らない乱れた髪のまま、その騒ぎに、出向いて行った。

が、馬上のその姿を見ると驚愕に目を見開き、その男に見つかる前に、こっそり兵の頭にその姿を隠して、テントに戻った。

そして、次にテントが開いた時、アデンはいかにも逃げ出す様子で身の回りの物を携え、繋がれた馬のほうへと足早に歩いて行く。

手綱を取り、馬に乗ろうとしてその馬の轡を誰かに掴まれた。

背後にも、気配を感じる。

轡を掴んだのはシャッセルで、背後に居たのは、アドルフエスだった。

「…使者を、出迎えるご用を、すっぱかすおつもりじゃあ、ありませんよね？」

黒髪の、体躯の立派なアドルフエスに凄まれて、アデンは心外だと言う顔で怒り狂った。

「…お前に何の、権限がある！」

だが、いつもそれは静かなたたずまいのシャッセルが、乱暴に彼の腕を掴み捕らえ、もう片方をアドルフエスに掴まれて、アデンは顔色を、変えた。

「…何の権限があつて私に乱暴を働く…！」

お前達！こんな事をしてただですむと、思っているのか…！」

だが騒ぐ彼の前迄、馬に乗ったその使者は、取り巻く兵達を引き連れてやって来た。

ファントレイユが、王子のテントから姿を出してその馬上の人物を見つめ、思わずつぶやいた。

「……アイリス……！」

それは彼の、叔父の名だった。

馬上のその人物は、整った顔立ちの上に優雅な微笑を浮かべ、濃い栗毛を朝日の中艶やかになびかせて、濃紺のマントを纏い、それは柔らかに、彼に笑って見せた。

「……ファントレイユ。」

無事を確信してはいたが、それは心配していた。

「……何しろ君ときたら、ギデオンの側に居る時は、無茶ばかりする」濃紺の、輝く瞳に、瞳の色よりほんの少し明るい群青の上着とマントを付け、馬上よりそうファントレイユに挨拶をし、彼の隣に姿を現した王子に、優雅な仕草で上着と同色の帽子を脱いで、軽く会釈をし、礼を取った。

マントレンは彼の事を知っていたが、フェリシテとソルジェニーは、初めて目にするファントレイユの叔父が、彼以上に、それは優雅で気品あり、余裕の溢れる様子について、二人揃って感嘆のため息を漏らした。

彼は、大変巧みに手綱を操りながら、馬上よりアドルフエスとシャッセルに腕を捕らわれたアデンを見つめ、悪戯っぽく、微笑んで見せた。

「……アデン准将。」

こんな早朝に、お出かけですか？」

アデンはその男を見て、完全に心の平衡を、欠いた様子で叫んだ。

「……アイリス……！」

なぜ貴様がここに顔を出す！この男達に私を拉致するよう命じたのも、お前の差し金か？！」

アデンの睨みは凄まじかったが、アイリスは全く動じる気配は無か

った。

「…指揮官が、指揮すべき兵を置いて野営地から逃亡したとあれば、拉致するのに私の命令等必要ないと思うが…」

彼らを取り巻いていた兵達が、それを聞いて一斉に、ざわめいた。アデンの、顔が歪んだ。

「と……逃亡等、しておらぬわ!」

アイリスは、その端正な顔に僅かに微笑を浮かべ、素っ気なく言った。

「…それはこれから、ゆっくりと話すとしてみましょうか…」

そして彼は、シャッセルとアドルフエスに頷いて、アデンを連行させた。

シャッセルとアドルフエスは、馬から降りるアイリスの横にアデンを、連れて来る。

アイリスは辺りを見回し、「…さて、どこならいいかな?」

とつぶやく。

ソルジェニーはすかさずファントレイユの隣から一步踏み出し、申し出た。

「場所をお探しなら、私のテントで構いません」

アイリスはファントレイユの横に立つ、少女のような容貌の王子の、真っ直ぐな青い瞳を見つめると、それは人好きのする柔らかな微笑を浮かべ、にっこりと微笑んで言った。

「お言葉に、甘えるとしましょう」

彼はシャッセルとアドルフエスに振り向くと、彼らに微笑んで、促した。

彼らはアデンを、引ッ立てて王子のテントに姿を、消す。

彼らが消えた後、兵達が大いに困惑にざわめき、アイリスに付き従っていた男の一人が、彼らに言った。

「…ここは私の部下が見張る。」

君達は持ち場に、戻りたまえ…!

…朝食の、支度をしなくていいのか?」

真被りにしていた帽子を取り払った、金髪で長身のその男を、兵の数人が見知っていて、慌てて皆を急かして、その場を散り、支度をするよう告げた。

その兵の内の一人が、その男に声を、掛けた。

「…ギウンター中央護衛連隊長。

一体、何事です？

ギデオン准将も、夜襲を命じられたきり姿を、見ないが……」

ギウンターと呼ばれた、その長身のそれはしなやかな動作の男は、彼につばやいた。

「…直に正式指令が下る。

何も心配はいらない」

訊ねた男はギウンターを見たが、彼とアイリスが登場した以上、それは本当だと、納得した様子だった。

一つ、頷くと言った。

「…では勿論、ギデオン准将の事も？」

ギウンターが頷き、男は、その返答で笑顔になった。

兵達皆が、ギデオン准将が、夜襲を命じられた切り戻らないと、心落ち着く様子も見せずずっと夜通し、自分も含めてそわそわし続けていたからだった。

ギウンターは手袋を脱ぐと自分の部下達に、王子のテント周辺を見張るように告げて、テントの中へと、消えて行った。

中ではアイリスが、王子ソルジェニーにそれは親しげだが礼をわきまえた、初対面の挨拶を、述べた所だった。

ソルジェニーは、ファントレイユの叔父と名乗るアイリスが、間近で見るとファントレイユよりも長身で幅広な肩幅で、すらりとしたしなやかな立ち姿をしていて、容貌も美しく大層立派な騎士で感心したが、ファントレイユの方もその叔父を、心から敬愛している様子だった。

ソルジェニーは、ファントレイユのいつも優雅な様子が、この叔父を、見習っているんだと思い当たって、心の中でつぶやいた。

「…やっぱり誰にでも、お手本はいるんだ」と。

アデン准将は何度も、アドルフエスやシャッセルの腕を振り払おうとし、彼らに乱暴に、掴まれた腕を引き戻されていた。

ギュンターがひっそりと、後ろで腕組みして控えていると、アイリスが相変わらず余裕のある微笑を、アデンに向けた。

「…久しぶりだな。アデン。」

相変わらず、悪巧みが大好きな、様子だ……」

アイリスにそう微笑まれ、アデンはそれはぞっとする、青冷めた表情を、浮かべた。

アイリスはそんな彼の様子等素知らぬ顔で、ファントレイユに言った。

「…ギデオンは、無事だと思って間違いなさそうだね？」

それは優雅に微笑みかけ、ファントレイユは、アイリスに一つ、頷いて見せた。

「…刺客のローゼも、捕らえてあります」

アデンの顔がますます、青冷めた。

そして、何も口を開くまいと堅い決意の表情を見せた。

アイリスは、それは素晴らしい微笑でファントレイユに微笑みかけると、アデンに顔を向けて、言った。

「…ああ、アデン。」

君がローゼに命じてギデオン准将の命を狙ったなんて、訊ねるつもりは毛頭、無い。

私が来たのは、勿論別件だ。

サランティス公から大金の寄付を、君が受け取った後、帳簿のどこを探しても記載されていない件なんだ。

釈明があれば、聞こう…。

君もご存知の通り、サランティス公は、老齢ながらもそれは厳格なお方だ。

君に着服等されたと知ったら…」

アデンは途端に、青冷めた。

「…そんな事は、知らん！」

公は本当に、寄付をされたとおっしゃったのか?!」

アイリスはそれは優雅に微笑むと告げた。

「…そうだな。」

老齢だから寄付されてない事を、お忘れなのかも知れない」

アデンはほっとして、そうだろう、と頷いた。

「…が、例え記憶違いだとしても、それを君は彼にそう、言えるのか？」

年寄りだから、ボケてるんだろうと？

あのお方がどういうお方か、解っていて？」

微笑みながらそう畳み込むアイリスの顔を見て、アデンの、顔色が、変わった。

「…その上、寄付をしたと歴とした証拠があつたりしたら……
どうなると思う？」

彼は一層明るい笑顔をアデンに向けたまま、懷から取り出した、寄付の金額と署名をしたための洋紙皮をひらひら指先で揺らし、そう問うた。

アデンが、一瞬にして青冷め、震え出した。

その驚愕に見開かれたアデンの目を見つめ、アイリスが少しも優雅な態度を崩さぬまま、更に鮮やかに微笑んで、つぶやいた。

「…君が言えないのなら、私が言おう。」

公の金を、泥棒した者はすべからず、右腕を切り落とされる。例外無く。

公の法に、従つて」

アデンはとうとう、我慢出来ずに怒鳴った。

「そんな書状は、偽物だろう！」

寄付したと言う証拠をでっち上げて、私をはめる気か?!

…くそ！放せ!！」

だが、振り払おうとしてもシャッセルもアドルフエスもそれは厳しい表情で、頑としてその腕を、放そうとはしなかった。

「…アイリス……！
貴様……！」

俺に刀傷を付けただけじゃ飽きたらず、右腕迄切り落とすつもりか？！……」

その、心底怯えた様子は、見ている者に鬼気迫るものがあつた。
だが、アイリスはうつとりするような微笑を、浮かべる。

「ああ、昔そんな事も、あつたっけね……！」

だが君も飽きずに、悪巧みをしてるじゃないか……！」

言う迄も無く、私は公に、問答無用で君の右腕を持って帰るよう、
ご命令頂いている……。

だが私にだつて情けくらいはある。

君とは古い戦友だし。

……まあ、仲が良かったとは、とても言えないがね」

そう言つたアイリスは、それは優雅に微笑んだりしたから、アデンは心底震え上がり、彼の恐怖はその場でアデンを見ていた全員に、
背筋に冷たいものが走るような悪寒すら、感じさせた。

アデンは、アイリスを見つめて、もうすっかり真っ青な顔色の、低く震える声でつぶやいた。

「……貴様はどうせ、私の腕を切り落とす瞬間もその笑顔を、崩さないんだろう？」

アイリスは、それは屈託無く、楽しそうに笑つて見せた。

「良く、知ってるな！」

だてに付き合ひは長くないようだ。

……右腕が無くなれば君の悪巧みが終わると思えないが、残念ながら公に、右腕だけと、お約束してしまつたんでね。

で？ドッセルスキ右將軍に組みしたのは、昔から敵視していた私に、脅威を与えたかつたからか？

強力な後盾が、欲しかつたんだろう？」

「……………」

アデンがまだ、伺つような様子で、迂闊な言葉を口にすまいと顔を

引き締めた。

それを見て、アイリスが、笑った。

「ドッセルスキが、怖いかな？」

右腕を、失うよりも？

「……私を完全に敵に回すよりも？」

アデンが、声を低く落としてそうつぶやくアイリスを、体を震わせ、心底ぞつとした様子でそつと見た。

視線を受けてアイリスは、心から楽しそうにアデンに顔を傾けて、促すように、微笑んだ。

皆が、彼のそのあまりの素晴らしい笑みに呆れた。

心から楽しい微笑で、脅しているからだ。

「アデンはアイリスが、彼の返答次第では本気で腕を、切り落とす腹だと、完全に飲み込めたようだった。

アデンの顔が完全に真っ青になり、体がぶるぶると震え出す。

剣を、ぎらつかせて見せる必要も、無かった。

アデンは彼の微笑みに、竦み上がったので。

アイリスはアデンの様子に素っ気なく首をすくめて見せると、退屈そうに告げた。

「……さて。

君が右腕をどうしても無くしたくないとあらば、私だって鬼じゃない。

君は寄付金を、新規の馬の購入費に当てたと公に報告し、その馬は私が手配して近衛連隊に、送っても構わない。

「……で？その交換条件迄君に言う必要が、あるかな？」

マントレンはあまりに見事なアイリスの優雅な脅迫に、思わず唾を飲み込み、皆がアデンを見守ったが彼が既に、落ちているのは誰の目にも明白だった。

「……ローゼに、命じたのは私だ」

アイリスはぴしゃりと言った。

「……それじゃ、足りない。」

アデン、解っているんだろう？」

アデンは、目を剥いてアイリスを睨んだが、その優雅な男は目で微笑んで、返した。

忌々しげにその笑顔を見つめ、アデンは唸った。

「私に命じたのは、ドッセルスキ右將軍だ！」

甥を殺せと……！絶対、確実に仕留めて、この戦地から生きて都に返すなと！

……そう命じられた」

アイリスは視線をアデンから、テントの戸口近くで腕組む、ギンターに移して言った。

「……聞いたかい？ギンター」

ギンターは、ゆっくりと顔を前に倒し、つぶやいた。

「……確かに」

アデンは、はつとするようにギンターを振り返り、アイリスに向き直ると叫んだ。

「……あの男迄たらし込んだのか……！」

……アイリスの手管に下るとは、落ちたものだな！

ギンターともあろう男が！」

アイリスは、人聞きの悪い、と肩をすくめたが、ギンターはそれは迷惑そうに眉間に皺を寄せ、唸った。

「……お前がどう思おうが勝手だが、アイリスの手管に落ちたと言うよりは、ドッセルスキが死ぬ程嫌いだと言えば、お前でも納得するか？！」

そう、ギンターは長身の体を起こしゆっくりアデンの前まで来ると、金の髪を肩の上で揺らし、その深い紫の瞳で、アデンを睨め付けた。

アデンは一瞬、目の良く見知っている男を見つめ、はつと記憶が蘇ったように顔を、歪めた。

「……やっと、思い出したか？！」

俺は剣を向けられて逃げ出す男が、大嫌いだってな！

…ましてや、仲間を平気で見捨てる奴なんぞは、虫けら以下だ！

あの肝っ玉の欠片も無い、ど卑怯な男が右將軍だなんて、こんな笑える話は無かるう？

…アイリスと、いつも司令室で笑いの種にしている」

アデンが、そのギンターの凄まじい睨みについ、彼の瞳の底に沸き上がる怒りを感じ、顔を下げた。

確かにギンターもアイリス同様、私生活ではそれは派手な遊び人だったが、いざ戦地となると誰よりも勇敢なだけで無く、どんな不利な状況下であろうと部下を見捨てた事の無い男として、確固たる周囲の信頼を得てきた男だ…。

そしてその事は、アデン自身も良く、知っていた。

ギンターは組んでいた腕を解くと、アデンに笑った。

「…で？お前はドッセルスキの、手管に下ったって訳だ！」

アデンは、その長身から勇敢さ漂うそれは男らしい、かつて見慣れた素晴らしい美男の、それは頼れるギンターにそう笑われて、つい、俯いた。

ギンターは肩を、すくめた。

そしてアデンを見つめて言い放つ。

「准将なんて過ぎた地位を与えられて、自分の肝っ玉がうんと小さい事も忘れたのか？

どうせ血を見るのは、今だに怖いんだろう？

まだ戦場で、貧血を起こしてるんじゃないのか？

大貴族の地位で隊長に成ったと聞いたが、ドッセルスキに媚びへつらって准将迄成ったと聞いて、それは心配したよ。

お前の部下達をな！

…戦場で、真っ先に血を見て貧血で倒れる、お前の身を心配しなくちゃならないからな？

…それで？

俺に代わって、お前の命を敵から護ってくれるいい部下は、見つかったのか？」

周囲の皆が、アデンがいつも決して戦場には足を踏み入れない理由を聞いて、心の底から呆れた。が、アデンは体裁を構ってる暇は無かった。

アデンの瞳は真っ直ぐ、いつでも勇猛で誰からも頼られる、かつて彼の隊長だった男に、注がれていた。

まるで彼の怒りを、心から恐れるように。

…誰もが、ギウンターの部下に成りたがった。

彼はどの腕の立つ薄情者の隊長達よりも、面倒見が、良かったので「ドッセルスキなんぞに金と地位を与えられて尻尾を振り続けるから、命を何度も救われた恩人の俺が、卑怯者が何より大嫌いだって事も、綺麗に忘れて俺に平気で唾を吐きかけられるんだよね?!」

ギウンターに鋭くそう言われ、アデンは真っ青な顔で頭を、垂れた。「俺に、言わせたいのかアデン。」

お前がドッセルスキなんぞとつるんで悪巧みをしてるのを知って、俺がどれ程お前の命を救った事を後悔したか…。

心の、底からな」

そう、静かな威嚇を向けられ、アデンはぶるぶる体を震わせて、更に深く、顔を、下げる。

「…それとも俺が、お前の大嫌いな、肝の座ったアイリスと組んでるのが、そんなに不満か？」

だが似合いだろう？

お前も自分の肝っ玉に見合った、ドッセルスキなんぞと蔓んでるんだからな?!」

アデンがますます、うなだれた。

だがギウンターの声が低く、鋭くなった。

「…実際、お前なんぞがギデオン前右將軍子息を殺そうだなんて企むくらいなら、敵に囲まれたお前をとっと見捨てれば良かった!」アデンの、掴まれた両腕が、それを聞いて激しく震え出す。

幾度も…幾度もだった…。

ギウンターは毎度足手纏いになる彼を連れ、それでも決して、彼を

見捨てなかった。

そう、幾度もその身で、盾になってくれた…。

「…お前を助けに戻った時、お前が受ける筈だった敵の刃を代わりに受け、負った傷は今だあるが…。」

全く甲斐のない、馬鹿げた行為だったな！」

ギューンターの、その本心からの怒声に、アデンがわなわなと震え、その瞳にとうとう、涙が滲んだ。

「……………ギューンター…。」

ギューンターは応えず、相変わらず低い、怒りの籠もる声音で、つぶやいた。

「ギデオンの、命を狙った事を卑劣な行為だなんて、これっぽっちも思っただけじゃないんだろう！」

叱咤するような鋭い言葉は、そこに居た全員を代弁するかのようだった。

その場の皆に、氷のような冷たい視線を浴びせられ、とうとうアデンが、必死に首を横に振って、かつての恩人に、叫んだ。

「…ちゃんと、証言する！約束する！！」

「…本当か…！」

二度と俺に、お前の命を救った事を後悔させないな？！」

ギューンターのその透ける紫の瞳と言葉は真剣で、アデンは頭を深く垂れ、ささやいた。

「…約束する……………必ずだ……………」

ギューンターが、ようやく笑った。

「…裏切ってみろ…。」

右腕一本どころか、俺が救った命を、俺の手で間違いなく終わらせてやる…！」

その言葉にアデンが顔を振り上げ、必死に、叫んだ。

まるでその頼りになる味方だった男に、心の底から命乞いするように。

「……………必ずだ！」

アデンはその厳つい顔を歪ませて、ギウンターに目に涙を浮かべて懇願した。

「…約束は必ず、守る！」

ギウンターはようやく、怒りを解いてつぶやいた。

「……いいだろう」

一同はその、迫力ある答弁に、ほっと息を、付いた。

アデンは、ギウンターの部下に引き渡され、縄をかけられ、テントから連れ出された。

ソルジェニーは、長身で容貌の立派な二人の使者に、ささやいた。

「…お茶を…召し上がりませんか？」

アイリスは相変わらず人好きのする柔らかな笑顔で可憐な王子を見つめて、頷いた。

「…頂こう」

王子が、その素晴らしい微笑を向けられて思わず、微笑み返した。皆はその場で、王子手ずから入れたお茶を、配られた。

アイリスはそのゆったりとした優雅な動作でお茶のカップを手にし、控えめに立つ、真っ直ぐの栗毛の、青白い顔の利発そうな小柄な男に顔を、向けた。

「やあ、マントレン」

マントレンはアイリスに、感心してつぶやいた。

「…アデンの口を割らせるのに、二段構えだとは…！」

でも本当の武器は、ギウンター隊長のようですね」

アイリスよりも更に少しばかり背が高く、濃い金髪をさらりと背に流したその美男は、快活に笑った。

「…俺は隠し玉って訳か」

そして、解いていた腕を組んで、ソルジェニーから、茶を乗せた力ツプの受け皿を受け取り、王子に丁重に礼を、した。

ソルジェニーはその金髪の、男らしく勇猛な美丈夫に、感嘆したように一瞬、見惚れた。

「…アデンの命を救ったって、本当ですか？」

シャッセルが、その噂でしか知らない歴戦の強者について、訊ねた。ギウンターはカップを口に運びながら言った。

「…昔は俺も近衛にいて、奴の隊長だったしな…！」

皆が、頷いた。そこに居るソルジェニーを除くほぼ全員が、知っていた。

ドッセルスキが幾ら自分の周囲を、身分の高い取り巻きで並べ、ギウンターのような身分の低い男を排除したくても、ギウンターは圧倒的多数の大貴族達にその、決して味方を見捨てぬ気概と、どんな状況でも敵を打ち倒す勇敢さで認められ、彼以外に、王城ある中央地方の護衛連隊長を任せられる男はいないと迄言わせた、実績を持つ男だと。

「…近衛が、ひどい事に成っているとは聞いていたが、甥まで暗殺しようと思むとはな…」

ギウンターが、お茶をすすりながら、ぼそりと言う。

マントレンが、笑った。

「都や王城警備隊長にと、ドッセルスキが指名してきた男を全部、蹴ったって聞きました」

ギウンターが、その紫の瞳を、上げた。

「人の陣地に無断で上がり込むような行為だろう？」

俺の傘下に、口出しはさせない。

悔しかったら俺を、首にしてから好きにしろと、言っただけだ」

アイリスが、優雅な仕草でカップを口に運んでいたが、ぼやいた。

「…君が首になったりしたらそりゃ、もっと口クでも無い事になる。君が首にならない様、君自身がちつとも心を碎かないから、こつちの心配事に、なってるんだがね？」

アイリスとて『神聖神殿隊』付き連隊長で、実際は別の連隊を統べている。

この二人が連隊長として居座つてなければ、ドッセルスキは自分の取り巻き達をこの部署の連隊長に据え、更に勢力を拡大し、軍の権力をそれこそ、その掌中に一手に、収める事になってたろう。ギユンターは、笑った。

「…俺だつてまさか、ドッセルスキが甥を葬つて、ずっと右將軍の地位に居座ろうとする程ずうずしいとは思ってなかった」
が、アイリスが、素っ気なく言った。

「そりゃ、するだろう？」

戦場で敵と戦つて実績を上げるより、うんと手っ取り早くて、楽しいかないか」

その言いように、皆がやはり、彼はファントレイユの叔父だ。と目を伏せた。

ギユンターは肩をすくめた。

「…まあ、実際ギデオンが殺られなくて、良かった。

で？その刺客は大層手練れなのか？」

「…実際、ファントレイユが駆けつけなければ、危なかった」

シャツセルがぼそりと言うと、皆が、目を見開いてファントレイユを、見た。

シャツセルはその時の様子を思い出すと、又ため息を、漏らす。

が、ファントレイユが全員の視線を浴びて口を開く。

「…マントレンと、王子と約束している。

果たせなかったら、彼らに顔向け出来ない」

シャツセルと、アドルフエス迄も、そう言う彼を、見た。

マントレンもフェリシテも、ソルジェニーも同様に。

アイリスが、それは気遣うようにファントレイユを見つめる。

ファントレイユより頭一つ長身の、その優雅で柔らかな笑顔を持つ騎士は、その美貌の甥に労り包み込むように寄り添うと、彼の瞳を覗き込んだ。

ファントレイユがそつと見上げると、アイリスは微笑んで告げた。

「…テテユスがそれは、いつも君の身を、案じている」

ファントレイユはいつも自分を心配してくれる、アイリスの息子、彼にとつての優しいいとこの名を聞き、思わず顔を、下げた。

その様子に、アイリスはいつも崩さない微笑を翳らせ、訊ねる。

「…今度も、無茶はしていないね？」

が、アドルフエスが口を滑らせた。

「…ギデオンの背に飛び込んでローゼの剣を受止めたが、掠り傷を負っただけだ」

アイリスが初めて笑顔を崩し、眉をひそめた。

「…傷を、負ったのかい？」

ソルジェニーが途端に、それは心配げにファントレイユを、喰い入るように見つめた。

マントレンは眉を寄せ、フェリシテは言葉を無くした。

だがファントレイユは、一斉に視線を注ぐ彼らの様子を目にし、何でも無いようにいつもの優雅な微笑で返した。

「…アイリス。

アドルフエスが言ったように、本当に、掠り傷なんです」

だがアイリスの眉は心配げに、寄ったままだった。

「……………見せてご覧」

ファントレイユが一つ、ため息を付くと、口を滑らせたアドルフエスを軽く睨み、アドルフエスは気づいて視線をそらし、肩を、すくめた。

彼が上着とシャツを肩から滑らすと、傷を皆に見せ、つぶやいた。

「名誉の負傷にもなりませんよ…」

ヤンフェスが、良い傷薬を持っていてギデオンが塗ってくれたので、傷跡すら、残るかどうか……………」

アイリスは傷を見て納得したように、頷いた。

が、ソルジェニーはそれでも、五センチ程の刀傷に顔を歪めていたし、マントレンはファントレイユの剣の腕をどの誰よりも熟知していたから、ローゼの手強さを思っ、俯いた。

ファントレイユはどんな時でも、自分が傷を負う戦い方はしなかつ

た。

きっと彼は真つ向からあの男と、やりあつたに違いない。

傷を受けるしかない程、ローゼ相手には余裕が、無かつたんだろう…。

ギユンターが、つぶやいた。

「…なる程。」

君の甥は君同様、姿に似ずそれは、勇敢なようだ」

アイリスはそう言うギユンターに、誇らしげに、にっこりと微笑んだ。

「…自慢の、甥なのでね」

そう言われた途端、ファントレイユが頬を染めて大人しく俯く。

皆が、一度も見た事の無いファントレイユのその、とても殊勝な様子につい、彼を、一斉に凝視した…………。

「…これから、どうします？」

マントレンに聞かれ、アイリスは彼に微笑んだ。

「…ギデオンを、迎えに行かないと」

ソルジェニーが咄嗟に叫んだ。

「どうか…！」

私も同行させて下さい…！」

アイリスはその必死な様子の幼い王子に、微笑んで頷いた。

「…私はアデンを連れて先に戻る。
する事も、あるしな」

ギユンターが言うつと、アイリスは頼むと言うように、頷いて応えたが、テントの外でアデンがギユンターの部下に引き立てられ始めると、兵達が一斉に手持ちの仕事を放り出し、寄って来てはその様子を見て、ざわめく。

そして夕べから姿の見えない彼らの英雄、ギデオンの身を案じ、兵達は不安げに、どうなってるんだと騒ぎ始めた。

マントレンはその様子を目にし、一つ、ため息を、付いた。

こういう騒ぎを収めるのに頼りになりそうな、アドルフエスやシャ

ツセル達はさつさと、ギデオンの元に戻るため、馬に乗り始めていたからだった。

そして、騒ぎを見物中の、近くに立っているスターグに気づいた。

「役に立ってくれるな？」

ギデオン准将はじき、ご無事で戻られるから、自分の仕事をしると、兵に告げてまわれ！」

スターグがふいに話しかけられ、その命令に肩を不満げに揺らすのを見て、マントレンが尚も言った。

「聞いたんだろう？」

ファントレイユが、安酒場の夕食じゃ割にあわないとぼやいたのを、その借りを返す、チャンスだぞ……！」

スターグは、借りを作ったのは彼で、あんたじゃないと言いたかったが、小柄ながらマントレンは肝が座っていて、彼は自分の隊長をこれ以上、敵に回すのはまずいと察し、彼の前から姿を消して、親友のラウリッツ迄促し、仕事に戻れと喚きながら、兵の間を歩き抜けて行った。

アデンへの尋問（後書き）

特別編。ギデオンとファントレイユの初めての出会い。

軍教練校の入校式で、ギデオンに始めて出会った時の事だった。

新たな入隊者と、それを出迎える上級者が沸き返す中、ファントレイユは、はぐれたいところを探していた。

母方のいとこテイスは自分と違って、父を軍の重要ポストに持つ大貴族の息子で、

彼が付いていれば大抵の事は乗り切れるし、彼の父、ファントレイユには叔父に当たるアイリスは、息子共々面倒を見ると、約束してくれていた。

軍では、ギデオンの父に当たる、絶大なる信頼を集めていた右将軍が戦死。

その死を痛む間もなく、ギデオンの叔父が次期右将軍を継いだ。

右将軍となったドッセルスキは、亡くなった兄と違い、剣の腕も勇敢さも人望も持っていなかったから、軍では彼におべっかを使う貴族達が、幅をきかせるようになっていた。

実力よりも、将軍に上手く取り入る事が出来る者か、もしくは、右将軍とて気を使わなければならない大貴族達が、重要ポストを占めるようになっていた。

ファントレイユのように、身分の高くない貴族の息子等は、いくら実力があっても大貴族達にさげすまれる存在だった。

・・・現に、テイスとはぐれた彼は、ごったがえす人波の中、もう何人かの慇懃無礼な身分の高い青年に、突き飛ばされたり、ぶつかられたりした。

彼らはぶつかつた相手を見て、謝罪を言うべきかどうかを判断した。

テティスには間違いなく詫びただろうが、ファントレイユを見るなり、ぶつかった相手は眉根をひそめただけで、侮蔑の表情を、浮かべて薄ら笑った。

自分の、腕を掴む者が、居た。

彼が振り返る間も無く、彼の横についたその少年は、ぶつかった大柄な青年に、言った。

「・・・謝罪すべきだろう？」

・・・当然だと、言わんばかりの、強い口調だった。

彼はその言葉を発した、隣の少年を、見た。

自分より少し小柄だった。が、何よりその美しさに、驚いた。

少女かとも、思った。金の髪。白い肌。つんと尖った鼻。

大きな青緑の瞳。赤い唇。

少女ならば、今までお目に掛かった事の無い、素晴らしい美少女だった。

だがファントレイユは噂をテティスから聞いていた。

前將軍の子息は、少女と見まごう美少年で、だがその勇敢さは父親譲りだと。

「（彼が、ギデオンだ・・・！）」

相手はギデオンを一目見るなり、その綺麗な顔に見惚れ、そしてそれがギデオンだと思い当たると、途端、先ほどの無礼な態度を一変させた。

「・・・ああ、失礼。ぶつかりましたか？」

明らかに上級生だったが、その青年はファントレイユを見ず、視線をギデオンにくれたまま、謝罪の言葉を、言った。

ギデオンはその綺麗な顔を、慥然と歪めて言った。

「・・・ぶつかられたのは彼だ。彼に謝罪したらどうだ！」

きつぱりと、その愛らしい赤い唇から出る言葉。

ファントレイユは胸が、踊った。

ここに居る誰よりも身分の高い彼が、一介の、取るに足りない貴族の息子の自分為に、自分より年上の青年に『謝れ』と、公然と言い

放つ。

青年は、ファントレイユを見た。

相変わらず、機嫌を取る対象ではない、と言う侮蔑の表情を浮かべたが、ギデオンの手前、歪んだ笑みを浮かべ

「・・・失礼した」

と言った。

ギデオンはそれでも、眉をしかめたが、取りあえず、その場を納めた。

青年はこれを機会に、とギデオンに話しかけようとしたが、ギデオンはファントレイユの腕を掴んだままさっさとその場を退いた。

「・・・どこまで行くんだい？」

引つ張られて、ファントレイユが言つと、ギデオンはようやく歩調を弛め、ファントレイユを見た。

一瞬、ファントレイユの美貌を目の当たりにし、怯んだような驚きの表情を浮かべ、つぶやいた。

「ああ・・・悪かった。つい、あの男に腹が立つて・・・」

そして、ゆっくり、労るようにファントレイユの腕を放すと、その素晴らしく綺麗な顔で見つめた。

ファントレイユは首を、傾けた。

「・・・だが、嬉しかった」

ギデオンは予想していないようだった。

あんまり素直な、感謝の言葉に、一瞬戸惑うような表情を、見せた。

「・・・ファントレイユ！」

長身のテティスが人波の向こうから、彼を見つけて叫んだ。

「・・・いここが呼んでいる。もう行かないと・・・」

本当に、嬉しかった。

・・・ありがとう」

丁寧にそう言い、その場を去ろうとした時、ギデオンは言った。

「・・・違う！・・・私は・・・君の事を庇ったんじゃない！

あの男につい、腹が立って・・・」

彼の感謝を受ける資格が、自分には無いと言っように、ギデオンはその綺麗な顔の上に困惑を浮かべていた。

ファントレイユは振り返り、彼に微笑んで言った。

「・・・それでも、嬉しかった！」

再会（前書き）

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからっきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を

度々救い、信望を得ている。

フェリシテ・・・ヤンフェスらの後輩。短剣の名手でヤンフェス同様

とても重宝されている。

主に、戦場ではヤンフェスと行動する事が多い。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

アドルフェス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

アイリス・・・ファントレイユの叔父で、『神聖神殿隊』付き連隊の、長。

大貴族で、軍の実力者。反ドッセルスキ派の最右翼。

参謀、マントレンと、反ドッセルスキ同志で秘かに

交友があり、情報交換を、している。

ギユンター……中央護衛連隊の、長。都周辺の警護を一手に引き受け

その信望は厚い。

“どんな激戦でも部下を見捨てない男”として、周囲から

信頼を得ているが、とつても遊び人。

だが誰もが“見事な騎士”と認めるローランデに

ベタ惚れ。して以来、彼には頭が、上がらない。

アデン……ギデオンよりうんと年上だが、同じ近衛准将。

ギデオンの叔父で、現右將軍、ドッセルスキに指令を

受けて、ギデオン暗殺を企む。

スターグ……ファントレイユの後輩。マントレンの隊所属。

下級貴族で、腕が立つ遊び人。

再会

午前の爽やかな風を感じソルジェニーが軽やか馬に跨ると、その横でアイリスが鎧に足を掛け、ゆったりした動作で馬に乗り、ソルジェニーに微笑を送る。

淡い髪を揺らし優雅そのものの美貌を傾けたファントレイユが、王子を挟みアイリスとは反対側に馬を止めた。

アイリスが後ろに振りくと、アドルフエスとシャッセル、そしてフエリシテらが馬上で手綱を握り、頷く。

その後ろに三人居るアイリスの部下が、出かける用意はとづくに済んでいると、静かにたたずんでいた。

彼らはアイリスを筆頭に、一斉に、駆け出す。午前の爽やかな風を感じソルジェニーが軽やか馬に跨ると、その横でアイリスが鎧に足を掛け、ゆったりした動作で馬に乗り、ソルジェニーに微笑を送る。

淡い髪を揺らし優雅そのものの美貌を傾けたファントレイユが、王子を挟みアイリスとは反対側に馬を止めた。

アイリスが後ろに振りくと、アドルフエスとシャッセル、そしてフエリシテらが馬上で手綱を握り、頷く。

その後ろに三人居るアイリスの部下が、出かける用意はとづくに済んでいると、静かにたたずんでいた。

彼らはアイリスを筆頭に、一斉に、駆け出す。

アイリスとファントレイユが、彼らのまん中で馬を繰る王子を伺う。王子はその柔らかそうな金の髪を風にたなびかせ、青の瞳をその晴天の中煌めかせ、少女のように軽やかに馬を操ってアイリスを感じさせたが、ソルジェニーは、濃い艶やかな栗毛を馬上で揺らし、ゆったりとした素晴らしい騎士ぶりの叔父と、淡い髪と瞳の色の際だつ美貌の甥に挟まれて、それは嬉しそうに草原を馬で駆けた。

が、ファントレイユがずっと王子の視線を受ける度、安心させるよ

うに微笑みかけるのに、アイリスは気づく。

王子は実はそれは気もそぞろな様子で、ギデオンの無事な姿を一刻も早く、目にしたいんだと感じた。

時々、ただ一人の自分を気遣う身内のギデオンの、無事なその姿を思つて、泣き出したいくらいの真つ直ぐな感情で慕う思いを、周囲の大人達の手前必死に隠し、抑える様子を見せる。

だが若輩で、とても感情の素直な王子は、その想いを隠しきれずにその表情に、覗かせていた。

アイリスは王子の馬術の腕を観察すると、後ろに居た、アドルフエスとシャッセル、そしてフェリシテに視線を送り、一つ、軽く頷くと拍車をかけた。

突つ走る勢いのアイリスに、皆直ぐに気づくとファントレイユもそれに習つたが、合図を送る迄も無く王子はその心のまま、駆け出した。

先頭の三騎が疾風のように走り出し、後ろの皆も直ぐに、続いた。

ソルジェニーはアイリスを、見たが、艶やかな美しい焦げ茶色の巻き毛を風になびかせ、ゆつたりとした優雅で端正な面持ちの騎士は、素晴らしく小粋な微笑を彼に返しただけで、更に速度を上げる。

どんどん上がる速度に、軽やかに王子が、心のまま応えるように付いて行く様に、慌てたのはアドルフエスやシャッセル達の方だった。ソルジェニーはファントレイユを見つめると、ファントレイユもそれは素晴らしい微笑を称えていたので、彼はつい、二人に感謝し、そのはやる心同様、軽やかに馬を走らせながらギデオンに向かつて、一直線に駆け抜けた。

要塞に着くと、彼らは交互に並ぶ色とりどりのガラスのはめ込まれた窓から、幾筋もの朝陽差し込む広々とした廷内の玄関広間に、ギデオンとレンフィール、ヤンフェスと幼いカディツ公子息の姿を見つける。

ギデオンは陽を浴び、豪華な金髪のその輪郭を白く輝かせて、確かにそこに、居た。

その白に包まれた光の中、見慣れた彼の、宝石のような碧緑の瞳がソルジェニーの姿を目に、心から親しみを浮かべた優しい輝きを放ちその両手が、迎え入れるように広げられた途端、ソルジェニーは感激で目頭が熱くなって、思わず駆け寄り、その胸に飛び込んだ。腕に抱かれるギデオンのその温もりと確かな感触に、安堵が沸き上がるともう、ソルジェニーには自分を抑える事等、出来なかった。胸に顔を埋め、腕にきつくしがみつки、肩を震わせるソルジェニーに、ギデオンの心迄もが震う。

幾度もそつと耳元に顔を傾け、心配かけてすまなかったと、繰り返し、ささやき続ける。

ソルジェニーは体の震えが止まらず、ギデオンの腕を、それが二度と消えて行かないよう、きつく握り放さなかった。

その小さな体が、彼の無事を目にした喜びにその身を震わせ続けるのを、ギデオンは泣き顔のように顔を歪めながら腕の中でしっかりと抱き包んだ。

ギデオン自身も自分の感情を抑える事が最早出来ず、何度もその背を手でさすり、頭に頬を寄せて彼の身を案ずるその真摯な想いに、深い親愛と、感謝を寄せる。

ファントレイユが光を背に、その情景を微笑んで見つめているその、ブルー・グレーの瞳が、ギデオンの視界に一瞬入り、彼は顔を上げ、その美貌の騎士の柔らかな微笑みを、目に映し出す。

そして腕に抱くソルジェニーに顔を傾け、そつと、耳元でささやいた。

「私の伝言を、聞いたかい？」

そう問われ、ソルジェニーはようやく顔を上げる。

今では懐かしさすら感じる、ギデオンのその、艶やかな金の髪に囲まれ色白の小さく整った顔が優しく向けられ、ソルジェニーは問う顔をした。

「…伝言？…ギデオンの？」

その返答に、ギデオンは少し言い淀み、ソルジェニーから視線を外してファントレイユを見るが、ファントレイユは思い切り気まずそうに顔を背けた。

ギデオンは眉を寄せてため息を付くと、見つめているソルジェニーに視線を戻し、彼を見つめてささやいた。

「…君の、護衛の事だ…。どうせ自分の事は詳しく、言っていないだろう？あの男は。

自分が何をしたのかを」

ソルジェニーはギデオンを、その青い真っ直ぐな眼差しで、見つめた。

「…彼が暗殺者の刃を止め、彼自身が軽い傷を負ったと…そう、聞きました」

ギデオンは真顔でささやいた。

「…正直彼がいなければ私は、重傷を負ったか…死んでいた」

ソルジェニーがそんなひどい危機だったとは知らず、動揺したように目を見開き顔を、揺らす。

その青い瞳が、みるみる間に涙で潤む。ギデオンはそれを見て、自分の迂闊な失言に唇を噛むと、それを告げなかったファントレイユのソルジェニーへの思いやりに、そつと感謝を向けた。

ソルジェニーは必死でもう一度、無事を確認するようにギデオンの腕をきつく握り、その確かな手応えと温もりに、震えながらも安堵して、ささやいた。

「…良かった……！」

本当に…良かった……！」

言葉は最後、震えて途切れた。

そしてもうこらえきれないように涙を溢れさせ、彼の胸に、顔を突っ伏した。

顔を埋めて肩を震わす王子に、ギデオンは思わずきつく、彼を抱き留めて彼の涙を真心で、受け止める。

心から労るように抱きしめるが、そのか細い幼い体をとて頼りなく感じ胸が、詰まった。

…ソルジェニーは知っていて、一晚彼の身を案じ、心休まらずにそれは不安だったと、そう、痛感したからだった…。

アドルフエスも、レンフィールもシャツセルも…。

廷内に差す朝日に照らされた光の中、幼い王子を愛おしそうに大切に腕に抱き、切なげに眉を寄せるギデオンの、初めて目にする姿を暫く呆然と見守っていた。

ヤンフェスは心から微笑み、フェリシテは少し瞳を潤ませながら良く頑張ったと、王子を誉めてやりたい氣に、なった。

アイリスはそれを見、とても幸福そうに微笑みながら一つ、頷いた。ファントレイユがすつ、とその場から去ろうとし、アイリスは彼の背にさりげなく声かける。

「…立て役者が、雲隠れかい？」

ファントレイユは困ったように長身のアイリスを、見上げた。

ソルジェニーがその言葉に気づき、そつとギデオンの胸から顔を、上げる。

今だギデオンの腕の中にいる王子の濡れた青の瞳が、自分に真っ直ぐ注がれ、その視線に気づくと途端、ファントレイユは氣まずそうに顔を背けた。

皆がその反応に一樣におや？という顔を、する。

ギデオンは微笑むと、ソルジェニーの耳元にそつと告げた。

「…心配事からも君を護った、君の護衛は最高の男だと言ってやっただが、聞かなかったか？」

ソルジェニーはそのギデオンの言葉に顔を上げて彼を見つめると、その豪華な金の髪に囲まれた、色白の小顔とその宝石のような碧緑の瞳。そして傷一つ見えない無事な姿をもう一度、その瞳に大切そうに映し出し、心に刻み、涙で溢れそうな瞳で唇を震わせ、思い切り頷いた。

「…私も、そう思う……！」

ソルジェニーに涙で頬を濡らしてそう言われ、ギデオンは沸き上がる感情に潤みかけるその美しい碧緑の瞳を優しく向けて、そつ、と微笑んだ。

王子はギデオンを見つめ返すと、ファントレイユに礼を言おうと、彼の姿を目で追ったが、ファントレイユはアイリスの長身の体の後ろに隠れるように、立っていた。

ギデオンは王子に次いでファントレイユに振り向いたものの、彼の様子を伺い見ると一つ、ため息を付いてつぶやいた。

「……やっぱり私の伝言は無視、したんだな？」

ファントレイユはその言葉に、動揺を隠すように一瞬顔を揺らす。アドルフエスとシャッセルに挟まれていた小柄なフェリシテがつい、彼を庇うように急いで、か細い声でつぶやいた。

「あの、おみやげのりんごのパイは、みんなで美味しく頂いたんですが……」

フェリシテの言葉に、隣で彼を見下ろす長身のアドルフエスの眉が思い切り、寄った。

「……一晩アデンを寝ずに見張って、俺達は何も食って無いのに、君らはりんごのパイを食ってたのか?!」

体の大きな強面のアドルフエスに目を剥いて唸られ、フェリシテが思い切り怯えて、思わず優しいシャッセルの方にその身を寄せた。

ソルジェニーはすつ…と、ギデオンの腕を抜け出すと、ファントレイユに歩み寄る。

窓辺の朝日に、照らされるように白く輝く頬をしたファントレイユの美貌の横顔を見上げ、ソルジェニーは少し震える唇を、開く。

「……ギデオンが、貴方は信頼に足る人物だ…って。

マントレンもフェリシテも、心から貴方を信じてた。

凄く不安で怖かったけど、みんなの信頼を貴方は決して裏切ったりはしないと…私も、そう思ってた」

そう言って、その少女のような年若い少年の瞳はまた涙で溢れそうに潤み、ファントレイユはとても困ったように一瞬眉を切なげに寄

せたが、微笑みを取り戻すと告げた。

「……それが、私にとっての最上の喜びですから、どうか、笑って下さい。

良く、やったと……そう思っ下さるんなら……。」

少し屈んだファントレイユに優しくそう言われ、ソルジェニーは気づき、慌てて必死で涙をその手で拭うと、急いで顔を上げ、彼に応えるように微笑んだ。

ファントレイユが、王子のその様子を目にし、それは嬉しそうに綺麗なブルー・グレーの瞳をきらきらさせるので、ソルジェニーは思い切りそんな彼に、魅入られるように見つめた。

だがアイリスが、これ以上感謝を言われたりしたら、ファントレイユの神経が持たないと感じたようで、ヤンフェスとフェリシテに視線を送り、頷く。

そしてギデオンに告げる。「……私は王子と共に、子息を城に、送り届けます」

ギデオンはその申し出に一つ、頷いてみせた。

死体は片づけたとは言え、血糊だらけの戦闘の跡の生々しく残るその場所に、若輩の王子と子息を長く置きたくないと、アイリスは告げていた。

その、誰もが信頼出来る人物と名を上げる、大貴族の彼をギデオンはそつと、伺い見る。自分の側に付いてドッセルスキに睨まれている男達は皆、近衛を抜けアイリスの元に身を寄せて今は安全な事を、いつも心の底で彼に感謝していた。

だがアイリスは

『それが、自分の役目だ』と、ギデオンの感謝を知っているように彼に優しく微笑みかけ、自分の望みは彼が、父親の跡を立派に受け継ぐ事だと、その心で知らせた。

ギデオンはつい、叔父が居座りとつくに諦めていた地位に就く事の重要性に、少し俯くと、心を決めるように唇を、きつく噛む。

レンフィールがそつとファントレイユの横迄来ると、自分の不手際を、言いにくそうに小声で彼に、告げた。

「…実は……ローゼが口を、割らない……」

ファントレイユは珍しく大人しい、レンフィールの様子に、軽く頷くとささやいた。

「…君とギデオンじゃあ、脅しが上手いとはお世辞にも言えないかな」

レンフィールは怒ったが、口を割らす事の出来ない事実の前に反論出来なくて、顔を高慢に上げて腕を組んだ。

「…なら、君に任せよう。」

ファントレイユ

ファントレイユは思い切り肩をすくめた。

アイリスがそつと王子の背に触れ、その長身で頭上から彼を見つめる。

「…ローゼの口を割らせる間、では王子、私のお供をして頂けませんか？」

それはゆったりとした、人好きのする濃い栗毛の優雅な騎士にそう言われ、ソルジェニーは思い切り微笑んだ。

ギデオンを見つめると、ギデオンは笑った。

「ローゼの口を割らせたなら、又会えるから」

ソルジェニーは嬉しそうに、ギデオンに、頷いた。

とても頼もしく優しい騎士アイリスはそつと王子の背に手をかけ、カデッツ公子息に並び立つヤンフェスとフェリシテの方へ、出立を促す視線を送る。

が、ローゼの元へ行こうとするファントレイユの背を目にし、彼の後ろに素早くアイリスは近寄ると、その肩をそつと掴んで彼の耳元に顔を寄せた。

「レイファスからの伝言をついでに彼に、伝えて置いてくれないか

？」

ファントレイユが長身の彼を少し見上げ、だがその眉は、思い切り、寄った。

「…レイファスの？ローゼにですか？」

アイリスはそれでも微笑んで見せ、そつと屈んで彼の耳元に、その伝言を、ささやく。

ファントレイユはそれを聞いて、アイリスを、暫くの間じつと見つめ、一つため息を付くと腕を、組んだ。

「…貴方はレイファスに、甘すぎます。

こんな伝言を受け取るだなんて…！」

長身のアイリスと並ぶとファントレイユはとても細っそりして見え、いつもどんな事にも平然と対処する冷静な様子とは違い、アイリスに、拗ねた子供のような表情で懨然と言い放った。

ファントレイユの怒る様子にでもアイリスは朗らかに、笑って見せた。

「彼が誰と付き合おうが、私の口出す問題じゃないし、彼を縛る気も、無い。

それに…私が知って傷ついたりはしないと、レイファスも解つての伝言だろう？」

ファントレイユはまだ険しく眉間に皺を寄せてつぶやいた。

アイリスの前に居る彼は子供のようで、それは綺麗な子供で、そしてアイリスに少し、甘えるような表情さえ、見せた。

見ていた全員が、それは珍しい物を見たか、ついそんな彼に視線が、吸い付いた。

だがファントレイユは拗ねたような表情のまま、言った。

「…テテュスに聞いてご覧なさい。

いくら温厚な彼だつてきつと、私と同意見でレイファスを締め上げるに、決まっている！」

だがアイリスは、ファントレイユにとっては自分の息子テテュス同様、もう一人のいとこに当たるレイファスに、それは厳しい意見を

言い放つファントレイユの言葉を聞いて、困ったように微笑んだ。

「…どうかな。」

私達親子は、それはレイファスに、甘いからな」

ファントレイユの眉が余計に、寄った。

「…レイファスがその上に、あぐらをかいていると知ってるんですか？」

アイリスは、ちょっと眉を上げて、優雅に首を傾げた。

「…やっぱり？」

そうかとは思ってはいたが」

ファントレイユはどこ迄も甘い、アイリスを見つめてつい、レイファスへの怒りを爆発させた。

「レイファスの、あの我が儘者に、王子の爪の垢でも飲ませてやりたい…！」

貴方のような最上の相手の恋人だったのに、それを振って浮気するだなんて！

よりによって、ローゼなんて最悪な馬鹿と…！！」

滅多に感情を出さないファントレイユのその、激しい言葉に、ギデオンはつい、彼を呆然と見つめて黙り込んだ。

勿論、彼の怒りにびつくりしたのはギデオンだけで無かった。

他の全員もが、それぞれ突然の彼の爆発に、思いきり、引いた。

だがアイリスは微笑んだまま、ファントレイユに告げた。

「…けれどレイファスの考えでは、ローゼの口を割らせるのに効果的な伝言だと、言っていたんだ」

が、ファントレイユはまだ、怒っていた。きつく眉間を寄せたまま、組んだ腕も、解かない。

アイリスは優しく彼に屈むと、ふくれた子供の機嫌を取るようにそつと、つぶやいた。

「…君が私を気遣って味方してくれているのは、ちゃんと、解っているから。」

でも、どうしても彼に敵しく出来ない私が悪いんだし、私を悪い見

本だと思つて、君が心を捧げる相手にはせいぜい、ちゃんと君の事を想い返してくれる相手を、選ぶようにしなさい」

ファントレイユは即座に鋭く返した。「私は絶対、レイファスみたいな相手は選びませんから……！」

アイリスは、微笑んで頷いた。全員が、それぞれ離れた場所から、ファントレイユのひどく怒っている様子を見、思い切り心配げに、彼を伺つた。

ギデオンですら、ファントレイユの怒りを怖れるようにそっと、近寄ると、小声で訊ねる。

「……君が怒るんだから、余程の伝言の、ようだな……」

ファントレイユは彼に振り向くと顔を傾け「……自分が尊敬している相手を、思い切り馬鹿にされたりしたら君だって、腹が立つんじゃないのか?!」

と怒鳴つた。

ヤンフェスもフェリシテも、ギデオン相手に怒鳴る人間を初めて目にして、ぎよつとした。

が、ギデオンが、冷静に腕組みして尋ねた。「……誰を尊敬している?」

ファントレイユはまだ側に立っている、そのゆつたりと優雅この上無い、大人の男の風情漂う濃い栗毛の、柔らかな微笑を称えた美男の騎士を、目で指しつばやいた。

「アイリスだ」

ギデオンは、テテウス以外には見せない、心から気を許し、拗ねたような彼のそんな様子を目に、つい続けた。

「……その伝言は、つまり君の大事なアイリスを、馬鹿にしたような内容なのか?」

ファントレイユは心から敬愛し、尊敬する騎士の誇りを傷つけられて、もの凄く怒ってる様子でまた、吐き捨てるように言った。

「……そうだ!馬鹿に、仕切っている!」

なのにアイリスは伝言を頼まれたその相手に、考えられないくらい

に甘いから、馬鹿にされてもそいつを許してしまう！

…彼のように素晴らしく、誇り高い騎士がだ！」

ギデオンが、頷くと素っ気なく聞く。

「本人が許しているのに、なぜ君が怒るんだ？」

ファントレイユがその疑問にかっ！と目を剥いた。

「その伝言を頼んだ相手の性格を、知り尽くしているからに、決まっている！

相手から反撃が無ければこれ幸いと、どこ迄もつけ上がる奴なんだ！」

アイリスが、外見こそは可憐な美青年だが、ファントレイユが女性と浮き名を流していると同様、その可憐な外観に惹かれて寄り来る男性をやっぱり思い切り弄び、浮き名轟かす元恋人のレイファスを思い浮かべ、つい笑った。

「でも私と違って君は、それはきっぱり、彼に物を言うだろう？あれでレイファスは君の事を本当の兄弟のように思っているから、君に軽蔑されはしないかと、それは気にしている」
ファントレイユの、ブルー・グレーの瞳が、射るようにきつくなっ
た。

「……………アイリス。

彼の言った事を鵜呑みにするだなんて！

彼のあの、華やかで可愛らしい外観に、絶対騙されてはいけません

…！

貴方の前ではそれは可愛い子を演じているに、決まっている！

影で舌を出してる姿なんて、知らないでしょう？

…私は幼い頃からずっと彼と一緒に過ごして来たから、彼が大人の前では大層いい子ぶりっ子して相手を騙して、裏では、騙されるなんて馬鹿な奴だと笑う姿を、嫌という程見ていますからね……！！

…彼が心配しているのは軽蔑なんかじゃなく、私の反撃だ！

彼の事を知り尽くしているから、私が怖いだけだ！

だいたい、軽蔑なんて彼が恐れると、本当にお思いですか？

軽蔑なんてものは、価値観の差から産まれる極めて視野の狭い、個人的な感情だと彼は思っている！

そんな個人的な価値観に彼が、振り回されるだなんて、断じて、ありえない！」

シャッセルとレンフィールは顔を思わず下げたし、アドルフエスですら同様に、これからの尋問が心から、思いやられた。

ファントレイユは滅多に怒らないが、腹の底から本気で怒ると、誰も勝てない程の凄まじさを発揮するのを、彼らは一度、見ている。

そしてそんな時の彼は、身分年齢等、綺麗さっぱり無くなる。

ギデオンに向かって怒鳴るのは、その前兆だと、その場に残る三人は、経験から知っていた。

彼らはその、レイファスという人物を知らなかったが、そういう相手といつも張り合っているからファントレイユがこれ程弁が立つようになったのだと言う事だけは、解った。

…なんにしる彼らは、ギデオンも含めて、こう言った手合いと、口で争いたくないものだ、心の底から、思った。

アイリスが玄関扉に戻ってきて、その場で待っていた皆を、視線で促す。

ソルジェニーはヤンフェスを見上げたが、彼は肩を、すくめた。

そしてやれやれと首を横に振り、その場を逃げ出す事が出来るのはとても幸いな事だと、ソルジェニーに告げるような顔を向けて、王子の瞳をぱちくりさせた。

ローゼへの尋問（前書き）

＋：登場人物紹介：＋

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに

出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

フェリシテ・・・ヤンフェスらの後輩。短剣の名手でヤンフェス同様

とても重宝されている。

主に、戦場ではヤンフェスと行動する事が多い。

アイリス・・・ファントレイユの叔父で、『神聖神殿隊』付き連隊の、長。

大貴族で、軍の実力者。反ドッセルスキ派の最右翼。

参謀、マントレンと、反ドッセルスキ同志で秘かに

交友があり、情報交換を、している。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフ・フェス……19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

ローゼへの尋問

ファントレイユはむすつとした不機嫌な表情のまま、その扉に向かう。

ギデオンがそつと彼の後を続けるのを見て、アドルフエスとレンフィール、そしてシャッセルもが、肩をすくめながらその後に続いた。縛られたローゼが、椅子にかけている一室に入る。

ファントレイユが姿を現すと、その薄い金の真つ直ぐな長い髪を背に垂らした美丈夫の刺客は、彼に振り向いてそのグレーの瞳を、向ける。

そしてファントレイユを見つけると、顔を輝かせた。

どうやら、彼の暗殺を止めたその人物ではあるが、尋問に関してはギデオンやレンフィールよりも更に、チョロイと思っている様子は明白で、ファントレイユを舐めきっているローゼの態度が、ギデオン始め取り巻き三人達にもはっきりと解って、ギデオンはため息を吐き出し、腕組みして横を、向いた。

確かに、綺麗な容姿のギデオンも細面のレンフィールも、一見女性的に、見えはするがその性格は口を割らせるだなんてまどろっこしいマネなんかよりも、よっぽど腕にモノを言わせる方が楽なタイプだったし、その押し出しと迫力は、ファントレイユのいかにも優雅なやさ男風よりも、余程、相手に睨みが効いた。

しかし、ファントレイユは怒っている。

皆はどうなる事が予想のつかないまま、その場の成り行きを、見守った。

ローゼの態度と周囲の心配を余所に、ファントレイユは彼の前に立つと、にやにや笑いを浮かべるローゼに、ぶつきら棒にぼそりと告げる。

「…アデンはとくに、洗いざらい、吐いたぞ」
だがローゼは、案の定鼻で、笑った。

「それがどうした？」

「あいつが何を言おうが、俺は俺だ……！」

そしてファントレイユの、淡いグレーに見える優しい栗色の髪と、大人しく俯く細面の、煌めくような美貌を見つめ、つぶやく。

「……お前にしてやられるとはな……」

あの時取り逃がしたんで、お前に舐められたりしたんだ。

さっさと犯ってやるんだ……！

解っているのか？

人が来なけりや、お前は俺の物になっていた」

後ろから聞いていた全員が、ローゼがファントレイユを舐めきっている理由を知って、目を、見開いた。

が、ファントレイユは少しも冷静さを欠いた様子も見せずに、掠れた声で言い返す。「……………人が来ようと来まいと、どのみちお前の物にはなつてない」

ローゼは軽く、縛られたまま肩をすくめて見せた。が、それこそ威嚇するように、ファントレイユに鋭い一瞥をくべて続けた。

「……余程俺に何か、しゃべらせたいようだな？」

だが確固たる証拠なんて、何一つ、無いんだろう？

お前達の証言を、誰が相手にする？

暗殺されたなんて、ギデオンの気のせいだし、我々は濡れ衣を着せられ、脅されて証言したのだと、そう言えばそれで、通るんだぞ？」
ドッセルスキの、権力を宛にしているな。と周囲には解った。

アデンなんかよりも余程場数を踏み、自分の失地回復するのに頭の回転も早く、したたかだった。

経験から来る余裕でローゼは、ファントレイユの、髪を垂らして俯き、一つため息を付くそれは綺麗な姿を、舐め回すようにわざといやらしく見、脅すようにつぶやいた。

……どうやら彼の中ではもうとつくにファントレイユに勝っていて、後はただ、相手を思い切り言葉でなぶり、態度で威圧をかけ、戦意を無くさせるだけのようだった。

「…相変わらず、色っぽい男だ…！」

さんざん可愛がって、俺の下で泣かせてやってれば俺の剣にそれは怯んで、今頃はギデオンを確実に仕留められたのに………！」

まともな神経の持ち主なら、そんな目付きで見られ、こんな事を人前で言われたりしたら自尊心を傷つけられ、腹を立てるか、悔しげに唇を噛んで俯くところだった。

が、これにはフアントレイユは笑い、口を開こうとしたがその前に後ろから凄い形相のアドルフエスが黒髪を揺らし藍色の瞳を剥いて、激しい勢いで靴を鳴らして進み出て来、思わずフアントレイユはその勢いにぎよつとして、口を閉じた。

アドルフエスは進むなり、ローゼの頬を、立派な体格のそのごつい手で、思い切り張った。

…ばんっ！

それは、ローゼの頬に、真っ赤な手の跡が残る位激しかった。

尋問を受けているにも関わらずに舐めきった態度のローゼに、思い切り憤慨するアドルフエスを、フアントレイユは思い切りびっくりして、目を見開いて見つめる。

口の端から血を滴らせ、だがローゼは懲りなかった。

尚も、自分を阻んだフアントレイユを、徹底的に打ちのめそうと、更なる威圧をかけ、言葉の攻撃を続ける。

「…生きていれば機会はある。

この礼は、必ずするぞ…！」

フアントレイユ。

俺を敵に回した事を、絶対後悔させてやる…！」

だがお前を、ただで殺すと思うな…！」

仕留める前にお前が止めると懇願する迄、犯り殺してやる…！」

だが今度もフアントレイユが返答しようと口を開けた隙に、尚もへらず口を叩くローゼに思い切り腹を立てたギデオンが、その金髪を揺らし決然と、進み出た。

レンフィールの眉が瞬間、寄る。

「…ギデオン！」

ギデオンはレンフィールの声を耳にはしたものの、足を止めぬまま忌々しげに

「解っている！」

と一声叫び、拳で間髪入れず、ローゼの胸を、殴った。
がっ…！

ローゼは一瞬、胸が詰まって息が止まる。

薄い色の金髪を顔に垂らし、呻いて眉をきつく寄せ、だが今度は気を、失わなかった。

ファントレイユは驚きに目をまん丸にしたまま、淡い色の栗毛を揺らして、右脇に鬼のような形相で立つ黒髪長身のアドルフエスと、左に、ぎらりと鋭い眼光で睨め付け並び立つ金の髪のギデオンを左右交互に伺い見ると、つい独り言のように、ぼそと、つぶやいた。

「…君達がそんなに、私の貞操を気遣ってくれるなんて、もの凄く意外だ」

シャツセルは後ろで腕組みしたまま、一つため息を付くと、そうだろうなと頷いた。

…よりによって、女性と遊びまくっている、ファントレイユの貞操だ。

アドルフエスが、そのとぼけたファントレイユの言い用に、さっと振り向いて怒鳴った。

「…こんな男に、こんな侮辱を受けて、よく平気だな！」

ギデオンを殺そうとした男だぞ…！

お前が防がなければ、ギデオンはこんな奴に………！」

その後は、言葉にするのも悔しいと言うように、アドルフエスは拳を、震わせた。

ファントレイユは怒る二人の意見を聞いたが、表情を変えず肩をすくめて、ローゼに向き直った。

そしてぼそりとつぶやく。

「…余程この手の顔が、お好みのようなだが、私をどうこうしたいと

思うのは、レイファスにもう二度と相手にしないと、それはきっぱり、言われたからか？」

ローゼの、しなやかで長身の体が、縛られたまま、びくんと大きく揺れる。

その名がファントレイユの口から出てくるとは信じられず、目を見開いてとてもゆっくり顔を上げ、自分に注がれるファントレイユの瞳を見つめ、その顔を一瞬にして、青冷めさせた。

「…レイ…ファス……？」

ファントレイユは相変わらず冷静さを崩さぬまま、だがブルー・グレーの瞳を輝かせて喰い入るようにローゼの、その反応を、見つめた。

ローゼの脳裏には、ファントレイユが『外交向け』と秘かに呼んでいる、鮮やかな肩迄の栗色巻き毛と、宝石のようにくつきりと際立つ青紫の瞳の、大人しく可憐な美青年のレイファスの姿が、浮かんでいるようだった。

ファントレイユは内心『こいつも本性が、解ってないな』と踏んで言葉を続ける。

「…いつの間にレイファスと付き合ってた？」

私を口説き損ねた、後か、前か？」

ギデオンとアドルフエスが、二人同時に、彼らの中央で腕組みそう告げるファントレイユの顔を、両脇からそっと伺った。

ローゼが唇を噛んで俯くので、ファントレイユは尚も、低い声で言った。

「…私は犯すつもりだったのに、レイファスにはたぶらかされているのか？最高に、間抜けな話だな？！」

アドルフエスがそれを聞いて、ファントレイユの怒りは腹の底に一時収められ、表から見えないように隠しただけで、まだ列記として存在している事を知り、後ろのレンフィールを眉を寄せ、そっと、覗き見た。

女顔のレンフィールも、長身のアドルフエスからの視線を受けるが

俯くと、余所を向いて見せた。

アドルフエスの、ため息が漏れ、レンフィールとギデオンはそろそろ無敵のファントレイユの反撃が始まったと知って、口を噤んで床を、見た。

白っぽい金髪を背に流した、端正なたたずまいのシャッセル迄もが、つい、下を見る。

可憐な恋人、レイファスの名で思い切り動揺を見せたローゼが、その隙を、ファントレイユに容赦なく叩かれるのが、目に見えたからだった。

「……伝言を、聞きたいか？」

ローゼが、ファントレイユの言葉に思わず顔を、上げる。

どうやら、自分から離れようとする恋人を取り戻したいと、心からローゼが願っている様子が伺えて、ファントレイユは思い切り眉間を寄せた。

「……お前、まさかレイファスにマジになって、ないよな？」

……お前は遊んでるつもりでも、遊ばれているのはお前の方なんだぞ？
レイファスに手玉に取られてるとも気づかず、よくも私を犯すだなんて大口叩くもんだな！」

ローゼが、ファントレイユを激しく睨むが、その後唇を、きつく噛んで金の真っ直ぐの髪を滑らせ、俯いた。

ファントレイユが、笑った。

「……どうした？俺を犯したいんだろう？」

なら相手に、なってやってもいいがレイファスに捨てられたと言う事は、あっちの方は全然大した事は無いと言われたのも同然だと、覚えておけ！」

この言葉に、皆が一斉に顔を、下げる。

アドルフエスは、そんな厳しい評価を下されたローゼに、つい同情心を、抱きかけて必死でこらえた。

男としてそれを言われるのは、致命的な打撃だ。

が、レンフィールも、ギデオンもアドルフエスと同感で、それは気

まずそうに目を、伏せたままだった。

シャッセルは、ローゼの卑劣な脅しに思い切り対抗するようなファントレイユのやり用に、ついたため息を漏らした。

「伝言を、伝えてやる…！」

ファントレイユが言うのと、ローゼがまた反射的に、顔を、上げる。

その必死な表情に、ファントレイユは思い切り肩を、すくめた。

「…ギデオンの命を狙った刺客にしては、随分と可愛いらしいもんだな…。」

伝言は、こうだ。

『君は、期待外れだった。』

言葉でさんざん期待を煽る口説き方はなかなかだが、実力を伴わない大口は、ただのほら吹きだ。

もし私の言う事を聞く気があるのなら、改めた方がいい。

私とはもう次は完全に無いと、思ってくれ。君の顔を二度と見たくないと思う程度に、失望したのでね』」

ローゼの顔が思い切り青冷め、そして見ている者に解る程、ぶるぶると全身を震わせて、がっくりと肩を落とし、憔悴しきった。

ファントレイユを除く全員が、男としてそんな伝言を突きつけられたローゼの心境が、痛い程解ってつい同様に、俯き加減に首を、垂れた。

が、ファントレイユは首をすくめると手加減する様子は全く見せず、口を開き、ギデオンとレンフィールは、思わず経験豊富な年長者だと、二人を見下していた今のローゼの、哀れに打ちひしがれた様子に、気の毒げな視線を、向ける程だった。

「…お前、どの辺りでそんなに自分に自信を持っていたんだ？」

確かに、私を喰い損ねたのは人が来たからだが、君が私を組み敷けたのは、格闘技で勝ったんであって、決してテクで上を行ったんじゃない。

しかも、完全な不意打ちだ。

まさかレイファスの前でそんな卑怯なやり方で私に勝った事を自慢

げに話し、それを誘い文句に使ったりはしなかったろうな？

…そこ迄馬鹿じゃ、ないんだろう？」

ローゼが、それを聞いてがっくり首を垂れ、だいたいその方面に鈍いギデオンですら、ローゼがレイファスにそれを言っただけの興味を引き、誘ったんだと、解った程だった。

だがフロントレイユは真顔でつぶやき、傷口に更に塩を、塗りたかった。

「お前、本当にそこ迄馬鹿だったのか…？」

どうりで私程度の腕前でお前の剣なんか尽く止められる筈だ。

私なんか、軽くあしらえると、思ってたんだろう？ 剣の腕は、どうてい格下だと。

だがどうやらお前は、あっちの方同様、剣の腕でもさぞかし使えるよう見せておいて、実は全然、大した事なんか、無いじゃないか！」

…そう、言われたローゼは見るも無惨に、青冷めきつて、首を垂れた。

が、フロントレイユは気づく風も無く続ける。

「大体ギデオン相手に真っ向から殺そうとしたって、お前程度に出来る訳なんて無い。彼は私なんかより数段優れた使い手だ。

私程度が止められる剣の腕くらいで、ギデオンの暗殺を請け負う事が、どれだけ無謀か気づかぬ位馬鹿なんだから…レイファスに振られても仕方無いとも言えるよな？」

聞いている、アドルフエスやレンフィール、ギデオン達の方が、そのひどい侮蔑の言葉の羅列に、俯き加減だった。

彼らは思った。

惚れていたレイファスからの伝言で、十分ひどい打撃と最悪な屈辱を受けていると言うのに、フロントレイユは容赦無しだ。

…怒っている彼に、迂闊に1言えばその10倍は返ってくる、見本のようだった。

…だがフロントレイユは皆の想像を遙かに、超えた。

「…そこ迄馬鹿なんだから、口を割らなくても仕方無いだろう。まあせいぜい、墓場まで秘密を胸に閉まって置け。

口を割らない以上、レイファスが振らなくなっただってどのみち彼には二度と会えない。

何しろ、お前の狙った相手は猛獣だし、彼の取り巻きはやはり、血に飢えた狼共だ。

お前が口を割らなければ最大のチャンスとばかり、お前の命を断つ時を、ヨダレを垂らして待ってる。

私を犯してる間なんか、あるなんて甘い考えもいいとこだ！

殺していいと許可が出る迄も無く、狼共はお前を殺す隙を狙うに決まっているし、口を割らず、命乞いもしないとなれば俺を殺していいと、自分で言ったも同然だ！」

項垂れきっていたローゼの、顔から色味が、完全に、消える。

微かに、彼が体を震わせ始めているにもかかわらず、ファントレイユはお構いなしに言葉を続けた。

「お前一人の時誰かが剣を携えて、たった一人で現れたら、最後の祈りでも唱えるんだな。

それで天国の門が開くとは思えないし、レイファスの同情を買えるとも思えないが、少なくともお前の自己満足くらいの役割は果たすだろう…！」

墓場まで秘密を持って行った、忠義者なんだと、せいぜい自分を、慰める。

…だがもう一度聞くが、まさか本当にさつさと先にぺらぺらしゃべったアデンに義を立て、墓場迄秘密を持って行こうと思っているんじゃないよな？

そこ迄最低のど阿呆に、ギデオンが殺されかけただなんて、さすがの私だって思いたくも無い」

ファントレイユが真顔で彼に訊ねるが、ローゼは項垂れたまま体を微かに震わせ続けて返す言葉を必死で、探った。

ファントレイユの言葉の裏の真意を必死に…それこそ必死に、探り

ながら。

奴は本気で、言ってるのか？

奴らには自分の証言が絶対必要で、殺す事等問題外の筈だ…！

が、ファントレイユの言葉はその心をそのまま現し、容赦も隙も、無い。

ローゼはまだ、震え続けた。

レイファスの件で尻尾を掴まれ、既に断罪の決定が下されたように最早ファントレイユの脳裏には彼を殺す事しか念頭に、無いように感じられて狼狽え、必死でどうやって立場をひっくり返すかを、思い巡らした。

が、ふいにレイファスの愛らしい、それは可憐な姿が脳裏に浮かぶと、意志が挫かれるようにその姿が手元から、消え去って行く事を思っただけで、瞳がうつすらと涙で濡れ、それを知られまいと唇を、きつく噛みしめる。

「…おい……………！」

レイファスに振られてまさか本当に、落ち込んでるんじゃないかな？！」

…だから…落ち込んでいるじゃないか…。

と、全員の瞳にローゼの様子が、そう物語っていたが、ファントレイユは気にする様子は、無かった。

確かに…。

ギデオンは思った。

確かに、『犯してやる…！』だなんて最高に卑劣な脅し文句を吐く相手だから、同情する気なんて鼻からなかったものの、ファントレイユのやりようを見ると、ついローゼの方が可哀想になって、それは困った。

今や、瀕死のように青い顔をしたローゼが、微かにつぶやいた。

「…ファスが…言った」

ファントレイユが、その声のか細さに、顔を寄せる。

「何を？」

ローゼは俯いたまま、微かな声で、何とかその問いに、返答した。

「…レイファスが…ギデオンを殺せる男は、大した奴だと」
が、フアントレイユは鼻で笑った。

「…レイファスの大した奴に、成りたかったのか？」

だがローゼは首を背けただけだった。

…それは…その通りだった。

軍の大物アイリスをかつての恋人に持つ彼に確かに…認められたいとは、思った。

だがこの場では…せめてレイファスが暗殺を促したのだと、流れを変えたかった。

がフアントレイユは全く、取り合う様子を見せない。

ローゼは完全に、手だてを失った。

奴らは自分を、殺せない筈だった。が、フアントレイユは今…完全に殺す氣でいる。

あの時ギデオンの『殺すな…！』と言うセリフに、一番先に反応したのは、フアントレイユの筈だったのに…。

ローゼにはもう、どこで計算が狂ったのか、どうしたって解らなかった。

レイファスの事で頭を殴られたようなショックを受け、そのせいで全てを、見失ったんだろうか…？

項垂れ切るローゼの姿を目に、フアントレイユは、きつとこいつもその他（多）同様、さぞかしレイファスの、可愛い子ぶりっこに騙された馬鹿なんだなと思い、その思い切り予想外の展開に、目を涙で潤ませてるなとは思ったが、一つため息を付いて吐き捨てるように言った。

「…せいぜい祈りを唱えて首を洗って置け！」

ギデオンが、背を向けてそれで終わらせそうなフアントレイユに、つい慌てて口を挟んだ。

「…フアントレイユ。口を割らせる用でここに来たんじゃなかったのか？」

フロントレイユはギデオンに振り向くと、真顔で彼を、見た。

「…ああ、すっかり忘れていた」

ローゼは顔を、上げようと、した。

まだこいつらに自分は、利用価値がある筈だと、期待をかけて…。

が、フロントレイユは素っ気なく、言った。

「別に言いたく無ければ、言わなくなつたつていい。

…命乞いもする気も、無いんだろう？どうせ。

それを言う前に、私を犯してやる、だもんな。

当然、そこ迄元気なら、お前を心から抹殺したい奴らもさぞかし喜ぶだろうし」

ローゼは救いを打ち消す、その冷たい言葉に、上げかけた顔を再び下げ、俯いて震え出した。

だがフロントレイユの言葉は尚も、続いた。

彼の期待とは、まるで逆方向に。

「……まさか今更、吐くなんて言わないんだろう？

自分の意思を貫き通す、覚悟とか意地とか、根性くらいは、お前にだって、あるよな？」

ギデオンが、倒れている相手を更に踏みつける勢いのフロントレイユに、とうとう俯いたまま、つぶやいた。

「…フロントレイユ」

だがフロントレイユはお構いなしだった。

「意気地無しと呼ばれたく無かったら、せいぜい最後迄姿勢を貫いてくれ。

まあそれなりに、立派な覚悟だとは思つてやる。

…だがアデンに忠節を通すなんて、ただの大馬鹿としか思えない。どう頑張つたつて」

そう言つて肩をすくめ、にっこりと、それは優雅でにこやかな笑顔で、レンフィールに振り返った。

「…ああ、すまないレンフィール。

私でも彼の口を割らせるのは、無理なようだ」

だがローゼは、機会はここしか無いとばかりに、鋭く叫んだ。

「…命じたのは、アデンだ！」

ファントレリュは眉間を寄せ、必死な表情を浮かべるローゼにゆっくり、振り向いた。

「…失望させてくれるな。ローゼ。

君は今何も、言わなかったよな？」

だがローゼはなりふり構わず叫んだ。

「…アデンだ！」

私にギデオンを殺せと、命じた！」

ファントレリュは暫く沈黙した後、ギデオンに振り向いた。

「…君も勿論、聞いていないよな？」

ローゼがほざいているのはどうせこの場だけの事だ。

公の場になれば初め言ったように、脅されて証言したとか何とか言つて、前言撤回するに決まってる！」

ローゼの眉が、泣き出しそうに寄った。

ファントレリュは彼の言葉等、握りつぶす気にいる。

「…証言すればいいんだろう?!」

彼の声は悲鳴に近かったが、ファントレリュは腹の底から、怒鳴った。

「…しなくて、いい！」

この場で誰も、聞かなかつた事にすれば、私を犯す間も無く君を闇に葬れるチャンスなんだ！」

その本気の言葉に、ローゼがさがるように、かつての自分が余裕で対応していたギデオンと、レンフィールを見た。

レンフィールが、ローゼに必死で訴えるような瞳で見つめられ、ギデオンを、それは悲しげに見た。

ギデオンは一つ、ため息を付いて言った。

「…公の場で確実に証言すると約束するのなら、聞いた事に、してやる」

ローゼはそれは必死だった。すぐ様返事を、返す。

「…約束する！」

ファントレイユはだが尚も、きついブルー・グレーの瞳で射るようにローゼを見つめたまま、きっぱりと言った。

「…こんな男の約束の、どこが信頼出来る！」

ローゼは叫んだ。

「絶対だ！」

ファントレイユは、それは不満そうにローゼを見て、腕を組み直した。

「…命乞いして迄、私を犯したいのか？」

なら言つてやるが、男相手で私はバージンだから、下手くそな奴にされるのは死んでも嫌だ！」

「…ファントレイユ」

普段傲慢なアドルフエスが、珍しく沈んだ声で言った。

「…何だ？」

「俺が保証してやる。」

奴にはもうお前をどうこうする、気力は残っていない…」

だがファントレイユはそう言うアドルフエスにも、喰ってかかった。

「…君の保証の、どこが信用出来る！」

こいつはレイファスに振られて、ギデオンを殺す職務を遂行出来ずに、命乞い迄して生き延びて、私に一泡吹かしてやろうとか、企んでるに決まってる！

思つたより私が手強かったから、見て見ろ！

あんな哀れな演技迄して同情を引こうだなんて、最悪にタチが悪いつたら、ないじゃないか！

そうなんだろう？ローゼ！

お前が一筋縄ではいかない手練れの刺客だと言う事は、ちゃんと、解ってる！

…一介の、職務を誠実に遂行する、真面目な隊長なんかじゃなくなー！」

ローゼが、と言えば彼の耳に届くのか、もう解らなくなったよう

に、絶望で深く、それは深く、二度と顔が上げられない様子で、項垂れた。

ギデオンがつい、失望しきったローゼを、氣遣うように目で追い、ファントレイユに取りなすようにささやいた。

「ファントレイユ。君を犯そうとする時、君の言った言葉が脳裏に蘇ったりしたら大抵の男は一泡吹かせる前に、役に立たなくなると思うんだが……」

ギデオンがそつと言うと、ファントレイユがギデオンを見た。

「……そんな繊細じゃ無い君が例えそうなたとしても、この男は君の想像を遙かに超えた、それは図太い神経の持ち主だからな！

どうかは、解らないぞ？」

ファントレイユはきっぱり言い切り、ローゼは更に、自分の命の火が消えていくのを感じて、真つ青な顔で項垂れる。

ギデオンは、自分の目に映ったローゼの姿が、どう考えてみてもファントレイユの意見よりは正しいと思い、言った。

「……どうだ？ローゼ。」

まだ、ファントレイユを敵に回す根性があるか？」

ギデオンに聞かれ、ローゼが顔を振り上げ、悲鳴のように叫んだ。

「……ある訳無いだろう？！！

口から毒を吐く生き物だなんて、この外見を見て誰が思うんだ！！」

皆が、それは納得したように頷きまくる。

が、ファントレイユは心底呆れたようにつぶやいた。

「私の言葉が毒に思えるのか？……本当に、そんな程度の根性で、ギデオンを暗殺をしようとしたのか？」

その顔は真顔で、誰がどう見ても、ファントレイユは心の底から驚いている様子だった。

ローゼは涙目で、声を震わせて言った。

「……人を殺す方が、お前と話すよりよっぽど、楽だ」

ファントレイユはだが、一度敵に回した相手に手加減するような甘

い男では無かった。

つい、本音を吐く。

「そりゃ、物陰に隠れて命を狙う位、誰にだって出来る。」

私だって、やろうと思えば出来るぞ……？」

この言葉に、ぞつと背筋に冷水をかけられたように怯え切ったのは、ローゼの方だった。

彼らが、やれやれと首を振り、もう聞くに耐えないという様子で室内を出ようとした時、ローゼがギデオンの背に、必死で命乞いするように叫んだ。

「……ギデオン！」

確実に公の場で証言するから、身の安全を保証してくれ……！」

決死の哀願で、まるで命綱にすぎるような悲愴な声だった。

ギデオンは恋に悲慘に破れ、ファントレイユの言葉で思い切り切り刻まれてずたぼろで、更に命迄もファントレイユに握り潰されかけている、それは哀れなその男に、一つ、頷いた。

ギデオンの保証は誰よりも信頼出来たから、ローゼは心の底から、安堵した。

が、ファントレイユは大いに不満そうだった。

腕組むと、ギデオンの真正面に立ち、言う。

「ギデオン。君は甘すぎる。」

君の命を狙ったんだぞ？」

そんなに優しく、どうする？」

“優しい”と言う言葉に皆の足が、途端にその場に凍り付いた。

ギデオンは心の中で

『これは優しいんじゃない、哀れな相手に対する、最低の情けをかけたただけだ』

と反論したかったが、ファントレイユの反撃を想像した途端身が震って、止めた。

それで、出来るだけ差し障りの無い言い様を、心がけた。

ファントレイユの言葉の暴力が、自分に矛先を、向けないような。

「…ファントレイユ。」

君に言われた事は彼にとっては、全身を切り刻まれたも同然だ。体の傷には薬が塗れるが、心の傷薬は、無い」

ファントレイユの眉が、珍しいギデオンの意見に、思い切り寄った。

「………そんなに、柔な神経はしていないだろう？」

私にちよつと言われた位で…！」

ギデオンはため息混じりに、心から言った。

「…ファントレイユ。」

君のちよつとは、他人には、ちよつとなんて程度では、とても済まないものなんだ」

ファントレイユは暫く黙っていたが、口を開いた。

「君達は彼の口を割らそうとして出来なかったんだろう？」

…吐かそうと思っていけない私が話して、どうしてあの男はさつさと口を割る？

…ふざけているとしか、思えないだろう？」

あまつさえ、最初に人に向けて言った言葉が『犯してやる』だ。

しかも、平気で人の命を奪う。

そんな男にまともな神経が通っていると、君は本気で考えているのか？」

ギデオンが、ファントレイユを見つめた。

「…そりゃ、ローゼがさつさと口を割ったのは、彼に神経が列記としてあつて、これ以上君を敵に回す根性が、無かったからだだろう？」

「…君とレンフィールは敵に回せてか？」

………それはどう考えたって、おかしいだろう？」

だがギデオンはどうあつても納得いかない様子のファントレイユに、辛抱強く語りかけた。

いつも短気なギデオンのその態度に、レンフィールもシャッセルもが心から感嘆したが、アドルフエスはギデオン迄もがファントレイユの言葉の剣を、本心ではそれは、怖れているなと感じた。

「…ファントレイユ。」

私は全然おかしいと思わない。

むしろ良く、耐えた方だと、感心したものだ」

だがファントレイユはギデオンのこの返答に、心から驚いてつぶやいた。

「……君が？本当に？」

ギデオンが途端に憤慨する。

「私を一体何だと思ってるんだ？」

ちゃんと神経は普通に通っているんだぞ！

誇りだって、一応ちゃんとある……！

第一、尋問で

『あっちの方は全然大した事無い』とか

『下手くそ』とか罵倒されたりしたら普通そこで、思い切りヘコまないか？」

……しかもあんな男が真剣に恋心を抱いた相手に

『期待外れで失望した』

という理由で振られたりしたら、男としてもう立つ瀬はどこにも、無いじゃないか……！」

ファントレイユはそう言うギデオンをたっぷり見つめたが、思い切り眉を、寄せた。

「………そういうものか？」

「……そういうものだと、私は今まで思ってきたし、事実それでローゼは降参したじゃないか！」

ファントレイユは思わず、それは頂垂れるローゼの姿を、見た。

「……まあ、確かに」後ろでアドルフエスが、レンフィールに小声で聞いた。

「……ローゼと渡り合った時、ファントレイユは我が目を疑う程の凄腕だったよな……？」

奴は自分の腕は、全然大した事が無いように言うが。

俺が見た限り、かなりの腕に、見えたんだが……」

アドルフエスのそれは混乱する様子に、レンフィールが同情するよ

うにつぶやいた。

「…安心しろ。アドルフエス。

俺にもちゃんと、大した使い手に、見えたから」

だよな。とアドルフエスは頷いて、つぶやいた。

「…それにあれだけ凄まじい罵倒を浴びせおいて『ちょっと』だとか、ほざいてただろう？あいつ。

ファントレイユの物の価値観は完全に、いかれてる。

あいつに、正しい価値観を教えてやる奴は、誰もいないのか…？」

レンフィールが思い切り、本心から頷いた。

「…それについては、全くの、同感だ」

シャッセルが途端に、それは無理だろうと、深く暗いため息を付き、振り向いたアドルフエスとレンフィールの、救いを無くした。

その部屋を出た陽の差し込む廊下で、ギデオンのファントレイユの背に、そっと聞いた。

「…尋問の際、ローゼと以前何かあった口ぶりだったけど…」

彼の問いに、ファントレイユは動揺も見せる様子無く説明しだした。

「…ああ。ほら、ローゼは都守備隊からアデンに引き抜かれて、近衛の隊長に納まったのはちょうど、半年前だったろう？」

…あの男の就任直後に、ちょっと襲われてね」

レンフィールは聞き流そうと思いつい足が止まり、シャッセルは顔を上げてしまい、アドルフエスはその場から立ち去りたかったのに、足が動かず心の中で悪態をついた。

「…襲われたって、だが別に剣で斬りかかれたんじゃないだろう？」

ギデオンの問いに、ファントレイユは肩をすくめた。

「…無論、そつちじゃなくてね。

君の事は良く知ってたんだろうが、私の事は知らなかったみたいだ。ともかく、中庭でふいをつかれて抱きしめられて唇を奪われた」

フロントレイユが何気なくそう言うと、ギデオンはたっぷり彼の顔を見つめて

「…それは凄く、無謀な行動だな」

とつぶやいた。フロントレイユは肩をすくめて見せ

「君にそういう行動に出るよりはよっぽどマシとも言えるがね。」

…まあ、就任直後だったし、一応アデンの肝入りなんだし、私の事が解ってないんだと、やんわりとお教えしようと振り払う時に丁寧に対応していたら、あいつ、さっさと私の鳩尾に一発喰らわしてね。随分手慣れた様子で、私ときたら一瞬息が止まっちゃまってつい、立つてられなくなった所を、そのまま地べたに寝ころがされて上から、組み敷かれちゃって」

「……そこ迄したのか…」

ギデオンが、青くなつて俯いた。

道理でフロントレイユが、ご意見無用で腹を立てまくっていた理由が、飲み込めて。

が、顔を上げると、聞いた。

「…だが君が、彼にひどい報復をしたと言う話は聞かなかった…まさか、我慢したのか？」

「…まあ、その時組み敷かれていい気になつて口づけてきやがるんで、きつちりこの野郎と、殺気を放っていた所に、ヤンフェスが通りかかってね。」

ほら、彼ときたら状況を読むのも、場を察するのも得意だし、気の利く男だから…。

就任したての隊長に私が組み敷かれて殺気を放ってるのに気づいて直ぐ、私に声を掛けて近寄つて来て。

無論彼は、思い切りローゼに煙たがられて睨まれたが…。

ローゼは解ってないだろう？」

ギデオンは同意するように、頷いた。

「…ヤンフェスは君が、彼にひどい反撃するのを、防いだんだな？」
フロントレイユは、そうだと頷いた。

「彼はローゼを追い払い、私の側に来て聞いた。

一体何だつて就任したの隊長を、殺そうと思つたのかつてね。

… 正直、あんまり図々しいし、自分はそれはいい男で、大抵の相手は自分の魅力に屈服せざるを得ないんだ、と思つてるのがバレバレな位高慢だつたし、実際の所、相手の吐き気を誘う程気持ちの悪い下手くそな口づけで、よくそんな思い込みが出来るなど言うくらい最悪だつたから、きつちり思い知らせてやりたくて、暫くは我慢してしたい様にさせ、思い切り隙を作らせて三刺し目くらいで殺してやろうと思う程、腹を立ててた。

だがその後のヨシユア隊長暗殺の時、ローゼの仕業じゃないかとささやかれ、やつぱりあの時、殺つとくんだつたと後悔したものだ」

アドルフエスが、ほっ、とため息を吐いた。

レンフィールも顔を下げたままだつた。

「ローゼの場合は仕方無いとしても…最近の君は、実力行使の相手には殺気で応えるのか？」

ギデオンが、大いに頷いた。

「私だつたら、顎を割る程度で済むぞ」

ファントレイユの眉が、思い切り寄つた。

「… 普段温厚な私だつて、キレるさ！

相手を気遣つて、上品に私がどういう人間かをお教えしようとしたのに、鳩尾ちなんかに喰らわされちゃ！

… やり方があまりに下品だし、汚いだろう？！

第一、レイファスに同意する訳でも無いが、相手に吐き気をもよおさせるような口づけしか出来ない男が、いかにもテクがあるような顔をするなんて、最悪に図々しいだろう？！」

シャッセルが眉を寄せたがつぶやいた。

「… 余所から転属で来て、君の事を知らなくて、君に目を付けるような男好きな男なら、今度からは必ず警告するようにしよう」

アドルフエスも黙して頷き、レンフィールも下を向いたまま、頷い

た。

「…確かに、警告は必要だ。

どうせ君の事だ。

誰にも気づかれないう殺して、死体の処理迄考えてあるんだろう？」

レンフィールのつぶやきに、ファントレイユは思い切り眉を寄せた。

「…人聞きの悪い。

言っただろう？私はギデオンと違ってそれは温厚なんだ。滅多にキレたりはしない。

だがその私がキレる程、ローゼは礼儀知らずだったんだ！

…これだけあいつの事が嫌いと言うのに、ギデオンに暗殺は企むは、レイファスと付き合ったりするわけで最高調に嫌われきっているのに、尋問に訪れた私に、あの大馬鹿が何て言っただか、君達も聞いたりする？」

『犯してやる』だ。

どこ迄人を舐めたら気が済むんだと腹綿が煮えくり返るし、思い知らせてやろうという気になるだろう？

…なのにあの根性無しときたら、さっさとペラペラしゃべっちゃまって情けないっただら！」

シャッセルがつい、つぶやいた。

「…でも君は尋問したんだから、相手をしゃべらせたら職務を全うした事になると思うが」

ファントレイユもつい、そうつぶやく彼に振り向く。

「…シャッセル。

君には誰もが一目置いて君を尊重するから、相手のぞんざいな態度に腹を立てて、殺してやりたいと思うような事は起き無いんだろう？」

シャッセルは思い浮かべて、確かに。と微かに頷いた。

「…私が短気なら今まで何人殺していたんだという位いる。

でもとても温厚だから、殺してやりたい程腹を立てた相手は、あい

つを入れてもたつたの二人だ。

「少ないもんだろ？」

その場に居た全員が、数は少なくとも、一度怒った時のその、容赦無しの徹底しきつたやり方に、全然同意出来ずにため息をつきまわったが、ギデオンの代表して言った。

「……ともかく、君の外見に騙されるなと警告して置こう。君を本気で怒らせると……」。

それこそ、権威も名誉も自尊心もズタボロにされて……それはひどい事になるからな」

ファントレイユは異論を唱えようとしたが、他二人同様、シャッセル迄もが

「……ヘタをすれば、自信を全て無くして、廃人同様だ……」と結果を憂いた。

見栄張りのレンフィールも、ついぼそりと言った。

「人前で平気であれ程有無を言わせず罵倒されたりしたら、社会的地位も他人からの評価も一気に下降して、抹殺されたも同然だしな

……」

アドルフエスは口を開きかけて閉じ、そして結局、言った。

「……確かにあいつのやり用は下劣だが………あれは……」。

つまり、その……」

ファントレイユは顔を上げて即座に言った。

「……テクなし？下手くそ？」

アドルフエスは耳に入れたくないように顔をしかめた。

「……そういうのは、個人の感覚なんじゃないのか？」

つまりお前はヘタだと思っても、別の奴に言わせればそれ程ひどくないとか……」

ファントレイユはため息を、ついた。

「……そう言つて、ローゼを慰めるつもりか？」

残念ながらあんなにいいと思える奴は、余程経験が無いか、お世辞しか言わない奴だと思うぞ。

その場ではいい顔をしておいて、後で絶対、口をハンケチでそれは丁寧、幾度も拭っているだろう」

アドルフエスが、自分の事のように、肩を、落とした。

「…ともかく、君たちは大貴族でいつも媚びへつらわれているから、まっとうな庶民の感覚が解らないんだ。

身分だけで、人の心からの尊敬と正当な評価が得られると思うのは、大間違いだ」

三人が、一気に沈み込み、ギデオオンが慌ててファントレイユの、肩を抱いて、促した。

「…ともかく、アイリスに顔を立てられる。

ローゼを吐かせたんだから、君の手腕と頭の回転は大したものだ…」
ファントレイユは自分の本心とは違う結末に、それは不満そうだったが、三人は遠去かる二人の靴音に、それはほっとして、胸を撫で下ろした。

ソルジェニーはそれは、うきうきしていた。

ギデオオンは無事だったし、その丘陵地帯は晴れ渡って、それは気持ちのいい風が、吹いていた。

アイリスは、ソルジェニーが馬をとて上手に操るのを知っていて、かなり飛ばしてくれて、その優雅でゆったりとした騎士と一緒に居るのは、とても安心して楽しかった。

カディツ公の城を訪れたが、公とその兄が、息子の帰還をそれは喜び、彼らに礼を言った。

城内はまだ、後片づけにこった返し、アイリスはもてなしを丁寧に断った。一同が晴れやかに、要塞に戻る。

中庭で、ギデオオンらは帰還者を出迎えた。アイリスは、行きの時と違い、陽の中のシャッセル、アドルフエス、レンフィールの様子が随分暗いのに目を止めた。が、ギデオオンに微笑んだ。

ギデオオンは直ぐに、

「ローゼは公の場で証言すると吐いたので、連行頂いて、結構です」と告げた。アイリスは頷いたが、ファントレイユがとても不満そうなので彼にそつと屈んで、尋ねた。

「君が、吐かせたんじゃないのか？」

ファントレイユは優しく伺うアイリスの顔を見つめ、告げようとした時、ギデオンの口を挟んだ。

「…勿論、彼の手柄だ！」

それは、素晴らしかった！」

ソルジェニーが何も知らず、ギデオンの誉め言葉に顔を輝かせて、ファントレイユを見つめた。

ヤンフェスとフェリシテだけは、後ろの三人のそれは暗い様子に『過酷だったんだな』

と当たりを付け、目を見交わし会った。

「ではローゼの身柄を頂いて、私も一足先に戻るとしよう。」

君達は野営地に戻るだろう？

軍を率いて都に戻ったら、真っ先に近衛軍中央補佐官舎迄、来てくれ。

後の事は私とギンターに、任せてくれて結構。

実は公に奴らを叩ける好機をずっと、待っていた。

いつもちよつかいかけられて大概、こっちの堪忍袋の尾も切れかけていたのですね」

そう、優雅にその苦労を微塵も見せずに微笑むアイリスを、ギデオンは見つめた。

アイリスは、次々とドッセルスキ派に付く気弱な貴族達と違い、最後迄平然と敵対し続けてきた男だったから、無理無いと皆は思った。彼の失脚を目論む諸々の計画や、暗殺迄あったらうに、アイリスは尽く退けて、反ドッセルスキ派の人間をその傘下に、庇い続けてきた。

…確かに、限界だったろう…。

近衛では、ギデオンの庇いきれない相手は次々と職を辞し、そうで

ない相手は暗殺迄されるように、なっていたから。

アイリスの合図で、彼の部下達がローゼを引き立てる。

ローゼは通り過ぎ様、そつ、とファントレリュを伺い見たが、彼がきついブルー・グレーの瞳を射るように向けると、慌てて顔を、背けた。

アイリスがそれを見てつい、困ったように眉を寄せると、つぶやいた。

「…君は私の甥を随分、怒らせたようだな…」。

実際彼が怒ると、私ですらお手上げなんだ。出来る事はせいぜい…

…君の長生きを、祈るくらいだ」

ローゼは一瞬にして、真っ青に、成った。

その様子はそこに居た全員にはつきり解る程で、ソルジェニー迄がつい、その刺客を、凝視した。

何一つ怖いもの等無いと言われる程肝が座りまくり、どんな事にも対処出来ると実力を評価された当代一の人物、アイリスに“お手上げ”と………言わせるのが、どれ程凄まじいか、ローゼは身に染みたようだった。

アイリスはファントレリュの機嫌を伺うように微笑むが、ファントレリュはアイリスに、言った。

「レイファスに、覚悟しろと伝言願えますか？」

アイリスが軽やかに、笑った。

「…宣戦布告かい？」

ファントレリュが途端に、低く強い声でつぶやいた。

「……趣味が、悪すぎる！」

あんな奴を味見した彼を、一生笑い者にしてやると、そう言っただけで下さい！」

ヤンフェスもフェリシテも、その意味は解らなかったが、馬上で縛られたローゼは勿論、ギデオンの後ろの取り巻き三人までもが首を項垂れたのを、首を傾げて、見つめた。

アイリスが苦笑した。

「…伝えておこう……」

アイリスは身軽で優雅な様子で馬に飛び乗ると、ゆったりと手綱を取って、ギデオンの微笑んだ。

「近衛軍中央補佐官で、再会致しましょう」

ギデオンが頷くと、アイリスは鮮やかな微笑を残し、帽子に手を掛け、王子に向かって馬上で一礼を取る。

ソルジェニーはその騎士の、優美な礼に、見とれた。

彼はマントを翻すと、部下に馬上で後ろ手に縛られたローゼを引立てさせ、軽やかに駆け去っていった。

ローゼへの尋問（後書き）

ああああ。うちわネタにどんどんっていくわ……………。

レイファスは、はっきり言って、男性ですが、

男性を平気で手玉に、取る人です……………。

そしてファントレイユは、女つたらしです……………。

この二人がいと同じ士……………。

ははははは。

笑うしか、ありません。

ちなみに、アイリスは、レイファスの恋人でした。

まあ、理由は色々ありますが、アイリスの

騎士道精神のたまものです。

単に、レイファスをほっとけなかったので。

ファントレイユはそれは、不満だったでしょう……………。

きつと。

怖くて、聞いた事ありませんが。

時間があったら、そっちの成り行きの

話も書いてみたいですが

完全にBLになります。

でも、色っぽい話になるかは、もの凄く

疑問です・・・・・・・・・・。

多分シリアスはほんのちよつとで、凄いギャグに

なりそう・・・・・・・・・・。

インタビュー

さて。ここまでのファントレユはさすがというか、相変わらずというか・・・・。

ギデオン：そうだな。心の底から恋愛を、謳歌していた頃だな。君は。

ファントレユ：だが、今こそ最高に謳歌しているが・・・・。

ギデオン：私に惚れているのが、謳歌か？

本当は殴られるのが、怖かっただけじゃ、ないのか？

フアントレイユ：どうして解らないんだ。本気だって。

最も君くらい恋愛オンチで経験値が低いと、

確かに誰かに惚れるという事に対して、想像力は全く、

働かないかもしれないが・・・。

だが本編ではどうしても聞けなかったが、なぜ私に、

応えてくれる気になったのか、解らない。

ギデオン：それは私だって、何度も言っているじゃ、ないか。

戦場で、命がけで私の背に、飛び込んで助けてくれるからだ。

フアントレイユ：・・・・・・・・・はあ。

ギデオン：・・・・・・どうしてそこで、ため息を、漏らす？

フアントレイユ：だって、そうじゃないか。

私が口説いたせいじゃ、ないんだろう？

私も何度も言っているが、君の背を護ったのは全く、下心無しの、行為だ。

君を、口説くつもりでやってない。

それが理由で応えてもらっても、ちっとも喜びじゃないんだ。

ギデオン：だって、しょうがないだろう？

掛け値無し、純粋な行為には普通心が動かされるものだ。

全うにお前に口説かれていたら、間違いなく、殴っていたぞ！

ファントレイユ：・・・だからいつもすごく、複雑なんだ・・・。

私の実力で君を口説き落とした訳なんかじゃあ、無いからな・・・。

アドルフエス：贅沢言いやがって・・・！

ギデオンが男に落ちるなんて、転変地異でも起こらない限り
有り得なかったんだ！

・・・それを落として、言うセリフか・・・！

だから貴様を、俺は大嫌いなんだ！

ギデオンが殴らないなら、俺が殴ってやる！

アドルフエス。貴方の気持ちは解りますが、主要キャラじゃないから、

控えて欲しいんですが・・・。

アドルフエス：大体、お前が一番悪い！

ファントレイユは本来王子と、くつつく筈だったろう?!

ファントレイユに、押し切られやがって!

情けない作者だ!

だって、仕方ないじゃありませんか。

私だって、王子をそれは、見目麗しく、性格良く描いて、

微笑ましい恋愛小説にしたかった……。

でもファントレイユがどうしても、『光の王』の恋敵になるのは嫌だし、

ギデオンに惚れているから、彼とやらせろと五月蠅いし……。

ギデオンときたら、大層な口叩く割に、恋愛オンチだから、

経験豊富なファントレイユに隙を見せたら最後、

初心者の彼では、ファントレイユ相手じゃてんで歯が、立ちません・
。。。

その上ファントレイユと来たら、ギデオンに本気惚れしていて、

恋に狂っているしで……。

狂人は、敵に回さないのが得策でしょう……?

ギデオン：作者の、神という立場を放棄して、

ファントレイユがしたいように、させた癖に……。

だって……。

ギデオン。別に私は貴方の行動を制限したりしていません。

色事でファントレイユと張り合えるんなら、

やりあってくれて、結構ですよ？

ギデオン：……勝てる訳が、無いだろう？

私が毎晩剣の手入れをしている時間に、この男は、そこいら中の寝室を

渡り歩いていると言うのに……！

ファントレイユ：毎晩だなんて、大袈裟すぎる……。

いくら私だって、そこ迄、不摂生じゃ、無いぞ……。

でも、『近衛一の色事士』だとか、その他諸々の

不名誉なあだ名を頂いても、その甲斐あって君を落とせたと思うと、

今迄してきた事は無駄じゃ、なかったと、報われた気がする。

アドルフエス：・・・良く言う・・・。

誰に何と言われようが、ご婦人と楽しむ事を、止めなかった癖に・・。

ギデオン：第一不名誉なあだ名がどれ程のものだ？

君はどうせ、全然気にしないだろう？

レンフィール：そうだ！

そんな神経のか弱い男だなんて誰も、お前の事を思っていないぞ！

大体、影でならどれだけでも悪口が言えるが、一旦お前の面前で堂々と

言った所で、100倍返して戻って来て、言った方が

打撃を受けて落ち込む羽目になるじゃないか！

お前の面前で堂々と悪口を言える勇敢な男は、

近衛には一人たりとも、居ないぞ！

ファントレリュ：そういうのを、勇敢と言うのか？

ギデオン：私は勇敢だと、思う。

アドルフエス。レンフィール：ほら見る！

自他共に認める、誰よりも勇敢なギデオンでさえ、

君と口喧嘩しようとは思わない！

ファントレイユ：彼の専門分野は、拳だ。

まどろっこしい事が、大嫌いだから。

・・・こつこつ調子で、本編も長くなるんですね・・・。

はい！

ここで切り上げましょう！

今度こそ！

ギデオン：・・・アドルフエス。だがどうしてもファントレイユに腹が立つて

殴りたいと言うのなら、まず最初に、私が相手に成ってやるが、どうする？

・・・ギデオン。アドルフエスはこれで心底貴方に心酔していますから・・・。

いじめないでやって下さい。

こいつはこいつで、結構カワイイキャラなんで・・・。

ファントレイユ：君に面と向かってそう言われただけで目が、潤ん

でいるぞ。

ギデオン：・・・別に、いじめてないだろう？

ファントレイユ：恋心が、理解出来ない君には、言っても無駄か・
・・・。

だが一応言ってみるが、アドルフエスは私から、君を庇うつもりで、私を殴ると言っている。

・・・庇う相手に、自分が相手に、なってやるなんて言われたらそりゃ、

思い切り、へこみますね・・・。

レンフィール：アドルフエスが、気の毒過ぎて、言葉にならない・
。。。

ファントレイユ：君も同類だから、身につまされるだろう・・・。

レンフィール：お前もだろう・・・。

ギデオンに、惚れていない振りをして、安全地帯に逃げていた癖に・
。。。

我々の扱われようを見て、毎度望み無しと、本当は肩を、

落としていたんじゃないのか？

ギデオン：レンフィール。この男はお前達という教訓を見すぎて、

自分の恋心を、それは随分深い心の底に封じ込めていたから、

私に惚れているという自覚すら、無かった。

・・・お前達より数段哀れな男なんだ。

ファントレイユ：はぁ・・・。

君にだけは惚れるまいと、思い続けていたのにな・・・。

アドルフエス：情けない・・・。恋敵には理解されて、肝心の惚れた相手には全然

気持ちが伝わらないなんて・・・。

惚れた相手が悪すぎますからね、ギデオンじゃ・・・。

三人のため息で、埋まった所で、では本当に、この辺で。

踊る地方護衛連隊会議（前書き）

†：登場人物紹介：†

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフエス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

ローゼ・・・近衛連隊、隊長の一人。アデンに指令を受け

ギデオンに直接手を下す機会を狙う、暗殺者。

ギデオンより、年上の熟練の、刺客。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

て無くし

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全
て無くし
孤独な日々を送っている。

アイリス・・・ファントレイユの叔父で、『神聖神殿隊』付き連隊
の、長。

大貴族で、軍の実力者。反ドッセルスキ派の最右翼。
参謀、マントレンと、反ドッセルスキ同志で秘かに
交友があり、情報交換を、している。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに
出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

フェリシテ・・・ヤンフェスらの後輩。短剣の名手でヤンフェス同様
とても重宝されている。

主に、戦場ではヤンフェスと行動する事が多い。

踊る地方護衛連隊会議

それから間もなくだった。

ギデオンの姿が、野営地から伺えたのは。

勝利の証のような、素晴らしく豪華な金髪を目に、兵達の心が皆、浮き立つように騒ぐのを、マントレンは感じた。

ギデオンは野営地で、兵達がすっかりテントを畳み、出立の準備が出来て中央に集まっている様を、見つけた。

そして、兵達が彼がもう少し近づいたら、歓声を上げようとしているのに、気づく。

振り返ると、アドルフェスとレンフィール。

そしてシャッセルの後ろに、今だ不満げに俯く、ファントレイユを見た。

ギデオンは手綱を取り、馬の足を一旦止め、ゆっくりと後ろに馬の首を向けて進み、ファントレイユの横に、付いた。

それに気づいた、皆も馬を、止める。

ギデオンはファントレイユの横に並ぶと、彼に微笑んだ。

だがファントレイユは、ギデオンに並んで進もうとはせず、馬の足を、止める。

ギデオンの顔が途端、曇る。

アドルフェスが、眉を寄せ、レンフィールが、ため息を付き、口を開こうとしたが、シャッセルが先に、言った。

「…ギデオンの、好意を、受ける。ファントレイユ。」

それくらい、彼の為にしたって、いいだろう？」

シャッセルにそう言われ、アドルフェスに睨まれ、レンフィールも、そうしると、肩をすくめて見せ、ファントレイユは仕方成しに、自分に不似合いだと思っている、英雄の隣に並んで帰還する、榮譽を受けた。

後方に居たヤンフェスとフェリシテがそれを見て微笑み合い、ソル

ジェニーに、二人揃って促した。

ソルジェニーは気づいて、ファントレイユの横に馬を、付ける。ファントレイユは英雄と王子に挟まれ、困惑したように左右の二人を交互に見つめて、馬を下げようとしたがギデオンに首を横に、振られた。

「…私は、王子の護衛なんですよ？」

ファントレイユは言うが、ギデオンは聞く様子無く、言った。

「…なら並んでも、問題あるまい？」

王子も彼に、全開で微笑んだ。

ファントレイユは心からため息を漏らして、手綱を繰った。

ギデオンは、本当にファントレイユは手柄に欲が無いなど、感心した。

もしレンフィールだったりしたら、ソルジェニーを押しつける勢いで大手を振り、得意満面で凱旋したに違いないのに。

今や、ギデオンが来るのを、歓声で迎えようと待ち構える兵達の前へ、ファントレイユは英雄と並んで姿を、現した。

「ギデオン！」

一人が、叫ぶと、もう後は、一斉だった。

騎士達の、口々にギデオンの名を叫ぶ声が、野営地を駆け抜ける。

彼らの、命を尊び続けた金髪の軍神の無事な姿を、彼らは熱狂的な歓声で、迎えたのだった。

轟くようなその歓声に、ソルジェニーは、胸が本当に、熱くなった。ギデオンの隣でファントレイユは、兵達が心の底からの安堵に包まれギデオンを迎える、そのたくさんの笑顔に、親しみを浮かべ見つめている。

その横顔を見た時、彼が、自分の栄光なんかよりも多くの兵同様、ギデオンの無事を心から願い、真心で彼の身を案じ、いつもの余裕なんか忘れて、必死でギデオンの命を救ったんだと感じ、その彼の覚悟とやり遂げた素晴らしさに、ソルジェニーは涙が零れそうになった。そして…兵達の間に見せるマントレンさえもが、あの時

あれ程平静だったにも関わらずギデオンのその兵達の歓声に手を上げて応える、素晴らしく輝かしい姿を見つめ、感じ入ってる様子を見せた。

『無事を、信じるしか無い』と言った彼のその深い青い瞳は、再びギデオンの姿をその目に映し、感激で潤んでいたからだった。

つい、ソルジェニー迄もが、彼と共に感極った。

歓声は止まる事無く、ギデオンは取り囲む兵らのまん中で馬を止め、その姿をもう一度見られて嬉しいと心から喜ぶ皆の顔を見回し、感激で瞳を少し潤ませ、微笑んでみせた。

途端、もう一度歓声が沸き起こり、一斉に彼の名を、兵達が叫び始めた。

「ギデオン！」

「ギデオン！！」

「ギデオン！！！」

ソルジェニーはファントレイユを、見た。

ファントレイユはギデオンを見つめていた。

ギデオンは兵達の歓声を受け、彼らを包むように、見守った。

その輝ける金の髪は、英雄としての彼を更に眩しい程、輝かせていた。

ギデオンが、一声叫んだ。

「……戦は終わった！都に戻るぞ！」

兵達はその声に、怒号に近い歓声を上げ、持っていた物を一斉に、空に、放り投げた。

アイリスはローゼを連れ、『神聖神殿隊』付き連隊官舎の前庭に入った時、その建物の前に居る金髪の美丈夫の姿を見つけた。

既に昼はとうに過ぎ、内庭の木々は風にそよいで、気持ちの良い天気だった。

アイリスは部下達に頷くと、彼らは察したようにローゼを乗せた馬

を引き、別棟へと向かって行く。

ローゼが、後ろ手に縛られ、馬に背を揺らしながら、アイリスに振り向いて叫んだ。

「解ってるんだろ？な？ギデオンの命の保証をしている！」

アイリスはそう叫ぶ、金髪の年若い刺客の歪んだ表情を見つめ、少しためらったが、微笑んだ。

「……ギデオンの保証は、尊重しよう」

ローゼが途端、ひどい緊張を解き、ほっと息を吐きだした。

アイリスは少し肩をすくめたが、玄関で腕組みして待つ、美丈夫の近く迄栗毛の馬を進め、微笑む男の前で馬から、相変わらずゆったりとした優雅な動作で降りると、その男を見つめて言った。

「……ギンター。」

首尾は上々の、ようだ」

跳ねた金の長髪を胸に流し、ギンターが腕組みしたまま、さも愉快そうに、微笑んだ。

「……ギデオンの暗殺の知らせに飛び上がり、ダーフス大公が動き、デアヴォロス迄、動いたぞ！」

アイリスは濃い栗毛を揺らし、その濃紺の目を、輝かせる。

「……つまり、ドッセルスキの周囲は丸裸か？」

「ダーフス大公がドッセルスキを見捨てた上、デアヴォロスが脅しをかけりやもう、ドッセルスキに付く馬鹿は、いない。」

……ギデオンの暗殺が、モノを言った。

世事から遠ざかっていた軍神デアヴォロスでさえかんかんで、直ぐ様ドッセルスキ側に付く男達に刺客のような使者を差し向けたと、シェイルが言っていた」

「……では準備は整ったな？」

だが、ギンターはまた嬉しそうに、笑った。

「ドッセルスキを捕らえるんだな？」

が、アイリスは一瞬、表情を固めた。

「……ギンター、君まさか……」

ギョントーは笑ったまま、言った。

「おや？君も立ち会いたかったか？

ドッセルスキの逮捕に」

アイリスはとくに先を超されて、俯いてため息を一つ吐くと、帽子の頭に手をかけ、それを滑り降りしてささやいた。

「…当たり前だろう？

どれだけ楽しみに、していた事が…。

だが、まあいい。

どうせ立ち会ったって、罵り倒されるのが、オチだしな」

ギョントーはますます笑った。

「…それは俺が全部聞いてやった。

裁判の席じゃさすがにお前を罵れはしないさ！」

アイリスは少し笑うと、ギョントーの組んだ腕の横を、パン！と叩き、抱いて促した。

ギョントーは腕組んだまま、まだ愉快そうな笑顔で、アイリスと共に促されるまま官舎に、入った。

「アイリス…」

重い配色の室内の、窓から陽の差し込む廊下で、彼は二人が進んで来るのに気づいたように振り向いた。

その小柄で、艶やかな明るい栗毛に覆われた華やかな美貌は、面差しが彼に、似ていた。

ギョントーがアイリスを見つめると

「もう一人の、甥のレイファスだ」

「…ああ」

ギョントーは噂を知っているようだったが、あえて口には、出さなかった。

アイリスはその華やかな美貌の、小柄な甥に微笑みかけると、ささやくようにつぶやいた。

「ローゼは口を、割った」

レイファスはほっ、と一息吐いて俯くと、横顔を彼らに晒した。とても、可憐だとギユンターは思った。

が彼は理性的な表情を崩さすにつぶやいた。

「…では、ファントレイユは無事、ギデオンを護ったんですね？」

アイリスは察して、彼が口にする前に優しく言った。

「ファントレイユは、無事だ」

レイファスは少し眉を寄せると、掠れた声でささやいた。

「テテュスに早く、使いを。」

彼はそれは、心配している。

ギデオンの危機の時、ファントレイユは常軌を逸して無茶をすると

……それは、とても」

アイリスは頷いた。

「部下の一人がもう、『光の塔』に向かっている」

レイファスはアイリスの用意の良さを、忘れていた事に少し頬を染めたが、頷いた。

そのまま、背を向けてその場を立ち去りそうなレイファスに、アイリスは少しためらったが言葉を投げた。

「ファントレイユに、ローゼを味見した事を一生笑い者にしてやると伝えてくれと、頼まれたんだが…」

小声で言っただけだった。

が、レイファスは振り向いた。

途端、さっきの心配げな表情が一変し、きつい瞳をして眉間に皺を、寄せる。

ギユンターがつい、その変わり様に凝視すると、可憐な美青年は憮然とつぶやいた。

「…つまり、喧嘩を売るって、いうことですか？」

アイリスは少し微笑むと

「買いたくはないだろうが、彼はそのつもりらしい。ひどく、怒っていた。」

勿論、ギデオンを殺そうとした、ローゼにだが」

レイファスは一瞬、腑に落ちない表情をしたが、アイリスの少しすまなそうな表情に、ああ、そういう事か。と少し、笑った。

「つまり貴方を差し置いて、あんな奴と遊んだと、怒っていたと言う事ですか？」

ギユンターが見つめていると、アイリスは、少し首を傾けてそれでも、とても優しい声でささやいた。

「私は、構わないと言ったんだがね」

レイファスはアイリスの、その素晴らしい優雅な男らしさを瞳に映し、一瞬俯いてタメ息を吐くと、ささやくように言った。

「貴方の事は良く、解っている。

だがファントレイユは私が貴方を、袖にしたと思っている」

「だが、振ったろう？」

アイリスが微笑む。

ギユンターはそれを聞いて一瞬目を、丸くしたが、表情を崩さなかった。

レイファスはそれを聞いても、俯いたままだった。

「……でも貴方は傷ついたりは、しない筈だ。

私の方から頼んだ事だし、期間が終了したと思えば、それで」

アイリスは少し、寂しげな表情を、した。

「君は少し自分の魅力を過小評価している。

君みたいに愛らしい相手に、恋人のように微笑まれたり、まわりつかれたりしたら、大抵の男はそれは、嬉しいものだ。

ローゼもそれは、がっかりして見えた」

レイファスは顔を上げた。

その顔はとても冷静で、美貌が際立って見えたものの、きつくすら見えた。

「あの男は私と貴方の事を知っていたから、私が彼に傾いた時、それは大物の貴方に勝てたと、思い込んでいた。

でもその思惑が裏切られたからきつと、その事で落胆したんですよ」

だがアイリスはそれを聞いても、やっぱり意見を変える様子無く、微笑みを消さなかった。

ギューンターは、振ったのは確かにレイファスの方かも知れないが、痛手は彼の方が大きいように思えて、その理性的な表情を崩さぬレイファスを、感心したように見つめた。

アイリスよりも年若いのに、振った相手を気遣って、何でもない表情を作るレイファスを。

ギューンターの目から見てもアイリスは、確かにレイファスに応えてはいるものの、恋しい相手としてでは無く、大切な身内を労り慈しむような態度を、醸し出しているように見えたからだった。

ファントレイユ、そしてレイファス。

彼らに見合った気の使い方と、対応を、アイリスはしていた。

ファントレイユには、騎士としての彼をとて尊重し、レイファスにはその身はとて大切な存在だと、知らせるように。

レイファスはだが、そのギューンターの気持ち、察したかのように視線を一瞬、ギューンターに向けて少し微笑むと、そのまま背を向けて立ち去って行った。

ギューンターは腕組んだまま、顔をアイリスに寄せて小声でささやいた。

「…君の噂の、相手だろう？」

彼の母親は君の妹だと聞いた。

…その妹を敵に回しても、彼を奪い取ったそうだが、随分な事情がありそうだな」

アイリスは困ったように、眉を寄せた。

「…彼の、名誉に関わる事なのでね。

私が悪者で、いいさ」

短くそう言つとギューンターを見た。が、その紫の瞳は得心したような色を見せ、アイリスの、眉が更に寄った。

「……………知って、いるのか？」

ギューンターは肩をすくめた。

「別の噂が真実だとたつた今、解つた所だ」

「……別の、噂が出回っていたのか？」

アイリスが秘かに、心配げに尋ねるので、ギンターは彼の他人に見せた事の無いその表情に、呆れた。

「……余程彼の名譽を護りたいようだが安心しろ。

君を悪者にしたい奴らが、そっちの噂はデマだと、言い張っていたからな」

そしてアイリスを見つめながら続ける。

「……お望み道理、君は妹からその息子を奪つた、悪徳略奪者だ」

アイリスは、ほっとしたように、吐息を吐いた。がギンターはそれを見届けない内から小声で言った。

「……つまり君は、自分の領地内で幼い彼が犯されたりしたから、責任を取つたんだろう？」

アイリスはそれを口にするギンターを、少し睨んだ。

が、ギンターは平気でささやいた。

「……彼は責任を取られても嬉しくなかつた。

魅力を過小評価してるのは、君自身もだ。

君に恋人のように扱ってもらつても、気持ちがそれじゃな。

……しかも、彼の方から振つたんだろう？」

ギンターが、いかにもレイファスに、同情するように首を横に振り、歩を先に進めるのでつい、アイリスはその背に、声を顰めて投げかけた。

「……彼が、気の毒のような口ぶりだな」

ギンターは振り向くと、ぶっきら棒に告げた。

「……惚れた相手にははつきりそう言い、惚れてない相手にはそのまま言え。

恨まれても相手を、本当に傷つける事には、ならない」

アイリスは、俯いたまま吐息を吐き出すと「……レイファスは幼かつた。

大人で自分を大事にしてくれる相手と、恋愛ごっこをしていたに過

ぎない」

ギウンターが呆れて思い切り、肩をすくめた。

「…その相手がこれ程いい男なら、その初恋は永遠だろうな。

彼はあれでどうやら君の甥だけあって、姿の割には肝が座っているようだが、その初恋を忘れさせるような相手に出会うのは、至難の技だろうよ！」

アイリスはますます項垂れ、ため息を、付いた。

「…つまり私はレイファスにとっても、悪者だって事なんだな？」

ギウンターは思い切り、頷いた。

その、一度も人前で見せた事の無い、しよげ返ったアイリスについて、吹き出し言った。

「…君の弱味らしいな」アイリスが、気を悪くする様子無く、素直につぶやいた。

「ご覧の通りだ。

私は息子のテテユスにとってもとつくに、悪者なんだ。

世間を敵にしてレイファスを護ったが、テテユスに迄思い切り恨まれた。

後で気づいて全く迂闊だったが、テテユスはレイファスがとても、好きらしくてね……。

彼は私を父親じゃなく、まるで恋敵のように睨む」

ギウンターは呆けてその、一度も人前で見せた事の無い、弱々しい表情のアイリスを見つめた。

アイリスは最愛の妻を病で亡くして以来、その愛息子テテユスが彼の、唯一の弱点だと言われ続けて来た。

がテテユスはギデオンに次ぐ剣豪で、頭の回転も早く、アイリスの敵達にとって彼はアイリス同様、それは手強い相手だった。

つまり、アイリスには弱点が無いと、誰もが思っていた。

その最愛の息子に、恨まれて憎まれるだなんて。

ギウンターは吐息を短く吐くと、つぶやいた。

「…それは……とても気の毒な状況だな。

俺は君に同情は一切無用だと思っていたがこの件に関しては心から同情する」

アイリスは顔を、上げ、少し微笑んだ。

「君のような男に同情されるのは、有り難い。言葉だけや上滑りの同情じゃ、ないからな」

ギユンターが、頷きながら素っ気なく言った。

「俺は滅多に、同情はしないからな」

アイリスはそう言う彼を、じっ、と見た。

「……つまり、そんなに私が、気の毒に見えると言う事か？」

ギユンターは、少し言葉を溜めて、つぶやいた。

「その、通りだ」

アイリスは今度こそ、肩を落として深い、ため息を、吐いた。

それを見て、今度はギユンターが、アイリスの腕の横を、パンと叩いた。

まるで一度もしよげた事のない男を、力付ける様にして。

アイリスは感謝するように微笑みを浮かべたが、俯く顔を、上げる事は出来なかった。

髪の色も瞳も、そして長身の体格すらアイリスにそっくりな彼の息子、テテュスはアイリスからの使者を、『光の塔』と呼ばれる『光の王』を迎える居城の広間で、出迎えた。

それを告げられ、随分と安堵し、ほっとため息をついた所にその、使者はささやいた。

「近衛の毒は解毒すると、かのお方はおっしゃっていらっしやいました。

もう君の心配事は、無くなると」

テテュスはアイリスが、史上最悪の右將軍をととう、追い払う算段を付けたのを知った。

「……ではギデオンの祝いの品を、吟味しなくては」
上司の息子は微笑むだろうと、使者は思ったが、彼は寂しげに、俯いた。

使者に見つめられてつい、テテュスは顔を、上げた。

上司に、良く似てはいたがその息子は、アイリスよりもうんと優しく、真っ直ぐな気性に見えた。

上司はチャームिंगな人なつつこい笑顔と、無敵な程の強さで人を引きつけたが、この息子はその誠実で大らかな性格で人に好かれ続けている様子だった。

「……ギデオンが、戦場でもう無茶をしないという保証はどこにもないし、ファントレイユはギデオンの危機を、見過ごしたりはしない筈だ」

「……准将が本来の役職に、着いたとしてもですか？」

テテュスは、頷いた。

使者は言葉を失ったが、テテュスは微笑んだ。

「気遣いに感謝すると。アイリスにそう、伝えてくれないか？」

年下の青年に、優しくに見つめられ、使者は微かに、頭を揺らして返答に、代えた。

が、テテュスとその広間から出ようとした時、もう一人の使者が彼の足を、止めた。

彼はその男に耳打ちされて、つい声に出して尋ねた。

「……レイファスが来いと？」

『神聖神殿隊』付き連隊官舎迄？」

その男を、テテュスはじっと、見た。

時が時だけに、自分に何かあればアイリスは動けない。
だがその使者は、確かに見覚えのある顔だった。

男は、畏かどうかを吟味しているテテュスに、そっと付け足した。

「ファントレイユに喧嘩をふっかけられそうだから、相談に乗って欲しいと」

テテュスの眉がますます、寄った。

確かに、レイファスの呼び出しのようだったが、その内容が、彼に別の、危険信号を与えたからだった。

アイリスとギウンターが、『神聖神殿隊』付き連隊官舎の司令室に入ると、そこには数人の男達がたむろっていた。

一番長身の男がこちらに振り向いた。

「オーガスタス」

アイリスが言うと、栗毛で見事な体格の、いつもはそれは開けっぴろげで親しみやすい雰囲気の男は、げっそりした顔を、向けた。

「会議の後だったんだ。骨は折れてないが」

アイリスはオーガスタスが、思った程は大変では無かったと言いたかったのか、それとも本当に、骨を折りそうな事態を回避したのかを、伺った。

隣にたたずむ濃い栗毛と明るい栗毛が交互に混ざる独特な髪の色をした端正な騎士、ローランデがつぶやいた。

「腕で降ってきた拳を、受け止めた」

アイリスはタメ息混じりに『やっぱり、そっちか』と頷いた。

オーガスタスは、アイリスとギウンターを見つめてぶっきら棒に叩いた。

「……あの南領地『ノンアクタル』の糞野郎を言いくるめて、大公に恩を売った甲斐が、あったらしいな」

オーガスタスが顎をしゃくると、ダーフス大公爵への使者を務めた金に近い軽やかな栗毛のローフィスと、黒髪の男らしい立派な体格のディングレーが、アイリスを見つめた。

ローフィスはやつれきった親友オーガスタスを、それは気の毒そうに見た。

遠い王族の血を引くディングレーも同様、腕を組んで、沈黙していた。

今回の、立て役者の憔悴ぶりに、掛ける言葉も、無い様だった。

二人は会議後直ちにオーガスタスの使者としてダーフス大公と会い、約束を取り付け、その号令下でドッセルスキに組みする男達に、脅

しをかけて回ったのだ。

彼らの元にはとづくに、かつての左將軍、軍神ディアヴォロスから脅しが入っていたので、連中はあっさり、兜を脱いだ。

そして根回しが済み、ギウンターは二人から首尾は整ったと聞くやいなや、ドッセルスキをさつさと逮捕、拘留して、近衛の補佐官舎に拉致した。

ディングレーがオーガスタスを見て、つぶやいた。

「……どう考えても、役回りはいいつが一番、大変だった」

ローフィスも、心から、頷いた。

「……だが、大乱闘に成りかねない地方護衛連隊会議なんて、あいつにしか抑えられない」

ギウンターも、心から頷いた。

「アタマに来て、冷静さを無くさない忍耐力が、人を外れて必要だからな」

アイリスも言った。

「野蛮人達との通訳も必要ないし」

オーガスタスが、とうとうがつくり、首を垂れた。

「……誰でもいいから、不適合と言ってくれ！」

皆が隣のローランデを見る。

その澄んだ青い瞳の端正な騎士は、見つめられてつい、つぶやいた。
「……剣を抜くならいつでも役に立てるが、いかに剣を使わないかだつたし……」

もう一人、際立って美貌が目立つ、銀髪のシェイルがエメラルドの大きな瞳を向けて、腕組んだ。

「会議は荒れまくったんだろう？ 南の、アーシユラスはドッセルスキをそれは、お気に入りだったから」

この中で一番大柄筈のオーガスタスは、そう見えない程背を屈め、暫く、手を机に乗せて体を支えるようにし、俯いたまま告げた。

「……ドッセルスキからの山程の賄賂をもう近衛が送らないと聞いて、噴火した」

ギュンターが素っ気なく言った。

「そりゃ、そうだろう。」

で？それを命じたダーフス大公の屋敷に、剣を抜いて怒鳴り込まないと、どうやって約束させたんだ？」

オーガスタスは顔を、上げられなかった。

そう、アーシュラスはアースルーリンドでは珍しい、黒い肌をしていた。

彼はそれを、誇りに思っている様子で確かに、その黒い肌に金の髪は素晴らしく映えていた。

南領地ノンアクタルの大公は多くの妻の中から一番剛胆で頭が良く、押し出しがきいて迫力があり、姿も美しい息子を後釜に、据えた。

他の領主達が同郷の領主達を競争相手にするのは違い、南領地ノンアクタルでは次期大公子息の敵は同様の、それは多数の、大公子息達だった。

後を継げれば王様。しかし出来なければその他大勢の、役立たずの王子でしか、無いからだ。

…つまりそんな厳しい条件の中で、大公を継ぐ男が地方護衛連隊長だったから、半端じゃないのである。

彼は激怒した。

「定例報告を取りやめるとは、どういう事だ？！」

北領地「シェンダー・ラーデン」の中央護衛連隊長でローランデの息子、マリーエルが、腕組みしたまま、つぶやいた。

「近衛から直で、南領地ノンアクタルだけに定例報告がある事自体が間違っていると、どうして気づかないんだ！」

アーシュラスは、その明るい栗毛の中に濃い栗毛の混じるメッシュの髪を、長くその背に流し、濃い青紫色の瞳の小顔の美青年の、見目こそは女顔だが中味はそれは恐ろしい、人喰い野獣に匹敵する男

の発言に、思い切り睨んだ。

今にも剣を、抜きそうデ、マリーエルの補佐の彼の弟テレッセンも、西領地「シャノスゲイン」のウェラハス、東領地ギルムダーゼンのダーディアンの両隊長らも、行方を慎重に、見守った。

両隊長は、その通り、おかしいと言ったってどうせアーシユラスが、聞きやしない事を知っていた。

東領地ギルムダーゼンの、金髪の連隊長ダーディアンが、怒鳴った。

「出したくないと言ってるだろう？」

アーシユラスは怒鳴り返した。

「今まで出していたものを無くすのは、許さん！」

そして、どいつに話を付けに行こうか、迷った。

当然、定例報告で賄賂を送っていたドッセルスキだが、ドッセルスキに圧力をかけた奴が当然、居る筈だった。すぐに、近衛に一番大きな発言権を持つダーフスだと、思い当たる。アーシユラスはにやりと笑うと、オーガスタスに告げた。

「で、その取りやめ命令を出した男は俺の報復が、怖くないと、そう言っただんな？」

どう聞いても、脅しだった。

オーガスタスは頭を抱えたかったが、とぼけ通した。

「報復は頂けない。近衛と南領地ノンアクタルの全面戦争になるぞ」だがアーシユラスは折れなかった。

「ほう。ダーフスは近衛を動かす力迄あったか？」

出勤命令は、將軍の決定権だ」

ドッセルスキが南領地ノンアクタルの遠征にせつせと出向き、アーシユラスといつも宴会三昧で仲良しなのを、そこに居る全員が知っていたので、ドッセルスキを差し置いて出勤は出来ない。

と、アーシユラスが突きつけてきたなと解り、皆がオーガスタスの出方を息を飲んで、待った。

オーガスタスが、つぶやいた。

「こちらから、騎士を出す。」

決闘で決めよう」

アーシユラスが瞬間、立ち上がった。

そしてつかつかと、激しく靴音を鳴らしてオーガスタスに、詰め寄った。

そんな、肌の浅黒い、体のでかい猛獣に、携えた剣の柄に手を掛けながら、眼光鋭く詰め寄りたりしたら大抵の相手がびびるものだが、さすがに体格ではその色黒の野獣にも負けない、大柄なオーガスタスは、顔色も変えなかった。

アーシユラスは自分とほぼ同じ位の長身のオーガスタスに、唾がかかる程顔を近づけて怒鳴った。

「意見を、通せと言ってるんじゃないぞ！

あたり前にあつた事を、止めるなど言ってるんだ！」
だがオーガスタスとはばけた。

「同じ事だ。決着は決闘で付けよう」

瞬間、アーシユラスの拳がオーガスタスの頬に入り、オーガスタスは咄嗟に腕を曲げてその拳を、ぎりぎりで防いだ。

腕に阻まれ、アーシユラスは今度はオーガスタスの腹に入れようとしたが、オーガスタスは一步引いて、怒鳴った。

「…決闘が、余程怖いらしいな！」

アーシユラスの、動きは止まり、凄まじい顔でオーガスタスを、睨んだ。

「…決闘は当然だ！

それじゃ足りない、言ってる！」

そこに居た全員が、やれやれと首を横に、振った。

「…欲張りだな！」

オーガスタスが言うと、アーシユラスははばかり事無く、怒鳴った。

「ドツセルスキは金の他に、見目の良い肌白の女も、寄越したぞ！

！！」

そこに居た全員が、本来秘密裏に取引される、賄賂の内容をきっぱり明かす、その常識外れに言葉を、無くした。

オーガスタスは心から、その尻拭いに、うんざりした。

アーシユラスは、怒鳴った。

「金は決闘で、決めてやる。」

「だが女は、それではすまさんぞ！」

アーシユラスの様子に、仕方無くオーガスタスが、聞いた。

「どう、すまない？」

「今後一切引くからには、相当の相手をもらおう」

オーガスタスはい、アーシユラスの言い切りに問うた。

「…相当の相手って、誰が決めてるのか？」

アーシユラスはい、一瞬考えるように首を、傾けて揺らすと、本音を漏らした。

「…ギデオン」

室内から一斉に、ため息が漏れた。

オーガスタスはい、全身に疲労を感じた。

「あれは女じゃない」

だがアーシユラスは直ぐに、言った。

「肌白であれば、男でも別に、いい」

オーガスタスはいにも無く、言った。

「肌白の男は他にも、居る」

アーシユラスはその、素っ気ない却下に、仕方無さそうに、顎に手をかけ、考え、そしてゆっくり、周囲を、見回した。

色白で細面の端正で大人しげなテレッセンに目が止まると、その隣の兄、マリーエルの目が、凄まじい光を発して睨み据えた。

アーシユラスはさっと視線をそらし、その横の父親を、見た。

そんな大きな野獣の息子が居ると思えない程若々しくて、端正で色白で、艶がある。

「…あれなら、どうだ」

オーガスタスはそれがローランデだと解り、彼の恋人ギユンターが、欠席する事になった天の巡り合わせに心から感謝した。

彼がそれを聞いたらとつくに、かんかんになって剣を抜き、アーシ

ユラスに襲いかかって大乱闘に、発展していただろう。

が、やはりその息子も黙って無かった。

マリーエルは眼光鋭くアーシユラスを睨み、そして叫んだ。

「肌白の決闘の方は俺が、受けてやる！」

俺が勝てばお前の意見を、引っ込める！」

「お前が負けたら、父を差し出すか？」

アーシユラスが言った途端、マリーエルがかんかんになって立ち上がり様、剣を抜いた。

テレッセンとローランドが慌てて彼を、抱き留めるが、そうそう引き留めては置けないくらい彼は腹を立てているようだった。

アーシユラスも今にも剣を抜きそうで、オーガスタスは慌てて怒鳴った。

「……この場で剣を抜いた奴は誰だろうと、投獄するぞ！」

だがアーシユラスは笑い、怒鳴り返した。

「俺を拘束出来たら、言うんだな！」

オーガスタスは唸った。耐えようとしたが、その前に拳が、出た。

それはアーシユラスの腹を、掠めた。

アーシユラスはよけ様、にやりと笑った。

「やる気か？」

オーガスタスは睨みすえて、怒鳴った。

「決闘だと、言っただろう！」

そっちから二人出せ！」

金と、肌白の件で二人だ！」

西領地「シャノスゲイン」の連隊長ウエラハスが、ほの白い髪を流麗に胸に流し、そのくつきりと青く聡明な瞳を瞬かせ、素晴らしい容姿の端正な顔を少し歪め、うんざりしたように首を横に、振った。

「どう聞いても、軍の議事進行じゃない」

東領地ギルムダーゼンの連隊長、金髪で緑の瞳の伊達男ダーディア
ンが、当たり前だという顔を向ける。

「盗賊だってもう少し、穏やかな話し合い方をする」

だが『光の王』の血を受け継ぐウエラハスは、顔を上げると叫んだ。
「肌白の、決闘相手は私がする」

アーシユラスが、その声の主に振り向き様、目を剥いた。

「お前、人間じゃないだろう！」

まっとうな決闘が、できるのか？」

だがこの時ウエラハスは視線を、ギユンター代理の腕組んで呆れた会議を心からうんざりして見守る、黒髪の大貴族ディンググレーに送った。

彼は気づき、視線を向ける。

ディングレーから聞かされ事情が良く解っているウエラハスは、彼自身もドッセルスキを廃し、ギデオンを擁するべきだと日頃思っていたので、その計画に立ちはだかる南領地ノンアクタルの肌黒の野獣を真っ直ぐ見据え、言った。

「決闘相手が私では、勝てないらしいな。」

では私の勝ちだ。

肌白は、諦める」

この見事な理性的な駆け引きに、アーシユラスはキレた。

「馬鹿を、言え！」

ウエラハスは静かに即答する。

「なら決闘で私が手を使わず君を気絶させても、文句を言うな」

「人外の力を使うのは、卑怯だ！」

議長！ちゃんとフェアに戦えと命じろ！」

オーガスタスは力が、抜けていくのを、

感じた。東領地ギルムダーゼン連隊長ダーディアンは、鼻で笑った。

「卑怯？フェア？お前の決闘に、そんなもんがあったのか？」

ウエラハスも、言った。

「例え私が人外ちからの能力を使おうが、君も卑怯な手を使えばそれで、フェアになる」

皆が思わず呆れ返るような返答を、静かに顔色も変えずウエラハス

は言い切った。

その高潔な騎士の言葉に、普段ならびっくりして目を見開いたであろうディングレーも、ウエラハスがアーシユラスと同じ位置に自分を落として迄も、アーシユラスを止めようと態度で示してくれてほつとした。

勿論、平静時こんな不条理を、ウエラハスは誇りにかけても許したりはしなかっただろうが、何と言っても相手は、自分は人間だと思いい込んでいる、野獣だ。

ダーディアンですらウエラハスの覚悟に、これは裏に何かがあると踏んで、黙り込んだ。

アーシユラスは腹に据えかねたがとうとう、怒鳴った。

「気絶させられると知って決闘する馬鹿が、どこに居る！」

ウエラハスは取りすまして言った。

「では私の勝ちだ。

ギデオンもローランデも諦める。

どうしても欲しいなら、直接本人に交渉しろ。

だがどちらも並じゃない使い手だ。

君が一言でも思惑を口にした途端、彼らは誇りにかけて間違いなく君に決闘を挑むだろう。

寝室で楽しむ前に、その決闘で医者も葬儀も必要としないんなら、交渉してみればいい」

アーシユラスは、一度引くと舐められる事を熟知していた。

が、相手は滅多な事ではしゃしゃり出て来ない、（人外の能力者の上『神聖騎士』なんぞを名乗り、欲より名誉だの誇りを使命にする、融通の全く利かない至上の堅物）西領地「シャノスゲイン」地方護連隊長だ。

しかも、奴は、日頃騎士の見本として尊敬と崇拜を受ける、その人格を思い切り疑われるような普段決して言いそうにない言葉迄使い、立ちほだかっている。

…つまり今回は、余程の、事だと言う訳だ。

連中の、思惑にふと思い当たって、アーシユラスは知恵を働かせ、上手く立ち回る必要があるとは感じたものの、誇りは引く事を許さなかった。

全員が、ふーふー唸りながら、引くに引けず、行くに行けないアーシユラスを、見守った。

が、とうとうつぶやいた。

「機会を見つけて本人と交渉しよう」

ウェラハスはその黒い野獣に、微笑んで頷いたが直ぐに、マリーエルとローランデに視線を投げて、南領地ノンアクタル及びその連隊長の、側には決して近寄るなど警告の、視線を投げた。

マリーエルはアーシユラスに、死にそうな程向かつ腹立てたがその視線を受け止めて、微かに頷いた。

「踊ったなんて、もんじゃない」

男らしい黒髪のディングレーが言うと、相変わらずライオンの様なオーガスタスは、跳ねてくねる鬣のような赤っぽい栗毛を揺らし、その一つ年下の黒髪の大貴族を見つめ、心からつぶやいた。

「あの場に居たのがギウンターで無く、お前だった事を、神に感謝したよ」

皆がつい、一斉にギウンターを見た。

アイリスが口を開いた。

「否定、しないんだな？」

ギウンターが金髪を揺らしその男らしい美貌に懔然とした表情を浮かべ、腕組みしたままつぶやいた。

「どうして否定する。」

マリーエルに、良くやったと、誉めてやる！」

ローランデはその貴公子然とした端正な出で立ちで、それは大きなため息を付いた。

「彼を抑えるのは、それは大変だった。」

解ってるのか？剣を抜いたらお終いだ。

そのまま乱闘にもつれ込んで、ただの斬り合いで終わるんだぞ？
後に残るのは話し合いの決着で無く、怪我人の山とアーシユラスの、
報復だけだ。

その上ダーフス公との取引はご破算で、全てがぶち壊しになっていた！」

皆が、ローランデの言葉に頷きまくった。

だがギユンターは唸った。

「……いいだろう。」

神の采配だと思ってる。

だがあの地黒の野獣が二度と、ローランデに近づく事が無いよう、
思い知らせないとな！」

皆が、今度はローランデを、見た。

濃い栗毛に明るい色の栗毛が交互に混ざる、独特の色の髪を品良く
背に垂らした彼はその髪を振り、その澄んだ青い瞳を真っ直ぐ、金
髪の美丈夫に向けると、静かだが断固として言い放つ。

「彼は直接本人に、交渉すると言った。」

つまり、それを言ってきた時、剣を抜くのは君で無く、私だ」

だがギユンターが、途端怒鳴った。

「俺のこの腹立ちは、どうすればいいんだ！」

あいつにきつちり、人の領域に無断で踏み込めばどういう事になる
か、教えてやらなきゃ気がすまないぞ！」

だがローランデはその恋人に、本気できっぱり言い切った。

「公衆の面前で誇りを傷つけられて一番

怒ってるのは、この私だ！君の役目は私がどれだけ腹を立ててるか、
決闘に立ち会って見届ける役目だ！

……文句が、あるか？」

皆が本気でローランデが剣を振るうとどれ程のものが良く、知っていたので、黙り込んだ。

ギユンターは真っ直ぐ見つめて来る愛しい恋人の青い瞳に、思い切

り怯むと、それでも不満げな吐息を一つ、吐き、だが仕方無さげにつぶやいた。

「……………いいだろう」

だが、金に近い明るい栗毛を揺らし、空色の瞳のローフィスが心から気の毒そうに、オーガスタスに耳打ちした。

「…次の地方護衛連隊会議が、思いやられるな……………」。

アーシユラスを目前に、ギウンターとマリーエルの我慢大会だ」

オーガスタスは考えたくも無いと言う様子で、その鳶色の瞳を周囲に巡らせ、怒鳴った。

「…だれか、他の適任者はいないのか？！

俺を地獄から救い出してくれる使者は？！」

それは顔の広いアイリスが、言葉もなく、心から気の毒そうに、そんなオーガスタスの腕をぽん。と叩いた。

オーガスタスは途端、怒鳴った。

「他の思いやりは、無いのか？！」

アイリスは艶やかな焦げ茶の髪に囲まれた、その優雅で甘い顔立ちの上に気の毒げな表情を浮かべ、心から残念そうにつぶやいた。

「君の期待する思いやりは、私は持ち合わせて、いないんだ」

だがオーガスタスは喰い下がった。

「お前が持つてなくて、誰が持つてる！

正直に言え！

お前は山程逸材を、抱え込んでるだろう？」

皆が、何とかしてやれ。と期待を込めてアイリスを、見た。

が、アイリスは率直に言った。

「…君を超える器の主なんて、誰一人思い当たらない」

ギウンターがその鮮やかな金の髪を振ってアイリスに振り向き、つぶやく。

「なら一回くらいは代理議長を、君が引き受けてやれ」

ディングレーが続く。

「…そうだな。代理出来そうな奴は、君しか居ない」

ローフィスも同意した。

「いい考えだ。」

東領地ギルムダーゼンの野獣共もそれはお前が大嫌いだし。
南領地ノンアクタルも同様だろう？

あいつらに睨みがきくのは、お前くらいだ」

アイリスは、ため息を付いた。

「では次の一回は、代理を、しよう」

ライオンのようなオーガスタスは途端、そう言ったアイリスに抱き
ついた。

踊る地方護衛連隊会議（後書き）

この16話はねーーーーー。

ちよつとヤバイよ。

かなり長いし、

ファントレイユったら、きつちり怒ってるわ。

でも笑えるのよ。

読んでくれるヒトにウケるかどうかは、賭けね・・・。

BL全くダメ。

って読者はいないと思うけど、ファントレイユが

実は過去にローゼに襲われかけて、遺恨がある

という、BL好きにはちよつと美味しい設定でして・・・。

でも、BL読者は「お前、BL書きだろう?！」

と、テキに回しかねない内容に、なっている。

だってファンちゃんって、バージンなくすなら、

テテユスかアイリス。

と決めているから・・・・・・・・。

でもどっちも、彼にそのキになんないから、

ファンちゃんは大手を振って、女性と遊びまくってるのである・・・。

でもう、お気づきの方も多いと思うが

ファントレイユは外観に似合わずそれは、意思が強いのである。

なんで、ローゼの顔だけ男には絶対

カタ向かないのである。

もう、いい加減にしろよ、と作者も言いたいくらい

（作者の代わりにギデオンが言ってるが・・・）

尋問者の立場を最大限に活用し、ローゼに

復讐を果たしているが、まだ全然、足りなさそうである・・・・・・・・。

まあね。

自覚ナイけど、愛しのギデオンの暗殺決行しちゃね・・・・・・・・。

最大限に恨まれても、仕方無いわ・・・・・・・・。

ちらちらと、「ファンちゃん、実はとっても

ギデオン好きでしょう?」

的だが、ご存じの通り、ギデオンは中味きつちり、猛獣なんである。

惚れるには、危険過ぎる相手なんである。

深層心理は惚れてても、意識上では

「絶対、無理!」と激しく拒絶しているが、無理もナイだろうね。

どう考えても、ロマンチックな展開というよりは

暴力チックな展開にしか、なんないもんね……………。

さて。追加特記より三年後の、ファントレユとレイファス。
ギデオンが、ファントレユに落ちた後の、会議での会話です。
レイファスは目ざといので、ギデオンとファントレユの様子です
ぐに

二人の間に何があったか、解ってしまうんですね。

いつもファントレユが座る前方左側の、

隊長達と向き合う場所の椅子の、その横に、

神聖神殿隊付き連隊長、レイファスが席を儲けて腰掛け、

彼が横に腰を落とした途端、耳に顔を寄せて、言った。

「お前にしちゃ、またとんでもない大物を射落としたもんだな！」

ファントレイユはその、たっぷりの明るい栗毛に囲まれた、

自分と良く似た面差し、自分よりも小柄で、

幾分小造りの華やかなレイファスの顔を、見つめて返した。

「・・・レイファス、君はここに、私の批判に来た訳じゃ、

ないんだろう？」

ギデオンが、そして隊長達もが、自分達を呼び集めたレイファスが、

ファントレイユと話す会話について、聞き入った。

「・・・そりゃ、そうだが。

相手がああ大物の美人だと、君の男ぶりが10倍増しに見える」

ファントレイユは暫くレイファスをまじまじと見、言った。

「・・・正直、君に誉められると、背筋が凍るね」

「・・・君を誉めた事は、今まで無かったかな？」

「一度も」

「そうか。まあ、それは、仕方無いだろう？

君を誉める事柄が、一つも無かったせいだ」

「・・・だが彼を射落として君に誉められるとは思ってもみなかった」

ぼそりとつぶやくと、レイファスはささやいた。

「・・・私の周囲にどれだけ居たと思う？

あの、黙って座ってりゃ、視線の吸い付く美人に惚れ込む男が」

ファントレイユが肩を、すくめた。

「・・・星の数くらい、居たろうな」

「・・・そういう事だ。皆、断念したがね。

誰もが知っている理由で。

ギデオン、済まない。初めてくれて結構だ」

ギデオンの表情が、二人の会話が黙り込む全員に

筒抜けなのを知って、思い切り、曇った。

「・・・・・・ファントレイユ。レイファスは君のい
とこだっけ？」

「母親が姉妹のね。顔がそれとなく、似ているだろう?。」

「・・・私の方が、随分と可愛いがね」

レイファスの一言で、ファントレイユの眉が思い切り、寄った。

「・・・可愛い?」

「・・・もしかして君は自分の事を、ずっと可愛いと思っていたのか?」

「・・・可愛いだろう?」と、腕を組んで、真顔で見返す。

ファントレイユはそう言う、美貌と呼ばれる自分に良く似た、
やっぱりとても綺麗な顔立ちのとても無い性格のいところに、

心配げな視線を、投げた。

「・・・君は可愛いの意味を、本当に知っているのか?

可愛いという言葉の定義が、とんでも無く間違ってるんじゃないか?

可愛いっていうのは、すれっからしとか狡猾とか、根性悪とかいう

意味で使うものじゃ、ないんだぞ?」

今度はレイファスの眉が、寄る番だった。

「・・・なる程。・・・つまり君は今まで、私の事をすれっからし

で狡猾で、

根性悪だと思っていたのか？」

ファントレイユは困ったように、つぶやいた。

「……だって、そうだろう？」

「……それなら言わせて貰うが、君の可愛いも、相当怪しいもんだ。」

どうせ君は、可愛いっていうのは、ああいう……
と、ギデオンを肘で差す。

「……のを、思っているんだろう？」

私の可愛い定義は、間違っていない。

間違ってるのは、君だ」

が、ファントレイユは即答した。

「彼は可愛いじゃないか」

「……ほう。じゃ、何か？君の可愛い定義は、

無謀で周囲を省みない、ご意見無用の暴力を差すのか？」

ギデオンは腕組みしてこの二人の会話に聞き入っていた。

聞き入っていたのは部屋に居た全員で、これでは会議が、始めるにも始められなかったからだ。

で、つい言った。

「レイファス。無謀で周囲を省みないご意見無用の暴力とは、

私の事か？

私だったら、そんな相手にきく口は、控えるがな」

ギデオンが、睨む。が、レイファスは真顔で返した。

「・・・それが悪いと、私は言った覚えが無い。

実に勇敢じゃないか！

・・・君にはそれが、悪口に聞こえるのか？

彼が私に言った、すれっからしと狡猾と根性悪と、比べてみる！

無謀で周囲を省みないご意見無用の暴力を、

可愛いと定義するから間違っていると、言ったただけだ」

ギデオンは呆れてファントレイユに言った。

「・・・君の母方の家系は、口が立つのが特徴のようだな」

だが返答したのはレイファスだった。

「・・・それは、ファントレイユの事だろう？」

彼に、口で言い負かされて泣いた男迄居るんだぞ？

私にはそういう体験は無い。彼と違って、大人しいもんさ」

そう、そっけ無く言うところに、ファントレイユがつぶやいた。

「・・・君は自分の事が、全く解っていないようだな・
・。」

君が大人しいのなら、遠慮無しの人間なんて、いやしない。

・・・今の今まで気づかなくて、迂闊だったよ」

それは本心だったが、レイファスは負けていなかった。

「・・・ファントレイユ。そういう言葉は、君だけには、

言われなくなかったな。それで？君は、人の事が、言えるのか？」

ファントレイユは思い切り、肩をすくめて言った。

「私は君と違って、自分の事を可愛いとも大人しいとも、

思っていないからな」

「・・・だが、自分くらいいい男は、そこらに居ないと、思っ
てないか？」

この言葉について、彼の方を体事振り返ってファントレイユは怒鳴
った。

「・・・私はそうなる為にそれなりの努力を、してるんだ！」

だがレイファスも怒鳴り返した。

「・・・似たような顔が二つ並んで見る！」

どう見たって私が、可愛く大人しいさ！」

レイファスの言い切りに、ファントレイユがとうとう、折れた。

「・・・いいだろう。」

外見に限定したらと、言う意味なら、なんとか同意できる」

きりが無いので、ギデオンが口を、挟んだ。

「・・・君達が仲が悪いのは良く解ったから・・・」

「仲は、悪くない」レイファスが、

とぼけたようにギデオンを振り向いて即答した。

ギデオンが、助けを求めるようにファントレイユを見ると、

彼はその視線を受け止め、取りなすように言った。

「・・・ああ、どっちかっていうと、いい方なんだ。」

・・・ただ、なぜか口を利くとお互いがひどく疲れる」

「・・・そうだな。お前は自分を、結局譲らないだろう？」

ファントレイユは困惑して額に手を当てた。

「・・・君が私を、分析して意見を述べてるつもりなのは、良く、わかるが、君も、譲らないだろう・・・？」

ファントレイユの困り切った声にレイファスは理解したように

返答した。

「・・・・・・・・ああ、なる程。それでいつも議論が、終わらないのか」

ファントレイユは頭を抱えた。 >/FONT<

ギデオンの帰還（前書き）

ここにも、アイリスの根回しのその後が、挿入されています。

会議です。荒れ狂った。

の様子が描かれています。

ギデオンの命を救う事と、

この会議で南領地ノンアクタルを

言いくるめる事。

が、このギデオン右將軍就任の

鍵ですね・・・。

オーガスタス、心から、お疲れさま。

追記で、アイリスが議長を務める会議の様様子も

お伝えするかも、しれませんが・・・・・・・・。。。

十　：登場人物紹介：　十

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからっきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を

度々救い、信望を得ている。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに

出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

フェリシテ・・・ヤンフェスらの後輩。短剣の名手でヤンフェス同様とても重宝されている。

主に、戦場ではヤンフェスと行動する事が多い。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフエス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

アイリス・・・ファントレイユの叔父で、『神聖神殿隊』付き連隊の、長。

大貴族で、軍の実力者。反ドッセルスキ派の最右翼。

参謀、マントレンと、反ドッセルスキ同志で秘かに

交友があり、情報交換を、している。

ギユンター・・・中央護衛連隊の、長。都周辺の警護を一手に引き受け

その信望は厚い。

“どんな激戦でも部下を見捨てない男”として、周囲

から

信頼を得ているが、とっても遊び人。

だが誰もが“見事な騎士”と認めるローランデに

ベタ惚れ。して以来、彼には頭が、上がらない。

ローランデ・・・アイリスより一級上の、北領地「シェンダー・ラーデン」大公。

い。

地方大公は、剣の腕が抜きんでていないと務まらな

いる。

とされているが、彼はその中でも、更に抜きんでて

誠実な人柄で、好感を持たれているが、

ギョンターに惚れられて人生が変わった人。

ある意味、かなり、不幸かも。

オーガスタス・・・アイリスより三つ先輩の、地方護衛連隊、会議長。

「死人が出ない地方護衛連隊会議」を仕切れる

ただ一人の人間と、周囲の信望が厚い。

シェイル・・・ギウンターの部下。都護衛連隊長。ローフィスの義弟。

美貌でならした人で、外伝になるが、

軍神ディアヴォロスの恋人。

影の実力者ディアヴォロスを動かしたのも、この人。

（二人の会話シーンは省きました・・・・・・・・書くべきか？）

ローフィス・・・アイリスの部下。『神聖神殿隊』付き連隊、顧問長。

シェイルの、義兄。オーガスタスの親友。

ディンググレー・・・大貴族で、王家の血を継いでいる。

腐った貴族が嫌いで、彼らとつるんでいる。

王家の血で顔がきくので、重宝されているが、本

人は

面倒くさがり屋。一応、ギウンターの部下に当たる

宮中護衛連隊の、長。

レイファス・・・19歳。『神聖神殿隊』付き連隊所属。

ファントレイユのいとこ。ファントレイユ同様

小柄で目立つ美青年だが、性格はきつい。

理路整然と、口で相手を言い負かすのを得意とし

周囲からは“無敵”と思われる。

テテユス・・・19歳。『光の塔』付き連隊所属。

ファントレイユの、もう一人のいとこで、アイリスの
息子。

大貴族で有りながら、大柄で、ゆったりとして

頼れる性格で皆に、好かれている。

教練校では、ギデオンに次いで、剣士だった。

↑会議出席者↑

アーシユラス・・・南領地ノンアクタルの護衛連隊長。

傲慢。我が儘。俺様。

彼を怒らせると、報復がそれは怖いと言われる

南領地ノンアクタルの大公子息で実力者。

ダーディアン・・・東領地ギルムダーゼンの護衛連隊長。

野獣だらけ、と言われるこの地を治める、

野獣の親玉。ファントレイユらの

一級先輩、グエン＝ドルフの父親。

ウェラハス・・・西領地「シャノスゲイン」の地方護衛連隊長。

野獣だらけのこの会議の、唯一の、良心。

王家の血筋と『光の王』の血を受け継ぐ、

誇り高い騎士団を治める、長。

人外の力で西領地「シャノスゲイン」を

影の障気から護っている。

マリーエル・・・北領地「シェンダー・ラーデン」の地方護衛連隊長。

やはり、野獣の多い（東領地程では無いが）地の

治安を護るだけあって、彼も、中味は猛獣。

ギウンターの恋人、ローランデの息子。

ファントレイユ、ギデオンの教練校時の、剣の

臨時講師も務めた。

ギデオンの帰還

ソルジェニーは近衛軍中央補佐宿舎に向かう兵達が、行きとほうって代わって、解放と歓喜に沸き立つ様子が解った。

そこいら中で、アデンとローゼ逮捕の話で持ちきりで、アイリスとギユンターの来訪がどういう結末を迎えるのかを、心待ちにする様子だった。

ソルジェニーは馬車の中から、ギデオンが素晴らしく豪華な金髪をなびかせ、堂に入った晴れがましい姿で馬上に跨る姿を、いつ迄も、いつ迄も飽きる事無く見つめていた。

時折、ギデオンが視線をソルジェニーに送って微笑むと、彼はとても幸せそうに微笑み返し、ギデオンの胸を熱くさせた。

ギデオンは馬車の暗がりにも身を沈めるファントレイユにも視線を送るうとしたが、彼はどうやら、疲労している様子で目を、閉じていた。

ソルジェニーは気づいて馬車に同乗する隣のファントレイユをそつ、と伺ったが、淡いグレーに見える栗毛が風に柔らかに、揺れるものの、その色白で整った美貌のそのなだらかな曲線を描く頬はひどく青冷めて見え、閉じた長い睫毛は影を落とし、彼がどれ程気を張って職務を遂行したのかが見て取れた。

ソルジェニーはギデオンが言った通り、彼がいざとなれば危険も省みずに肝が座り、誰よりも強い意志と決意を持って行動に移し、決して逃げ出す事はしない様子に、心から感謝した。

ファントレイユに、どれ程労りの言葉を投げかけても足りないような気がして、彼が、いつもは手抜きをしていると言っていたけど、いざと言う時誰も出来ない働きをするんだから、それは許されてもいいんじゃないかと、思った。

白碧の騎士シャッセルが、白金の長い髪をなびかせ、素晴らしい堂とした体格で馬を操りながら時折、馬車の中を盗み見た。

ソルジェニーと目が合うと、彼はそのくつきりとした碧い瞳を伏せ、そつと軽く頭を下げて、王子に礼を取った。

がその騎士の、馬車の中を探るような視線に、思わずソルジェニーは隣のファントレイユを見つめると、その騎士もチラリと伺い見える、目を閉じ馬車に揺られるファントレイユの青冷めた顔色に疲労を労るような暖かな瞳を、向ける。

…ああ彼も、ギデオンの命を救ったファントレイユに、感謝しているんだ。

そう、ソルジェニーは気づいた。

通り過ぎるヤンフェスは、少し眠そうだったが、ソルジェニーの視線に気づくと途端、風に煽られた茶色の肩迄の短髪を振り、親しみの溢れる茶色の瞳を向け、人のいい笑顔を見せて朗らかに、笑った。ソルジェニーはその笑顔がとても嬉しくって、つい彼に思い切り手を、振った。

馬車の窓から手を振る、その細っそりとした幼い少年は少女のように可憐に見えた。

だが兵達は国で一番身分の高い王子が、農民のヤンフェスにそれは親しげに手を振る姿に、心の底から安堵した。

帰還の行軍の兵達全員の心の中に、身分差別の暗黒時代が、過ぎ去る予感が、走り抜けて行った。

補佐官舎に一同が着き、その中庭に歩を進め行く。

官舎の前にはずらりと補佐官達が並び、ギデオンが子供の頃から知っている、彼の父親の、親友だった男達が数人居て、ギデオンに、頷きかけた。

ギデオンはその横に立つ、アイリスとギュンターをも見、そして…。

兵に両側を押さえられた彼の叔父、ドツセルスキの姿も、見つけた。その細面に威厳を持たせようと鼻髭を蓄え、だがやっぱりどこかひよろりとした感じの栗毛のやさ男は、とうてい父アルフォロイスの弟には思えない、背ばかり伸びた頼りない体格をし、だがその蒼の瞳はぎらつくようにギデオンの姿に注がれていた。

ギデオンは幼少の頃彼に会った時、母親そっくりなギデオンの容姿を目にし、一目で兄の子だと解ったにも関わらず、それでもロクに声も掛けない有様を見て、祖母が困惑の吐息混じりにつぶやいた言葉を、思い出した。

『軍神の家系に産まれるべき子じゃ、無かったわ。あの子は……』
説明が無くても、解った。

叔父は軍務等、好きじゃない……どころか、兄アルフォロイスと違って大嫌いだと、いう事が。

「……………」

ギデオンは馬を降りると、彼らに近寄った。
ギウンターが素早く部下に、アデンとローゼを連れて来い、と顎をしゃくり合図を出す。

ギデオンは振り向き、ソルジェニーとファントレイユとを促し、迎え入れる補佐官らと共に、官舎に、入った。

ギデオンの取り巻き三人は、引き立てられるアデンとローゼを、ギウンターのその部下から、引き継いだ。

ギウンターは広場に整列してたたずむ兵達に向き直ると、叫んだ。

「…解散！」

だが、騎士達はその場から、動こうとはしなかった。

ギウンターはその様子に肩をすくめたが、マントレンとヤンフェス、フェリシテの姿を見つけると、こっそり招いて、彼らを中へ、入れた。

重々しい焦げ茶色の壁と戸、そして床の、官舎の大広間で補佐官

全員が、ドッセルスキとアデン。

そしてローゼを罪人と迎え、審議が、始まった。

ドッセルスキに組みする大貴族達が両側にしつらえられた座席に半数以上居て、やさ男の現右將軍を、ほつとさせた。

が、まず、ローゼが引き出されて、中央の証言台に、立たされた。ファントレイユは王子とギデオンと共に、その証言台の真横に座っていた。

が、金の髪の毛のその表情の無い冷たく見える整った顔立ちを、少しやつれさせたローゼの長身の背に、ファントレイユがぼそりと、つぶやく。

「…今からでも、遅くない。

初志貫徹して口をつぐめ」

ソルジェニーはびっくりして横で腕組むギデオンを見たが、ギデオンでも処置無しと、投げやりな表情でソルジェニーを見つめ返した。ローゼの背後に警護として立っていたシャッセル、アドルフエス、レンフィールの三人は、そのファントレイユの脅しのような秘やかな声を耳に思い切り呆れたが、当然ローゼは、ファントレイユの言う事等聞かなかった。

彼は自分が殺そうとした男の保証をそれは、信頼して頼ったので。

…その男は王子の横に座る、金髪の毛の素晴らしく目立つ綺麗な男で、腕組んだまま、今だ続くファントレイユの、声を顰めた脅し文句を、無視していた。

ローゼは真つ直ぐ前を見つめると、質問に対してはつきりとした口調で、告げた。

…つまり、断固として命じたのはアデン准将だ。と、言い張ったのである。

だがファントレイユが補佐官らが聞こえない様、さんざんローゼに小声で「根性無し」と、見た目では解らない、それは優雅な様子で罵倒し続け、レンフィールとアドルフエスを呆れ返らせた。

次に引き出されたアデンも当然、ドッセルスキに命じられたと、証

言した。

ソルジェニーは思わず、広間の後ろを探したが、金髪美丈夫の功労者は、広間の後ろの壁に背を持たせ掛けて腕組みし、表情無く立っていた。

ソルジェニーの視線に気づくと、その素晴らしい美貌の紫の瞳を煌めかせ、その顔を笑顔に、変えた。

だが、証人控え席に座っているドッセルスキに、それ程焦る様子も無く時折、ギデオンの生きてそこに座る姿と、失敗した部下が寝返る様子に心から憤りを感じる激しい蒼い瞳を向けて、ソルジェニーの胸を不安でどす黒く、した。

どうしてもその不安を拭えなくてつい、ドッセルスキの様子に視線が、戻る。

けれどドッセルスキが、自分の斜め後ろに目を向けた時、激しく鋭い蒼の瞳が睨むように注がれ、ソルジェニーはふ…。とそちらに、振り向いた。

そこにはアイリスが、手入れの良く行き届いた焦げ茶の長い巻毛を品良く胸に垂らし、素晴らしく優雅で余裕の微笑みを湛えていた。ドッセルスキの眉が、険しく、寄る。

見てると二人は暫く見つめ合っていたが、激しいドッセルスキの視線は終いに、床へと落ちた。

ソルジェニーが、その敗北者のように目を伏せたドッセルスキが理解出来なくて、アイリスを振り向くが、気づいた彼は軽く頭を下げ、優美そのものの素晴らしい礼を、王子に取った。

そして上げた顔で悪戯っぽく、それはチャーミングに、微笑んで見せる。

ソルジェニーはついその頼もしさに、胸が熱くなるのを、感じた。

…大丈夫なんだ…。

きつと…。いや、絶対に！

隣のギデオンが気づき、ソルジェニーにその綺麗な顔を俯け、金の波打つ髪をさらりと肩から滑らせてその碧緑色の、気遣う瞳を向け

た。

が、ソルジェニーはギデオンの『大丈夫』と、屈託の無い青い瞳で、微笑んで見せた。

二人の証言が済むと、今度はドッセルスキが証言台に立つ。

亡き金髪の兄とは違い栗色の長髪で、ひよろりとした長身の、ひ弱に見える男だったが、でもその態度は胸を張り、他人を見下す傲慢な風情だった。

当然ながら前の二人の言葉を激しく冷たい声で打ち消し、そんな覚えは無い。

と言い張り続けアデンの虚言だ！と怒鳴り続けた。

彼は憮然と、濡れ衣を着せられた被害者のような顔で再び席に戻ると、自分を不当逮捕した男達とその一味を、今度は絶対許さず闇に葬ってやる！とその冷酷な蒼の瞳で見回す。

…だが、自分の身内のような左將軍のナイアステンが証言台に立ち、ドッセルスキの企みを知っていたと証言し、ドッセルスキの瞳は驚愕に、見開かれた。

更に補佐官のドッセルスキ派の二人迄もが、彼からギデオン暗殺を、聞かされたと言証し出した。

周囲はざわめき立ち、ドッセルスキは顔色を、無くす。

そして…その後も、ドッセルスキから聞かされたと言う証人が続々と出てきて、ドッセルスキは今まで味方だった男達が手の平を返す様子を見、とうとう顔を下げ、膝の上で握る拳を、震わせた。

ソルジェニーは、再びアイリスを、見た。

だがもうアイリスは、笑っていないかった。

ドッセルスキの敗北する姿を、あの優雅な彼とは想像出来ない程に離れた、きつく輝く濃紺の瞳を向け、まるでドッセルスキに死地に追いやられた亡き騎士達に成り代わり、断罪し止めを刺すかのように、鋭く見つめていたからだった。

が、最後のドッセルスキが頼りとしていた男に迄手の平を返されたと知り、それでもかっ！と目を剥くと、再び宿敵アイリスのその整

った顔を、睨み付けた。

ソルジェニーが見ているとアイリスはさっき迄のきつい瞳をどこかに置き忘れたかのようにドッセルスキの向ける激しい憎しみの瞳に、それは優雅な微笑を浮かべ、そしてからかうように、ドッセルスキにわざと丁重に、頭を軽く下げて礼を、取って見せた。

今や職を追われようとしている右將軍に対するひどい侮辱は、ドッセルスキをぶるぶる震わせる程、怒らせた。

がアイリスは顔を上げると怒り狂うドッセルスキを見つめ、ますます楽しそうに、朗らかに笑って見せた。

ドッセルスキは怒りで体を震わせ切っていたが、さつ！とその顔を審議の聴聞席に姿の見える、ダーフス大公に向け、気づきドッセルスキを見つめるダーフスに向いすぎるように見つめては微笑みかける。

が、ダーフスは途端、ドッセルスキの視線に顔を、背ける。

ドッセルスキは暫く呆然と、ダーフスのその、厳格で気品溢れる横顔を凝視していたが、ダーフスの視線が自分に、注がれる事がもう無いと知ると、もう一度凄まじい憎悪の籠もる視線を、アイリスに向けた。

蛇のように、邪悪な瞳だった…。

ソルジェニーはドッセルスキのその瞳に、ぞつ！と背筋を凍らせたし、ギデオンも、気づいて眉を、激しく寄せた。

が、アイリスはその瞳を真っ向から受け、見据え返すと、彼の方こそもつと物騒な、底冷のえする氷のように冷酷で優雅な微笑を、その顔に浮かべた。

途端、その背筋を断ち切るような冷え切ったアイリスの微笑みに、ドッセルスキは一瞬、たじろぐ。

が、補佐官長のドッセルスキの名を呼ぶ声に、彼は再びその証言台に、歩み寄る。

そして、ドッセルスキが自分を弁護すべく、口を開く、その前に、補佐官は彼につばやいた。

「……これだけの証言がある以上貴方に、右將軍の地位に留まって頂く訳には、参りません」

ドッセルスキは暫くそう言った男を、呪うように見つめたが、頭を垂れ、俯いて微かに、頷いた。

証言台を降りる時、ドッセルスキは三度それは凄まじくアイリスを睨んだが、アイリスはそれは優雅に、そして軽やかに微笑み返したが、ドッセルスキはその優雅な微笑のその瞳が、脅すように強い意志の籠もった氷のような瞳なのに気づき、今度こそその真意が解り、思わずぞつと背筋を、凍らせた。

絶対、報復してやるぞ！と言いたいののはこつちだったが、彼は“命を無くすような事故には、くれぐれも気を付けたまえ”と、優雅な微笑の影で本気で、脅したからだった。

ドッセルスキはアイリスの物騒な微笑に、初めて狼狽え、俯いた。考えてみれば近衛に居た時、語り継がれる伝説を残す、勇者の一人だったアイリスだ。

こちらの刺客同様、相手を殺す事等屁でも無いだろう。

なぜあの男が今まで、自分を殺しに来ないのか、不思議だった。

アイリスの腕ならその氣に成れば、いつでだって自分を、殺せた筈だ。

……右將軍の地位に付いていたからこそ、危険だと思っていた。

が、アイリスは右將軍の彼が不審な事故死等したら、いかにも『自分の仕業です』と告げるも同然な馬鹿な真似はせず、堂々と真正面から渡り合つて見せ、將軍の座を降りた彼にゆっくり、報復する腹だと、その時ようやく、気づいたからだった。

ドッセルスキはもう一度、アイリスを、見た。

やはり柔らかなで優雅な微笑みで、がその濃紺の瞳は氷よりも冷たく刺すように鋭く、ドッセルスキはつい、その優雅な仮面に隠されたその“殺氣”に冷や汗を隠し顔を、背けた。

今や彼の念頭にあるのは、どうしたらアイリスに命乞いするかで、その橋渡しの出来そうな男の顔を必死で次々と、思い描いた。

「…さて。右將軍の地位を明けたままにしておく訳にはいかない」
その言葉でギデオンの顔が一瞬、揺れた。

叔父が居る以上、自分がその地位に着く事等無いと、とつくに諦めていた地位だった。

代々、祖父も父も、右將軍だった。

彼が産まれた時、父が、跡継ぎが出来たと、どれ程喜んだ事か…。
そして幼い彼に、右將軍の地位の、重責と誉れをいつだって延々と語り続けてきた。

だが、その父が命を落とし叔父が居座り、今のギデオンに出来たのは、その誉れ高い彼らの顔に泥を塗る、叔父の汚いやり方を、体を張って止める事だけだった。

「…ギデオン。君の、役職だ」

ソルジェニーはそつ、と席を立つギデオンを、見つめた。

彼は静かだったが、感情を、抑えているのが、解った。

ソルジェニーは視線をフロントレイユに向けると、彼は平静そのものの落ち着きで見守っていて、ソルジェニーのざわくつ気持ちを落ち着かせた。

席を立ったギデオンは、補佐官長の前に立つ。

補佐官長は虎の紋章の入った、金の肩当てを、厳かにギデオンに手渡して、言った。

「…就任式の日取りはこれから決めるが、これをつけて出席してほしい」

アイリスが、真っ先に立ち上がると拍手を送り、次々に拍手が、沸いて起こり、広間は拍手で埋め尽くされた。

ギデオンの父の親友だった補佐官達が、感極まってギデオンを抱擁すると次々に、勇猛だった彼の父親の面影を忍び、彼に心を寄せる者達が寄り来ては、ギデオンに心からの、祝福の抱擁をする。

ギデオンは少し涙目で、俯き加減だったが、どの相手にも気丈に微

笑み、抱擁と握手を、返していた。

ひとしきり彼らの抱擁を受けると、ソルジェニーに振り向き、微笑みかけ、王子の青い瞳が涙で潤むのを見て、優しく、頷いてみせた。だがソルジェニーは今にも涙が滴り落ちて止まらなくなりそうので、両手で口を覆ってその輝かしい彼の優しい姿を、見つめ返した。

ギデオンの瞳にも涙が光ったように見えたが、彼は微笑んだまま、視線をゆっくり、ソルジェニーのずっと後ろの、壁際にひっそりとたたずむマントレンとヤンフェスとフェリシテ。

そして、王子の横に座る護衛のファントレイユに、送る。

マントレンの瞳は濡れていたし、ヤンフェスはそれは嬉しそうに、輝くように微笑み、フェリシテは心から安堵した表情で、彼を見つめ返した。

ファントレイユは視線を受け止め、静かに微笑むと、頷いて見せた。ギデオンはすつと顔を上げ、どれ程感謝しても足りない、という表情を一瞬浮かべ、彼らに向かってゆっくり、片膝を折って床に付け手を胸元に当て、深々と頭を垂れて、一礼した。

ギデオンのその挙動に、周囲の注目が一斉に集まる。

その場の全員が、右將軍と成ったギデオンが、まるで王に礼を、取るかのような深く頭を垂れる姿を目を止め、続いて、その礼を捧げる相手を探す。

対象の筈の王子とアイリスが、気づいて拍手を始める。

皆が、二人へじゃないのか？といぶかり、視線を彷徨わせるが、アイリスが自分の後ろのマントレン、ヤンフェス、フェリシテに視線を向け、王子が隣のファントレイユに微笑んで拍手を送っているのに、気づく。

彼らは注目と視線を浴び始め、慌てた。

ギュンターは、彼らがどうしてここに居るのか問い正されるとやっかいなので、顎をしゃくり、合図を送って促すと、マントレンとヤンフェスは直ぐに察し、フェリシテも慌てて彼らに続きその場から、急いで姿を、消した。

ソルジェニーが、隣のフアントレイユに拍手を送り続けるが、フアントレイユは慌てた様子で椅子を蹴立てると、ギデオンの元へと駆けつけ、彼に屈んでその腕を掴み、頭を、上げさせた。

「…頼むから……！」

後で、幾らでも感謝を受ける！

君はたった今！右將軍に成ったんだぞ？！

右將軍が深礼を取る相手は王と、相場が決まってる！

お願いだから……！

膝を、上げてくれ……！」

だがギデオンは自制心を忘れて慌てる、珍しいフアントレイユのその美貌を見つめ、静かに告げた。

「…本当に、感謝を受けるんだな？」

フアントレイユは周囲の視線が自分に集まり来、慌てて即答した。

「…受けるさ！勿論！」

だがギデオンはきっぱり、言った。

「君の言う事は宛てにならない！」

フアントレイユは焦りまくった。

「…約束する！」

「…その約束は、守るんだな？」

「約束だから、当然守るさ！」

「誓うか？」

「私の命に掛けて！」

頼むからいい加減、膝を上げてくれ！

君は誰よりも高貴な身分だろう？……！」

ギデオンはようやく笑うと、折った膝を伸ばして立ち上がり、フアントレイユを心の底から、安堵させた。

ギデオンが官舎前の広場に姿を現す。

解散している筈の兵達は身じろぎもせず、その場でたたずみ、静まり返ってまるで彼の、言葉を待つように、その視線を一齐に、彼に向けていた。

ギデオンは一瞬、熱い彼らの数百の眼差しに、涙が零れそうになったが、ぐっところえ、渡された、虎の紋章入り金の肩当てを高々と振り上げた。

途端、わっと、そこら中に轟く、津波のような歓声が湧き上がり、大地を揺るがす程のその歓声を、兵達は歓喜に満ちて叫び続け、拳を振り上げ、飛び跳ね、お互いを堅く、抱き合った。

皆の目に涙が光り、ギデオンですら、とうとうその頬に、一筋の涙を、伝わらせた。

ファントレイユは、素晴らしく豪華な金の波打つ髪を散らし、その手に、栄光の印を高々と掲げるその色白の小顔に浮かぶ、素晴らしく綺麗な碧緑の瞳が、涙に濡れて煌めく様子に目頭が熱くなった。

その時ふいに、今回ばかりじゃなく今まで幾度もギデオンが、絶体絶命の危機に瀕した時胸の潰れる思いで彼の背に飛び込み、彼が背に、受ける筈だった刃を受け止めたその手の感触が、ふいに蘇り、震え出すのを感じ、慌てて震える右手を左の手で押さえ付け、その震えを止めようと、した。

同時に目の前のギデオンの、生きて素晴らしい栄光の姿を見つけた時、心の底から感激の震えが、体中に湧き上がった。

アドルフエスもレンフィールも、シャッセルも同様に、ギデオンのその素晴らしい姿を、感激の面持ちで瞳を潤ませながら、言葉も無く見守った。

シャッセルは、幾度も命を落としかけたその彼が、今ここにこうして兵の祝福を受ける様はどんなものにも代え難く、今日のこの彼の姿は一生、忘れられないだろうと、深く胸に刻んだ。

そして……その彼の、危機を救い続けたファントレイユに、感謝の一瞥を、くべる。

がその一瞥を受けたのは王子ソルジェニーで、王子はもうとっくの

昔に頬を涙で濡らしていたが、隣に立つ護衛のファントレイユにシヤッセルが見つめている事を知らせようと、彼をそっと、伺い見た。だがファントレイユは俯いたまま顔を上げない。

「ファントレイユ。」

……シヤッセルが……。

みんな、感謝している……。

貴方の、働きに」

ソルジェニーがそっと告げるが、ファントレイユは首を横に、振っただけだった。

「ファントレイユ」

が、ファントレイユは声を詰まらせ、ようやくささやき返す。

「……どうか……王子。」

どうか、今だけは………」

ソルジェニーは、いつもそれはとても優雅で滅多な事では、その優雅さも余裕のある表情も崩したりはしない彼の護衛が、俯いて肩を震わせている姿を、静かに見つめた。

…あの夜、ファントレイユはごろつきの安酒場ですら、あれ程真剣に、ギデオンの身を心配していた。

本当に、見た事の無い、様子を見せて。

その彼が感激で肩を小刻みに震わせどうしたって顔を上げられない様子を、労るようにソルジェニーは見つめ続けた。

ギデオンがだがその時叫んだ。

「聞いてくれ……！」

この暗殺計画撲滅の、一番の立て役者だ……！

私の命を、救ってくれた男が居る……！」

その功労者の素晴らしい行動に、騎士達がその目の中に、ギデオン同様、一瞬感謝の煌めきを浮かび上がらせた。

ギデオンがファントレイユを見つめ、ソルジェニーも彼を見たが、ファントレイユはその場を動けなかった。

ギデオンが尚も彼を伺うが、ファントレイユは足を運ぶどころか、

顔を上げる様子すら、無い。

業を煮やしたシャッセルが進み、ファントレイユのその腕を掴むとマントレンが拍手をし、ヤンフェスがそれは嬉しそうにそれに同調し、兵達が、シャッセルに腕を引かれてギデオンの元へ進むファントレイユに、割れんばかりの拍手を送り始める。

が、ギデオンの隣に、シャッセルに引き出されたファントレイユはやっぱり、顔が上げられない様子で、ソルジェニーはだんだん彼の事が心配になって、彼を喰い入るように見つめた。

拍手を送っていた騎士達も、顔を上げないファントレイユをギデオンが心配そうに、そつと伺い覗き込む姿を目にし、その手を、止め始める。

マントレンが、どうしたものかな。とやっぱり心配げにヤンフェスを見上げると、ヤンフェスは笑って腕を、組んだ。

ファントレイユは拍手が、収まっていくのを、感じた。

その肩は今だ震えていたが、一瞬ぐっ……。とその震えを飲み込む様子を、見せた。

次に彼がその面を上げた時、彼はいつものようにそれは優雅な微笑を、その面の上に、湛えていた。

ソルジェニーは途端、手が痛くなる程の拍手をし、ヤンフェスはマントレンに、大丈夫だろ？という顔を向け、拍手を始め、マントレンも、

『やれやれ』と肩をすくめて、拍手に参加した。

やがて割れんばかりの拍手の嵐の中、それでもファントレイユは感激の涙を心の底に押しやり、その微笑を、保ち続けた。

ギデオンも、横に立つシャッセルも、彼の潤んだ瞳を、知っていたし、滅多に感情を現さない彼の胸が熱く、その涙を必死でこらえているのを、痛い程感じた。

だが、ファントレイユの心とは裏腹に、歓声は全く止む様子を見せず、どこるかますます盛り上がり、素晴らしく見事な豪華な金髪の新しい右將軍と共に、その横の優雅な美貌の功労者に、何時までも

何時までも誉れと感謝の拍手の嵐を送り続け、ファントレイクをそれらは、困らせたのだった……。

ギデオンの帰還（後書き）

ええと……。

今回ネタ無しなので、参考文献という事で……。

一言：マントレン
マントレンさん……。

随分ほっとしているようだな……。

私は作者に愚痴を垂れないと思ってるな？

思ってます。

まあ、いいだろう。

作中では私の方が、ファントレイユとの付き合いは

長い。

だから作者にとっては意外でも、私ももしかしてとは、思っていた。

……つまり、ファントレイユがギデオンにマジ惚れの件ですか？

本人が自覚するのを無意識に拒否していたから

言わなかったが。

まあ、気持ちちは解る。

ご存じの通り彼は、姿はそれは美しいが、中味はきつぱり！
猛獣だ。

だが彼は真摯な猛獣で、義の為には自身の命も厭わない。

彼の為なら死ねると思っている男は大勢いるし

私たぜって、彼を亡くしたら、軍から退く決意だった。

・・・まあ、それ迄命があつたらな・・・。

ローゼのような刺客に命を狙われたら、

私なんかはあっさり、殺されていたし

それに私は奴らに睨まれていたから

ギデオンが居なかったらいつ前線へ

捨て駒として送られたかしれない。

彼は本当にいつだって、皆の命を救っているのに

それは自分のすべき事で当然の事だと言う顔をしていた。

たった一人で、後ろなんか決して振り返らず、

先へ・・・どんどん先へ、そのまま天国へと逝ってしまいそうで

我々は本当に、悲しかった。

彼を、止められたらいいのにと、皆が思っていたのを

ファントレイユがしたのだから

まあ・・・・・・・・・・。

したいように彼がしたって責める気は無い・・・。

ギデオンはどうしたって結局変わらないだろう・・・。

ファントレイユの手前気は使っても。

根っからの剣士だし、戦う為に産まれてきたような男だから・・・。

だから私から作者への注文は

ファントレイユと同じだ。

私も彼の遺体にはお目にかかりたくない。

それだけは肝に命じて欲しい。

以上でよろしいですか？

ど・シリアスですね……………。

キャラの肝いりも、半端じゃないんですよ……………。

作者って、こんな苦勞する立場だったんですね……………。

頑張ります。

金の虎の紋章（前書き）

さて。最終章です。

感想等頂けると、幸いです。

† ：登場人物紹介： †

ファントレイユ・・・19歳。ブルー・グレーの瞳。

グレーがかった淡い栗色の髪の、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

レイファス・・・19歳。『神聖神殿隊』付き連隊所属。

ファントレイユのいとこ。ファントレイユ同様

小柄で目立つ美青年だが、性格はきつい。

理路整然と、口で相手を言い負かすのを得意とし

周囲からは“無敵”と思われる。

テテユス・・・19歳。『光の塔』付き連隊所属。

ファントレイユの、もう一人のいとこで、アイリスの
息子。

大貴族で有りながら、大柄で、ゆったりとして
頼れる性格で皆に、好かれている。

教練校では、ギデオンに次いで、剣士だった。

ソルジェニー・・・アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い
瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全
て無くし

孤独な日々を送っている。

ギデオン・・・19歳。小刻みに波打つ金の長髪。青緑の瞳。

ソルジェニーのいとこ。王家の血を継ぎ、身分が
高い。

近衛准将。見かけは美女のような容貌だが、

抜きん出て、強い。筋金入りの、武人。

マントレン・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛連隊、隊長。剣の腕はからつきしだが、

参謀として、ファントレイユやギデオンの窮地を

度々救い、信望を得ている。

ヤンフェス・・・19歳。ファントレイユ、ギデオンの友達。

近衛では珍しい、農民出身だが、弓の達人で

その腕前の素晴らしさから、各隊から引き合いに

出される程。気のいい男で、みんなに好かれている。

シャッセル・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

無口、高潔な人柄で、剣の腕前もさる事ながら

誠実さで、ギデオンの信望を得ている。

レンフィール・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

“狐”の異名を取る、天才剣士。

でも性格は、我が儘で目立ちたがり屋。

アドルフエス・・・19歳。近衛連隊、隊長の一人。

大貴族出身で身分が高く、ギデオンの崇拝者。

体格が良く、押し出し満点。

大貴族だけあって、プライドが高く、傲慢。

だが剛腕をふるう腕の立つ剣士で、

戦場では信頼されている。

金の虎の紋章

レイファスは、ファントレイユの靴音が、直ぐに解った。

『神聖神殿隊』付き連隊官舎の彼の一室で、扉が開くなり、その面差しがそれは良く似た、自分を睨み据える美貌のいところを、彼は微笑んで出迎えた。

「ファントレイユ。伝言は、聞いた」

ファントレイは、良く似た顔立ちだが、自分より小柄で華奢で、それは華やかで可愛い顔立ちの、鮮やかな栗毛を肩に揺らすレイファスを、無表情で見つめて頷き、憮然と言いつつ放った。

「……………で？」

それについて言う事があれば、聞こうか」

レイファスは肩をすくめると、隣部屋に声をかけた。

「テテユス！」

テテユスは呼ばれ、それは気まずそうに戸口から、顔を出す。

アイリスと同じ、濃い栗毛と長身の、やはり面立ちの彼らに良く似たそのアイリスの息子は、関わりたくないと言わんばかりに、顔を二人から、背けていた。

が、ファントレイユは気にせず、言った。

「…テテユス迄巻き込んで、私の攻撃をかわす気か？」

レイファスは思い切り、肩をすくめた。

「だって、調停役は必要だろう？」

テテユスはようやく、顔を上げた。

アイリス譲りの、大柄でゆったりとした、その誰からも好かれる親しみやすさと優しさを持つ彼は、言った。

「…ローゼは結果的には、彼の伝言で口を、割つたと聞いたし、レイファスのした事は私もどうしようも無く愚かで趣味が悪いと思う」
ファントレイユは顔色も変えずに、それでもテテユスには態度を大層柔らげて微笑み

「それは君の、意見だろう？テテュス」

と言った。怒っている相手は君じゃない、と言われてテテュスは、言葉を無くして頂垂れた。

フアントレイユは途端、レイファスに喰ってかかった。

「…どうしてあの馬鹿がほら吹きだと気づかないんだ？

君がそこ迄迂闊だなんて、知らなかったな！

君の経験中の、最大の汚点だろう…！」

だがレイファスも組んだ腕を解かずに、即答した。

「最悪の、初体験を除いてね。

だが私にだって言い分は有る。

あの男をいい気にさせたのは、君だろう？フアントレイユ。

あいつ、君の唇の味は絶品だと、抜かしてやがったが、それについての意見があれば聞こうか」

フアントレイユの、眉間が思い切り寄った。

「…あの男が何を言おうが単なるふいうちだ！

私の意思なんかじゃないぞ！」

レイファスは腕を組み、彼を見た。

「…なる程。君は彼の口づけに随分、うっとりとしていたと言うのに、邪魔が入ったそうだな？」

フアントレイユは心から、ローゼを殺せなかった事を、悔やんだ。

「…あいつが大口叩きと罵ったのは、君だろう？レイファス！

嘘に、決まってるじゃないか！」

「…だが、口づけられたのは事実だし、最初にあいつに隙を見せた自分にも責任があるとは、思わないのか？」

「あつて、たまるか…！！

君はどうせ、私がうつとりしたってくらいだからさぞ、いいんだろうと踏んだんだろうが…」

「当たり前だ！その一言が無かったら、釣られたりしない！

どう責任を取ってくればいいのか、聞きたいのはこっちだ！

テテュスに言われる迄も無く、あいつは最悪で、全く迂闊だったが、

君の隙が無けりや私だつて、回避できた危険なんだぞ！

どう見たつて、口だけでいい気になつてゐる輩に、ちゃんと見えたんだから――！！」

「……どうして自分の意見を曲げたりしたんだ！！」

第一、本当に私がうつとりしたかどうか、どうして私に確認に来ない！

どう考えても、確認義務を怠つた、君の責任で私に落ち度なんて、無い！

聞かれたらちゃんと、

『最悪に気持ちが悪く、吐き気を我慢した』

と答えてやつたのに――！！」

テテユスが口を、あぐり開けた。

「……また、吐きそうだったのか……？」

ファントレイユは、じろりとテテユスを見てつぶやいた。

「……あの場で殺してやるうかと思うくらいに、気持ち悪かつた」

テテユスは、レイファスに肩をすくめて見せた。

「……レイファス。白旗を上げる。

ファントレイユは自分を気持ち悪くさせる、自惚れの強い強引な男は死ぬ程嫌いだ」

レイファスがまだ、テテユスの言う事に頷かないので、テテユスは静かに、言つた。

「……彼は、マジギレしている」

レイファスは、一つ、ため息を、ついた。

「……失礼。ファントレイユ。

個人の見解が、そこ迄大幅にズレてゐるなんて、想像が付かなくてね」

ファントレイユは途端に、レイファスを睨め付けた。

「……それだけか？」

レイファスはため息を付くが、言つた。

「今度、君かテテユスの名を使って口説かれたら、必ず裏を取ろう

……。

何せ君たちの名は、品質保証付きだからな……！」

ファントレイユはとうとう、怒鳴った。

「……謝罪を、聞いて無いんだが！」

テテユスが、途端に言った。

「レイファスにとつてはあれが精一杯だ。

だって、君に騙されたとさんざん、愚痴ってたし、怒っていたからな」

ファントレイユは目を、剥いた。

「騙したのは、私じゃなく、ローゼだ……！」

たった、二日後だった。

が、ギデオンは正装に、金の肩当てを、付けていた。

虎の、紋章が、入っていた。

広場には近衛連隊が整列し、將軍の就任式の準備が、整っていた。

ギデオンは、忌々しげに戸口を、見つめた。

彼の着替えの手伝いをしていたマントレンとヤンフェスは、思い切り肩をすくめたし、レンフィールドが戻り、首を横に振り、シャツセルも戻るなり同様で、アドルフエスは戻って、

なんで俺がこんな役目を……と悪態を付いてギデオンに睨まれたが、首を横に、振って見せた。

だがソルジェニーが彼の元へと訪れた時、その背後にようやく目指す人物の姿を、ギデオンは見つけた。

その、グレーがかったふんわりとしてたつぷりな栗毛を肩の上で揺らし、見事に整いきった美貌の、ブルー・グレーの瞳を煌めかせ、相変わらず小憎らしい程優雅ですらりとした立ち姿で、白の正装に金の肩当てを付け、深紅のマントを羽織る装いの、堂としたギデオンを目に、静かに一礼して見せた。

ソルジェニーがギデオンに微笑み、ギデオンは彼に微笑みを返すな

り、つかつかとやって来て、ソルジェニーを通り過ぎてフロントレイウの腕を、いきなり掴む。

フロントレイウは掴まれた腕をじっと見るが、ギデオンはいきなり怒鳴った。

「…この…大嘘つき！」

フロントレイウは途端、その素晴らしい正装姿の、相変わらずあでやかな金のさざ波のように波打つ長髪に囲まれた大層綺麗なギデオンの、怒った顔を見つめて、言った。

「…人聞きの、悪い…」

いつ、私が嘘を言ったんだ？」

「…感謝を受けると言ったのを、忘れたのか？」

「…だから…とつくに、受け取っているだろう？」

だがギデオンは彼を、睨んだ。

「…嘘を付け……………！」

あれ以来雲隠れして、私に『ありがとう』を言わせない癖に…！」
だがフロントレイウは朗らかに、笑うと

「…だって……………」

君の素晴らしい晴れ姿を見られたんだから、どうしてそれが、感謝にならないと思うんだ？

言葉なんかより、余程雄弁だ。

思った通り、その金の虎の紋章は、素晴らしく君に似合ってる！」
ソルジェニーにはギデオンの、気持ちが解りすぎて困ったが、フロントレイウの気持ちも、解った。

ギデオンのその肩当て姿はずっと、フロントレイウが思い描き続けてきた姿で、それを現実で目の辺りにして彼はそれは、感激している様子だったからだ。

だがレンフィールは、ぼそりとつぶやいた。

「…気障だな……………」

アドルフエスが、怒ったように言った。

「全く、同感だ！」

どうして“ありがとう”くらい、素直に聞けないんだ？

…それとも、ああいう風にもったい付けるのが、あいつの口説きのテクニックなのか？！」

「…ギデオン相手に、口説くもなからう？」

シャッセルが、アドルフエスを見て素早く釘を、刺す。

ギデオンがファントレイユの全開の笑みに、引きつり笑顔で、返した。

「……………それは嬉しい。

だが私の方も、言いたい事があると、どうして解らないんだ？！」

だがファントレイユは、それは気弱な表情で、ギデオンに告げた。

「…でも私だって、今日くらいは君の性格を忘れて、感激に浸りたんだ…！」

それくらいは、許されてもいいだろう？

だって………思っただ通り、君は素晴らしく似合っているし。

目に焼き付けて置きたいのに、君と話したりしたら、台無しに、成りかねないだろう………？」

まるで、乞うようにギデオンに告げるファントレイユに、その場に

居た一同は途端に顔を背けて、床を、見た。

ヤンフェスが、マントレンを見たが、マントレンは心から、関わりたく無いという様子を見せ、ヤンフェスも彼同様、知らん顔を決め込む事に、して俯いた。

ソルジェニーがギデオンを見守ると、彼はファントレイユを見据えて、つぶやいた。

「…どうして私と話すと、感激が台無しに、なるのか聞こうか？」

ファントレイユは、困ったように言った。

「…本心を言うと君は、きつと怒る。

それですめばいいけど……。

殴られたく、無いんだ」

「…私が、殴りたくなるような事が、言いたいんだな？」

ようやく、ファントレイユは言葉が通じたと、安堵した表情で頷い

た。

「その通りだ。」

私はこの顔が、とても気に入っているから、変えたくない」

ソルジェニーが、ギデオンをじっと見て、ささやいた。

「…ファントレイユを、殴ったりしないよね？」

ギデオンはソルジェニーを見つめ、そして慌ててファントレイユに、笑い掛けた。

「勿論、殴らないから、聞こうか？」

ファントレイユは、本当に？という顔を、見せた。

そして、ギデオンの両拳を、その手で握り込む。ギデオンが、両手首を握るファントレイユの手を見て、訊ねた。

「…何だ？これは」

「私の、安全保障だ」

ギデオンの眉が更に寄ったが、顎をしゃくって、促した。
ファントレイユはそれでもためらいながら、つぶやいた。

「…きつと、この拳は上がりかけると思うんだが…」

「いいから、さっさとええ！」

「…ほら、君ときたら、それは素晴らしく綺麗だろう？」

今の姿は、凄く似合っていて最高に、美しいし。

性格さえ思い出さなければ、一生に一度、見られるかどうかの、晴れ姿だし。

だから、綺麗な君の姿を……」

ファントレイユの握る、ギデオンの拳が、震え出し、ファントレイユはつい、心配顔で、訊ねた。

「時間差で、この手を放した頃に殴ったり、しないよな？」

ファントレイユの、心から恐れる様子に、ソルジェニーも言った。

「ギデオン。」

私も彼の、顔が変わったりするのは、嫌だ」

ギデオンは拳の震えを止めると途端に、にっこりと、微笑んだ。
そしてファントレイユに向かって、低い声で言った。

「…つまり、姿だけは綺麗だから、本来の私を忘れて、綺麗な外観だけを心に止め置きたいと、そう言いたい訳だな?!」

ファントレイユは心から頷くと、言った。

「君の性格迄変えてくれだなんて、贅沢は言わない。」

せめて、今日一日、君の姿を見ている間だけでも、君の性格を、忘れていただけたんだ」

その場に居る一同が、命知らずのファントレイユの言葉に、顔を下げきった。

「つまり君は、私の姿だけを、気に入っていると、そういう訳だな?」

ファントレイユは途端に異論を唱えた。

「誰もそうは、言つてやしないだろう?」

君のその容姿にその性格は、酒の効いたパンチみたいなものだ。

とても強烈で個性的だし、味があるとは、思つてるさ。

第一、今日一日だけの事だ。

どうせ今日を過ぎれば、いくら私が君の外観だけを思い出そうとしたって、君は嫌でも、その性格の方思い出させてくれるじゃないか

………」

ギデオンは、それは不満そうだったが、言った。

「口を利かない事が、感謝になるなんて聞いた事が無いが、ご要望なら仕方無いな…!」

このギデオンの返答に、全員が思わず、驚愕の表情を浮かべてギデオンを振り返った。

ファントレイユは心から嬉しそうに

「…ありがとう…!」

そして、就任、おめでとう!」

そう言い、ギデオンが次の言葉を発する前に、王子を促しさつさと、彼の前を、去つい行った。

扉が閉まり、姿が消えてようやくギデオンは「どうして、ありがとうを言う筈が、言われる羽目になるんだ?!」

と、怒鳴り、心の底から憤慨してみせた。

だが、式が始まった時、シャッセルが壇上に上がるギデオンの、その素晴らしい正装姿を目に、つぶやいた。

「…ファントレイユの、気持ちも、解る……………」

アドルフエスが振り向き、レンフィールは肩をすくめ、ヤンフェスとマントレンは思い切り、頷いた。

荘厳な、多くの人間が入る大講堂で、彼は中央に、高い窓から差し陽を浴び、金の虎の紋章の入った肩当てをきらきらと輝かせ、それは彼の長い金の髪も相まって一層彼を、輝かしく壮麗に、見せていた。

衣服は白で、見事な金の刺繍が入り、マントは真紅、裏地に白い毛皮が付き、黒皮の幅広のベルトと、ブーツを付けていた。

アイリスはそつ…と、ギウンターの後ろに立つ、オーガスタスを見やった。

アイリスの視線に気づき、ギウンターも。

ローフィスとディングレーは両脇で、二人揃って晴れやかな顔で『ギデオンの晴れ姿は、お前の功績だ』と、その耳元で、ささやき続ける。シェイルもローランデも並んで、同感だと頷き笑みを、零していた。

オーガスタスが、俯いていた顔を、さつ、と上げる。

その鸞色の瞳が壇上に注がれ、皆の視線は同様、壇上のギデオンに、注がれた。

素晴らしく綺麗で堂としたギデオンの不動の姿は、彼の勇猛さの際だたせ、誰も文句の付けようもない、皆が長年待ちこがれていた右將軍、そのものだつた。

彼は中央高台で、右將軍の印である金の杓を渡され、そしてそれを受け取って、皆に高々と、上げて見る。

静かな感動を湛えた歓声が、熱く、熱狂的な轟きに代わった。

その講堂に居る全員が、口々にギデオンの名を呼び、拍手と歓声は号泣に近く、どれ程多くの人々が、彼の就任を待ち望んだかを、彼に教えた。

ソルジェニーはその姿に感極まって、瞳に涙を、浮かべていた。

そつ、と隣から差し出されるのに気づくと、ファントレイユが白い刺繍入りのハンケチを、その手に、持っていた。

その顔を、小柄な自分に傾けて差し出す彼の様子が、あんまりいつも通りのとても優雅で素晴らしい美貌で、ソルジェニーはつい、尋ねた。

「…貴方には、必要無いんですか？」

ファントレイユは途端に、肩をすくめた。

「…だって王子。」

おめでたい席では、泣くもんじゃ、ありません。

笑うものでしょう？」

そうささやいた彼の微笑が、あんまり小粋で素晴らしくて、ソルジェニーは思わず、涙が止まるのを感じた。

そしてファントレイユに微笑んで、そつとハンケチを返す。

「…折角ですが、それは必要、ありません」

そう言つて王子が、素晴らしく微笑むので、ファントレイユはそれは嬉しそくに、そのハンケチを、胸に終った。

— E N D —

おまけ。 其の後の、会議。（前書き）

アイリスとギョウター側の、お話です。

おまけ。その後の、会議。

一ヶ月が、経とうとしていた。

そろそろ・・・だな。とアイリスは思った。オーガスタスに尋ねたが、南領地ノンアクタルから決闘はいつするのかと言う問い合わせも無く、金の件で決闘を付けると言う話はあれきり、絶ち消えたと聞いた。

しかしアーシユラスが忘れる筈も無い。が、ドッセルスキが將軍の座を追われ、アーシユラスを頼つたらしいが、賄賂を送らない限りは要請には応えられないと、冷たい野獸からの返答を受け取つたらしいから、さすがのアーシユラスもドッセルスキと繋がりがあつた事が公で口に登るのは、時期がまずい。と、大人しくしていたのかもしれない。

が、一ヶ月が、立っている。

つまりそろそろあの野獸が、次の会議で暴言と暴拳を吐くのを、覚悟しなくてはいけない。

オーガスタスが誰か代役をと叫んだ、意味が解りすぎる程解つた。ぞつこんのローランデに色目使われ、ギョンターは日頃氣に入らないと言つていたアーシユラスに、報復の機会を狙い澄ましていたし、父親が大好きな息子のマリーエルも絶対！あれで納まる筈も、無いだろう。

オーガスタスが逃げ出したくなる気持ちだが、痛い程解つたが引き受けると、言ってしまった。

だが救いは自分は一回きりだ、と言う点だ。

つまり、今後そのやり方を貫く必要も無く、その一回は好きにやつていいと言う事だ。

アイリスはともかく、どうすればこの、混乱が納まるのか、じつく

りと考えた。

会議の会場へ足を運ぶ途中で、ギュンターは彼を見つけた。

「よお・・・」

無然した表情で、前を歩くマリーエルの女顔に挨拶する。

彼は、振り向いた。

少年の頃からそれは母親似の、小顔の美少年だったが、大人になってもそれは変わらない。

だが、昔から中味は自分と同じ野獣、とふんだけあって、髪は彼の愛しのローランデにそっくりだったが、その態度といい立ち姿といい、どこから見ても立派な野獣だった。

数歩先からも彼の、凄まじい気迫が常に漂い、マリーエルが居るな、と言う存在感を醸し出していた。

マリーエルはギュンターを見た。

自分が幼少の頃青年盛りだった筈だ。

だがローランデと最近は蜜月を過ごしているせいか、全然、衰えを見せない。

相変わらずの美丈夫ぶりに、マリーエルは心の中でつい、ふん、と鼻を、鳴らした。

ローランデは俺の物だと、彼の前でたつぷり、その男ぶりを見せつけた時とちつとも変わらず、逞しくしなやかな体付も、教練一モテたと言うその美貌も、憎らしいくらいで、マリーエルはもの凄くしやくに触ったが、今回の相手はアーシユラスだ。

「相変わらずだな」

マリーエルは皮肉な言葉を、投げかける。

ギュンターは彼が、苦み走った表情の理由を熟知していた。

長年行方を探していた母親の違う弟レッスンの面倒を、マリーエルは一手に引き受け、教練でも彼を庇い通し、そしてその後距離を置こうと言って、レッスンに振られたのだ。

ギュンターでも呆れるが、マリーエルの初恋はよりによって父親で、

母親共々父親に惚れ込んでいた。

自分がかつさらった形で母子はローランデに失恋し、その後マリーエルは父親の面差しを受け継いだ、弟テレッセンにその想いを移行させた。

テレッセンは母親を亡くし、彼しか頼る者は居なかったし、マリーエルもそれは彼を大切に、していたようだ。

その相手に、お互いの成長の為に離れようと告げられ、この、現在の苦み走った表情になっている。

テレッセンが一人前に成り、ローランデの妻がとうとう離婚を承諾して以来、ギユンターの方はローランデと、長年望んでいた同居を始めた矢先で、それがますます、マリーエルの苦い表情に拍車を掛けていた。

だがマリーエルは餓鬼の頃から半端じゃない“気”の持ち主で、子供らしい所はカケラも無く、最愛の父親の前では心配かけないようになり、大人しく子供の振りをしていたが、つい、餓鬼だと言う事を忘れていつも対等の口をきいていた。

現在21に成ったと言うが、17の年に、アースルーリンド全領地から金品を奪い、各地方護衛連隊を嘲笑い、打ち破って盗みまくった大盗賊、ドードリンデを打ち取り、伝説を残した。

どの領地からもお尋ね者扱いされていた有名過ぎる大盗賊の首領を、たった17の、当時は連隊長ですら無い一介の騎士が打ち倒したとあって、その名はあつと言う間にアースルーリンド中に、轟いた。地元民は皆、北領地「シェンダー・ラーデン」大公子息の素晴らしさに彼を英雄扱いし、全員が熱狂的な歓声を送った、だけあり、猛獣振りは格段だった。

18で地方護衛連隊長の地位に掛け登り、それ以来会議で顔を会わせるようになったが、テレッセンに別れを告げられた後で毎度、ギユンターをそれは忌々しげに、見る。

ギユンターは自分が勝者だと知っていたので、放って置いた。その余裕がますます気に入らないようなのは、明白だったが。

失恋の八つ当たりにも、いちいち付き合ってられるか。

と、言う迄も無く、ギウンターがローランデに受け容れられない長い期間、それでも愚痴一つ零さずローランデに尽くし続けて来た彼の姿を、幼いマリーエルは目の当たりにしていたのでさすがに、突っかかつては来なかった。

「（・・・俺に、『根性無し』と笑われると、思ったんだろうな）」
二人は、黙り込んで並んで、歩いた。

事情を知っているのか単に怖いのか、並ぶ二人を見て途端、皆が場所を開けて避ける。

ギウンターはその、隠す様子を見せない気迫を常に漂わせる、自分より頭一つ低い彼を見下ろし、つぶやいた。

「お前、ちゃんと抜いてるか？」

マリーエルが、表情を変えず彼を見つめる。が、その青紫の瞳は、見つめられただけで寒気が震う程の眼力だった。

「・・・欲求不満とか、言いたいんじゃないよな？」

マリーエルは、嗤^{わら}った。

ギウンターは思い切り、肩をすくめた。

「まあ、一番の男盛りに、恋人に振られちゃな」

マリーエルは思い切り気に、触ったようだったが、言った。

「アーシユラスの事を、それは想ってるからな！」

あんたも同様だろう？と振った。

「・・・あいつは俺が、決着を付ける」

ギウンターが言うなり、マリーエルは間髪入れず、凄まじい迫力で彼の胸ぐらを、掴み上げた。

周囲がその様子に、ぎよっと、した。

マリーエルにそんな鋭い気迫で胸ぐらを掴まれたら本当に、怖いのに、ギウンターは平気だった。

「・・・あいつは俺の目の前で！」

ローランデを侮辱した！あんたの目の前じゃない！」

ギウンターはだが、言った。

「だから何だ！俺は心の底からムカついてるし、アーシユラスとはお前より、付き合いが長い！」

どれだけ溜め込んでるか、お前には解らないだろうがな……！」

マリーエルが殺気に近い迫力でギユンターを睨んだがギユンターは静かに、睨み返す。

どっちも野獣だけあって凄まじい迫力で、会議前にこれではと、関係者が慌てて責任者を、呼びに行った。

アイリスは、あと数歩で会議場だと言うのにその廊下で睨み合う、ギユンターとマリーエルの姿を見つけた。

二人の怖さに誰も側に、寄れなかった。

アイリスは二人の横に付くと、つぶやいた。

「会議の準備をする者が、中に入れなくて困っている」

「……入ればいいだろう？」

ギユンターはまだマリーエルに胸ぐらを掴まれていたが、マリーエルを凄まじい瞳で睨み付けたまま、言い返した。

アイリスが腕を組んで思い切り、ため息を、吐いた。

俯いたまま、告げる。

「……いい加減大人げないとか、思わないんだな？」

相手はローランデの息子だろう？

君には年長者の、思いやりとか余裕とかの持ち合わせは、無いのか？」

「……この、今にも喰い付きそうな野獣の坊やを君が何とかしてくれるんなら俺だって、殺気を引っ込めるが」

アイリスは思い切り、呆れた。

「……仲裁がいるのか？」

自力ではどうしようも、無いのか？」

ギユンターが、ぶすつとして、告げた。

「……アイリス。こいつは五歳の餓鬼の頃から、俺の恋敵なんだ」
アイリスが、呆れた。

「君は五歳の子供を恋敵に、していたのか？」

ギウンターは頷いた。

「もの凄く、手強い。ローランデにそれは、愛されているからな」
マリーエルがとうとう、口を開いた。

「・・・お前にくれてやるなんて本当に、馬鹿な事をしたぜ！」
ギウンターが、嗤^{わら}った。

「お前が、餓鬼の頃のたわ事で無効だとか、言い出さない卑怯者で無くて、良かったぜ！」

あの頃から野獣だったが今はきつちり、成獣だもんな！」

「・・・睨み合ってる、理由を聞いていいか？」

アイリスがそつと、聞いた。

「・・・俺がカタを付けると言ったのに、こいつがしゃしゃり出る」
ギウンターが言うともマリーエルも怒鳴った。

「・・・しゃしゃり出てきたのはお前だろう！」

権利があるのは、俺だ！！！」

アイリスは、心の底からうんざりした。

「・・・君達がここで言い争っていると、ローランデに告げていいんだな？」

二人ともが瞬間、睨み合うのを止めてアイリスを、見た。

「・・・告げ口か？」

ギウンターが言うとも、マリーエルも言った。

「それは無いだろう？餓鬼扱いされる」

「私がどんな人間か、君達は知らないとも言っ気か？」

アイリスが事態の決着を付ける為本気でローランデを呼ぶ気だと、

二人は気づいて殺気を、解いた。

「入ってくれ。実は、君達に教えた時間は他者より、早い。まさか二人が睨み合うとは思ってなかった。

私の予測が甘くて君達に、謝罪する」

ギウンターは、謝罪する、と言う言葉は明らかに皮肉だな。と軽く肩をすくめた。

君がそこ迄ローランデに関して、大人げなく激怒するとは思わなか

った、と呆れたんだろう。

マリーエルもこの、多大な政治力を持つ軍の大物の言葉を、その通り受け取る程阿呆では無かった。

促されて会議場に、足を、踏み入れる。

周囲に円形に椅子が並べられ、中央が広く、議長席が設けてあった。周囲の椅子の前には手摺りがあり、つまり怒った出席者が直ぐ剣を抜いて、中央に乱入出来ない仕組みだ。

あちこちに、場を隔てる手摺りが設けられて乱闘、しにくいようになっている。

・・・つまりここで行われているのは、いかに、危険な会議かと言う事を物語っていた。

アイリスは心から、オーガスタスの苦勞を、思った。

二人をとにかく、椅子に掛けさせ、自分は二人に、向かい合ってた。座った。

「・・・解って無いようだが君達は、それぞれの地方護衛連隊の、長だ」

アイリスは二人を交互に見たが、お互い腕組みしてそっぽを向きあい、やっぱり解っている様子は、無い。

「今日は、多分決闘に、なる」

二人の瞳がきらりと嬉しげに光り、アイリスは心から、げんなりした。

「金と肌白。二人出す。」

どっちがどっちか、なんだがどうせ、君達は肌白の方で決着を着けたいんだろう？だがアーシユラスを思い切り殴らせてやるから、ギョンター。折れてくれ。君が金の方だ」

だがマリーエルが問うた。

「・・・殴る？決闘だろう？」

アイリスが、顔を上げた。

「会議場では、剣を抜かせない。

殴り合いの、決闘だ」

ギウンターとマリーエルが顔を、見合わせた。

アイリスは肩をすくめ、続けた。

「アーシユラスが前回の事を覚えて無くて（そんな事はまず、無いだろうが）言い出さなければ決闘は、無い。後で君達が好きなだけ、やってくれ」

ギウンターはため息まじりにつぶやいた。

「・・・随分投げやりだな。君の関心は会議だけか」

マリーエルもつぶやいた。

「会議の席じゃなきゃ、乱闘してもいいんだな？」

アイリスは二人を、見た。

「だってそれ以外なら、ローランデを呼べばコトは済む。

ローランデの前じゃ君達は恥ずかしくて言い争えないだろうし、万が一アーシユラスが彼を目前に口説き出しても、ローランデが正式に決闘を申し出てアーシユラスに自分の考えの甘さを、思い知らせるだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・東領地ギルムダーゼンの野獣共がお前を凄く、嫌う理由が良く、解るぜ」

ギウンターがつぶやくと

「あんた、人の首根っこ掴んで喉を鳴らせと言う気なんだな?! 最低のやり方だ!」

アイリスは誉め言葉を聞いたように、にっこりと笑った。

「野獣相手に、まっとうなやり方をする必要が、どこにあるんだ?」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人がぶすつたれて黙り込むと、アイリスの部下が彼らの武器、つまり長剣、短剣、その他を、お預かりしますと丁寧に取り上げ、二人は離れた椅子に腕組みし、最悪に不機嫌なぶつちよう面で後の入場者を、待った。

東領地ギルムダーゼンのダーディアンは、それは入り口で、ぶつぶつ言った。

「剣を取り上げるってのは、裸に成れと同じ事だぞ？」

俺に、恥をかかせるつもりか?！」

きかん気、駄々っ子のような、相変わらずの口のきき方に、ギョーンターは思い切り、肩をすくめた。

だがやっぱり、アイリスが顔を見せた。

「……今日は私が代理議長で、帯刀は困るんです。

オーガスタスと違い私は、暴力沙汰に馴れていなくて」

ダーディアンは呆れてモノが、言えなかった。

「……お前が暴力沙汰に馴れていないんなら、三歳の子供は刺客だ」

アイリスはその言い回しにそれでも、にっこりと笑い、言った。

「貴方のご息は今でもどうやら、貴方の目を盗んで私の最愛の息子の側を、ウロついているらしい。

勿論、こちらも気をつけては居るが、万一賊と間違えて逮捕、拘留する事にも成り兼ねない」

ダーディアンは金髪とその見事な体躯を揺らし途端に、怒鳴った。

「……グエン＝ドルフはそんなヘマは、しない!」

だがアイリスはますますにっこりと、笑った。

「ご息を随分、信頼しておいでのようなうだ。

だが、私の部下達もそう、思っている。

まさか東領地ギルムダーゼンの大公子息が捕まるなんて。と。万が一御息を逮捕してもそうとは解らず、貴方の問い合わせを、待つ事になるかもしれません」

アイリスは自分の息子を餌に、寄ってくるダーディアンの息子グエン＝ドルフを、手屑音引いて待ち構えて拉致監禁してやるぞと、脅したのだ。

「……アイリス。それを続けるといつか、寝首を欠かれるぞ」

だがアイリスは全然気にもせず、笑顔のまま差し出された剣を、受け取った。

「短剣もです。刃物は全部」

ダーディアンはムカムカしたような表情で、胸、腰、そしてブーツの下から短剣を、じやりと差し出し、アイリスに手渡した。

「・・・これで、いいんだな？」

アイリスは頷いたものの、こんな脅しで彼が屈するとは思っていないかったようで、つい同情するようにささやいた。

「都には出向くなど、グエン＝ドルフに釘を刺しても駄目なんですか？」

ダーディアンは、むすつと彼を、見た。

「息子は俺同様、それは目端がきいて、すばしっこい」

つまりどれだけ監視しても抜け出し、彼の手にも負えない、と言う事らしかった。

アイリスは俯いてつい、ため息を、付いた。

そしてアイリスの狙い通り、『光の王』の血を引く素晴らしい騎士、西領地「シャノスゲイン」護衛連隊長ウエラハスの後ろから、アイシユラスがその黒い肌の大きな体を威嚇するように押し出しながら、こちらに向かっているのを、見た。

アイリスはまず、長身で見事な体格をしたその銀に近い金髪を爽やかに肩の上で揺らし、澄んだ湖のような青い瞳の、この会議の中の唯一の良心、ウエラハスに事情を話す。

地方護衛連隊長の中ただ一人まっとうな人間の騎士ウエラハスは当然、快く彼に武器を差し出す。

そしてその後ろから来たアイシユラスに、アイリスは同様にするよう申し出たが、やっぱりの反応だった。

「・・・あいつは自分が武器だ！」

武器を持ち込み禁止なら、あいつ自身を入場禁止にすべきだ！」
アイリスは、微笑んだ。

「つまり今回は、貴方が、欠席と言う事ですか？」

意見のあったアイシユラスは、引っ込む訳にはいかない。

「欠席はしない！武器も外さない！」

アイリスは彼を、とても気の毒そうに、見た。

「・・・皆全員が、刃物を持っていないのに、貴方だけには必要なんですか？」

「・・・つまり、そんなに彼らが怖いんですね？」

アーシュラスが怒りを通り越して、魔人のような顔に、成った。

「・・・あいつらが、怖いだと?!」

俺の、どこをどう見たら、そう思うんだ!!!」

大層大柄なオーガスタスと張る程の見事な体格のアーシュラスが叫ぶと、アイリスが彼の腰の剣を、じつ、と見つめた。

アーシュラスはそれに、気づく。

アイリスはため息混じりにつぶやいた。

「・・・だって他の男達は刃物を必要としない」

アーシュラスは顔を怒りに歪めて、怒ったように剣を鞘毎腰から抜き、アイリスの手に押しつけた。

「・・・これも・・・これも必要ない！」

俺は意気地無しじゃないからな!!!」

短剣の他に宝石のたくさん付いた髪飾り、胸飾り帯飾り迄差し出す。が良く見るとその先は全部、鋭い、刃だった・・・・・・・・・・・・・

「どうぞ。入って頂いて、結構です」

アイリスはにつこり笑うが、アーシュラスが中へ消えると、眉を顰ひそめて両手いっぱい刃物を部下へと、渡した。

アーシュラスの後ろから三人の侍従が付いてきたが、アーシュラス同様、刃物を、横に付くアイリスの部下に差し出しては通り過ぎ様、ジロリ。とアイリスを睨んだ。

どう見ても三人共アーシュラス同様黒い肌をした、体のそれはでかい筋肉の塊の、侍従と言うより戦士だった。

アイリスが改めて中に入ったものの、雰囲気は最悪だった。全員がアイリスに、殺気に近い視線を投げかける。

アイリスは心の中で思い切り、ため息を付いた。

が口を開いた。

「先程も言いましたが、今回私がオーガスタスの、代理議長を務めます」

アーシュラスがふん！と鼻を鳴らした。

「奴は腹でも、壊したのか？」

アイリスは、笑った。

「オーガスタスの欠席に、興味があります？」

アーシュラスは慚然と告げた。

「ある訳無いだろう！」

ダーディアンが唸った。

「なら、聞くな！」

二人は睨み合う。アイリスはそれでも笑顔を崩さず言った。

「今日は私ですのでこの際、やり方を変えたいと思います。議題を設けず……」

が、アーシュラスが立ち上がった。

「前回の、カタはまだ、ついて居ない！」

アイリス、お前オーガスタスからちゃんと、引き継いでいるんだろ
うな？」

ばつくれるつもりかとアーシュラスは説き、アイリスは応じた。

「……決闘の、件ですね？」

アーシュラスは安堵したように、頷いた。

「……あの賄賂を送っていたのはドツセルスキの独断で彼は逮捕
された。送り主が逮捕された以上、誰が貴方に金を送ると言っ
つ
す？」

新たな近衛の者と、話し合いがついていると？」

アーシュラスは、唸った。

「ギデオンを、呼べ！ドツセルスキを引継ぎ、ついでに体も差し出
せと言つてやる！」

一同が、顔を下げきった。あちこちからため息が、洩れる。
アイリスは冷静に告げた。

「ギデオン右將軍の、前將軍の引継事項の中に貴方への賄賂は、入っております」

アーシユラスは座ったまま、ダン！と鋭く足を踏み鳴らした。だがアイリスは顔色も変えずに、つぶやいた。

「・・・賄賂は、ドツセルスキ前右將軍の懷で無く、近衛の金庫から出ている。」

「・・・これは、不正です。」

ドツセルスキは直、この罪状でも逮捕、監禁され、裁判で事情を聞く事になる。

それを受け取った貴方にも裁判所からの召喚が、届くでしょう。

「・・・私の、言っている事が、お解りか？」

アーシユラスは鼻で、笑った。

「・・・つまり俺を罪人扱いすると言うんだな？」

アイリスは、だん！と机を叩き、言った。

「扱いじゃなく、罪人だ！」

ダーディアンも、ギウンターもマリーエルも、全うに言葉の通じない野獣アーシユラス相手に正攻法で喧嘩を売るアイリスを、ついまじまじと、呆れて見つめた。

アーシユラスは嗤った。

「俺を、逮捕、拘留すると言う事か？！」

アイリスは、艶やかに微笑むと、告げた。

「・・・貴方の領地には貴方の後釜を狙う継承者が、それはたくさん、居る。」

貴方が逮捕され、大公を廃されれば皆さん、大層喜ぶ事でしょうね？」

ダーディアンがつい、つぶやいた。

「・・・俺も、喜ぶぞ」

ギウンターも同感だと言う顔をしたが、さすがに言葉には、しなかった。

当然、アーシユラスが憎しみを込めて激しく、アイリスを睨んだ。

「・・・俺を、脅しているようだな！」

アイリスは、ため息を付いた。

「君があまりにも自分の今の現状を把握しないから、解るよう言った迄だ！」

さて。だが私はオーガスタスの意見も、尊重しよう。

彼は君を納得させるのに、決闘だと、言ったそうだな？」

アーシュラスは、丁寧な言葉を取り払ったアイリスが、優雅さはそのまま、だが気迫を増すのを、見た。

「そうだ！」

アーシュラスが乗ってきたのを確認し、アイリスは一つ頷き腕を組んだ。

「・・・その意思是尊重する。が、議長は、私だ。

決闘はこの場で、武器は拳で、どちらかが倒れる迄やってもらおう

！」

だんっ・・・！

アーシュラスが、立ち上がった。

「・・・冗談だな？」

アイリスの、気迫が更に増す。その濃紺の瞳はギラリと光る猛獣の青の瞳を見据えたまま、だが口元に微笑をたたえ、低く秘やかに、告げる。

「私は冗談を、言わない」

ウェラハスは猛獣を相手に少しも、気品と威厳を損なわないアイリスに、感嘆した。

「本気で、拳で決闘しろと?!」

アーシュラスが、それこそ激怒して怒鳴ったが、アイリスも微笑を消ないまま、凄まじい気迫で相手を静かに見つめ、つぶやいた。

「そう、言った筈だ」

アーシュラスは、沸騰寸前だった。相手がオーガスタスならとくに詰め寄っただろう。

だがアーシュラスはアイリスの腹づもりを、探った。

その瞳が、全うで真っ直ぐな瞳なんかじゃない事を彼も良く、知っていた。つい、探るように怒鳴る。

「・・・誰と、話を付けている！」

ドムングルか？シャーラーセンか！」

その二人はアーシユラスと大公の座を争った、母親違いの兄弟の名だった。

が、アイリスは微笑を消さないまま怒鳴り返した。

「明かす馬鹿が、居るか？切り札を！」

その、優美にすら見える男の微笑を、アーシユラスは心の底から齒噛みして呪った。

ダーディアンもギョンターも、アイリスが背後で手を回し万全の準備で事に臨むやり方を、知ってはいたがこの公の場で、やはりとても優雅に、本人にだけはちゃんと解るような脅しを掛けている事に、呆れ返った。

マリーエルはつい、武器を、取り上げた上での遠慮の無い脅迫の、その海千の老獪なやり口に、腕組みしたまま、唸った。

アーシユラスはその、底なし沼のような恐怖を与える静かで優雅な男に、仕方無さそうに慄然と怒鳴った。

「拳だな?!」

アイリスは、艶然と、微笑った。

「・・・拳だ」

アーシユラスはそれでも、激しくアイリスを睨み付けながら、いつドッセルスキのように自分の足元を掬うかもしれない男を、睨み据えた。

事実、ドッセルスキは間違いなくこの男にして、やられたのだ。

アーシユラスが、怒りを腹に、それでも座ったのでアイリスは少し俯くと、告げた。

「金の件が、決着が付いてなかったな？」

アーシユラスに確認を、取る。

「肌白もだ」

アイリスは、頷いた。

「西領地「シャノスゲイン」のウェラハス連隊長がその件を、収めた筈だが？」

アーシユラスが喚いた。

「・・・あれは、違法だ！」

アイリスは、顔を、上げた。

「・・・いいだろう。君に前回の件で侮辱を受けたと、ローランデの息子マリーエルが名乗りを上げている。

そして、ギウンターもだ」

彼は二人を、見た。

「君と決闘したい男が二人居る以上、金、肌白の二件で決闘を、認める。但し、言った通り、拳でだ。

この条件を飲むか？」

アイリスが、じつと促すように・・・最もアーシユラスには脅すようにしか見えなかったが・・・彼を、見つめた。

「・・・俺が殴り倒したら、金も肌白も、言うがままだな？」

アイリスは見つめたまま言った。

「負けたら金はギウンターが、肌白はマリーエルが請け負う」

ギウンターは、アイリスの言い様に、肩をすくめた。つまり、絶対負けるな。と言う事だ。マリーエルも黙したままその瞳は気迫を増す。

「立会人を、呼んだ。彼らの前で宣誓して貰おう。

決闘で決着を付ける以上、君は一切の報復を、関係者の誰にもしない。

君の、誇りにかけて」

アイリスがそう言うと、アーシユラスが、それは嫌そうに、彼を、見た。

「勝負に誓うのは聞いた事があるが、誇りにかけて誓わせる気か？」
アイリスはしゃあしゃあと続けた。

「勿論、君が宣誓を破れば君の誇りは、地に、落ちる。

君も知つての通り、私は『神聖神殿隊』付き連隊で君の領地にも、度々訪れる。

君の領地で君の誇りが泥まみれだと領民が知り、そんな男を大公に据えたまま大人しく従うかは、君も知つての、通りだ。

南領地ノンアクタルでは、誇りこそが“男”たる、証だそうだな。

・・・そして領民は、“女”には、従わない」

アーシユラスはその侮辱に、心から沸騰して怒鳴った。

「いい加減覚えろ！お前の言っている事は全て、脅しだ！」

が、アイリスも怒鳴り返した。

「覚えるのは、そつちだ！」

私は事実しか、口にしていない！」

二人の、睨み合いが、続いた。

アーシユラスは一番最初に報復の標的をお前にし、闇に紛れて襲撃し殺してやるぞと睨み、アイリスはその報復の前にアーシユラスを捕まえ、彼の後釜に座りたい兄弟にその身を、売ってやる！と、凄んだ。

だが相変わらずアイリスの、底冷えする微笑は、消えたりはしなかったから、アーシユラスはつい、意思を挫かれたように瞳を、微かにそらした。

アーシユラスには、解つたのだ。アイリスを急襲する自分の部下は、アイリスにとっては自分の縄張りも同然のこの都には、数える程しか居ない。

だが自分の敵は、寝首をかく事の出来る膝元に、ごろごろ居ると。だがアイリスはつぶやいた。

「覚えておけ。君の最大の敵は、君が思い描ける人物じゃない。どれだけ頭の中にその無数の顔を思い描いたとしてもだ」

アーシユラスは憮然と、唸った。

「つまり、ドムングルでもシャーラーセンでも無いと、言う事か？！」

アイリスは、微笑んだ。

「勿論、君が私の言葉を、信じればの話だが」

皆がこのアイリスの見事な駆け引きに、相変わらず最高に嫌な相手だと、彼に賞賛を送った。

アーシユラスはますます、かつとしたが、嘘を言ったのか、真実かと詰め寄った所でこの肝の座った男が明かす筈も無く、アーシユラスは自分の真の敵が霧に包まれたように解らなくなつて思い切り苛立ち、アイリスをただ、睨み据えた。

だがアイリスは止めの釘を、刺した。

「君がやり損なつた時、次期大公の名を聞いて君は真実を知る。

・・・だが、そうならない為には、ドッセルスキがなぜ廃されたのかを良く、考えるんだな」

ギウンターも、ダーディアンも、やっぱりアイリスを敵に回すと最悪だなど思つて顔を、下げきつた。

つまりドッセルスキのように人非人な事を平気でするならいつでも廃してやるぞと、言ったのだ。

だが実績が有る以上、彼の脅しは有効だと、マリーエルは感じた。事実、アーシユラスは大人しく、なつた。以前よりは。

「立会人を、出せ」

アイリスは部下に振り向くと、頷いた。

二人の人物が、顔を出した。

そこに居る全員が驚いた。

その二人はローランドと、ギデオンドつたからだ。

ギデオンはアイリスに散々、言い含められてはいたが最高にムカついていた。隣の別室から中の様子をずっと、伺っていたので。

心の中で、金と体を、差し出せたと？と、その場を一気に華やかにする美女のような素晴らしい容貌を見せながら、凄まじい気を放ち、アーシユラスを睨みすえた。

ローランドは隣のギデオンの様子に、ため息を、付いてアイリスを見つめた。

アイリスは肩を、すくめた。

「誇りにかけて、誓うか」

アーシュラスが、二人に向かうがその姿を、眺める。

ギデオンは、自分やダーディアン、ギンターと同様の金髪だったが、見事に艶やかな波打つ黄金色で、その色白の小顔と、宝石のよ
うな青緑の煌めく瞳も相まって、それは目を引いた。

ローランデの、少し俯く風情は、その美しい曲線の白い頬に独特の
色の栗毛がかかり、とても端正で、つい、腕に抱いて奪いたくなる
ような儚さが、あった。

にやつく顔でローランデを見つめる、アーシュラスのその思惑に感
づいたギンターの殺気が、咄嗟にアーシュラスの背に突き刺さっ
た。

アイリスがそれに気づいて直ぐ、怒鳴るようにアーシュラスを促し
た。

「・・・誓いの言葉が聞こえないが、いつ君はそんな小声になっ
たのかな？」

アーシュラスはアイリスを、途端に睨んだ。

「俺の誇りにかけて・・・!!」

怒鳴りだし、その場の全員がほっとした時いきなりアーシュラスは
アイリスに振り向いた。

「・・・俺が勝てば、こいつらは俺の物だな？」

アイリスはげんがりして言った。

「君が倒す予定のマリーエルに聞くんだな」

アーシュラスがマリーエルの方を振り返り、口を開こうとするのを
見てアイリスがとうとう、腹の底から怒鳴った。

「決闘の、後だ！交渉は！」

まだ勝負前に交渉出来る筈も無いだろう！」

アーシュラスは肩を、すくめた。

ギデオンはつい、初めて見る、真剣に怒鳴るアイリスの姿に、なる
程。彼も苦勞しているようだ、察した。

アーシュラスはそれは不満そうだったが、二人の前で、その言葉を

口にした。

「・・・俺の誇りにかけて、決闘後の報復は行わない」
アイリスが唸った。

「決して、誰にも？」

「誰にもだ」

「・・・もし、誰かが襲撃され、君の気配がチラとでもしたら、私はその時、全力を尽くす。

これは誓いでは無い。決意だ。アーシユラス。君が例えこの言葉を覚えていなくても、私が忘れる事は決して、無い」

皆がそのアイリスの覚悟に、心底ぞつと、した。
が、アーシユラスは嗤った。

「・・・いいだろう。俺の誇りを地に落とせるなら落として見る。
俺はこの決闘には、負けない。

褒美を目の前に差し出すとは、お前もしやれた事を、するな」

ギデオンは呆れ返ったが、ローランデは予想していたようだ。彼は静かにそれを言葉にした。

「・・・アーシユラス。君は先日から私に一言も意見を言わず私の身の行く末を勝手に決めているようだが・・・」

アーシユラスにとっては女同然のローランデが口を開いても、彼の自分の態度を改める気なんか無く、好色な視線はそのままだった。

が、そんな瞳付きで見られたりしたら、ギデオンならもうとくに殴りかかっていただろうが、ローランデは、違った。

「もしどうしても私が欲しいなら、この会議の後剣を抜いて決闘だ。そして、そこ迄して私が欲しいと言うのなら、こちらとしても光栄の至りだから、一切手を抜く事無く剣を振るうと約束する」

武人としての青く鋭い瞳で真っ直ぐ見つめられ、アーシユラスはその視線がそのまま剣だと、気づいた。しかもその視線から察するに、噂通り、並の、使い手じゃ、ない。

ローランデは続けた。

「この決闘を受けないと言うのなら、今後一切私に、近寄るな。こ

れはこの場で口にした限り、この場を仕切るアイリスが立会人としての役割を果たす」

アーシユラスはローランデを、見た。

「・・・つまり決闘受けないでお前をかつさらったらアイリスが、しゃしゃり出ると言う事か？」

アイリスはつぶやいた。

「君の、報復行動だと判断する」

アーシユラスはまるで、前門の虎、後門の狼に囲まれたように、進退窮まった。

「・・・解った」

そう、言った。

ついダーディアンが側に居たギユンターにこっそりささやいた。

「・・・解った。だぞ？あの、アーシユラスが！」

ギユンターはダーディアンを見ないまま言った。

「アイリスを敵に回すとお前もああなる」

だがダーディアンも、言った。

「お前もな」

二人は顔を見合わせたが、思い切りため息を、付いて俯いた。

「・・・私も君には言いたい事がある」

ギデオンが、おもむろに、口を開いた。

アーシユラスは勿論、皆が右將軍に成り立てのまだ若く、しかし輝くような“氣”を放つ彼を見つめた。

「何やら君は私に思惑があるようだが、今後の事も、ある。私も腹に溜め込むのは嫌いだし、剣で思い切りお互いやり合い、その後は、すっぱり水に流すというのは、どうだ？」

アーシユラスの好色そうな視線が素晴らしく美しいギデオンを見て、復活した。

「真剣でやりあうのか？」

だがギデオンは自分より頭一つ半はでかい、そのヨダレを垂らす黒い肌の大きな野獣に怯む様子も見せずにつぶやいた。

「それでもいいが。」

アイリス。南領地ノンアクタルの大公候補は山程いるんだな？」

アーシユラスはその意味が解り、黒い肌に浮かぶような青の瞳をきらつかせて、激怒した。

「・・・俺を殺せる程の腕だと過信しているようだな！」

ギデオオンが、うんざりするように、言った。

「私はアイリスのような言い回しは苦手だ。」

個人的な事のようなだからはっきり言わせてもらうが、お前のその目付きも言動も、最悪に気分が悪い。

アイリスさえ許せば今直ぐにでも決闘して斬り殺してやりたいが、彼の顔もあるからそう言う訳にもいかない。

近衛の中では完全なうさ晴らしが出来ないが、決闘ならお前をぶつた切つても誰も、文句を言わないんだろう？」

ダーディアンもギウンターもマリーエル迄もが、ギデオオンの解りやすい言動に心から、ほっと胸を、撫で下ろした。

アーシユラスは当然、沸騰した。

「・・・決闘だ！」

ギデオオンは、頷いた。

「頼みがある」

アーシユラスはついその言葉にまた、女に甘えられたようなでれついた視線を、向けた。

「何だ？」

猫が喉を鳴らしたような声音にギデオオンはめげずに言った。

「その前に、ギウンターとマリーエルとやるんだろう？まあ、そつちに代理を三人も抱えてるようだが、出来れば私が君と剣を、交えたい」

アーシユラスは自分が指名されたのが嬉しいようだったが、皆はギデオオンが、後釜が居るならさっさとアーシユラスをぶつ殺したいんだなと、感じた。

だがギウンターが、唸った。

「俺はきつちりアーシユラスに腹を立ててる。

俺からあいつを取り上げる気か?!」

マリーエルも間髪入れずに怒鳴った。

「よりによってこいつは俺が負けたら・・・!と言いその上、親父を差し出すかと問うたんだぞ!

この、俺にだ!」

アイリスは、誰がアーシユラスを叩きのめすかで仲間割れが始まるのを感じ、すかさず口を挟んだ。

「君達は忘れていようだが・・・」

口を開くと、ギデオン、ギンター、マリーエルの視線が一斉にアイリスに、集まる。

「・・・選ぶ権利は彼にある。

彼だって男にこんなにもテた事が無いんだから、考えさせてやってくれ」

アーシユラスは、唸った。

「ギンターは・・・金だな・・・。マリーエルは・・・」。

だがローランデは直に決闘だと、言うし」

ギデオンが即座に言った。

「勿論、マリーエルが勝てば私とローランデの決闘は必要無いだろう?」

ローランデが肩をすくめた。

「私はそれとは別件だ。公の場で侮辱されたし、決着をつけたい」
ギデオンが途端、年長者のローランデの意見に眉を顰めた。

「・・・そういう我が儘を言っているのなら、俺だってあいつを、ぶっ殺したい」

アーシユラスはもう、かんかんだった。怒りすぎて消耗し、決闘は無理なんじゃないかと思う程。

だがアイリスがつぶやいた。

「別に悩まなくとも、アーシユラス。君が全員を引き受けてくれて、

一向に構わない」

アーシユラスがジロリと睨む。

手練れで知られる四人も相手に命が持つ筈も無く、とっとと死んでくれと、聞こえたからだ。

しかも、大層軽やかな、笑顔で。

ダーディアンがつぶやいた。

「前から思い続けてきたが、あいつの笑顔ってほんとに、ぞっとするな」

ギユンターも腕を組み直してつぶやいた。

「心から楽しそうに、死ねと言う」

ウエラハスもつぶやいた。

「まあ、彼が相手を心理的に追いつめているのは、認める」
だがギユンターはウエラハスのその言動に、つい眉をひそめてつぶやいた。

「上手いやり方を覚えた、とか言って次回野獣相手に同じ手を、あんた迄使い出すんじゃないよな？」

ウエラハスは彼らを、見た。

「だが、有効なのは確かだ」

ギユンターもダーディアンも、やれやれとそっぽを向いた。

彼らの中で一番年若いマリーエルが、腕を組んだままアーシユラスを促すように唸った。

アーシユラスはだが、悩みまくり、唸りまかった。

アイリスが仕方なく言った。

「ローランデとギデオンの決闘は、マリーエルと戦った後に決めろ」
アーシユラスは頷いた。

いきなり、上着を、脱いで、ギユンターを真っ直ぐ、見つめる。

「・・・・・・・・・・」

ギユンターは見つめられて嬉しそうに上着を脱ぎ様すぐに、中央に躍り出る。

「余程あいつを殴りたかったんだな」

ダーディアンが言う。

「お前の妻にアーシユラスが言い寄ったらどうする？」

マリーエルが聞くと途端、ダーディアンが頷いた。

「・・・今のギウンターの気持ちだが、痛い程解る」

マリーエルも、頷いた。

アーシユラスはその、とても嬉しそうな金髪的美丈夫に、あつという間に拳を右、左へと繰り出す。それは当たらなかつたが、空を切り裂く音が轟き、もし喰らつたらと、ぞつとするものだった。

周囲に居た者達は一斉に二人に場を開け、見物に回った。ギデオンが腕組みし、つぶやいた。

「・・・あれなら剣で無くとも大丈夫だな」

ローランドは横の、やる気まんまんの、美女のような右將軍を、呆れたように見た。

アーシユラスが繰り出し続けるがギウンターはまだ、拳を脇に畳んだまま、アーシユラスの拳を間一髪で避け続けた。

ダーディアンが唸った。

「あんなに見切りがいいのか？ギウンターの奴」

だがウエラハスもつぶやいた。

「アーシユラスの体力はだが、無限に近い」

マリーエルがぼそり、とつぶやいた。

「ギウンターは相手を疲れさす事なんて、考えてない」

ウエラハスとダーディアンがつい、揃ってマリーエルを見つめた。

マリーエルの視線はじつと、ギウンターを見つめ続けていた。

長身のギウンターより更に、アーシユラスの方が背が幾分高い。肩幅も、胸幅も、そして背筋迄も、その肌黒のしなやかな野獣のような男は大きく、勝っていた。拳はだがまだ、空を切り続けるにも関わらず、アーシユラスは獣のように鋭い眼光でギウンターを見続け、そのぞつとする拳を、仕留める為に振り続けた。ギウンターはだが、まだ気迫を内に止めてその拳を、避け続けた。

ギデオンは感心した。避けていると言うのに、ギウンターの立ち位

置が殆ど、変わらないのだ。上体を、拳に合わせて振り続けて、避ける。左右、両側から繰り出されるそれなのに。

「・・・あんなに体が、柔らかいのか？」

ギデオンが聞くと、アイリスがつばやいた。

「・・・彼は剣より喧嘩の方が得意なんだ」

ギデオンが、アイリスの横顔を、見た。

アーシユラスの殺気が増し、ギンターを微かにその拳が、掠るようになる。ギンターの逃げる方向に拳を振り出すがギンターはそれさえも、首を振って外し、途端、拳を振り入れる。

がっ！避けた方向に、拳がスライドし、アーシユラスの顎を、掠った。

アーシユラスの口に、僅かに血が滲み、彼の瞳が更に鋭くなった。が次に腹へ飛び込んで来るギンターの拳を、後ろに飛び退いて避けた所にギンターの、もう片手の拳が、顔の真横から、降って来る。

アーシユラスが避ける事を予想し、ギンターは拳を腹に入れた後、一歩踏み込んで次に、決め手の拳を放っていた。

が、それは、咄嗟に後ろに引いたアーシユラスの額を掠め、掠り傷は作ったものの、アーシユラスに深くは入らない。

ギンターはちっ！と舌打ちする。アーシユラスはだが足を踏み込み体勢を戻すとまた、剛腕を振るった。

ギンターの腹にそれが、入った。

「・・・！」

ギデオンがつい、乗り出す。

続いて今度は右胸に、殆ど、弾くようにして拳が入った。

「・・・入り始めたな」

ダーディアンが唸る。

更にもう一発、顎を掠め、ギンターは首を振ってそれを受け、唇に血を、滲ませた。

アーシユラスの瞳がそれを見つめ、ニヤリと笑った。更に一発。腹

に。そして、左脇に。

ギウンターが、少し体をふらつかせ、ダーディアンがますます唸った。

「・・・ヤバいんじゃないか？」

だがマリーエルの視線は静かだった。

だがその後のギウンターは、アーシユラスの拳を受け続ける。

ギデオンが、当たるその拳に揺れるギウンターの体に合わせて体を浮かせ、つい、アイリスを、見つめた。

だがアイリスがまるで動じる様子が、無い。

じっと、行方を見守るように落ち着いて、見える。ローランデを見る。彼はその端正な表情を、少し歪めて見守っていた。また、ギウンターが腹に受けると、ローランデが叫ぼうとし、アイリスが咄嗟に彼に、振り向いた。

アイリスに目で制され、だがローランデは異を唱えるように、アイリスを見つめた。

だがアイリスは、微笑った。

「・・・たまには、いいだろう？あいつがどれだけ君が好きかと、示したって」

ローランデは怒鳴るように叫んだ。

「教練の時も私のせいで、四力所も刺されて、血まみれで失神したんだぞ！」

アイリスは肩を、すくめた。

「・・・ならまだ、余裕だな」

ローランデは、アイリスを、睨んだ。

だが、次の拳がギウンターの腹に、入った時だった。

ギウンターは身を屈め、アーシユラスも同様だったがアーシユラスに次の動きが、無い。

ギウンターの拳がアーシユラスの腹に、突き刺さっていた。

だが静止は一瞬だった。ギウンターの斬るような拳が再びアーシユラスの腹に入り、がつん！と音を立てた。

マリーエルがようやく、顔を上げた。

そして次にギョントアの鋭い拳がアーシユラスの胸を突くと、アーシユラスは受けはしたものの、心臓を直撃するその一打を、一瞬体を逸らし、その衝撃を逃がした。

アーシユラスの瞳はそれは鋭く射るようにギョントアに注がれ、ギョントアはあれだけアーシユラスの拳を受けながらも、口の端に血を滲ませたまま、嗤った。ギョントアの拳が弧を描く。アーシユラスは相手の嗤いを見ながら避けたが、動きを読み切ったギョントアの拳は、アーシユラスの、こめかみを、掠めた。

アーシユラスが、よろめいて、足を支えた。

ギョントアが一瞬、アイリスを、見た。

アイリスの、止める様子が見受けられず、ギョントアは視線をアーシユラスに、戻した。

アーシユラスはだが、馬鹿にするなど、拳を振った。相変わらず空をびつ！と切り裂き、その威力に衰えは無かったが明らかに視線は彷徨い、平衡感覚を無くしているのが解った。

ギョントアは止めないアイリスに、良いんだな？と無言で拳を構えると、今まで喰らったお返しを始めた。

だが………。

腹の一カ所に集中して、ギョントアの拳が次々、入る。アーシユラスはずしんと体が重くなっていくのが、解った。五発目で、それでもアーシユラスは立っていたが、目は完全に、光を無くしていた。

「ギョントア。殺したいか？」

アイリスが声を掛け、ギョントアが顔を、上げた。

唇に血を滲ませ、アーシユラスの重い拳を散々受けて彼自身もひどく、憔悴してはいたが、腕組みして自分を見守るマリーエルに顔を振って、つぶやいた。

「……後が、居るしな」

アイリスは頷くと、アーシユラスの侍従達に、手を貸すよう頷いた。彼らは、アーシユラスに駆け寄った。

ギウンターが、それでもフラついて、戻って来る。

通り過ぎ様アイリスが尋ねた。

「まともに喰らったのは、何発だ？」

「三発程はかなり、ヤバかったな」

「・・・まっとうに入っただのは？」

ギウンターが顔を上げて、その紫の瞳でアイリスを睨んだ。

「・・・あいつのがまっとうに入ったら、それで終わってる」

アイリスは、やっぱり？と肩を、すくめた。

ギデオンが見ていると、ギウンターは微笑を浮かべてローランデに寄り来る。ギデオンの、隣に居たローランデは、色白の顔を青冷めさせ、眉を寄せ、掠れた声で叫んだ。

「・・・どうして、そんなに馬鹿なんだ！そこ迄して・・・。。倒さなくても、いいだろう？！」

ローランデに倒れかかるように前に立つと、それでもギウンターは、彼を見つめて、笑った。

「笑い事じゃ、ない・・・」

ローランデの青の瞳が潤み、ギウンターは少し、咳き込んだ。ローランデは慌てて彼の肩を、支える。

「・・・どうせまた、暫くは動けないんだろう？」

「お前に関わるといつも、ぎりぎり迄自分を出さないと、勝てない」

「勝たなくても・・・！」

ギウンターが、顔を、上げて異論を、唱えた。

「・・・じゃなきゃ、お前は手の上に、落ちてこないじゃないか・・・」

「」

ローランデはもう、泣いていた。

「そのやり方を諦める気は、無いのか？だって・・・お前なら誰でも望むままだろう？」

ギウンターが、ムキになった。

「望むままじゃないから、こう、成っている！」

ギデオンがつい、ぷつと吹き出し、ギウンターの視線を感じて、ふ

いと顔を、そらした。

アイリスが頷き、彼の部下がローランデに手を貸し、ギューンターは両側から支えられて、会議場を、出た。

ギデオンがその背を見送り、アイリスに視線を戻した。

「・・・わざと、受けたのか？」

アイリスは、大きなため息を吐きながら頷いた。

「息の根を、止められない程度に受けて、相手の油断を誘った」

アイリスの濃紺の瞳は、微笑って、いた。ギデオンは彼がどれだけギューンターの事を信じているのか、解った気が、した。

ダーディアンはそつとマリーエルに、尋ねた。

「知ってたのか？」

「・・・あいつが大馬鹿だって事は餓鬼の頃から、痛い程知ってるぜ！」

吐き捨てるようにつぶやく。

「・・・まあ・・・あれで親父をほだして落とされちゃ、息子としては苦々しい限りだ」

マリーエルは思い切り、同意して頷いた。

ウェラハスの、ため息が洩れ、二人が振り向いた。

「・・・一途だな」

ダーディアンがすかさず、言った。

「・・・気持ち悪いがな！」

マリーエルも怒鳴った。

「その、通りだ！」

アイリスが寄る気配に、アーシユラスが顔を、上げる。

「決闘は・・・！終いか！俺が、負けたとかほざかないな？！すぐあいつを、呼び戻せ・・・！」

汗で乱れた金髪が、黒い肌の額に降り、アイリスは彼を見つめて、ささやいた。

「君は、解ってない。あのまま止めなければギューンターは君の臍腑

を、破っていた」

アーシュラスは、随分劣るようなアイリスを見上げ、怒鳴った。

「・・・俺が、死んでいたと?!」

アイリスは頷いた。

「あれで相手の急所に詳しい上に、どう叩けば倒れるかも、知り尽くしている。剣で戦うより、危険な相手だ」

アーシュラスは体を起こそうとして、ギョントアの殴った腹の力所に痛みを感じて顔を、歪めた。

「内出血、しているかもしれない。医者を呼ぼう」

アーシュラスはだが、アイリスの腕を、掴んだ。

「・・・これ位は、平気だ」

アイリスはそれでも心配そうに、告げた。

「本当に?」

アーシュラスは頷いた。

「自分の体だし、これくらいひどく痛めた体験は幾度も、ある」

アイリスは、頷いて告げた。

「マリーエル相手には、代理を立てろ」

アーシュラスは、アイリスの腕をきつく、掴んだ。

顔が、痛みと怒りに、歪んでいた。とても、悔しいようだ。が、アイリスは尚も言った。

「解ってるんだろう? 今、激しく動き回ったら、本当に臓腑が、破れるぞ」

アーシュラスは、はっ!と息を吐き出し、アイリスの腕を放すと腹にその手を、当てた。

「手当てはこちらでする」

侍従の一人がそう言う。アイリスは地方毎にある、独特の治療法を知っていたので、頷いた。

が、暫くして侍従の一人が、ゆらりとその長身を揺らし、柵を避け、中央に姿を、現した。

アイリスが瞬間、顔を、揺らす。

ドーデイン……。

アイリスは瞬間、心配げにマリーエルを、見つめた。が、怖じる様子無く彼も、上着を投げ捨て、中央に寄る。ダーディアンは胸にマリーエルの上着を降らされ、顔を歪めてそれを受け止めた。

アーシユラスの懐刀。刺客。……そしてアーシユラスを、大公に押し上げた人物だった。

アーシユラスと同様、鋭い顔つきをしたその男は、肌の色の黒さも手伝って、ぞっとする雰囲気醸し出していた。

アイリスは、マリーエルを見つめた。もしかするとアーシユラスより、手に負えない相手かも、しれないと。

だが、マリーエルは気にする様子は、無い。

相手が前に立つと、あまりにも彼を有名にした、立つてるだけで相手を威嚇する。と言われた、凄まじい“気”が、噴出し、その場を凍り付かせた。

ギデオンがつい、伝説を作った使い手で、かつて剣の講師だった男を、見た。

ギデオンが教練の講師をしていた時彼は一度だって、あれ程の“気”を、見せた事が無かった。ひよっこ相手には、無理だろうと侮られていたと知り、ギデオンは喰い付くように、マリーエルを見つめた。

アーシユラスとは、逆だった。相手の出方を待ったのはドーデインで、先にかかっていったのは、マリーエルの方だった。

だが、拳を直ぐに振るう訳で無く、足を使って間合いを詰める。相手が引くと、逃げる方向にすかさず拳を、振り入れる。ドーデインはそれでも、二発を避けた。

ダーディアンがその戦法に、唸った。

「……あれは、嫌だな。凄く、気が、散る」

ウェラハスは観察し、つぶやいた。

「マリーエルは、伺ってるな」

ダーディアンが、尋ねた。

「何をだ？」

「自分の“気”で、相手の動きをどれ程縛れるかを」
ダーディアンは、頷いた。

「・・・初めて見たが、目に、見えるようだぜ」

その場が、寒くなるような“気”だった。

だが当の本人、マリールは灼熱のように、見える。

冷たい、焰。

ギデオンはそれでも、かつての師の、戦いぶりに、夢中になった。

ドーディンはそれでも、冷静だった。凄まじい“気”を放つ相手を強敵と捕らえ、まるで野獣が相手の隙を伺うように、勝つ好機を探る。

マリールの“気”は、増すばかりで、アイリスはドーディンを見つめ続けた。

ドーディンはチラ、と手当てを受ける主、アーシユラスを、見つめた。彼としては、白旗を上げたい事だろう。ギウンター同様、刺し違え無ければ、触れる事すら危ぶまれる相手だと、解ったようだった。だが彼は自分の能力を主に、示し続けて信頼を得てきた男だった。が、アーシユラスは医者に促される。彼は主の、任せると言う視線を受け、主が部屋を、出て行くのを、感じた。

顔をマリールに、戻す。自分から見たら、小柄とも言える相手だったが、その“気”の凄まじさが彼を何倍も、大きく見せる。

そしてその野獣は隙が微塵も無く、ぞつとするような“気”で喰らうように拳を、振り上げる。

その拳は大抵、予測を裏切った。

ドーディンの、顔が歪む。どうやって戦っていいかすら、解らないようだった。

だが・・・アイリスはまだ、ドーディンを見つめ続けた。

ドーディンが気持ちを入れ替える。途端、マリールの頬を、ドーディンの拳が掠る。縛られた動きが解けたような素早い動作で、マリールは咄嗟に、避け、掠るその実力を、知った。

だがマリーエルが表情を変える事は、無かった。再び拳を繰り出し、ドーデインはまた、マリーエルの予測を裏切って腹を掠める拳を突き出す。

マリーエルにも、彼のやり方が解ったようだ。

ドーデインは一切物を考えず、ただカンだけで拳を振っていた。

「・・・あれも、凄く嫌だな・・・」

ウエラハスがつぶやき、思わずダーディアンが彼に振り向く。ウエラハスはつぶやき続けた。

「カンだけで動く気だ。気配の、かけらすら、無い。肩が動いても、次にどこに来るのか、予想すら付かない」

ダーディアンが、頷いた。

「俺は、好きだ。カンでやるのは」

ウエラハスはその言うその嬉しそうな野獸を見、俯いた。

「・・・そうだろうな」

マリーエルもどうやら、相手に合わせて切り替えたようだった。振ってくる拳を、入る瞬間避け、全身を感覚にしたように俊敏にそれを、避け始めた。

ギデオンが見つめていると、彼らは剣を拳に変えたような戦いをしていた。

右、避けて振り入れ、咄嗟にまた避ける。

息を飲む程の攻防でどちらも拳を入れ続け、避け続けた。

がっ！腕でマリーエルの拳を受け、もう片手をマリーエルの腹に入れる。

マリーエルは避け、戻した拳で相手の脇腹を狙い、間髪入れずに避けた相手の、顎を狙う。

ドーデインは首を避け、その拳をマリーエルの頭に振り入れ、マリーエルが頭を避けて避ける間に、脇腹を狙う。がっ！マリーエルの肘がその拳を、止めそして・・・。。。。。

早い拳が次々相手に繰り出されていくが、まだ一発もどちらも、喰らう様子を、見せない。

まるで早さを競うようで、一瞬でも判断を謝ったら即座に相手の、拳の餌食になる。

ドーデインは、老練だ。が、マリーエルは俊敏だった。ギデオンがつい、つぶやいた。

「こんなのは、見た事が無いから、つい息をするのを忘れる」

アイリスの手がそつと、彼の背に、触れた。

「・・・酸欠で、倒れるぞ」

そんなに柔じゃない・・・と言いかけて、ギデオンはアイリスの手が、とても暖かいのに気づいた。まるで癒す力を持っているかのように、彼に触れられると優しくて、安心する。

アイリスが大きいのはその存在感だけで無く、器もそうなのか・・・と、ギデオンは改めて、思った。

あれ程平気で相手を脅す癖に、ちゃんと、血が通っているどころか、相手を包み込むような大きさがあった。

大物と言われるのはただ腕が立ち、立ち回りが上手いだけじゃ務まらないのかと、ギデオンはつい、俯いた。

だが、二人の攻防は、激しさを、増した。ドーデインの振りが威嚇するように、大きくなる。リーチの長い彼の腕は相手に脅威を与えたるうが、マリーエルは動じる様子が、無い。相変わらず、最小とも言える振りで間髪入れずに攻め続ける。

ドーデインの、顔が、歪んだ。

ウェラハスは見たが一瞬、隙を付いてマリーエルがその鋭い“気”を、ドーデインに放った。

まるでもう一つの拳のように、ドーデインはまともに彼の瞳に見入られ、一瞬体の動きが、鈍る。

マリーエルは拳を入れたが、ドーデインはそれでも、腕でその拳を、堰き止めた。

マリーエルの顔が、止められて引き締まるのをアイリスは、見た。全うに拳が、入る筈だ。今までの相手なら。

マリーエルはまた拳を振ったが、ドーデインはその“気”に対抗す

るように、振り出すマリーエルの拳の上から、肘を押し入れた。
がっ……！

マリーエルも間髪入れずに引つ込めたが、それでも喰らった。マリーエルは体を振りながら拳を入れるが、ドーデインはその拳を、やはり腕で、止めた。

「……どっちの腕も、痣だらけだな」

ダーディアンをつぶやきに、ウエラハスもため息を付いた。止めの一撃を、どちらも狙い澄ましていた。いつ、その時が来るかと緊迫が続き、見ている方が耐えられない程だった。がっ！がっ！お互いが、腕で、肘で、互いの拳を留め、ついにマリーエルは、さっと引いて足で蹴り上げた。ドーデインはふいをつかれ、避けきれずにその足先が彼の腹を掠めた。

あつという間に間を詰めると、マリーエルの拳がドーデインの顔に炸裂したかと思ったが、マリーエルは瞬間、身を、引いた。腹にドーデインの拳の入る、寸前だった。

二人は、一瞬、間を開けて睨み合った。

マリーエルはそれでも果敢に間を詰める。恐れ of 微塵も無い相手の態度に、ドーデインは一瞬引くが直ぐに、攻撃に備えた。マリーエルの拳が空を切り、それが合図のようにまた、激しい攻防が、始まる。

ドーデインは、良く耐えた。が、マリーエルは拳と共に間髪入れずに“殺気”を放つ。そしてその“気”は、鋭くなる一方だった。

マリーエルは真剣に、怒っていた。

相手が、アーシユラスで無い事に。

そしてギョウターが自分の前で男を見せつけ、最愛の父親を、さらった事に。

ついに何度目かで、マリーエルが相手を確実に仕留める寒々しく射るような“殺気”を放ち、相手を凍り付かせた瞬間、彼は思い切り拳を、振った。

宙を切り裂くだろうと思ったが手応えがあり、マリーエルはそのま

ま、夢中で拳を、振り続けた。

「マリーエル！」

アイリスが、叫んだ。

マリーエルに聞こえている様子は無く、アイリスが彼に、駆け寄った。

ダーディアンが、腰を浮かせて唸った。

「飛び込む気か・・・?!」

アイリスが後ろに立った瞬間、マリーエルはその気配に振り向き様拳を繰り出す。アイリスは瞬間手の平でそれを受け止め、直ぐ後ろに引く彼の、腕を咄嗟に掴み、引いて叫んだ。

「・・・もう、止める！」

ダーディアンの、ため息が聞こえた。

「・・・よく、入るぜ。戦ってるあいつの間合いに」

マリーエルは、呆けたようにアイリスを見つめた。その濃紺の瞳は、彼をそれでも労るように見つめ、ささやいた。

「君の、勝ちだ」

マリーエルはつい、一息吐くと、直前迄戦っていた相手を、振り向き見つめた。

腹を抱え込み、俯いていた。

マリーエルは素っ気なくつぶやいた。

「・・・まだ、やれるだろう？あれなら」

アイリスは解っていない彼の、腕をもう一度強く引いて注意を自分に、向ける。

マリーエルがアイリスを、見る。

「君はこの所、敵しか相手に、していないだろう？
決着はどうやって着けている？」

そう問われ、マリーエルはようやく、アイリスの言わんとする所が、解った。

その掴まれた腕を振り払い、俯くと言った。
「必ず相手を殺してる」

アイリスは、頷いた。

そしてドーデインの横に立つと様子を、伺った。

足が、震えていた。明らかに殺気に、当てられたんだと解った。

「大丈夫か？」

アイリスは自分でも間抜けな問いを発しているとは、思った。が、ドーデインは体の震えを、腕で抱き止め、頷いた。

ギデオンが自分を見つめてるのに気づき、マリーエルはつい、

「よお。仔ライオン」

と声を、掛けた。

ギデオンは何か言おうとして、言葉が無い事に気づいた。

マリーエルも気づいたようにつぶやいた。

「ああ・・・もう、右將軍だったな」

ギデオンは顔を上げて告げた。

「それはどうだっていい」

そして、自分を見つめ続けるかつての教え子に、疑問の視線を、向けた。

「何だ？」

ギデオンはそれは、躊躇した。

「・・・つまり、腕が痣だらけだろう？」

マリーエルは思い切り、ため息を付いた。

「多分な」

「やっぱり、強いな」

ギデオンがあまりに素直にそう言うので、ついマリーエルはつぶやいた。

「勝てるよ、思ってたがな」

ギデオンが呆れたように、顔を上げた。

「相手を仕留める気で、戦ってたんだらう？」

マリーエルは肩をすくめた。

「いや？・・・ギウンターの事を思い出した途端、猛烈に腹が立ち、気づいたら拳が、入ってた」

アイリスは戻って来て、それを聞いて呻いた。

「・・・ギンターだと思って、殴ったんだな？」

マリーエルはぶつきら棒に告げた。

「そうかもな」

アイリスは、頷いた。

「ドーディンは、自分が受ける筈じゃない殺気を受けて訳も解らず敗北した。とても同情出来る状態だと思う」

マリーエルが、アイリスを見上げた。

「同情？」

アイリスは肩を、すくめた。

「だってギンターなら、君の視線の理由は解った筈だ。ドーディンに解らなくて固まっても、無理は無い」

マリーエルは思い切り、憤慨した。

「この決闘は無効だと、言い出すなよ！」

アイリスはまた肩をすくめた。

「君が勝ったのは、こっちに都合が、いいからな」

マリーエルはそれを聞いて、調子のいいアイリスに肩をすくめた。

アイリスが室内に入り、アーシユラスは寝台から体を、起こした。南領地ノンアクタルの医者が彼を止めたが、アーシユラスは手でそれを、振り払った。

「ドーディンは、負けた」

アーシユラスは怒鳴った。

「ならローランデの決闘を俺が、受けてやる」

アイリスは一つ、ため息を付いた。

「君はただ、遊びただけだろう？」

命を掛けてもローランデが、欲しいのか？」

アーシユラスは無然とつぶやいた。

「ローランデは問題じゃない。誇りの、問題だ」

これを聞いたらまた、ギンターが殺気立つなと思ったが、アイリ

スはつぶやいた。

「・・・なあ・・・。誰が見ても、ギンターと君がやって、彼が勝つとは思わなかった。だがギンターは君に勝った。どうしてもだか、解らないだろうが、彼は自分の身を削っても君に、思い知らせたかった」

「何を？」

「ローランデは戯れにその名を口にする程軽々しい相手ではないと」
「・・・つまり、ギンターはローランデの誇りの為に身を、削ったと言う訳か？」

アーシユラスはギンターを殴った拳の感触を、思い出してつぶやいた。

「・・・そうだ」

「なぜ、他人の為に、そこ迄する？」

そんな馬鹿な男には、見えないが」

「本気で惚れてるから、馬鹿になれるんだ」

アイリスが言うと、アーシユラスは呆けた。

「・・・男相手に、本気で惚れたのか？あの男が？」

「・・・冗談だろう？」

「アーシユラス。いい加減、覚えてくれ。」

私は・・・」

「・・・冗談を言わないんだっただな。」

「・・・つまり・・・」

つまり本当に、それ程迄に、ローランデに、惚れてると、言うのか？

あの、ギンターが？」

アーシユラスのその呆れた様子に、アイリスはとうとう、ため息混じりにつぶやいた。

「笑っていいぞ」

アーシユラスはそれは愉快そうに笑おうとして、いきなりぞつとして、固まった。

自分ではありえない理由で、自分の拳をあれだけ受けて迄殺そうと

した心理が全く理解出来ず、かなり怖かったらしい。

「………つまりそれで、俺を殺そうとしたのか？」

アイリスは肩を、すくめた。

「君の領地ではどうかは知らないが、こっちではこういう事が、たまにあるんだ」

「嘘を付け！ギョンターが、間違いなくイカれてる！」

アイリスは、頷いた。

「それは私も………そうは思うね。

人を真剣に愛するとどうやら、人は平気で、狂人になれるらしい」

「つまり俺の相手は狂人か」

アイリスは、頷いた。

「ローランデ本人も勿論手強いが、彼に惚れ込んでるギョンターも、父親大事のマリーエルも手に負えない。ローランデは鬼門だと、肝に命じて置くのを勧めする。

だが……君は私の意見等聞いたりはいらないんだろう？」

アイリスが素っ気無くそう言い、アーシユラスが問うた。

「お前から見ても、ギョンターもマリーエルも、異常か？」

アイリスは肩を、すくめた。

「完全に、常軌を逸してる」

アーシユラスはぶつぶつ言った。

「お前から見てもか………」

アイリスが戸口でそつと振り返ると、アーシユラスはまだ、ぶつぶつ言った。

彼に恋心が、解つてるとは思わなかったが、ローランデに関してギョンターがいかに危険かは身を持って理解したようだった。

アイリスは部屋を出ると、心からため息を吐き出し、オーガスタスの苦勞を、思いやった。

会議場に戻ると、そのオーガスタスが、居た。

机の上に掛け、ウェラハスとダーディアン。そしてマリーエル、ギデオンと話し込んで居る。

アイリスの姿を見て、

「ヨオ！」

と声を掛ける。

向かいに掛けたダーディアンがぼやいた。

「これで終いか？」

アイリスは肩を、すくめた。

「楽しかったろう？」

ダーディアンは、認めた。

「まあな」

オーガスタスは、呆れきった。

「・・・つまり、不満のある奴を集めて、勝手にやらせたんだろう」

アイリスは思い切り、ため息を付いた。

「不満は爆発させないと、溜まるだろう？ 今後の君の苦勞を、減らそうと思っただ」

珍しく疲れたアイリスの様子について、オーガスタスはかつての下級生のその肩を、ぽん！と叩いて労った。

「ギウンターがまた、やったな？」

アイリスが彼の横に掛け、その大らかな男を見つめた。マリーエルも尋ねる表情でオーガスタスを見つめた。アイリスが聞いた。

「君は詳しく知ってるのか？」

ギウンターが教練の頃、血だらけだった件だが」

オーガスタスは、頷いた。

「ギウンターと対抗意識を燃やしていたグリーンが、ローランデにちよっかい掛けて・・・。

あの馬鹿、ローランデを庇って、大人しく切られた上に傷口に塩を塗り込まれて・・・」

ダーディアンが、軽く言った。

「・・・・・・えげつないな。まあ、俺達も、たまにやるが」

ギデオンは一級上だったグエン・ドルフの父親を、呆れたように、見た。グエン程美貌の細面でしなやかでは無かったが、確かに整っ

た顔立ちの、立派な体格で格好のいい野獣だった。

ウェラハスが、そのえぐさに思い切りため息を付き、額に手を、当てた。

「ギョントアの、報復は無しか？」

マリールルの問いに、オーガスタスは手の上に顎を乗せ、彼を見つめてつぶやいた。

「元はと言えばあいつがグーデンのペットを寝取ったのが原因だ。あいつ……」

オーガスタスが、思い出して吹き出した。

「……この流血は全部自業自得だと喚き、ローランデの前で、気絶なんて格好の悪い真似出来るかと叫び、ローランデを物陰に隠した途端、ぶっ倒れた」

オーガスタスがあんまり愉快そうに、くっくくくと、口に手を当てて笑うので、一同は呆れた。

アイリスがつぶやいた。

「……噂では出血し過ぎて実はヤバくて、グーデンは大貴族なのにその件で講師に呼び出しを喰らい、厳重注意されたと聞いたぞ？」
「オーガスタスはそう言うアイリスを、茶色の瞳で悪戯っぽく見つけた。そうした彼は途端、とてもチャーミングに見える。」

「……それ位言わないと……」

「ヤバくなかったのに、ヤバいと、言ったのか？」

ギデオンが聞き、オーガスタスが彼に、微笑った。

「まあ、俺も結構、友達思いだからな」

全員、首を横に、振った。

「だが実際ギョントアは、三日は寝台を離れられなかった。奴にとつては、それが最悪だったろうな。じっとしてられない男だったから」

ウェラハスが聞いた。

「だが傷は、深かったんだろう？」

「喧嘩馴れしてるし、怪我にも馴れた男だから」

アイリスが、頷いた。

「本当は動き回っちゃいけないのに、動いてたんだな？」

「傷を広げないよう、動くのは馴れてるようだった」

ダーディアンが呆れたようにつぶやく。

「今回は、どうかな」

「物影から覗いていたが、まあ、大丈夫だろう。あいつ、痛みに馴れてるし。明日には動き回ってるぞ」

アイリスが、睨んだ。

「覗いていたのか？」

オーガスタスが心から、笑った。

「苦労、したみたいだな？お前が真剣に怒鳴ったのはここ数年、見た事が無い」

オーガスタスの笑みに、アイリスは肩をすくめた。

「獰猛な野獣に苦労して鎖を付け、喰い付かれないよう注意しながら檻に、入ってる気分だった」

ダーディアンが、頷く。

「決闘に持つてく迄散々、駄々こねてたしな」

ウエラハスも、頷いた。

「良く、忍耐が持つなと感心した」

アイリスはウエラハスをじっと見つめて、吐息を吐いた。

「・・・途中で、放り出して逃げられるんなら迷わずそうしたさ」
「そうだろうな、と皆が、心の底から同意した。」

ダーディアンが、チラとアイリスを横目で見、つぶやいた。

「その上お前、戦ってるマリーエルを止めに入ってたろう？」

マリーエルが顔を、上げた。

ウエラハスもつぶやいた。

「・・・彼は何も見えて無かった。よくあの拳を止められたな」
ギデオンも頷いた。

「・・・その気でいかなきゃ、間違はなく喰らってる」

アイリスはマリーエルをじっ、と見た。大人しくしていると美青年

に見える猛獣を。

「・・・仕方無いだろう？」

私はギョンターと違ってちゃんと年長者だから。

若い彼が暴走したら、管理しないと」

オーガスタスが、笑った。

「だってお前、俺と違って暴力沙汰は、馴れてないんだろう？」

ダーディアンが途端に、睨んだ。

「・・・そうだ。俺にそう言って武器を取り上げた」

アイリスは二人を嫌そうに見つめた。

「・・・必要とあれば対処するしか無いだろう？」

放って置いて、誰か何とかしてくれるか？

・・・どう考えても会議じゃない。議長とは名ばかりで、ただの決闘の、仲裁役だ」

ウェラハスが肩をすくめた。

「会議だと思って出席すると、脳が沸騰するぞ」

ダーディアンがその、一番まっとうな崇高な騎士を見てつぶやいた。

「・・・あんたでもか」

「当たり前だ」

ウェラハスの、大きなため息がその場を、包んだ。

オーガスタスが途端くくっ！と笑い、全員が彼を、見た。

「・・・だがあれはいい案だ。今度から俺もそうしよう」

ダーディアンとマリーエルが、顔を上げた。

「まさか・・・」

マリーエルが言うと、ダーディアンも言った。

「会議場への武器の持ち込み禁止か？もしかして・・・」

ウェラハスは思い切り、頷いた。

「妥当だ」

ダーディアンが叫んだ。

「あんたはいいだろう？武器が無くても！

拳で対処しろと言ってるんだぞ？」

アイリスが、ギデオンを見てつぶやいた。

「拳がモノを言う会議なんて、あっていいのか？」

が、ギデオンは笑った。

「私は性に、合ってる」

「だが、少なくとも死人は出ない」

オーガスタスの心から嬉しそうな言葉に、アイリスがぼやいた。

「やはりかつては死人が出てるか・・・」

ダーディアンが言った。

「一人が剣を抜けば、全員身を守る為に抜くからな。どさくさに紛れて不運な奴が喰らったんだろう。」

・・・あれは事故だ」

ウエラハスがそう腕組みする彼を見た。

「会議で死人が出るのはどう考えても異常だ。・・・事故で済ませられるか？」

オーガスタスが顎を手に乗せつぶやいた。

「両手両足に、枷も付けられれば言うこと無いんだが・・・」

ダーディアンとマリーエルが、そう言うオーガスタスをじっと、見た。

「・・・出席者を人間扱いしない気か？」

マリーエルが唸るとダーディアンが怒鳴った。

「こいつ、その内一人一人に檻を用意する気だぞ！」

「・・・ああ、それは名案だ！」

笑顔で言うアイリスを、マリーエルとダーディアンが睨んだ。

オーガスタスも同意見だと肩をすくめた。

「・・・俺が出席者で人間に見えるのは、ウエラハスだけだしな」
アイリスも頷いた。

「・・・並み居る猛獣に囲まれた、森林に居る気分だった」

だろ？と、オーガスタスが彼を見た。

ダーディアンがマリーエルを見、マリーエルも彼を見た。そして二人してギデオンを見る。

マリーエルがギデオンに声をかけた。

「・・・お前も、同類だろう？」

ダーディアンが唸った。

「近衛代表で出席してオーガスタスを泣かせろ！」

アーシュラスが喜ぶし、お前は機会を見つけてあいつをぶった斬れる」

オーガスタスはどうとう、アタマに来て怒鳴った。

「これ以上まだ、猛獣を増やす気か！」

言つとくが、何時までも俺が議長で居ると思うなよ！」

だが、ウェラハスが思い切り下を向くと、オーガスタスにそつとささやいた。

「・・・そのセリフは、確か五年前にも、聞いた記憶が・・・」

皆がそのつぶやきに言葉を無くした。

そして今にも唸り出しそうなオーガスタスを、心から、気の毒そうに、見つめた。

e n d

おまけ2 ギデオンとファントレイユ。初めての出会い

軍教練校の入校式で、ギデオンに始めて出会った時の事だった。

新たな入隊者と、それを出迎える上級者が沸き返す中、ファントレイユは、はぐれたいところを探していた。

母方のいとこテイスは自分と違って、父を軍の重要ポストに持つ大貴族の息子で、

彼が付いていれば大抵の事は乗り切れるし、彼の父、ファントレイユには叔父に当たるアイリスは、息子共々面倒を見ると、約束してくれていた。

軍では、ギデオンの父に当たる、絶大なる信頼を集めていた右將軍が戦死。

その死を痛む間もなく、ギデオンの叔父が次期右將軍を継いだ。

右將軍となったドッセルスキは、亡くなった兄と違い、剣の腕も勇敢さも人望も持っていなかったから、軍では彼におべっかを使う貴族達が、幅をきかせるようになっていた。

実力よりも、將軍に上手く取り入る事が出来る者か、もしくは、右將軍として気を使わなければならぬ大貴族達が、重要ポストを占めるようになっていた。

ファントレイユのように、身分の高くない貴族の息子等は、いくら実力があつたとしても大貴族達にさげすまれる存在だった。

…現に、テイスとはぐれた彼は、ごったがえす人波の中、もう何人かの慇懃無礼な身分の高い青年に、突き飛ばされたり、ぶつかられたりした。

彼らはぶつかった相手を見て、謝罪を言うべきかどうかを判断した。テイスには間違いなく詫びただろうが、ファントレイユを見るなり、ぶつかった相手は眉根をひそめただけで、侮蔑の表情を、浮かべて薄ら笑った。

自分の、腕を掴む者が、居た。

彼が振り返る間も無く、彼の横についたその少年は、ぶつかった大柄な青年に、言った。

「…謝罪すべきだろう？」

…当然だと、言わんばかりの、強い口調だった。

彼はその言葉を発した、隣の少年を、見た。

自分より少し小柄だった。が、何よりその美しさに、驚いた。

少女かとも、思った。金の髪。白い肌。つんと尖った鼻。

大きな青緑の瞳。赤い唇。

少女ならば、今までお目に掛かった事の無い、素晴らしい美少女だった。

だがファントレイユは噂をティイスから聞いていた。

前將軍の子息は、少女と見まごう美少年で、だがその勇敢さは父親譲りだと。

「（彼が、ギデオンだ…！）」

相手はギデオンを一目見るなり、その綺麗な顔に見惚れ、そしてそれがギデオンだと思い当たると、途端、先ほどの無礼な態度を一変させた。

「…ああ、失礼。ぶつかりましたか？」

明らかに上級生だったが、その青年はファントレイユを見ず、視線をギデオンにくれたまま、謝罪の言葉を、言った。

ギデオンはその綺麗な顔を、憮然と歪めて言った。

「…ぶつかられたのは彼だ。彼に謝罪したらどうだ！」

きっぱりと、その愛らしい赤い唇から出る言葉。

ファントレイユは胸が、踊った。

ここに居る誰よりも身分の高い彼が、一介の、取るに足りない貴族の息子の自分為に、自分より年上の青年に『謝れ』と、公然と言い放つ。

青年は、ファントレイユを見た。

相変わらず、機嫌を取る対象ではない、と言う侮蔑の表情を浮かべ

だが、ギデオンの手前、歪んだ笑みを浮かべ

「…失礼した」

と言った。

ギデオンはそれでも、眉をしかめたが、取りあえず、その場を納めた。

青年はこれを機会に、とギデオンに話しかけようとしたが、ギデオンはファントレイユの腕を掴んだままさっさとその場を退いた。

「…どこまで行くんだい？」

引つ張られて、ファントレイユが言つと、ギデオンはようやく歩調を弛め、ファントレイユを見た。

一瞬、ファントレイユの美貌を目の当たりにし、怯んだような驚きの表情を浮かべ、つぶやいた。

「ああ…悪かった。つい、あの男に腹が立って…」

そして、ゆっくり、労るようにファントレイユの腕を放すと、その素晴らしく綺麗な顔で見つめた。

ファントレイユは首を、傾けた。

「…だが、嬉しかった」

ギデオンは予想していないようだった。

あんまり素直な、感謝の言葉に、一瞬戸惑うような表情を、見せた。

「…ファントレイユ！」

長身のテティスが人波の向こうから、彼を見つけて叫んだ。

「…いここが呼んでいる。もう行かないと…」

本当に、嬉しかった。

「…ありがとう」

丁寧にそう言い、その場を去ろうとした時、ギデオンは言った。

「…違う！…私は…君の事を庇ったんじゃない！

あの男につい、腹が立って…」

彼の感謝を受ける資格が、自分には無いと言うように、ギデオンはその綺麗な顔の上に困惑を浮かべていた。

ファントレユは振り返り、彼に微笑んで言った。
「…それでも、嬉しかった！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2169d/>

「アースルーリンドの騎士」番外編『ファントレイユとの出会い』

2010年10月9日11時41分発行